THE KAIZO

改造

五月号

1923

スタイナハ若返り法研究

文學博士　醫學博士　榊保三郎
醫學博士　諸岡存
共著

再び囂々たる世論を惹起した若返り法の眞摯な研究書、スタイナハの深遠なる生理學の智識と、十數年に亘る嚴密なる實驗によりて組立てられたる「若返り法」は七十にて尙ほ廿歳前後に見る性慾生活に生き得べき事を說く。「我若返り法」研究の大家榊、諸岡兩博士の解說せし我國に唯一の權威ある書。

五版

◇定價壹圓參拾錢◇

◇四六判上製◇送料十三錢◇

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

法學博士 堀江歸一著

（男女各學校では本書を經濟書の參考書に用ひています）

國際經濟と國民經濟

定價一圓九十錢
送料十五錢

第六版

本著は我國財政、經濟學の權威たる堀江氏の近著、先づゼノア會議の前後から最近に至る間に於て世界の經濟が如何に動いてをるか、之に對して我國の經濟社會は如何なる地位と狀態にあるかを詳說し、世界大戰後の今日、國際平和の不徹底より國民生活を蹂躪する政策の行はるゝを痛擊し、對外債務、租稅、不景氣に對する國民の依るべき道を明示す國際經濟と國民經濟に通ぜんとするものゝ必讀に値する快著。（戰後の經濟界を相する唯一の參考書）

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番

長田秀雄作

戯曲 愛憎篇

四六判天金

定價壹圓六拾錢
送料十五錢

最新刊

法統の全滅を期し本願寺一味を率ゐて起てる、顯如上人と法敵信長との石山合戰を題材とし、對陣中に起れる顯如父子の鬪爭、顯如の北の方と小姓との間にまつはる愛欲、放埒、淫蕩を描き、その愛欲が實子教如の爲めに妨げられたるを以て死に頻してまでも我實子を呪咀し、憎惡する北の方の惡魔振りを徹底的に透察したる近來稀なる趣味多き藝術的名作だ。
尚本書は別に戯曲『父の別莊』の長大篇を收む。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四二〇〇

戯曲

愛すればこそ

谷崎潤一郎氏の大名著

本書は明治、大正の藝術壇の代表作として不朽の神品と稱せらる。　三角關係の深刻なる戀愛を描いたもので、人間愛慾の惱みがいた〳〵しいまでよく表現されて、讀む人をして一氣に藝術の殿堂へと引ずつて行く、眞に名人の名作で、千古に光輝を放つ快著だ。

本書は大正文壇の藝術的代表作として國民文藝賞を授與さる

定價壹圓六拾錢
送料拾五錢

第八十版

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番

賀川豊彦三名著

星より星への通路

定價貳圓　送料十七錢　四六判　布装上製

四十七版

愛の結晶とまで稱せらるゝは賀川氏である。現代の荒みに荒める精神界を根こそぎに革命せんとする著者の鋭き血の迸りは詩となり、歌となり、文章となり遂に本書となつた、氏の本色は此書の詩、歌、文章に依りて代表されると云つても宜しい。

死線を越えて

（二八四版）

定價參圓　送料十九錢

太陽を射るもの

（一八三版）

定價貳圓八十錢　送料十九錢

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

谷崎潤一郎作

戯曲 愛なき人々

四六判 布装

定價弐圓 書留送料拾七銭

幽谷に白蘭を見る氣高かさ、天上の星と語る神秘さ、美はしさは此作者獨歩の境地であり、そして人間の底ひも知れぬ惡魔的愛慾を自由に解剖する氏の藝術力の絶大なるは古今比儔すべきものがない、我々の心の奥に潛む煩惱、憤怒、悲嘆を無造作に引きずり出して暗に漾ふ宿命の情緒に涙をそゝらし、對角、三角、四角の戀愛をも曇りなき名刀にてグン／＼解決して行く冴えは讀者をして一種の恐れをさへ抱かしむ、明治大正は云ふも更なり、我國の古今を通じ、世界の各國を通じて氏の如く惡魔的精神に徹するものありや、谷崎氏を通じて不朽の藝術力を味へ、そして唯美的精神の琴線に觸れよ。

卅二版

「愛すればこそ」の姉妹篇出づ

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二



勞農露西亞の新舊經濟政策

アドルフ・ヨッフェ

「革命當初のサヴエート・ロシアと現下のサヴエート・ロシアとの間には、何等の共通點がない。」——我等の友人側でも、はた又我等の敵側でも、多くの人達は斯ふ云つて居る。コンミユニズムを認めない乍らも、我等に同情を持つて居る連中は、新ロシアの全歴史は、徹頭徹尾コンミユニズムの實現不可能なることの證據である、とさへ斷定して居る。

そして實際、もし誰か一九一九二〇年にペトログラード、モスクワもしくはどこか大きな縣市を訪ねたことのある人で、更らに再び今日、是等の都市を訪ねたならば、その人は必らず、ロシアは全く變つた、そして今や、全然かの巡査や憲兵の警戒裏にブルジョア制度の「神聖なる基礎」を保守する老衰沈滯のブルヂョア都市と何等選ぶ所がない、と語るであらう(恐らく皮相の觀察眼を以てすれば、さう語るのが當然かも知れぬ)。

實際だ！　都市、そこには街上巡査の役目に當る兵卒もなければ、兵卒に代る警官もない、いや、そんなものは全く無用である。何故なれば市民の男子、はては女さへも夜中ブッ通しで自由にその街路を徘徊散歩しても、すりにブッかる恐れもなければ、遊冶郎にからかはれる恐れもない。都市、そこには右側だらうが、左側だらうが街路を勝手に誰が往來してもけたゝましい叫び聲によびとめられることがない。そんなことをせずとも何等の騷擾が起らぬ。都市、そこには(こゝが恐らく最も肝腎)殆んど全部の店が、板で打ちつけてあり窓が殆んど何處でも打ち壞はされ、看板や廣告が古い昔のこと、しかしまだ忘れられてない何事かを語りつゝ更らに新らしい傷口を露出して居る。都市、そこには立派な人達には一寸一杯やらうと云ふ所もなく、レストランが閉ぢられ酒類が嚴しく禁ぜられて居る。——かう云ふ都市こそ、必然、凡べての上品な人達に對して慄つとするやうな印象を與へ、且つ、コンミユニズム程惡いものはないとの確信を吹つ込まねば已まぬのである。

これに反して、同じ都市ではあるが、そこには到る所まだ近い過去の恐ろしい戰鬪の痕跡が歴々としてのこつて居る、全然、破壞された家屋、窓硝子を打ち貫いた彈丸や砲彈の跡、破壞された上に滅茶苦茶に取り散らされたショーウインドー及び所々傷口を露出した看板がかゝつて居る。しかしこの都市には、それにも拘らず、電燈がキラ〳〵と輝き、强さうな馬車屋が昔のやうに「旦那！　疾い所、一ツ走り如何でがす」と云つたやうな調子、辻々には外觀が如何

にも昔の巡査に似た「町の守衛人」が立つて居て、新しいエンブレムの五角星をつけて居乍らも、ブルヂョアのためにはスリを見張るが、しかし一日の勞働を終つて家へ歸りを急ぐ貧しい女のためには、もうかの「上品な人達」があつかましくからかふのを制することが出來ぬ。何となれば商賣の自由が復活されて後、「上品な人達」は誰がこの商業の自由を徹底的に認めて居るか、誰がさう認めて居らないかを知る筈がないから。

都市、そこには到る處立派な店と、更らに一層立派なカフエーやレストランのあかりが輝いて居る。都市そこには立派な人達は、も早や自分の胃袋について屈託する必要がない。即ち嘔吐を催ふす程飽食することが出來る。無論、その斷定には札の入つた中型のカバンを投げ出すが、然しその場で直ちにもつと大きな型の札入カバンを投機取引でかせぐことが出來る—かうした都市は凡ての「眞の」ブルジョアに對して愉快な感じを起させる。たとひ「勞農共和國」にあり乍らも、何んだか自分の家に居るかのやうに思はせる。

兩者對照の相違は、斯くの如く歴然たるものがある。しかしそれにも拘らず、實際「新經濟政策前」のロシアと「新經濟政策後」のロシアとの間、「眞に實質にふれた」相違は決してさう大きくはないのである。

米國のチャスーレス、ベアード教授は、その極めて面白い且つ大體偏頗のない著書 "Cross currents in Europe of today" に於て、ロシア革命前のソシアリストは實を云へば、皆自家の勝利の場合に對して何等のプログラムを持つて居なかつた、即ち革命の翌日何をなすべきかを全然知らなかつた如く斷定して居る。

尊敬すべき博士の此の斷定は、正當でもあり又不正當でもある。全政權を掌握した後に於ける行動に就いての正確なるプログラムに、事實我等の手中にはなかつた、又あり得なかつた。此の點が抑々、マルクシスト・レヲリウショニストとソシアリスト・ユトピアンとの相違點の最も重要なるものゝ一ツである。

そして實際、もし誰か一九一九―二〇年にペトログラード、モスクワもしくはどこか大きな縣市を訪ねたことのある人で、更らに再び今日、是等の都市を訪ねたならば、その人は必らず、ロシアは全く變つた、そして今や、全然かの巡査や憲兵の警戒裏にブルジョア制度の「神聖なる基礎」を保守する老衰沈滯のブルヂョア都市と何等選ぶ所がない、と語るであらう（恐らく皮相の觀察眼を以てすれば、さう語るのが當然かも知れぬ）。

實際だ！　都市、そこには街上巡査の役目に當る兵卒もなければ、兵卒に代る警官もない、いや、そんなものは全く無用である。何故なれば市民の男子、はては女さへも夜中ブツ通しで自由にその街路を徘徊散歩しても、すりにブツかる恐れもなければ、遊冶郎にからかはれる恐れもない。都市、そこには右側だらうが、左側だらうが街路を勝手に誰が往來してもけたゝましい叫び聲によびとめられることがない。そんなことをせずとも何等の騷擾が起らぬ。都市、そこには（こゝが恐らく最も肝腎）殆んど全部の店が、板で打ちつけてあり窓が殆んど何處でも打ち壞はされ、看板や廣告が古い昔のこと、しかしまだ忘れられてない何事かを語りつゝ更らに新らしい傷口を露出して居る。都市、そこには立派な人達には一寸一杯やらうと云ふ所もなく、レストランが閉ぢられ酒類が嚴しく禁ぜられて居る。——かう云ふ都市こそ、必然、凡べての上品な人達に對して慄つとするやうな印象を與へ、且つ、コンミユニズム程惡いものはないとの確信を吹つ込まねば已まぬのである。

これに反して、同じ都市ではあるが、そこには到る所まだ近い過去の恐ろしい戰鬪の痕跡が歷々としてのこつて居る、全然、破壞された家屋、窓硝子を打ち貫いた彈丸や砲彈の跡、破壞された上に滅茶苦茶に取り散らされたショーウインドー及び所々傷口を露出した看板がかゝつて居る。しかしこの都市には、それにも拘らず、電燈がキラ〳〵と輝き、强さうな馬車屋が昔のやうに「旦那！　疾い所、一ツ走り如何でがす」と云つたやうな調子、辻々には外觀が如何

にも昔の巡査に似た「町の守護人」が立つて居て、新しいエンブレムの五角星をつけて居乍らも、ブルヂョアのためにはスリを見張るが、しかし一日の勞働を終つて家へ歸りを急ぐ貧しい女のためには、もうかの「上品な人達」があつかましくからかふのを制することが出來ぬ。何となれば商賣の自由が復活されて後、「上品な人達」は誰がこの商業の自由を徹底的に認めて居るか、誰がさう認めて居らないかを知る筈がないから。

都市、そこには到る處立派な居と、更らに一層立派なカフエーやレストランのあかりが輝いて居る。都市そこには立派な人達は、もう早や自分の胃袋について屈託する必要がない。即ち嘔吐を催ふす程飽食することが出來る。無論、その勘定には札の入つた中型のカバンを投げ出すが、然しその場で直ちにもつと大きな型の札入カバンを投機取引でかせぐことが出來る—かうした都市は凡ての「眞の」ブルジョアに對して愉快な感じを起させる。たとひ「勞農共和國」にあり乍らも、何んだか自分の家に居るかのやうに思はせる。

兩者對照の相違は、斯くの如く歴然たるものがある。しかしそれにも拘らず、實際「新經濟政策前」のロシアと「新經濟政策後」のロシアとの間、「眞に實質にふれた」相違は決してさう大きくはないのである。

米國のチャスーレス、ベアード教授は、その極めて面白い且つ大體偏頗のない著書"Cross currents in Europe of today"に於て、ロシア革命前のソシアリストは實を云へば、皆自家の勝利の場合に對して何等のプログラムを持つて居なかつた、即ち革命の翌日何をなすべきかを全然知らなかつた如く斷定して居る。

尊敬すべき博士の此の斷定は、正當でもあり又不正當でもある。全政權を掌握した後に於ける行動に就いての正確なるプログラムに、事實我等の手中にはなかつた、又あり得なかつた。此の點が抑々、マルクシスト・レヲリウショニストとソシアリスト・ユトピアンとの相違點の最も重要なるものゝ一ツである。

ユートピアン・ソシアリストは、彼等の中の最も傑出せるものすら、厳格に云ふとたゞ多少の差こそあれ、悉く皆フアンタジーを畫くことのみに専心し、繪畫の天才を以て、逐次ソシアリズムへ移り行く「高雅」な舞台を畫いた、彼等の夢想したソシアリズムの極樂（アルカヂア）の畫を描いた。而して如何にせば人類はかゝる極樂（アルカヂア）に到達し得るかてふ問題に至つては、たゞ之を人類は善心だと云ふ信念で極めて無雑作に解決した。彼等は多く此の問題について興味を持たなかつた。ソシアリスト・ユートピアン中の傑物の一人たるフーリエが、その誘惑的なる社會畫を描きつゝ、終生フイラントロープの百萬長者の屋根裏で、その百萬長者がフアランスターを創造するに必要な金をもつて來てくれるのを待つだけで、満足したのも、まさにその所であつた。

此の意義に於て、我等は實際、革命の後に何をなすべきかを知らなかつた。老カウツキーは今こそもう氣が狂つて居るが、曾ては "Am tage nach der Revolution" てふ見事な著書を書いた。然し彼ですら、此の著書中に、社會革命と名附けられる經濟的及社會的プロセッスが、全然結了した後に、始めて來る幸福な人生に就いては、多く論ぜずに、革命そのもの、及び革命の戰闘のポツシビリチーと、その方法、その勝利に就いて、より多く語つて居る。蓋し、凡べてのマルクシストはカウツキーの如き不良な革命家ですら、未だ曾てプロレタリアートの獨裁政治として、長く打ち續く歴史的プロセッスを措いては、革命の勝利はあり得ぬものとした。

この事實一つだけでも、明らかにソヴエート政府が新經濟政策に移つたことを捉へて、直ちにコンミユニズムが實際的に失敗に歸したものゝ如く斷定を下す人達を論破し得る。彼等すら、今日のロシア即ち新經濟政策に移つた後のロシアに於て、プロレタリアートの獨裁政治が存在して居らぬとは云つて居らぬ。已にして「プロレタリアートの獨裁政治」が存在する以上、當然「社會革命」が繼續して居る譯である。而して社會革命が繼續して居るからには、少くとも「コ

ンミユニズムの破產」を口するのは尚早である。然し本文の當初の題に歸つてこゝに特記せねばならぬのは、即ちマルクスを始めとしてマルクシストがあらゆるユートピア、種々の社會的ユートピアを嫌惡しつゝも尚ほ且つ、多くの時日と努力とを「革命の勝利」即ち、より正確に言へば、武裝革命叛起の「翌日」に於て、何をなすべきかといふ問題の研究に傾倒したことである。相違點（大きな相違點だ！）は、たゞ、ユートピアンが社會主義の極樂の此の地上に出現した曉に來る時代を描くことにのみその力とファンタジーを傾注して居る間に――且つその間如何なる方法で、人類は此の極樂に到達し得るかについての樂觀的な、時として子供の如き幼稚な夢想に於て、その判斷を下すに當り、實際の事實を根柢とせずに、たゞ自身一個のファンタジーに立脚して居た間に――、ある現代の學者の中には、さうでなければならぬと考へて居るものもあるらしい――、一方では、科學ソシアリズム派のマルクシストは、曾てかゝる些事に頓着したことがなく、あくまで科學的經濟及政治的法理を根柢として、世界のプロレタリアートの武裝的叛起、內亂、プロレタリアートの勝利及その獨裁政治の樹立を論證し、更らに勝利は一時的のことがある、或は敗戰、或は反動の一時的勝利とが交錯することがある、と云ふことまでも考慮に入れ、現在の科學の推定の範圍に於て、プロレタリアートの最後の勝利後、その獨裁政治時代の未來について研究した點にある。

勿論かゝる事情の下に於ては、共產建設の主なる階梯――それは既に、苟も少しでも社會主義に關する書籍を讀んだものにはわかつて居ることで、一々列擧するだけの價値はない――は、たゞその大體だけを指定し得るのみであつた。それのみならず、已に、マルクスによつて「明日」の使命として指定された「搾取者の搾取」――疑もなく、ブルヂョアがコンミユニズムを憎み、コンミユニズムの前で、動物的戰慄を催す第一の原因である――さへ思ひ起せば、ロシアに於けるコンミユニストが、政權奪取の時、盲滅法でやつたものだとなすある現時の學者連の說を、否定するに十分であらう。彼

等がまだロシアで政權を奪取せぬ頃、即ち一九一七年十一月七日（十月廿五日）の革命前、已にコンミユニストは「平和のために」「全政權をサヴエートに」等の政治的モットーを出したと同時に、經濟方面に於て「生產に對する勞働者の監督」――共產經濟への道程に於ける第一階梯――の設定のために奮鬪した。

是等のステップは「全政權をサヴエートへ」てふモットーが實現された後にも繼續された。然しサヴエート當局は、共產制度は、他の世界が擧つてブルヂョア資本制度を續けて居る時、獨り隔離された一國に於て完成し得られぬものであることを、かねてから知つて居つた。それ故常に、左顧右眄、細心の注意を拂つて、ロシアに於けるコンミユニズム建設の道路を、徐かに前進した。のみならず、サヴエート政府は、終始、經濟的建設をすてゝ軍事方面即ち世界のインペリアリズムの軍事的進擊に對する武裝戰鬪の方に、氣をとられた。

舊曆の一九一七年十月廿四日から廿五日への夜中、ペトログラード駐屯兵及勞働者の武裝的叛亂に際して、叛亂者の戰死者が六名で、敵側には死者が無かつた。此の時の勝利の後、ボリシエヰキー中の比較的若い元氣な連中は「有史以來の最大の革命は、殆んど血を流さずして完成した」と、云つて歡喜したが、年長で且つ經驗をつんだ僚友は、澁面をつくり頭を橫にふり乍ら、六人の戰死者位で、革命の犧牲が濟むものでない、まだ〳〵敵味方共に血と淚を流さねばならぬ、ブルヂョアも地主貴族も、未だ曾て自分から進んで自家の權力と特權を讓步したことはないと語つた。果然、その後間もなく、ペトログラードに向つてケレンスキーの「人形兵」が、その後耻づる色もなく、ロシアをドイツに卸賣と小賣の兩方で賣つたクラスノーフ將軍のドン哥薩克兵と共に、進擊を始めた。その次には士官候補生が叛起した。最後に、全世界の資本列國と彼等の雇入れた幾多有色人種兵の國際的干涉が始まつた。同時に、サヴエート・ロシアは、拔け道のない封鎖と干殺しの經濟的ボイコットを受けた。かゝる境遇のロシアにあつては、共產制度を決定する經濟施設の組織的遂行な

どは、思ひもよらぬことであつた。

國をあげて國防に當つた。ロシアの生産力は、資本主義の混沌狀態に代るべき共産主義の組織を布くことよりも、國防のためにより多く用ひられた。これは非常の難事であつた殊に、ロシアは全世界からボイコットと封鎖を受け、加ふるに恰かも最も發達した工業地と豐沃た農産地方が武力干渉のために遮斷されたので、一層の困難を加へた。しかも疲勞困憊已に葬り去られた政府の遺産として殘つた重傷の尙ほ癒え切らないロシアは、ともかく全然自力丈けで、五百五十萬の軍隊を編成し已にツアール時代に、根本的に打破された産業を、ともかく技術的にこの大軍を給與し得る程度に、進めることが出來た。これは殆んど不可能な事業の遂行であつた。從つてそれが實行は、たゞ全國の生きた力が擧つてサヴエートの旗幟の下に自覺的に、又非常の決心を以て集合團結し、更らに最も峻酷にして、且つ秩序だつた非常政治――政治的テラー、國有（ナシヨナリゼーシヨン）、徵發、沒收等の實施によつて、始めて之れを期待することが出來た。即ち凡べての利害が、戰爭――インペリアリズムの進擊に對する革命の防禦の前に、讓られねばならなかつた。

初めは革命黨員自ら、子供のやうにお人よしにも、たやすく勝つた、血も流さずに勝つたとして歡喜したものだが、外國の干渉の發展につれて敵味方ともに殘酷を極める。階級的衝突が愈々激甚となる。白軍の占領地方では赤兵に對して極めて原始的な人道にもとるやうな殘酷振りを發揮する。

それと同時に、此方でも地方では、屢々全く自然的勢で、多數群集の本能的壓迫の下に、中央からの指令をまたずに手嚴しい手段がとられた。

而して當時の外國干渉は、常に內亂てふ保護色をつけ、いつも過去の人、即ち陸海軍の將軍連に率ゐられる露西亞人民の一部が、サウエート政府の周圍に集合した他のロシア人民の一部に對して、攻勢をとつたかのやうに見せかけ、已

に幾萬否な、幾十萬のロシア人の生命をその犧牲に投じた。

例へば、何等の考慮もなく、小規模の商賣を片つばしから國有にした。殊にこの種の小商業が、住民の主要な生活手段となつて居た地方で、盛んに行はれたものだ。しかし一度も、革命の指導者の方で、之れを認許したことがなかつた。しかも地方では饑餓に迫つた多數の群集の自然的勢ひの下に、盛んに行はれた。是等の群集は空虚な胃袋とショーウインドーに並べてある種々の珍味――それは自由と平等の國では、たゞ理論的には存在し得ないが、然しこの商業の自由否な投機の自由のお蔭で、存在して居る物質特權者だけが求め得る珍味――との間の矛盾を耐えることが出來なかつた。

本文の記者は、外交事務のあひ間に、政府の委托を受けて上記のやうな地方の組織事務に當つたことがある。"彼は常に小規模商業の國有には反對した。地方の僚友に向つてそんなことをしては、たゞ徒らに多數が貧乏する外、何ものをも作り得ぬことを説明した。けれども、彼がその地を去るや否や小規模商業國有は依然勵行された。

上記は即ちブルヂョアの干渉のために、階級的憎惡心が益々熱し來つた結果、社會主義否な半社會主義の施設の實行があまりに早過ぎた事實を語るものである。

一方に於ては、國家即ちサヴエート政府自ら、世界的武裝干渉と封鎖の期間、戰爭の要求に迫はれて、國家の經濟とその生産の利害を深く考慮する余裕がなかつた。第一、生産は殆んど、悉く軍用化された。第二、生産に於ても國民の經濟に於ても、凡べての生産物は、之れをその生産費の多少を問はず、どうでもこうでも作り出さねばならなかつた。かの干渉及封鎖時代重大なる役目に當り又特に農民に多大の苦痛を與へた徴發制度も、亦、こゝから生じたものに他ならぬ。

赤軍が食料品に窮し、しかも政府の徴税機關が、まだ完備しなかつた頃――即ち戰爭のために、必要な施設を布くこと

が出來なかつた——軍隊の兵站部は地方の農民から、時折、强制的に軍隊の必需品をとりあげねばならなかつた。しかもそれは、各農家に對し、單にその地方の村役場や、老人などから聞いた唯一の統計資料に依つて、割り當てたものであつた。

列國の干渉に對して、他の階級と同樣の敵愾心を持つた農民は、これを忍耐した。然しその忍耐たるや、非常に困難であつた。それ故、新經濟政策に移る第一步として、先づ徵發に代へるに、天然物稅を以てする法令が發布された。戰爭が終り、各部隊が自給の必要に迫られ、或は餓死するか、それとも己の生存のために、その場で直ぐ樣、必需品をどうでもかうでもとりたてるか、二者孰れか一ツを採らねばならないやうな境遇から脫却した時、始めて、納稅制度に移ることが出來た。

納稅制度によつて、國家は納稅の結果を待つことが出來、且つ逐次貯藏を積み、各方面の機關に供給することが出來る。他方、インペリアリズムの戰爭の直後の期間、即ちブルヂョア世界が非常の混亂に陷り、又未曾有の恐慌(パニック)に襲はれた時、コンミユニストが政權を握る唯一の國家たるサヴエート・ロシアは、上記の如き難關に當りつゝも、その當時の事情のゆるす限り、資本主義でなく共產主義を基礎としての露國の經濟組織に向つて突進せねばならなかつた。

而して共產制度は、唯だ一ツの國だけでは到底實現が不可能であると信じて居るにも係らず、否なむしろ兎かく信ずるが故に、ともかく世界に向つて、從來コンミユニスト以外凡ての人がユートピアだと做した共產制度の具體的實現の手本を示すべく努力せねばならなかつた。

勿論歐洲各國中、經濟的に最も後れた國、否な恐らくは、かゝる急進的改造には全然適せない唯一の國であるロシアに於ては、誠に至難の事業であつた。

然し、「不幸のおかげで幸福が來た」と云ふロシアの古諺の通り、ロシア國民のために、あれ程苦痛であつた封鎖とボイコットも、一方に於ては、實に、ロシアを世界の經濟機體の中から切り離して了つた。列國の經濟機體と云ふは、現下の經濟眼から見てたゞに全歐洲のみでなく、全世界から成立して居るとしなければならぬ。しかし機體の箍はインペリアリズムの世界戰爭の結果、資本制度の根柢の動搖と、その力の衰頽につれて、著しく弛んで來た

恰かも戰後の疲弊期に際して資本主義世界から手嚴しいボイコットと封鎖とを受けたサヴエート・ロシアは、實に、「經濟的不可能事」そのものであつた。即ち殆んど、全然獨立し、隔離された經濟機體を形成したのである。その結果、一方に於てはロシア國民は非常の窮境に陷つたが、他方に於ては、ロシアはおのづから殆んど自然經濟の狀態にひつ込まれ、更らに又その結果として、ロシアの新政府は容易に、別個の經濟方針をたてることが出來た。

如上の事情の下に、前記の經濟方針は、略ぼ次ぎの如き順序で遂行された。即ち先づ「血を見ない叛亂」の殆んど翌日に於て、「平和」及び「土地」に關する有名な政令が發布された。前者は政治的目的で發布され、サヴエート政府が、「平和のための戰爭」即ち實は、「世界革命のための戰爭」の火蓋を切つたものであつた。後者は、ロシアに於ける最大多數の階級即ち小農民の利益をはかり、彼等を革命の味方にひき入れ、彼等と舊ロシア地主貴族とを永久に離間するためのものであつた。蓋し、ロシア革命に對して武力的戰闘をなし得るだけの氣力と階級的憎惡心を持つて居つた——一部は今でも持つて居る——ものは、たゞこの地主貴族だけであつた。ロシアのブルヂョアに至つては、元來微弱で、極めて脆く敗北し、最初はサヴエート政府に對してボイコットを試みたが、やがて外國に落ちのび、そこでロシア革命の蔭口をたゝいて居た。それが近頃、少數の例外を除く外、多くは、「革命と仲直り」をして、昨今漸次故國へ歸り、故國ではもとの仕事に復歸しつゝある。」

前記の「土地法令」の發布後、サヴエート政府は、「搾取者の搾取」てふ共産革命の根本要諦を、部分的に遂次徐々と實現すべく幾多の政令を發した。鐵道、大規模の工業及商業の國有令（次いで必要に迫られて全部の工業及商業を國有にした）が出た。各種の銀行、保險會社等が國有となつた。同時に、市民の物質狀態を平均する手段が講ぜられた。（何人も一萬留以上の現金もしくは財産を所有することを禁ぜられた）階級別による配給令も出た。生産物の生産及配給を國家のモノポリとすると共に、それに必要な諸般の施設も實施された。サヴエート ロシアはかくして有史以來、始めての試み、即ち資本主義の混亂不秩序に代へるに組織だつた共産主義の制度を以てすると云ふ試みを斷行した。最後に國際關係に於ても、新らしい政策が打ちたてられた。サヴエート政府はツアール專制時代の國債全部を廢棄した。秘密外交不承認を聲明し、その掌中に落ちた秘密條約を悉く公表した。同時に、サヴエート政府は始めて、「民族自決主義」を、宣言したばかりでなく、實際それを實行した。

吾等はこゝではたゞサヴエート政府の經濟及一部政治方面に關する施政中の最も主要なるものだけを記したのみである。勿論サヴエート・ロシアの周圍の狀態は、到底是等の政令を一時に發布するを許さず、多くは比較的長い期間を隔てゝ發布された。然し、全部の政令を集めると隨分多數に上り、「法令集」は、新經濟政策に移る前に、既に數冊を重ぬるに至つた。

然しこゝに特記すべきは、上記の期間、サヴエート政府の諸般の施設（殊に經濟方面に於て）が、左の二ツの目的を主眼としたことである。即ち第一、「社會主義の祖國」とその政治的、經濟的及主義上の權利を守るための戰爭の要求應ずること。第二、出來る限り、世界のプロレタリアートに共産制度實行の——前例のない——手本を示すことが、その重なる目的であつた。而して世界のプロレタリアートのサヴエート・ロシアに對する同情と、その好

の干渉に對する積極及消極的反對運動とは、サヴエート・ロシアがインペリアリズムの武裝的干渉に對して、最後の勝利をかち得たについての有力なるファクターであつた。

然し、世界の大勢も亦、變つて來た。此の間、サヴエート・ロシアはその近隣の諸國、ロシア帝領に與つた小共和國と、平和條約を締結した。而して此の條約は實に偉大なる結果をもたらした。資本主義の世界がロシアを包圍した封鎖の鐵輪に、穴が穿たれた。サヴエート・ロシアはこの平和條約に據り、此の穴を通じて、恐らくは、敵の意志を問ふことなしに、世界的資本主義舞台にのり出した。全世界、殊に全歐洲は前記の如く、今や一ツの經濟機體を形成して居る。ロシアは再び此の機體の一部分になつた。他の凡べての事情を別として、この一事丈けでも、ロシアと資本主義世界との從來の相互關係の繼續を不可能にし、同時にサヴエート・ロシアの內治(特に經濟)政策にも影響を及ぼした。

吾等が幾度か反覆した如く、已に世界的資本主義の渦中に引き込まれた一ツの國に於て、共產制度を隔離的に實現することとは不可能である。而して、それ故にサヴエート・ロシアの施設の多くが可能になり(但しサヴエート當局はまだ曾て、已に共產經濟を建設し得たと考へたことがないが)武力干渉及封鎖當時、サヴエート・ロシアは事實に於て自給自足の經濟機體をなして居つた。

今や四圍の狀勢が變つて來た。武裝干渉は止んだ。從つて戰時の必要に迫られて施行した施設は、多く、その意義を失つた。こゝに於て、サヴエート政府は、今迄どこまでも必要と認めて施行した幾多の施設を再び改變せねばならぬことになつた。

加ふるに戰爭、ヴエルサイユ講和とその結果及び對露干渉のために極度に疲弊した世界、殊に歐洲の經濟機體は、恰かもその頃勃發した工業及商業の世界的危機に際して、愈々苦境に陷り、ブルヂョア世界はサヴエート・ロシア、殊にそ

の赤色軍の勇敢なる抵抗に會して、到底武力を以てしても糧食攻めにしても、サヴエート　ロシアを奪取出來ぬとあきらめた揚句、つひに從來採つて來た政策ではいけない、他の手段によらねばならぬ、他の手段によつて當初から痛みの激しかつた傷—自ら自分の體に刀を下し、外科手術を加へて、ロシアを歐洲の經濟機體から切り取つた時の傷—を癒すことを考慮せねばならぬことになつた。

然し他方に於てはインペリアリズムの戰爭後、しかく近いやうに思はれた世界プロレタリア革命に對する恐怖の餘りブルヂョア世界は幾度か非常の恐慌に襲はれたが、近頃では著しくこの恐慌氣分を和らげて來た。

プロレタリアートの老首領連は幾度となく豹變した。幾多大きな勞働者の政治的反對團體（オッポジション）は假面をかぶつては居るが事實ブルヂョア側即ち防寨（バリカード）の向ふ側に鞍替した。史上未曾有の大戰爭の結果、一般生活狀態は、極度に困難となつて來た。之等の危機に必らず附隨する饑饉と失職は、近頃、一層激しくなつて來た。斯くしてブルヂョアはたとひ力衰へ、一向落ちつくことが出來ない乍らも、尚ほ一層强い力を以てプロレタリアートにブツかつて來た。世界のブルヂョアは、大體に於て、最近徐々乍らも秩序的に、攻勢に轉ずる餘力を示して居る。

前記天然物納稅法が發布されるや、從來のやうに怪しい統計によつてとりたてられるやうなことがなく、農民はその歲の作柄と各自の全財産に應じ、天然物で納稅し、殘余の收入を自由に處分する權利を與へられた。右は—特に稅率が低いために——中農の狀態を著しく改善し從つて全般の生活程度が高められた。然しこれと同時に、政府に於ては幾多補足的施設を行はねばならなかつた。既に農民に對して收入の一部を處分する自由が與へられた以上、當然、從來發布された農産物賣買上の禁止法令が不用にならざるを得ない。又農民は農産物の賣上金で必要品を買はうとする故に、天然物納稅法と共に、他の方面の商業に就いても、制限を撤廢せねばならぬことになつて來る。斯くして一般的に商業

の自由が復活される。

此のプロセッスは、此の先も展開して行く。商業が自由となれば、市場に出る商品の生産者は、必らず自分の生産品が他人の生産品よりも、よりよく賣れるやうにしたがる。工業が國有にされてあつても、矢張りさうである。即ち軍隊供給を主とし、配給を中央に集中した當時にあつては、國立工場では、その生産が利益とならうが損にならうが、概してどうでもよかつた（どうせ同じ國庫から支拂ふのだから）。然し今日では、國立工場でも私人との商業に際し、その私人から利益を得ることを忘れてはならぬ。畢竟、國家のためには必要な工場は凡べて、之れを歳計豫算から切り離し商賣的打算方針で經營した方が得策となつてくる。

更らに進んでは新らしい商賣的打算から見て、政府自ら經營し切れぬ事業は、之れを個人の手に渡す。斯くして個人工業が部分的に復活される。

しかし濃厚に密集した所謂經濟界の雰圍氣を打ち晴らすプロセッスは、如上の道程を進んで行く。

もしこのプロセッスを、どこまでも何等の制限なしに進めて行くとしたならば、新經濟政策はコンミユニズムの死である。今日のロシアはブルヂョア國と何等選ぶ所がない——となす論者は正當であるかも知れぬ。

然し、そこには、實に一寸目にはつかぬが、しかし非常に重大な制限が若干保留されてある。

先づ第一に對外貿易が、國家のモノポリとしてある。此のモノポリは、廣く網を張つて居る生産及消費コオペレーションと相俟つて、自由貿易に對し最も有力なる調節者となり、資本主義の混亂した經濟の中に、社會主義的組織と秩序を注入する。何しろ、國家が外國市場に於ける唯一の供給者と需用者であつて、或は自ら賣買の局に當り、或は輸出入の許可證を出すのだから、その買ひ入れる貨物は實際國家に必要なるものだけに限られ、商賣の掛引からして個人商人

のために利益となるやうな商品には手をつけない。

次ぎに、經濟界を左右するに足る如き、有力なる大規模の商工業は國家の管理に移し、政府——その政權は、共産黨員の掌中にある（それも特記すべき點である！）——はコオペレーションと協力して、何等の行政的壓迫などを加へず、たゞ、合法的の資本主義の競爭手段によつて、國内の商工業を適當の方向に向けることが出來る。

其の外、鐵道、水路、車道等の交通機關も、亦悉く政府の手にある。かくして、國内の商工業に對する調節力は愈々確實になつて來る。

加ふるに、政府の手には計劃的經濟なるものが殘されてある。即ち政府は、自由商工業の調節をなすに當り、決して盲滅法に進むものではなく、豫め深き考慮と周到な用意とを以て作製した計劃によつてその局に當るものである。而してその計劃たるや、なるべくソシアリズムの世界に近い方向に向つて、國家を導くものであることは云ふまでもない。

「計算と、組織とはソシアリズムの根本である」とは久しい前から云はれて居る。

然らば、ロシアに於て如何なる變化が起つたのか——とつひ今しがた、新經濟政策はコンミユニズムの破産だ、今日のロシアは他のブルヂョア國と少しも變らぬ、と斷定した人達のあるものは問ふであらう。

變化した！大なる變化が起つた。先づ第一に互ひに戰ひ、互に憎み合つたサヴエート世界と、資本主義の世界とは、目下の所、否な恐らくは、大分長い期間、互ひに力では打ち勝つことが出來ぬ、否なむしろ一方は他の一方なしでは立つて行けぬと云ふことを覺醒するに至つた。否なさう覺醒しなければならぬことに立ち至つた。

更らに、變化を來たした事は、コンミユニズムが世界革命の勢力の著しく弛緩したのに鑑み、たとひ後戻りはしない、否な、已に、定められた道からは横へも外れはしない、が、ともかく互讓點（コンプロミッス）を見出しそれによつてサヴエート共和國は、

來の方針で進み乍らも、尙ほよく、廣く、ブルヂョアのために門戸を開き、ブルヂョアをして、安心してサヴエート共和國内で、自他共に有利に、共同して働らくことを得さしめたことである。

而して、それはたゞに、敗北したロシアのブルヂョアのみでなく、實に世界のブルヂョアにも及んだのである。ロシアのブルヂョアは、已に夙くから、あるものは愛國心にかられ、あるものは各自の利己心から、サヴエート制度を承認した。而して世界のブルヂョアは、サヴエート・ロシアの勃興匆々、全歐の經濟機體の上に受けた、「ロシアの不在」てふ重傷を何とかして癒さねばならぬことを知つて居た。あの道——即ち、サヴエート・ロシアを自家の手本通りに、改造しやうとして採つた武裝干涉及封鎖の道—は不成功に終つた。

殘る所は他の道—即ち、同樣に讓步腰となつたサヴエート・ロシアとの妥議(コンプロミッス)の道—である。

色々考慮した、色々爭論した、而して、その揚句…サヴエート・ロシアをゼノアに招き、共に歐洲の經濟的改造問題を決することにした。

しかも、ゼノアでは事實ロシアに對して、何ものをも與へず、たゞロシアから、自家の損害賠償を奪ひとらうとしたに過ぎない。然るに、破壞された歐洲の經濟問題を眞面目に議するものと信じたロシアは、鎧甲も被らずに、ゼノアへやつて來た。そして、聲を高く且つ明白に、聲明した。曰く戰爭を止めねばならぬ。ロシアは資本主義の世界なしでは立つて行けぬと同時に、資本主義の世界も亦、ロシアなきを得ない。之れは誰にも明白な事である。從つて相手の國の政治思想が何うあらうと問ふ所でない。それをよく理解したサヴエート・ロシアは已に夙くから實際的にコンプロミッスの準備をとゝのへ、それによつてサヴエート世界と、ブルヂョア世界との間の事業上のコオペレーションを可能ならしめやうとした。ロシアとの經濟的妥協は、世界の前に大なるパースペクチーヴを展開する。此のパースペクチーヴの大

なることに就いては、誰も未だ曾て、疑を容れたことがない（而してサヴエート・ロシアの代表委員は、更に資本主義世界に向つて、幾多具體的の利權讓渡案を提議した）……と。

最後に、ロシア委員は、特に言明して曰く、露國政府四圍の新らしい狀勢に適應すべく、ブルヂョアとプロレタリアートの權利觀念に合致した民法及刑法を作製した。外國資本の過去の損害に對する要求は之れを認めないけれども、更に新らしい讓歩の一として相互主義の下に、戰前の債務を承認する。露國政府は、ゼノア會議前既にその利權讓渡（コンセッション）政策に於て、世界の資本に對し思ひ切つた讓歩をなした。然しもしそれにも係らず、資本主義世界が已にロシアに於ける外國資本に對して與へられた保證を不十分だとするならば、直ちに此處で——會議に於て——愼重に且つ好意的に夫々資本主義國の代表者の申込を改めて審査してもよい……云々。

然し、ゼノア會議は、その名に反して、その實、全く別個の目的に向つて進んだ。即ち、經濟問題よりも政治問題——しかも、國際的政治問題と云ふよりは、內輪同志の政治問題に當つた。

ハーグ會議は、ゼノア會議の繼續であつた。しかもたゞ專門家（エキスパート）の會議に過ぎなかつた。勿論、同會議は一歩も前に進むことが出來なかつた。

然し、世界一般は兩會議を以て、何ものをも與へ得なかつた、從つて不成功に終つた、として居るけれども、吾等の見る所では、右の觀察は全く過つて居る。兩會議は重大な意義の會議であつた。即ち第一、世人をしてサヴエート共和國の眞相を會得せしめた。第二、歐洲經濟狀態の現實を明らかにし、以て一層歐洲現在の經濟機構にロシアを加へることの必要を明證した。其後の事件は愈々明確に如上の當然であることを證明した。即ちローザンヌ會議の如き、たゞ、政治問題丈けを解決するために開かれた會議ですら、尙ほ且つ、經濟問題に觸れざるを得なかつた。而してかの「石油

戰」の如きはローザンヌでも長春でも全くゼノア及ヘーグに於ると同様の役目をなした。

その頃サヴエート共和國は新經濟政策に於て、更らに一歩を進め財政政策に關する幾多の法令を發布した。所謂「露國問題」に就いてはまだ世界的にも、はた、又歐洲に於ても一般的解決は下されてない。たゞ若干の國際的決議が行はれただけである。然し、そんなことには目もくれずに、個々の國、もしくはそれ等の國々の個々の資本家は、已にサヴエート共和國との通商を開き、益々その發展をはかりつゝある。而して、恰かも其頃サヴエート共和諸國は合同して一ツの「サヴエート社會主義共和國同盟」を形成した。

然し、サヴエート諸共和國の經濟狀態が、新經濟政策につれて著しく改善された（これを證據だてるためには別に一文を草さねばならぬ）にも係らず、又サヴエート共和國と、ブルジョア列國とが經濟的に接近して來たにも係らず、ブルジョア世界は何うしてもサヴエート世界との妥協なくては到底インペリアリズムの戰爭の遺產として、世界に殘された打ち勝つことの出來ない經濟難を救ふことが出來ない。

サヴエート共和國が同等の權利を持つて全歐經濟機體に加はり、相當の地歩を占めない限り歐洲の經濟改造の名に於て何等血路を見出すことが出來ない。サヴエート共和國が一層至難な經濟狀態に陷り、戰爭、封鎖、干涉のために根本的に破壞された經濟を、獨力では到底恢復することが出來ない。それ故、恰かも資本主義の世界がサヴエート世界との妥協を要すると殆んど同樣に、サヴエート共和國も亦資本主義の世界との妥協の必要を感ずると云ふ事實によつて課せられた刻下の根本問題、根本のプロブレムは依然として解決されぬ。而してそれは主として資本主義世界が、たゞにこのプロブレムの解決のために何等なす所がないのみならず、プロブレムそのものすら之れを知らないで居るからであ

る。

然し、「現實」は、益々、問題の緊急解決を、要求して已まない。今日、尚ほ、刻下の主要問題の何たるかを知らぬ者があるとしても、その人は、必ずや遠からずそれを覺知するであらう。即ち、今日最も重大なる問題は、サウエート世界と資本主義の世界との妥協を可能ならしむべき國際的コンプロミッスを作り出すことである。

たとひ國内の制度と、對外政策上に差異があつても、サヴエート共和國と資本主義の列强との間に同盟―コオペレーションの如きもの―を作り出し、それによつて双方共に自家の本質を失はずに、歐洲乃至全世界の國民經濟の復興のために共に努力することが刻下の緊急事である。

本文は、實は何うしてサヴエート世界が、從來の資本主義に對する敵對的態度から新經濟政策の實施に向ふ途上にあるかを、說明するを目的として起草したものである。而してこの新經濟政策は、世間の解釋の如何に拘らず、已に眞面目に且つ永久にサヴエート世界とブルヂョア世界。とを共同して仕經濟的地盤に於て、(時としては政治上に於ても)仕事を共にするやうに導いた。

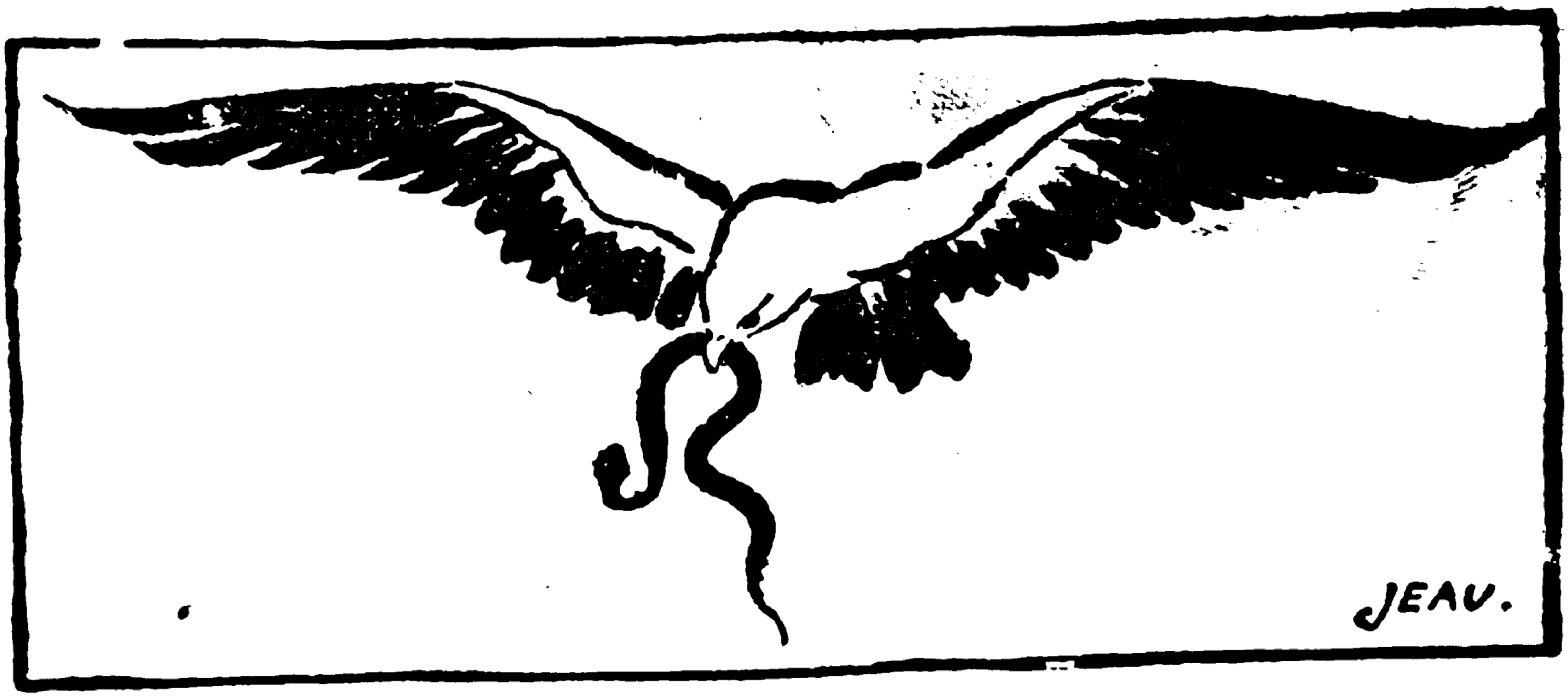
但し、今尚ほ遺憾ながら、以上の地盤はたゞサウエート共和國側だけの努力で築かれた。而して資本主義との事實上の共同の仕事は、たゞ個々の資本主義の事業家もしくは彼等の團體を相手にして、所謂「私的」に行はれて居る。しかも、是等の取引は法律上の保證なしに行はれて居る。それは資本主義國の政府が、極く少數の例外を除き、今尚ほ刻下の世界的プロブレム、もその役目も、意義もこれを認めないからである。

然し、それにも係らず、吾等は少しも疑はぬ、偉大なる師、「現實」は他日必らず、恰かもサヴエート世界を教戒し

得たと同樣によく、資本主義の世界を教戒するであらうことを。

（熱海ホテルにて四月十五日）

私どもはこの原稿を繙いて涙ならでは居られなかつた、ヨッフェ氏が三十九度五分の發熱があつたにも拘らず、幾日も〱もそれを我慢して一日に一枚、二日に一枚と鏤刻するが如くして幾十日もかかつて此の燦たる名文は出來上つたものです、本社記者は熱海に使すること廿回に近かつたのです、ヨッフェ氏は勞農ロシヤで一大異彩ある政治家であります、外交官としての才腕、辣腕は當代並ぶ人もない位です、その人がこんなに纏まつた論文をかかれるのは時代後れの我政治家に對し大なる？　を投げかけたものです。終りに我々はヨッフェ氏の厚意に感謝すると共に氏の體驗から滲み出たこの長論を研究の對象として露國研究に一段の步武を進めたいものです。(記者)



——改造五月號——

言論を蔑視する風潮

このごろ言論を蔑視する風潮がある、その原因には幾つもの理由はあらうが、第一に我國の言論界が世界の思潮に孤立してゐることである、依然として資本主義の傀儡であるからである、その道徳的批判社會的論評が民衆の頭腦より一歩後れて居るからである。そして諸君は極端なる權力崇拜者であり、他力本願主義であるからである。直接行動の聲はどうして起れる、暴力是認の忌はしき風潮は何故に起れる。その罪は必ずしも官僚と軍閥のみが負ふべきものではない。

諸君は加藤内閣の倒潰を望むことが急である。しかしそれは問題の末梢で、その本源をなす支那問題の根本的解決には毫も關與せざるが如き態度をとつて居るではないか、そして加藤内閣の更迭以上に數倍も、重大問題である二十一ケ條問題に對する諸君の言論は何等中外に重きをなさない、其は實に特權階級の代辯たるの觀がある。

諸君のよく云ふ―首相の道義的觀念―それがないのは今更のことではない、彼が研究會あたりから道樂華族の幾人をも閣僚に引張りだした一事でもその心事が民衆になかつたのは明白である。不誠實、老猾な我利心の發動であつたのである、彼にして眞に支那問題、日露問題に對して何等かの希望と理解且つ一片の公心があるならば、機は既に十二分熟した今日であるからどうにでも形がつく筈だ。彼が水平運動の代表とかに對して面色土の如く、ワナ〳〵慄えたといふ一事で以つて日本海の勇將も多寡が知れたものである。

言論を蔑視するの風潮といひ、首相を町奉行ほどにも思はぬ狀態といひ、その底を割れば幾多の原因が伏在している。元老を蔑し、軍閥を蔑し戰勝の余威を藉る言論界も今のままに時代との無理解、且つ政黨の御先棒を承はる不見識が永續したならば、ます〳〵蔑視せられ、資本家その他よりは與みし易しとせられ、一面、直接行動、暴力政治が出現するやうな寒心すべき結果に到達することはないか。

このごろの言論界を蔑視する風潮に對し、われ〳〵は謙遜の態度を以つて深く自省すべきではないかと思ふ。

世界政局の危機

片山潛

歐洲今日の狀態は肺患者の如きにある。殊に歐洲大陸は然うである。資本主義のモガキ樣は何う見ても其死物狂としか見られない。併し、肺患者的に如何に疲勞しても身體肺心共に衰弱しても又行き詰つて居ても精神丈は元氣で現狀を切り拔けんと百方畫策して居る。佛國がルール地方を占領したのも、佛國資本主義の行き詰りを示すもので、肺患者が精神過敏となり斯る暴擧を敢てするに至れるものである。

佛國がルール地方の占領を斷行せし理由は種々あるが、最も主なるものは獨逸の回復を恐れたのである。然り獨逸の復讐を恐れたからである。獨逸は休戰條約や之に次ぐに平和條約で其武裝を剝奪されたのであるが、ルール地方が其有である以上は復讐戰の準備をなしつゝあつたのだ。佛國は安心して戰後の回復事業に味を入れてやることは出來ないのである。佛國の現狀は財政上に於て危機に迫つて居る、其三億萬磅の國家財政の欠陷を何うして補ふかは問題である。實に佛國は獨逸が支拂ふ償金のみに依つて其生命を維持して居ると云ふ有樣であつて、而かも獨逸より償金を取るには獨逸の產業を發達せしむる外はないが、其產業發展は將に佛國の產業の一大競爭者となつて來るので佛國及び英國の資本家の欲せざる所である。斯くの如く佛國の對獨政策には一大ヂレンマが橫はつてるのであるが獨逸の產業は休戰條約履行の爲めに多大の償金を金品で支拂ひたるに拘はらず、益々進步の傾向を示し、マークの下落は或る程度を、少なく

とも最近迄は獨逸資本家を利益した。之は、彼等が安き賃銀で精鋭なる職工勞働者を使役して來たから、勞働者も賃銀は安くても物價は騰貴しても仕事があるので最近迄は凌ぎ來た。而かも獨逸國内の生活費用はマークの下落と比例して下落は爲さない。國民の大多數を占むる勞働者は組合を有して雇主に當り或程度迄は物價に相當する賃銀を要求して來た。而かも彼等は何れも消費組合及製造販賣組合（日用品）を利用して比較的其生計を緩和して來た。

斯く獨逸國民の活氣あるを見て居る而かも戰爭に其壯丁の半ばを失つた佛國は獨逸を怖れざるを得ない、而して獨逸の軍閥等は私かに其權力回復を準備しつゝあつた事は公然の秘密である。此一事は佛國をしてルール地方即ち獨國產業地の中心を占領せしむるに至れる所以である。

然るに一方獨逸の大資本家スチンネス一派は例のレパレーション問題を資本化し、之で其利益を壟斷せんと佛國政府と一種の契約を結びたることは既知の事實にして其目的は獨逸の勞働者を之に依つて一層搾取せんとする者で之れには佛國の資本家も贊成して佛獨資本家の提携となつて居るのである。佛國の資本家と獨逸の資本家との提携の成立に次ぐにルール地方の占領を以つてし、若しも佛國の計畫する如く事實上之が永久占領となり而かも佛國管理の下に「ライン共和國」とでもならばスチンネス一派はレパレーションの負擔を免かれて其利益のみを獲得する譯となる、今度の占領が獨逸民族の國家的觀念を非常に刺戟してルール地方では勞資協調的對佛政策を執り一見スチンネス一派も佛國のルール地方占領に大反對を示すが如きも、事實は敢て然らずで彼等は佛國資本家と提携して以つて其强敵たる英國の鐵工業に當らんとせる遠大の企圖に出でたるもので、實に獨佛の資本家等は斯く提携して以て兩國の無產階級を思ふ存分に搾取し終らんとせるものである。

今回、佛國がルール地方を占領するに至りたるは其永年の希望たる占領を獨のレパレーション不實行を一期として斷

行した者で、經濟的占領とは云へ事實的永久占領を意味するものである。

そして佛國が此占領に依つて結局直接利するか否か、又は佛國政府が揚言する如く獨逸を強制的にレパレーション條件を履行せしめ得るかは頗る疑問である。よし其占領が佛國年來の目的であつて、今度の行爲は之が目的を達したる者として佛國の政事家は滿足するかも知らないが、占領以來、表現されつゝある事實は悉く佛國に不利益なる事を示して居る。第一の事實は佛國の世界的信用を損害し來つたことにある。一例を擧ぐれば一月二日に巴里爲替相場は英貨一磅が六十二フラン八十であつた、米貨一弗は十三フラン五十であつたが漸次にフランは下落して英貨一磅は月末に七十八フラン六十になり米貨一弗は十六フラン九十近くになつた、マンチエスター・ガーデアン紙は其經濟週刊號一月二十六日發行に頗る悲觀的批評を佛國のルール占領に加へて居る。曰く、最近の佛國内閣會議はルール占領地域に鐵輪(アイヨン・リング)をはめて非占領の獨逸へ石炭の輸送の出來ざるようにすると決定したとの事であるが、之が實行には今一層多く人を派遣して監督を嚴重にしなければなるまいが、佛國の財政豫算の缺陷は占領前既に三億萬磅に達して居た。英國が千九百十九年に勞農露國と半壓迫的戰爭を試みても一億萬磅以上を費した經驗よりすれば佛國は又、多大の戰費を出費せざるを得ないであらうと。

啻に、佛國對外爲替が非常に本年一月中に下落して其對外信用を損したるのみならず、佛國は直接占領によつて損害を蒙りつゝある、一例を示さば其ルール地方占領十二日間の成績に見るに占領前に佛白兩國は毎日二萬貨車の石炭を獨逸より得たりしが占領後の十二日間は平均八千臺の貨車の石炭を得たるに止まる。之に反して非占領獨逸地方に向つては一日二萬二千貨車の石炭を送れりと云ふ、之も一月廿日の事で石炭坑ストライキの爲めに少からずと云つて居る、然り實際佛白兩國がルール地方占領以來、二週間に得たる石炭の總高は二萬八千噸で占領前迄の平均に等しき高を得るとせ

ば、佛國は八十萬噸を得る譯である。之が爲めに佛國は其ロトレンに於ても鎔鑛爐を四十も閉鎖するの止むなきに至つたと報じて居る。然れども總べての結果如何に拘はらず佛國は益々ルール地方占領の鐵輪を强固にして且つ區域を擴大しつゝある、歐洲の前途は實に暗澹たる者と云はざるを得ない、只獨逸民は疲勞し切つて居る而かも伏したる犬の如く彼等は只諦めて成行に任せると云ふ一事あるのみである。其帝國主義者と平和主義者とを問はず、永年軍國主義に教育され、且つ實際に之を經驗して來た所の獨逸國民は今日實際聯合國から武裝解除されて居る事を知つてる故に、如何に壓迫さるゝも、如何に搾取さるゝも又今日の如く現に其產業の中堅なるルール地方を占領されて凡ゆる迫害と亂暴とを敢行さるゝも如何ともすること出來ずと『諦らめ』て居る、其情狀は悲慘なる國民的一大悲劇である。ルール地方占領後佛國は豫定の行動として威嚇に威嚇を加へつゝある。前週中は占領地の一病院を病人患者諸共に追つ拂つたり、此處では佛兵に殺されたとか、彼處では射殺されたとか、捕縛投獄されたとか日々に其慘劇を極めつゝある、抑も獨逸政府及び人民は斯占領に對して如何なる政策手段を執り來りしか、佛國のルール占領に對する獨逸クノー政府の政策は、當初から消極的であつた。佛國の占領理由が經濟的占領とか、生產的占領とかあつたに對して獨政府は占領を以てヴエルサイユ平和條約に違反する者として斷然レパレーション條件の實行を中止した。ルール地方に向つて佛國官憲に對して非共同手段に出づるように命令を占領地官民に向つて下した。同地方の官民は一擧に出でて佛軍、民に對してボーイコツトを斷行した、其最著明なる者はルール地方第一の石炭會社なるレニシ・ヴエストフエリアン・コール・シンヂケートが其會社をエツセンよりハムブルグに移轉したので之は佛軍がエツセンに侵入せし日であつた、之が移轉はルール地方石炭採掘運輸一切の帳簿記錄を持ち去りたる者で事業は暗黑となれる譯である、故に佛國は如何にもがくも石炭供給の頭腦たる一大會社が其全機關にして移動さるべき物を悉く移轉したる故に其事業を經營するには非常なる困難を感ぜざる

を得ない、否な之が營業は事實不可能であるとの事である。

獨逸國は休戰以來始めて擧國一致の態度を以つて侵入佛軍に對した。ストライキ、サボタージ、ボーイコツトと凡ゆる手段を以つて佛軍及び其官憲に當つたのである、一種のガンデイズムは出現したのである、鐵道も佛國に向つて輸送せず、石炭は運ばず、至る所にストライキは行れて佛國軍隊の現在する所は無抵抗の抵抗が行れて例の非共同は實行されたのである。之が爲めに佛軍は進んで捕縛、銃殺、暴力を以つて殘酷極まる壓迫脅威を行ひつゝある、破壞的サボタージを爲す者は敵と認めて銃殺すべしとの命令を發するに至つた。尙ほ佛軍及經濟的官憲の命に從はざる者は直に追放すべし等、其他續々と脅威的政策は應用されつゝある。

今迄雇人とそして勞働者を壓迫して來た資本家や政府が資金を投じ、政府の命令を以つて同盟罷工を爲さしむるに至り。又勞働者にしても其雇主が佛國軍に捕縛されたからと云つて直に全炭坑夫が同盟罷工に出づるなどは擧國一致とは云へ一種の奇觀である。獨り獨逸の共產黨は之に反して獨逸の資本家にも亦佛國の資本家にも其帝國主義にも反抗すべしと云ふ態度に出でた。之には佛國の共產黨及伊、英、和、チエコ・スロボツク國の共產黨も贊成して佛國が將にルール地方占領を斷行せんとするに先ち、エッセンに國際的共產黨殊に獨佛の黨は其代表者を送り占領反對の一大示威大會を開催し其斷乎たる意見を發表した。之が爲めに佛國の共產黨員、カミヤン、モンモソーケル其他卄餘名は捕縛投獄された。

獨逸は佛軍に對して經濟的產業的及社會的反抗を今日迄繼續して居るが、佛國は其壓迫を强め武斷的に殘酷を極め而かも占領區域をも漸次に擴大して居るが、何人も容易に其前途を豫言し得る者はない。又獨逸を援助する者も資本家國からは仲々出さうもない、伊國首相ムソルニーも其技師を派遣して佛白のルール占領に協力してる以上、佛國政府の不利益になるが如き仲裁がましき態度も執らざるべく、首相ブランテング氏も容易に其主張を國際聯盟會議に於て急に持

出す模樣もない。今や獨逸國は舊獨帝國主義の權化ルデンドルフの云へる如く、英米は干渉せざるべし。故に獨逸は全世界に於て一人の友人を持たず、只與國一致以つて其前途を期するにあるのみと慨嘆せるが如き狀態に在るのである。

佛國のルール地方占領が愈永久的のものであり、之に白耳義の資本家が加盟する以上は、佛國の歷史的希望たる鐵、石炭、水、コークス等鐵工業に必要なる諸物資が此地方に集注されて而かも之が佛獨の安き賃銀勞働者をレパレーション條件の下に於て搾取さるゝ事となるのであるから英國の石炭業者と其鐵工業者は此ルール地方に一大競爭者を見るので英國の資本家の堪へる所ではない。若しも此が愈事實となつて現在する時は英佛は必ず戰爭を爲すであらうとは今日識者の斷言して憚らぬ所である。然りロンドン、タイムス紙は二月初旬既にアンタントの危機は非常に切迫しつゝあり、よし英佛兩國の人民は之が破壞を欲せずと雖、佛國が今度斷行しつゝあるルール占領政策は其結果如何に拘らず大英國の贊成もせず、又許しもせぬ所であると一大警戒の言を發して居るを見ても、英國の態度の那邊に在るかは明確である。尙ほタイムス紙は進んで、若しも佛國政府がルール地方占領に止まらず、獨逸の他地方迄其占領の手を擴げるが如き事あらば、此當然の結果としてヴエルサイユ條約は全滅するに至るべしと云つて居る。

英國の對佛關係は決して好望なりと云ふことは出來ない。メソポタミヤ石油問題と云ひ、トルコ問題殊にラウザンナ會議に於けるモスル問題に於て一旦英佛はルール地方占領と交換問題に決定せしかの如くなりしも、ラウザンナ會議が危機に迫り破滅に終らんとするや、ポアンカレー首相はアンゴラ政府に特別電報を發したり、又た近東に於ける佛國代表者をしてラウザンナ會議が若しも失敗に終らば、佛國はトルコと單獨講和を爲すべしとアンゴラ政府に通牒せしむるが如きは以つて如何に英佛關係が緊張し來りつゝあるかを推察するに難からず。加之、ポーランド對リスアニヤの國境問題たるメメル一件も亦容易ならぬ問題に進みつゝありて何時此邊から歐洲新戰が勃發するか分らない有樣である、

今や、佛國は大戰前の獨逸帝國を以つて任じて居ると云ふてもよい、八十萬然り、百萬に近い常備軍を有し其飛航隊は世界に冠たるものがある、ルデンドルフ將軍も明言せる如く英國が佛國と分裂して戰端を開く能はざるは、一に佛國飛航機隊の完備せる爲めなりと云へるが如くである。然れども前記の如く佛國資本家が白耳義資本家と協力してルールラインラント及びローレーン地方に於ける鐵工業を確立して英國の其と競爭せんか、後者は慘敗の外はなからう。此は英國資本家政府の百も承知する所であるから佛國をして第二の獨逸たらしむるに終ることはないであらう。英國の政事家が、佛國と永く此儘で提携し得ざるを知り、而も之が一大衝突の日ある事を豫想して私かに之が準備を爲しつゝある事は、最近協定の成立せる英國の對米借款の金利問題である英國が容易に米國の主張に讓れるが如きは實に其著明なる一證である。英國が其對米債務を支拂ふ折、契約の成立を急ぎたるは其對佛關係の日に月に危機に迫りつゝあるが爲めに外ならない。而して英國は露國と通商を盛んにせんと希望して居る、之に引き替へて佛國は、露國より舊債を回收せんとして居る。英國は獨逸の產業回復を以つて英國の得意先きの擴張となることを希望して居るが、佛國は獨逸の產業破滅を目的として居るのである。斯くの如く英佛の利害關係は至る處に相反して居る。決して永く現狀が續くとは思へない。殊に佛國のルール占領は、之が爲めに佛白資本家の接近以來英國の對佛關係は一層危險の狀態に陷りつゝある無論、佛國は無謀にせよ、亂暴にせよ其對獨占領政策を弛緩するやうなことはないと思ふ。益〻其占領を確實に又出來る丈け之を擴大して永遠の計畫を樹立するであらう。之に對する英國の政策は今迄に如何と斷言は出來ないが、早晩佛國に向つて戰爭を開始するに至らんことは明白である。然り、既に經濟的戰爭は開始されて居る。戰後各國の經濟狀態は英米を除くの外は、何れも險惡の狀態にある、佛國財政狀態は既記の如く占領斷行以前既に財政に三億萬磅の欠陷を生じて居つた。之からは財政の困難は層一層大きくならう。占領は佛國をして戰時狀態に置かしむ、其占領費や又英大

の高に及ぶべし。獨逸はマークの下落と共によし無力の抵抗を廢止して佛國に服從を申込みたるにしても、當分レパレーションの條件を履行し其支拂を實行することは困難なるべく、故に佛國の財政は益窮境に陥らう。
さり乍ら、佛國の資本家は決して之を以つて意に介せざるべく、彼等は獨逸の資本家と提携して結局佛獨の勞働者を奴隷化して其利益を壟斷せんとして居る。獨逸政府が今日迄執り來りたる無力的無抵抗主義を繼續し得るか否かも疑問である。それは、獨逸の資本家等は現に擧國一致に贊同して政府の政策は一致するかの如くであるが、其は自己の資本主義に利する所あるが爲である。彼等は前ヴイルト内閣以來、獨逸國家を犧牲として其暴利を逞ふして居るのである。レパレーションは彼等の賴つて以つて其私腹を肥滿する資料となり居るのである。昨年十月の計算に依ると勞働者は其賃銀及月給より全所得税額の七割二分を、而かも總べての直接税と間接税との八割以上を負擔して居る。彼等は其賃銀の若くは月給の中より直に差引かれて納税するのであるが、之に反して資本家等が滯納に滯納を重ねて以つて利益し來たるものは莫大なる額に及んで居る。獨逸政府がレパレーションの條件を履行し得ざるに至りたる原因は他にもあらんが獨逸資本家階級の私腹を肥やすに急なりしが爲めとも云へる。そは社會民主黨の調査に依ると獨逸政府は數ケ月前から二百二十億のマークの納税金額を資本家等に猶豫し既に年末には四百十億萬マークの多額に達して居る事を報じて居る而かも此等の納税金が期限となり始めた時には米貨一弗は八百マークに價して居つた。社會民主黨が調査報告した時には米價一弗は二萬マークに下落し今日は三萬乃至四五萬マークを昇降して居る。
彼等はマークの下落に依つて斯の納税延納に於て利益して居ることは莫大なる者で、殆んど無納税に等しき狀態である。然るに、一方資本家等は佛國がルール地方を占領したるとマーク下落を口實として石炭の賣價を五割增にして居る。
以つて獨逸の資本階級が如何に國難を惡用して自己の腹を肥やすに努力して亦他を顧みざるかゞ明瞭である。一月九日

の巴里ルタンは報じて云く、スチンネスを首領とする獨逸實業家等はルクゼンブルグの實業家等を仲介として佛國政府に交渉した。其要點は若しも獨逸政府が彼等に獨逸の鐵道を抵當とするならば、獨逸政府に向つて百八十億萬金マークの借款を保證すべしと云ふにあつた。然り、今や其の事實は明瞭となつた、云く、獨佛政府の友人であるスチンネスと共友人等は若しも獨逸が其鐵道を抵當とするならば、二百億萬金マークを貸すべしとの提供を爲したとの事、而かも之に對しては佛獨政府共に適當なる談判開始の基礎を認めて居ると云ふ。之に對する年利は十億金マークである。獨逸の資本家等はマークの下落に依つて日々に下向きの賃銀で有り餘る勞働者を搾取して暴利を貪り、租税の延納に依つて莫大の利益を占め今や此資金を政府に貸し付けて鐵道を左右し、層一層暴利を國民より絞り取らんとして居る。斯る資本家政策を是認するクノー政府を何故に獨逸社會民主黨は援助するか？是れ、社會民主黨の首領と其機關及全勞働組合の首領と其機關とは現社會制度然り現政府の下に比較的に好位置に在るが爲めである。

前記は、歐洲現狀一面の觀察に過ぎない。尙ほ實際歐洲の現狀及之が前途を豫測せんとするには近時擡頭しつゝあるフワシズムの現狀、及將來に關して研究する必要がある。之は啻に伊太利のみの事ではない、歐米至る所に其隱然たる勢力を形成しつゝある。獨逸に於ても亦之が勢力を資本家特にスチンネス一派に依つて利用せらるゝ日あるを豫想するに難くない、フワシズムに對抗する共産主義の運動及び之が根據地たる勞農露西亞今後の出様如何は、全歐否全世界の將來に大關係があるが此等の觀察及勞働者の態度如何を詳細に調査する必要があるが、此等は他日稿を改めて論ずることにしよう。

（千九百廿三年二月十日バデンバデン、サナトリアム・キシサナの一室に於て）

獨逸革命の回顧

北昤吉

一

獨逸革命は戰敗の結果として生じた單なる政治的革命に過ぎない。而も其は從來の多くの政治的革命と異つて、劇的波瀾の乏しい極めて散文的のものであつた。併し之にも拘はらず、獨逸の幾多の社會主義者は、或は革命の不徹底を辯護せんが爲めに、或は自己の變節的立場を肯定せんが爲めに、或は革命に於ける自己の割前を吹張せんが爲めに、眞僞相半ばなる程度に於て、回顧錄めいたものを公にした。革命製作家を以て自任する、嘗ては革命後の六人『人民委任委員』の一人であつたエミル・バルト君の『革命工場より』、久しく社會黨機關紙に據つて流麗な筆を揮ひ、革命後一時普魯西の大臣となり、今は「フォアウェルツ」の歸り新參の記者として統一社會黨の左翼の一重鎭たるハインリッヒ・ストレーベル君の『獨逸革命』、前身は籠製造人の徒弟、後獨逸護國軍の御大として共産主義者の恐怖であつたグスターヴ・ノスケ君の『キールよりカップまで』、年自立にして始めて社會黨の地方新聞の記者たるまで印刷業に從事してゐた天性の御都合主義者フイリップ・シャイデマン君の『崩解』、前の獨立社會黨の機關「フライハイト」の記者プラーゲル君の『獨立社會黨史』、「戰前は修正派の驍將として黨內の左黨より憎惡され、戰爭開始後は多年の論敵カウツキーと相携へて

侵略戦の繼續に反對して左黨より喝采され、獨立社會黨成立後は二重黨籍の故を以て去就に苦んでゐた社會黨の老儒エドアード・ベルンシュタインの『獨逸革命』、戦時中社會黨左黨派を以て形成されてゐた「フオルウエルツ」の記者團追放後黨幹部と官憲との後援に依つて主筆となつて今日に至つてゐるフリードリツヒ・スタンプワーの『十一月九日』等は其の重なるものである。其の他露西亞から來て獨逸革命に參與したラデツクの『獨逸革命の發展と共産黨の事業』も露國過激中隨一の獨逸通の著として注目の價値がある。更に此等に加へるに獨逸共産主義者の多數社會黨及び獨逸社會黨攻撃のパンフレツトを以てしたならば、獨逸革命渦中の人たりしものゝ著作は決して尠ないとは云へぬ。

然るに余が玆に此等革命渦中にあつた人でもなく、又平素此等渦中にあつた人々と必ずしも同一の思想と要求とを有しないで「獨逸革命の回顧」の標題で筆を執るのは、如何にも不適當らしく見へないでもない。併し余は一九二〇年の春、カツプ博士の反動革命失敗の後の人心洶々たりし獨逸首都に入り爾來約一年の間、獨逸革命の發生と經過、殊に之と社會黨諸派との關係を研究してゐたのであるから、余は今日に至つて當時を回想する毎に、余の聯想は、余が當時の興味の對象であつた獨逸革命の發生と經過とに溯らざるを得ない。從つて余の獨逸革命の回顧は、渦中の人の直接の體驗の再生ではなくて、局外者たりし一外國人の研究の追憶に過ぎない。そして余が此の追憶に於て最も痛切に感ずるでことは、獨逸革命が甚だしく劇的色彩に乏しく、舊秩序の發生が機械的であつた如く、舊秩序の崩壞も亦同樣に機械的であつて革命渦中にあつた人々にも唯徒らに渦の捲くまゝに浮動して、何等積極的に自主的に運命を指導し、運命に反抗せんとする巨人的、聖雄的氣魄と手腕との見るべきものがなかつたといふことである。獨逸の資本主義と軍國主義とが機械の如く運轉してゐた如く、之を打破すべき神聖なる使命を有した獨逸社會主義も亦理想主義の片影だもなき一個不靈の機械たりしことを實證した。訓練と規律とは個人を機械化することに依つて、正に革命に必要なる創意と烱眼と策略

と冒險とを不可能ならしめた。之れ獨逸の社會黨革命家が革命渦中にあつて、革命の經過を無心者の如く傍觀せんとした所以でなくて何であらう。

二

一九一四年八月四日に獨逸帝國議會の社會民主黨が政府の提出せる戰時公債に賛成を表したことは、たとへ共が如何なる理由を有するにせよ、世界に於ける驚愕すべき事實であつた。之は一九一二年十一月二十四日及び五日にバーゼルに開かれた國際社會主義者會議の決議に戻るのみならず、一切の國際社會主義の信條に背反するものであつたからである。獨逸社會民主黨の戰時公債協賛の一擧は、黨自身に取つては、黨の主義政綱を變易せしめたアルキメデースの點であつたのみならず、共は寧ろ無から有を生ずる一の新原理となつた。獨逸社會民主黨は共産黨宣言の有名なる一句「勞働者は祖國を有しない」に忠實に、祖國を有しないものと考へてゐたが、戰爭開始と共に彼等が愛國心の標的たる祖國を有するに至つた。之れ無より有の發生した例である。又獨逸社會黨に取りてはカウツキーの云へる如く「今日列强の外交的關係を支配する對立は……各國の資本家階級の利得追求者間の對立に外ならぬ」ものであつた。然るに一度祖國を有するに至つた獨逸社會黨員等は、戰爭の勝敗は單に資本家階級の勝敗たる丈けではなくて、實に彼等自身の勝敗たることを感ずるに至つた。勞働者は祖國を有するや否や、近來に於ける戰爭は資本家の市場獲得以外何等の意味なく、戰爭の勝敗は單に資本家の勝敗を意味する丈のものであるか否かは、玆に問題としない。併し一九一四年八月四日以前の社會黨の主義政綱は、此の時期以後の社會黨の實踐と兩立しないことは、一點の疑ひも容れない。獨逸共産主義の學者ユリマン・ボルヒアルド君は『一九一四年八月四日前後』と題する小冊子に述べてゐる。八月四日前の獨逸社會民主

黨が正しいか又は八月四日後の夫れが正しいか、二者の何かの一が正しくなくてはならぬ。彼等が八月四日前に宣べたことは社會主義の學說であつた。併し現在の社會民主黨の態度は之に異なつてゐる。若し其の態度が正しければ、以前の學說は間違はなければならぬ。そうして獨逸の資本は一般民衆に危險たるべき敵ではなく、其は寧ろ衣食住を與ふべき友である。從つて獨逸資本の敵は同時に獨逸勞働者の敵となり、此の敵を防ぐには如何なる犧牲も大とするに足らぬと、實際戰爭と共に一度祖國を有するに至つた獨逸の勞働者は、戰爭終結まで國內の資本家と「國內平和」を締結し、共同の祖國の爲めに戰つたのみならず、幾多の社會黨の新聞紙は勞働者は資本家より以上に勝利の爲めに努力しなければならぬと勸說した。

素より其の黨員の數から云つても、其の黨の組織から云つても模範的な獨逸社會民主黨である、戰爭の開始に先たつて多少防止の試みをやらないでもなかつた。必ずしも手をポツケツトにしての傍觀でもない。奧太利の塞比亞への最後通牒は七月廿三日即ち木曜日に發せられた。金曜日には社會民主黨の機關紙「フォルウエルツ」を除く凡ての新聞紙に此記事が載つてゐた。「フォルウ エルツ」の讀者は土曜日の朝に至つて始めて戰爭の危險を知つた。然るに金曜日の晩には既に伯林のウンター・デン・リンデンにて愛國的示威運動が始まつた。示威運動は土曜日と日曜日にも繰り返された。社會民主黨は尨大な組織の常として緩慢にも火曜日の廿八日に來つて始めて戰爭反對の示威を始めたが、其は大學生を中心とする主戰的愛國的示威運動に壓せられた。社會民主黨は八月二日に更に非戰的示威運動を豫告したが、併し此の五日の間は世界史は停止してゐるものではない。七月三十日「ロカル・アンツァイゲル」紙が爲めにする所あつてか、號外を以て動員命令を報ずると共に民心は激昂し、そうして越えて二日動員令と宣戰の詔勅が下つて、奔流は其の流れ落つべき所に流れ行つた。そうして此の間の數日間は獨逸帝國宰相の許に社會民主黨の總務等が評議を重ねてゐた

のみである。然るに黨總務の一員シャイデマンは戰爭防止の爲めに有ゆる手段を盡したが、凡て無効であつたと、白々しくも公言した。

勿論社會民主黨の戰爭防止の手段らしきものは、其の常套手段たる街頭行列騷ぎのみではなかつた。七月二十一日戰時豫算の件に就いての黨の總務會議に於て、フーゴー・ハーゼは白髮童顏の熱血漢レデブールの援助の許に、帝國議會招集の際に社會民主黨をして戰時豫算を否認せしめやうと力めた。シャイデマンは革命的社會主義のサボタージュを試み先づヘルマン・ミュラー君を白耳義のユースマントと共に巴里に派遣して獨佛社會黨の態度を同一ならしめやうと提案した。然るに八月一日國際社會運動の大立物であり、且つ獨佛親善運動の代表者であつた佛のジョレス不時の死は、戰爭防止の希望の消滅を意味することゝなつた。ミュラー君は手を空しくして歸つて來た。そうして獨逸社會民主黨の代議會に於て報告した。報告の大要はシャイデマンの『崩壞』中に載つてゐるが、佛蘭西のマルクス派の社會主義の左右兩翼共に、獨逸が佛蘭西に向つて宣戰すれば、佛蘭西社會黨は獨逸軍國主義の危險から祖國を防禦する爲めに、戰費に協贊を與へなければならぬ意見を有してゐるとのことであつた。ミュラー君は之に對して獨逸皇帝は平和を求めてゐるが、露國の獨裁主義的軍國主義の危險に顧みて、戰時豫算の承認は避け難いと答へ、且つ佛蘭西がペトログラードから來る危險に對して牽制しなければならぬと要求した旨をも報告した。更に結局獨佛の社會主義者共に戰爭の責任を他に轉嫁して、戰爭を防禦戰爭の意味に解しやうと試み、從つて獨佛社會黨の戰爭反對の一致的行動が不可能であるとの結論に達したことが報告された。このミュラー君の報告と共に、獨逸社會黨の進路は大體に於て其の方向を與へられた。

余は玆に獨佛社會黨の水掛論に、是非の評を與へんとは欲しない。併しこゝに一事の見逃すべからざる事實がある。其は外でもない。此の大戰前に於ては、マルクス派の社會主義者は、若し國際戰爭が發生するならば、其は資本主義的

制度其物に本づくものであると考へてゐたのが、戰爭の發端に於て、實に戰爭の進行中に於て、各國共制度に戰爭の責任者を認める代りに、敵國に責任を負はしやうとしたことである。即ち墺太利は塞比亞と之を後援する露國に、獨逸は露國に、佛蘭西は獨逸に戰爭の責任者を見出さうとした。戰時中敵愾心は社會制度や外交關係の如きものを標的とすることは出來ぬ。人間は意志のない非人格なメカニズムを憎惡することは出來ない。從つて戰爭に必要なる敵愾心は對手を作爲して之に向つて發動せざるを得なかつた。プロレタリアの階級鬪爭には資本家を憎惡の標的としなければ戰術は失敗するが如く、戰爭の責任を露國の政府や獨逸のユンカアに認めなければ、戰爭らしい國際戰爭は起り得るものではない。

三

必要は法則を作るのみではない、必要は學說をも案出する。一九一四年八月四日以前の學說と、四日以後の必要に依つて案出された新學說との矛盾を指摘するのは閑人の閑事業である。既に祖國を有しなかつた無産階級に祖國が無から生じた以上、さうして祖國を脅かす戰爭の責任者が發見された以上、理論の案出の如きは戰爭の景氣附けの爲めの一附帶事業に過ぎない、そんな理論に獨立な學術的價値を求むるが如きは應眞に子を求むるが如き愚である。併し余は敢て茲に所謂マルクス學徒が如何に戰爭を辯護したかを聊か檢討する。蓋し其の辯護論が如何に滑稽なものであつても、必要に即する實證的のものなる以上、實證的を誇るマルクス學說其儘の一九一四年八月四日以前の學說よりも、少くとも戰爭中一層實證的なるからである。八月四日以後の獨逸社會民主黨の墮落を口にしてはならぬ。社會主義の學說がプロレタリアの要求から懸絕した眞理ならば、獨逸社會民主黨の此の眞理を離れて行つた背德は指彈すべきである。併し社會主義の理論がインテリゲンチアの觀念の遊戲ではなく、プロレタリアの要求に根ざすものならば、戰爭中の獨逸民主黨

の要求と背馳する八月四日以前の理論は、プロレタリアの要求に根ざさない限りに於て、實證的根據なき空想である。そうして若し八月四日以前の空想を以て八月四日以後の獨逸社會民主黨を律せんとせば、之は明かに反動的である。そうしてこは民衆の要求を無視することに於て、墮落であらねばならぬ。重ねて云ふ、獨逸社會民主黨が墮落したのではない、平時の遊戯的理論を戰時の實證的理論たらしめんとする企てが却つて時代錯誤的墮落であつたのだ。墮落と非墮落とは畢竟立場の相違より來る結論の相違である。

戰時の必要に根ざせる新理論は、必要が大同小異なる以上、大同小異である。戰前に修正派の一人として知名であり戰時中は戰爭の責任に關する專門の研究者であつたエドウアルト・ダヴイッド君は戰爭開始後間なく、戰爭が獨逸に取つて全然防禦的であるに反して、聯合國政府は包圍政策侵略慾、掠奪慾を露骨に暴露してゐたことを述べ、露國は「盜み太りの巨象」であり、英國は「世界市場の專政君主」聯合國は「世界分割シンヂカート」であると言つた。過去二十年來カウツキーと共に社會黨の機關紙「フオルウエルツ」に又學術雜誌「新時代(ノイエ・ツアイト)」に、軍國主義と帝國主義とに對して戰ひ來つたハインリヒ・クーノーは八月の初めには「フオルウエルツ」の編輯部の依頼を受けて戰費協贊に抗議したにも關はらず、獨逸軍が白耳義及び北佛蘭西に侵入すると共に心機一轉して一小冊子を著はして左の如く論じた。我が黨の戰爭反對の左派は、我が黨が戰費に協贊を與へたるが爲めに、獨逸社會民主黨は崩壞したと主張する。併し我が黨は崩解しない、崩解したのは其の謬れる政治學說のみである。獨逸社會民主黨は八月四日までは各國の帝國主義的戰爭を防止しなければならぬと信じた。併し世界史の實際の力は一層强かつた。そうして戰爭に依る世界政治的勢力分割の解決は事實となつた。我々は此の世界史の進行を罪し之を過誤なりと宣言すべきであるか。否、其の反對こそ正當である。單なる理屈に對すれば歷史は常に正當である、そうして社會主義的理論家及び政治家は歷史の現實の進行に遵つて其の見

解を訂正する必要がある。今や吾人は帝國主義をも、最近の事件の教訓に從つて、避け難き資本主義的經過階梯と見做さなければならぬ。更に民族自決權の如きも小ブルジユア的民主的なる一理屈に過ぎないと。

戰前に於ては社會民主黨の最左翼に屬し、かのリープクネヒト、ルクセンブルク及びレデブール卜共に、「四つのL」の一人として有名であつたパウル・レンシユ君も亦クーノーと同樣の心機一轉者であるか、彼はクーノーの沈默せる事項につきても臆面なく公言した。レンシユ君は此の戰爭に於て獨逸は「革命」を遣ると主張したが、此の革命は彼に於てはプロレタリア的、社會主義的革命を意味しない。彼に取つては、戰事、獨逸の勝利、此の勝利に依る世界の經濟的政治的新組織が獨逸革命の全體であつた。彼の「獨逸革命の先頭にベートマン・ホルウエツヒが立つてゐるとの語は明かに之を裏書してゐる。彼は又「一ナポレオンは英國の世界的支配を動搖せしめることは出來なかつた。」一ベートマン・ホルウエツヒは之を果すことが出來た」と叫んだ。彼に依れば獨逸は英國に對して一層進步せる社會的原理を代表せるものであつたから。勞働階級が個人主義であつて未だ進步しない英國に對する獨逸の勝利は新時代、新社會的理想即ち社會主義化せる社會の發生を將來することゝなり、從つて彼は「民主々義と社會主義とは獨逸の運命と密接に結合する」と論じた。八月四日後の獨逸のマルキスト等の理論がどんなであつたかは、クーノーやレンシユの語で大體が推察出來る。

以上のマルクス派學者の變節改論の鮮かさを離れて、社會黨の政治家連の主張を點檢すると、戰爭辯護は一に露國の恐怖を理由にしてゐる。ベーベルの信任を受けて總務に推薦され、常に黨の左翼を代表して社會主義の爲めに奮鬪し來つたフーゴー・ハーゼは八月二日の社會民主黨所屬代議士會に於て戰時豫算案に反對したが、全員百十一名中十四名の少數派を除く大多數が戰時豫算を承認すると共に、黨の規律を重んじて、黨を代表して八月四日の議會に於て戰事公債協

發の演說をやつた。其の際彼は斯く述べた。「今や我々は戰爭といふ困難な事實の前に立つてゐる。我々を敵軍の侵略といふ危險が脅威してゐる。我々は今日戰爭に贊成か反對かを決議するを要しない。寧ろ祖國防禦の爲めに必須なる手段の問題に就いて決議する要がある」又彼は述べた。「我が民族と其の自由なる將來とは、國内の最善の分子を犧牲にし來つた露西亞專政主義の勝利に依つて、よし全然でなくとも、大いに危險に陷る。我々は此の危險を防ぎ、自國の文化と獨立とを安全ならしめる必要がある」と。シャイデマンも亦八月廿一日紐育の一新聞に寄せて書いた。彼は其の内に云つてゐる。「今次の戰爭の主なる責任は露西亞にある。」「佛蘭西、共和國的佛蘭西が露西亞の絶對專政主義と生死を共にして同盟せるは、全く不可解の事實である。」「我々獨逸人は、ツアール主義に對して我々を防禦すべき義務がある、露國に依る危險なる隷屬に對して最も發達せる社會民主々義の國家を防衞すべき事業を果さなければならぬ」と。以てシァイデマンが去る大戰の原因を露國の軍國主義に認め、自國をくるめての全世界の文明諸國の資本主義的制度其物が戰爭の原因なることを忘却せるが如くである。加之彼は以上の論文に於て日本にも側杖を喰はせて、其の弟子等が非常な好遇を受け其の知見を我々のところで磨き、其の產業上の知識を獲得した日本が獨逸を敵としたのであるから、日本は全世界中最も嫉忌すべき又最も虛言を吐く國民であると記してゐる。一度戰時の變態心理に陷つた彼は、留學生の派遣や商人の視察から生じた情誼が、資本主義的制度其物より生ずる戰爭を防止し得べく、又防止しなければならぬが如く考へたのである。其の議論の低級さは萬國博覽會の開催に依つて世界の永久平和が來ると考ふる人々の夫れと同類である。實に八月四日以前の社會主義は人を惡まずして制度を惡むものであつたが、八月四日以後の夫れは制度を惡まずして人を惡むこととなつた。

四

何れも要するに依つて案出された一夜作りの急理論である。一々之を取り立てゝ批評するも大人氣ない。併し余はこゝに此の新案の理論と八月四日以前の學說や主張と多少の比較を試みる必要を感ずる。蓋し此の比較は、平時の規約、決議、黨の結束、國際的提携等は觀兵式の調練と同樣多く價値のないものなることを會得するに必要なるからである。平素街路を練つてインターナショナルの革命歌を歌ふもの、五月の勞働祭に赤旗を押し立てゝ萬國の勞働者よ結合せよと叫ぶもの、大學の教壇に立つてマルクスの社會主義學說を講釋するもの、日本橋の水はテームス河の水と通ずると稱して國際主義を高調するもの、客間にあつて社會主義を談議することを好むブルジョアの新思想家を以て任ずる客間社會主義者、ブルジョア志願で官私の大學に入つて卒業後就職の見込なきが爲めに革命を賣物にするカフェー革命家等、よし此等が大同團結して一大社會黨を作り、各國の社會黨等と提携したりして、平時の團結や規約は、支配階級より云へば多く意とするに足らぬことは獨逸の社會民主黨……八月四日までは世界のプロレタリア運動の模範であつたことを記憶せよ……の八月四日以後の歷史が雄辯に語つてゐる。

獨逸の社會民主黨が參與した一九一二年十一月廿四、五日のバーゼル會議の決議は何とある。曰く「各國の勞働階級及び議會に於ける代表者等は國際事務所の後援を得て戰爭を防止し、萬一戰爭勃發せる場合には其の速かに終局に至るべきことに努力し、又戰爭に依つて惹起せられたる經濟的政治的危機を民衆の自覺の喚起及び資本主義一掃の目的に利用すべくあらゆる適當の手段を講ぜよ」(大要)とある。併し獨逸の社會主義は實際何をやつたか。其の行動は正しくバーゼル會議の決議に反對してゐた。彼等は戰爭の勃發に際し之を防止せんと力めず、戰爭の責任の轉嫁をやり、從來有

しなかつた祖國を作り出し、戰爭の勝利は全國民の勝利にして資本家のみの利益でないと說き、戰爭の勝ち味の時は侵略戰爭をも是認し、戰勝の望み絕ゆるや、露國過激派のモットーを借用して「無併合、無賠償」の平和を說き、更にウイルソンの機嫌を取つて休戰條約の成立の爲めにカイゼルの退位を要求したではないか。現にノスケは獨逸軍の優勢なる時には、白耳義を舊形式に於て恢復すべきやは疑問なりと云ひ、シャイデマンは戰後國境標の移動すべからざるを說くは政治的に幼稚の頭腦であると明言した。又カイゼルの退位を條件とせずば休戰の見込なきを察して、一九一八年十一月九日附で、カイゼルが退位しなければ無任所大臣の位置を退くべしと當時の宰相マックス・オアン・バーデンに文書を以て要求したるシャイデマンは、一九一四年八月三日の黨代議士會に、翌日の帝國議會に於てカイゼル萬歲の問題を豫め討議した時に、「カイザー萬歲、國民萬歲、祖國萬歲」として萬歲を唱へては如何と提議して多數を以て容れられ、カイザーに不徹底ながら忠勤を勵んでたこともあつた。又バーゼルの決議では戰爭を利用してプロレタリアの革命を起せとあるに、シャイデマン等の多數社會黨は、一九一八年十一月五日キールに海軍兵團の暴動起り、九日には伯林に革命騷ぎが起つたにも拘らず、八日に於ても尙ほ、「フオルウエルツ」紙上で「政府に於る社會民主黨の勢力增大」を要求する位が關の山であつた。十月三日マックス フオン・バーデン內閣の下で大臣に任命せられ、どうか閣下といふ稱號だけは用ひずに吳れとキマリ惡るがつてゐたシャイデマンが伯林の革命が成功した後の九日の午後二時に帝國議會の廣場で共和國を布告したのは、決してバーゼル會議の決議に忠なるものではなく、寧ろ後入齋としての彼の眞面目の發揮に外ならぬ。

バーゼル會議に於ては、ハーゼは獨逸の代表者として「故に我々は我々の境遇、我々の政治的及び組合的組織の許す方法を用ひて、我々の凡てが保證せんとするもの、即ち世界の平和と我々の未來とを保證せんが爲めに、我々の力の最大限を用ひやう」と述べ更に「支配階級は知らなければならぬ。國際的プロレタリアは衷心より戰爭を惡むものなるこ

と、又支配階級はプロレタリアをして感激して戰爭に加はり、そうして其が尊敬し、其が愛するもの、即ちプロレタリアの同胞を射さしめることは出來ぬことを」と述べた。然るに戰爭開始と共に獨逸社會黨の幹部も機關紙も勞働者をして熱情を以て戰爭に加入せしむる樣に全力を盡した。そうしてカールリープクネヒトが戰爭豫算の協贊を拒むや、獨逸勞働組合の大立物の故カール・レギーンは即刻の除名を要求した程であつた。ベーベルは矢張りバーゼルに於て牧師共を攻擊し彼等は平素地上に平和を齎らさうと言つてゐるが、一度戰爭が始まると其の同じ教壇から反對のことを云ふと罵しつたが、獨逸社會黨も亦、ベーベルの攻擊した牧師共と同樣の役目を果した。

勿論バーゼル會議に於ける決議は侵略戰に關するものであつたから、獨逸は戰爭を對露防衛と解し、佛國は之を對獨防衛と解する以上、除例外をなすと强辯出來ないこともない。又バーゼル會議は戰爭防止の手段を各國の社會黨に一任したから、戰爭防止の爲めに總同盟罷工の手段に據らずに、ミユラー一人を佛蘭西に遣つて戰爭責任の水掛論をやらした位でお茶を濁したとて必ずしもバーゼル決議に背馳したとも云へない。結局バーゼル會議は以前の凡ての國際社會主義者會と同樣、鼠輩の集會であつて、猫の頸に鈴を懸けやうとの決議はしたものゝ、鈴を懸ける方法は定めなかつた。從つて突然猫が出現した場合、鈴を懸けやうと全力を盡したが力及ばなかつたと辯明する餘地はある。一體社會主義者が國際會議などに餘りに重きを置くは、自國内に於て自力でやるべき勇氣の缺乏を意味するのみ以外何事をも意味しない全體社會主義者の國際會議などは觀兵式以上の意義のないことは、バーゼル會議で佛國のジヨーレスは、我々は有ゆる犧牲をなす覺悟があると述べ、參列の各國委員の拍手を浴びたが、戰爭開始に先だちて、獨逸社會黨總務部の會計係りのオツト・ブラ・リンが我黨は新聞其他各種の事業に二千萬馬克の資本を投じ、一萬一千人の使用人が關係し、今發行を停止されてゐる「フオルウエルツ」丈けにも百萬馬克投資してあるが、一度戰爭に反對すれば、官僚軍閥の爲めに是等

が搾犠牲にされると述べると、戰時中階級闘爭を中止する條件で「フオルウエツ」の禁止を解いてもらつて發行を繼續しなければならぬとは、黨幹部の一致した意見であつた。有ゆる犧牲を忍ぶ覺悟どころか百萬馬克の犧牲すら忍ぶことが出來なかつたのである。共産黨宣言はプロレタリアは共産主義的革命に於て鐵鎖以外何物をも要はないと誇張してゐるが、獨逸社會主義者は幸か不幸か戰爭反對に依つて喪ふべき二千萬馬克を有してゐたのであつた。

五

併し英國のサンダースが『獨逸に於ける勞働組合主義』中に言つてゐる如く、流石は獨逸社會民主黨はマルキシズムの滲み込んでゐる組合を背景にした一大政黨である。單にカイザー萬歲、「盜み太りの巨象」呪咀のみではない。規律と訓練とを以て代表的であつた社會民主黨には戰爭反對の一派が潜んでゐた。八月三日の代議士會議に於ける「カイザー萬歲、國民萬歲、祖國萬歲」の贊否の決を取つた時に、明かに反對したものもあつた。又萬歲を唱へずに靜かに直立する丈けに止めやうといふものもあつた。此の會議には九十二名の出席者があつたが、其内十四名は戰時豫算等に反對すべしと主張した。ハーゼ、レデブール、レンシユ、リープクネヒト、ルユーレ等即ち之れである。カウツキーは政府が今後の戰爭が侵略戰に非ずとの保證を與ふる場合には、戰時豫算を協贊し、然らざる場合には反對すべきと提案したが、此の提案は容れられずして、結局は豫算案を承認することにした。此の代議士會の少數派は黨の傳統たる規律を重んじて多數派と共に翌日の帝國議會に於て戰時豫算に贊成することゝなり、ハーゼは黨總務として黨を代表して豫算案承認の演說をなすの止むなきに至つた。併し八月三日の代議士會の反對派は其の後次第に反對の氣勢を高めて三年後遂に獨逸獨立社會黨なる新政黨を樹立するに至つたのである。社會黨代議士間に於てのみならず、各地方に於ても黨幹部の態

度に反對を表明したものもないではない。殊にヴュルテンベルグの社會主義者はクリスヒーン及びクラ、・ツエトキンを首領として戰時豫算協贊に反對した。又八月三日黨代議士會が戰費協贊を決議すると共に、フォルウエルツの記者は二人を除いて五十億馬克の戰費協贊に對して抗議を公にせんとしたが、官憲の爲めに發行を禁止され戰時中暗に葬られたる位であつた。抗議の署名者の內にはクーノー、ヒルフアーデング、ドイミフヒ、ストレーベル等があつた。又ハンブルヒに於て今日國粹共產派としてレーユンも持ち餘ましてゐるラウフエンベルと、ヴオルフハイム等は戰爭反對の運動をなしてゐた。併し一度戰時豫算に反對した人々の內で豹變したものもある。クーノーの如き「フォルウエルツ」紙の抗議書の署名者でありながら、暫くして戰爭是認論者となり、レンシュの如き八月三日戰費協贊に反對し、多數が戰費を協贊するや其の夜同志のロザ・ルクセンブルクの胸に抱かれて號叫せる程であつたのに、心機一轉して戰爭讚美者となり、コンラッド・ヘーニッシュの如き戰前は急進派として煽動的小冊子の著作者であつたが「二つの精神の」內的鬪爭の後、"Dutschland über alles"を歌ふに至つた。

併し獨逸社會民主黨內の反對派は益々其の勢力を增加した。一九一四年十二月には社會黨代議士の戰費反對派は十四名より十七名に增加した。そうしてリーブクネヒトは十二月の議會に於て始めて公然戰費に反對の投票をなした。リーブクネヒトの戰費反對は黨內に波瀾を起し、レギーンは速刻の除名を要求し、社會民主黨の院內總務は連名を以て黨規紊亂を攻擊した。レデブールは幹部の態度にあき足らずして總務を辭した。一九一五年三月廿日にはリユーレも亦リーブクネヒトに加はつて戰費協贊に反對し、三十名の社會黨議員は投票を拒んで議場より退場した。ハーゼ及びレデブールを領袖とする反對派は益々其の勢力を增して一五年六月には勞働運動に於ける有名なる數百名の人々を署名者として黨總務及び院內總務宛の公開狀を發して政府の侵略戰爭を無條件的に擁護することの不可を說き、且つ社會民主

黨の多數派の爲す所は黨の從來の主義綱領に戻ることを警告した。此の公開狀には國内平和の承認は階級鬪爭の葬上に十字架を立つるものであるとか、戰爭繼續の政策は無制限の民族慘殺の是認であるとかの激語がある。此の公開狀は印刷されて廣く配布せられた。間もなく、ハーゼ、ベルンシュタイン、カウツキー三氏は「刻下の命令」と題して「ライプチーゲル・フォルクスツァイツング」紙に宣言文を公にして、此の内に於て、所謂防禦戰なるものは明に純然たる侵略戰爭となつたから、社會民主黨は戰費に協贊を與ふべきものでないと主張した。此の宣言書は社會黨の多くの機關紙に掲載することを禁止され、「ライプチーゲル・フォルクスツァイツング」は初めに之を掲載する故を以て一週間發行を停止された。此の宣言に對しては黨及び黨代議士會の總務は連署を以て之に答辯しハーゼの如き黨總務にして院内總務を兼ねつゝ斯かる黨中黨を立つる行動に出づるを不可解なりと辯駁した。

社會黨の右翼對左翼の軋轢は其の度を高めた。一九一五年十二月廿九日には二十名の社會黨議員はガイエル君を代表として反對意見を宣明した後に百億馬克の第五回の戰時公債に反對の投票をなした。加之廿二名の社會黨員は公然反對の投票をなす勇氣を缺いてゐたが、ガイエル君の演說に共鳴して議場を去つた。ハーゼは總務を辭した。リーブクネヒト及びルューレはハーゼ、レデブールの率ゐる反對派より更に分離して別個の行動を取つて一六年一月廿七日に至つて印字機にて書いた「スパルタクス書簡」を發行して宣傳を試みた。執筆者はカール・リーブクネヒト（スパルタクスなる匿名を用ひた）ローザ・ルクセンブルグ、フランツ・メーリング、パウル・レヴィ、露國過激派のカルスキ・マレクレウスキ及びエルンスト・マイエル等であつた。リーブクネヒトは一六年一月黨規背反の故を以て除名され、五月一日ポツダーマー・プラッツに於て歸休兵の戰線に復歸するを止めんとする演說を試みたるが爲めに拘引せられ、八月廿一日懲役刑を課せられたが軍法軍議が此の擧に出たのは社會黨の多數派がリーブクネヒトを除名し之を壓迫したが爲めであつた

元來社會黨代議士會は代議士を除名する權利を有せず、之を有するものは、代議士を議會に送れる團體と社會黨總會であるに拘はらず、代議士會が廿五名は六十名の多數を以て彼を代議士會より除名したのは明かに黨則違反である。又社會黨委員會は廿名の戰時公債反對代議士の態度を是認したる理由を以て、「フオルウエルツ」を自今黨の機關紙でないと宣明したが、委員會は斯かる決議の權利のないものであつた。翻つて三月廿四日の帝國議會に於てハーゼ一派が豫算案に公然と反對するや、多數派との大衝突を生じ、社會黨代議士會は三十三名對五十八名の多數（四名の棄權と十二名の欠席）を以て少數派を代議士會より除名することを決議した。除名せられたるの代議士は「社會民主的勞友會」なる新團體を作り、十八名の署名代議士を以て宣言を發し、ハーゼ、レデブール、デイツトマンを總務に選んだ。此は十七年四月に成立せる獨立社會黨の前身である。此の獨立社會黨の成立と、之と多數社會黨との軋轢とが獨逸革命に於て重大なる意義を有することは以下に於て明かにさるべき事項である。

六

獨逸革命の發生に就いては社會民主黨内の反對派即ち後の獨立社會黨及びスパルタクス團の勢力も一因子たるに相違ないが、獨逸革命の最大原因は勝利の絶望と戰局の遷延による獨逸國内の窮乏と露國革命とが三大因子であらねばならぬ。故に一言にて盡せば、獨逸革命は、獨逸社會主義者の自力的革命ではなく、大部分他力的革命である。果して然らば獨逸革命の發生を理解せんと欲せば、我々は先づ以上の三大因子を考察する必要がある。

ベルンシユタインは其の著「獨逸革命」中に述べてゐる。一九一八年七月に獨逸軍の攻撃力が失はれたならば、十八年の八月には防禦力も亦喪はれたと。顧みれば十四年八月の始め獨逸軍が白耳義並びに北佛蘭西に殺倒した際は、獨逸社

會黨も官憲並びに軍閥より即刻の勝利を保證され、従つて社會黨員の愛國的熱情も高調に達してゐたが、戰局遷延して西部戰場に於ては戰局全く固定して了ふと共に、社會黨並びに一般勞働者は官憲並びに軍閥の保證あるもの丶價値を疑ひ始めた。「六週間後に巴里にてお目にか丶らう」との獨逸將校相互の挨拶は白日の夢と過ぎた。ルーデンドルフ將軍は其の紀念錄に於て獨逸軍の士氣の頽廢を歎き、其の罪の大半を獨逸社會黨に歸してゐるが、併し事實は此の反對であつた。獨逸軍は士氣の頽廢に依つて戰を喪ひたるものではなく、戰局徒らに遷延して而も勝利の望みなきが故に士氣を喪失したのである。獨逸に取つて勝利の望みが如何に少なくなつたかは、一九一七年二月一日より最高軍司令部が無制限の潜航艇戰を開始した事實に依つて示されてゐる戰勝の希望を一に無制限潜航艇戰につなぐは、反面から云へば、此の戰術が豫期の結果を生ぜざる時には、戰敗を結果することを意味するものであつた。ヘルフアリツヒは英國の食料は六週間を支ふるのみであり、獨逸は當時百五十隻の潜航艇を有し其の内大型のものが百二十隻であり、そうして毎月十二隻の新造艇が加はると述べ、又フオン・カペレ提督は數字的に聯合國の商船の絶滅の可能を說いたが、社會黨を代表してダヴイツドは之に反對した。蓋し其理由は獨逸當局者が聯合國も毎月十五萬噸の造船能力があることを看過し、又必要とあらば聯合國は中心國の港灣に保留さる丶獨逸商船の百五十萬噸を利用し得ることを無視したからであつた。社會黨は無制限潜航艇戰に反對の態度を取つたのも此の理由で依る。革命後獨逸舊軍閥が"Hintenstop"又は"Dolchstop in den Rücken."なる語を案出して戰敗は一に革命の勃發にありと强辯したが、之れ實に本末顚倒の暴論であつて、獨逸軍閥の望みなき戰爭の繼續が革命を誘發したに過ぎぬ。而して此の無制限潜航艇戰は米國を參戰せしめ聯合軍の士氣益々振へるに反して、獨逸を盟主とする同盟國側はブルガリア、トルコ、墺太利匈牙利等相續いで戰鬪能力を喪ひ崩壞に進みつ丶あつた。此等は事旣に平凡なる程までに周知の事實であつて、玆に詳しく論述するを要しない。

既に獨逸社會黨の愛國的主戰的態度は獨逸の勝利を豫想せるものであつたから、今や戰勝が覺束なくなると共に、獨逸社會は次第に其の態度を變ぜざるを得ない。戰爭開始後各國社會黨相提携して戰爭を中絶せしめんと努力する代はりに、獨逸社會黨は中立國の同情を私せんが爲めに、ヤニソンをストックホルムに、ジューデクムを伊太利に、シャイデマンを和蘭に派遣した。其の派遣委員の一人であつたシャイデマンは流石は形勢を見るに敏であつた。官憲軍閥の保證した戰勝の見込覺束なくなると共に、一九一七年三月「實行の時期」と題する殆んど歴史的意義を有する論文を「フォルウエルツ」に發表した。其の内に彼は云つてゐる、全世界が敵國に同情を有するは何故か、蓋し敵國が一層發達せるデモクラシイを有するが爲である。然るに我々に於てはプロイセンあるのみではないかと、彼は更に獨逸を支那に譬へて一切の改革を拒否する結果共和國を將來すべしと威嚇し更に宰相ベートマン・ホルウックの左顧右眄を攻撃し、國民にパンと馬鈴薯を與ふることが出來なくとも、何の理由あつて平等の選擧權を賦與することを拒むかと叱呼し、更に今日利得を得、夜は温きベットに寢てゐる人々が、戰後砲彈と飛行器と潜航艇との危險から歸り來る勇士以上の權利を有すとは不當極まると斷じ、戰爭開始當時より依然不渡り手形となつてゐる普魯西に於ける三級選擧制廢止、責任内閣制の實行を要求した。加之戰爭開始の際黨を代表して戰爭公債に協贊せるハーゼの演說に即して、社會黨は「了解の平和」を求めるものであると主張し、露國過激派のモットーたる「無併合、無賠償」の平和を要求し、此の平和は爾來「シャイデマン平和」の名稱で通用し、後れ馳せに加つてシャイデマンの特許を奪つた「エルツベルガー平和」の標語と共に人口に膾炙するに至つた。

愛國社會主義者、社會保守主義者、御都合主義者と罵らるゝシャイデマンにして既に然りである。戰局の遷延と經濟的封鎖に依る生活の脅威は一般勞働者の不平を誘發したのは素より當然である。既に一九一六年夏リープクネヒトに對

する判決は勞働者の激昂を招いたが、翌年四月に至つて、益々つのり來つた生活難は戰後始めての大ストライキを誘發した。此のストライキは先づ伯林に起つたが、主として軍需品關係の勞働者で總數十二萬五千を算した。而してストライキの標語は單に經濟的のものではなく、明かに政治的性質を帶びてゐた。平和とパンと徹底的民主化即ち之れである此のストライキには一ケ月以前に勃發した露西亞の第一革命の影響の無視すべからざるものがある。元來獨逸の勞働者及び猶太人は對露戰爭の意味にて戰爭に贊意を表したが、露國に革命起りツアール主義の危險の消滅すると共に、獨逸勞働者及び猶太人は戰爭の對象を喪ひ、戰意を喪失したことは當然である。伯林のストライキは更にライプチツクのストライキを誘起したが、此のストライキは一層極端なる性質を帶び、併合なき即刻の講和、戒嚴令及び檢閲の徹去、各聯邦に於ける平等的選擧權等の要求を含み、此等の要求が容れられざる場合には各地に於て勞働會を設くべしと威嚇した。此のストライキに於ては今日ザクセン州の政治界の大立物リビンスキーが牛耳を執つてゐた。

以上のストライキは幸ひに大事に至らずして了つたが、一八年一月には更に危險なるストライキが伯林を中心として獨逸及び墺太利に起つた。此等のストライキは獨逸の國內の悲慘に原因すると共に、露國の十七年十一月の第二過激派革命に氣勢を添へられたことは疑ふ餘地がない。此のストライキに於ては併合なき即刻の平和、平和會議の爲めの各國勞働者の會合、食料の配給、戒嚴令徹去、言論及び集會の自由、工場の軍事的監理の廢止、政治犯者の解放、政治の徹底的民主化、滿廿歲以上の兩性に對する一般、平等、直接、秘密の選擧制の施行等の幾多の政治的要求を含み、特に伯林に於てはストライキは最も險惡なる形勢を示し、勞働會公然出場してストライキを指導するに至つた。一月卅一日には伯林のみにて數十萬の勞働者は街上に出で、エーベルトと共に演說者たりし獨立社會派の代議士ドツトマンはストライキを教唆せりとの理由を以て逮捕せられ、五年の懲役刑を課せられ、全國百萬に及ぶストライキ加入者中二百名は合計

百三十年の懲役刑に處せられ、拘引せられたもの四五萬人に及んだ。一月のストライキは獨逸全國に亘つたのみならず墺太利全國にも發生した。以て如何に獨墺民衆が戰爭の繼續と官僚政治に不滿であつたかゞ想像するに餘りある。

七

獨逸人心の不安は望みなき戰爭の繼續と生活の困難とに依つて生じたると共に、露國革命の影響亦決して無視すべからざるものであつた。十七年三月の露國第一革命以後一ヶ月にして獨逸社會黨中の反對派が獨立社會民主黨なる一新政黨を樹立し、十七年十一月の露國過激派革命後二ヶ月にして伯林に於て勞働會突然現出したことは、既に獨逸に於ける露國の影響の何なるを語るに充分である。レーニンとトロツキーに露國入國の便利を與へ、加之多額の軍費を與へケレンスキー一派の親英的主戰派の計畫の裏をかゝしめんとした獨逸のホフマン將軍は、却つて露國過激派の爲めに飜弄せられ、獨逸自國が赤化した滑稽事は正しく天の與ふる悲喜劇であつた。十七年のズレストリトプスクの露獨單獨平和會議は米國の聯合國加擔後に於ける獨逸に一縷の希望を與へた。虛榮の權化たる獨逸のカイゼルは露のクールランド一帶を太公領とすべきを夢み、獨逸の軍閥の巨頭等は東部戰場の獨逸軍隊を西部戰場に旋廻して佛蘭西を屠らんと夢みつゝあつたのに、獨逸勞働者は露國の軍國主義の消滅と共に戰意を失ひ、露國過激派は媾和條約のサボタージュは一に係りて獨逸の赤化にありと考へて、過激主義の宣傳に努力した。伯林大學のヤストロー教授曰く粉磨夫と煙突掃除屋と取り組めば、前者は黑くなり後者は白くなる。獨が戰後共和的民主的となつたのに反して、佛が益々軍國主義的となつたのは正に此の例であると。此の相互の影響は獨露の戰爭後に於て最も著しくなつた。日本の西比出征軍の御土產も粉磨夫が煙突掃除屋から齎らし來つたものと見做すべきであらう。

露國過激派は國際慣例などを尊重する正義者ではない。媾和會議の當初より會議を宣傳の場所として獨墺勞働者に訴へつゝあつた。獨逸の代表者が之を警告すると、トロツキーは、講和條約は出版及び宣傳を禁止する條項を含まないと答辯した。露國代表者が宣傳を中止すると約束した後に於ても、宣傳は依然として行はれた。ブレスト・リトブスク講和成立後は伯林駐剳露國大使ヨッフエは獨逸國に於ける共産主義運動の統率を其の手中に收めるに至つた。十八年十月十五日にはデイットマン釋放せられ、廿一日にはリープクネヒト釋放され、更にロザ・ルクセンブルクも十一月十一日再び其の精力と知識とを革命運動に捧ぐる自由を得たが、之が爲めに必要なる費用は露國過激派政府の派遣せる在伯林露大使より流出したのであつた。加之露國大使は外交官の治外法權を利用し、外交文書と稱し多數の共産主義宣傳書を輸入したことは、十八年十一月四日伯林のアンハルター・バアンホーフにて此等の書類を容れたる箱の一つが壞れた爲め眞相が遺憾なく曝露して露國大使は退去を命ぜられたことに依つて實證されてゐる。獨逸の獨立社會黨員及びスパルタクス團員が露國大使の手を經て金員を受取つたことは疑を容れぬ。ベルンシュタインの『獨逸革命史』に記載さるゝ所に依れば、露國大使ヨッフエは伯林退去の前夜即ち十一月五日の晩、獨立社會黨員オスカー・マーンに拾五萬馬克と拾五萬ルーブルとを手渡し、十一月十日人民委任委員の一人となつたエミル・バルトは之を以て武器を購求したと稱せられる。而して獨立社會黨の總務ハーゼも此の事實を知れることはヨッフエの言明する所であつた。露國過激派は「獨逸に殘留する露國人保護」の名義で獨逸各地に支部を置いて革命を宣傳してゐた。更に十月八日、ゴータに開かれた全獨スパルタクス團會議は露國の例に倣ひ多くの勞兵會を増設すべきことを決議し、又斯莫科の過激派と啻に言論上のみならず、實行上に於ても協同すべきことを約した。

之より先ブレスト・リトブスク講和締結後リガが占領されて露國第十二軍がこゝを撤退するに當つて、彼等は獨軍に

ウイルヘルム二世の勝利は民主々義と自由との死滅であると告げ、且つ我々は今やリガを撤退するも革命の力は大砲の力よりも結局一層有力なるべく、遂に獨逸軍隊は露國の革命軍と共に自由の爲めに進軍するに至るであらうと煽動した更に十月キールに於ける獨逸海軍に暴動が發生すると共に電報を以て祝賀の意を表し、此の内に露國水兵委員會は最高の指揮權を掌握し、前露帝のヨット「極星」を司令部の所在としてゐる旨を告げ、且つ露國水兵は全世界のプロレタリア解放の爲めに國際主義の赤旗の下に戰はんと準備してゐると告げた　實に露國過激派政府がブレスト・リトブスクの苛酷なる條件を容れたのはレーニンの云へる如く「今後の戰ひの爲めに一層能く準備せんが爲めに不利の條件を承認した」ものであるから、過激派は先づ獨墺諸國を赤化せんが爲めに種々の策戰に出でた。同盟國側の崩壞の相圖となつたブルガリヤの講和を求めたのも、國内に於ける過激派の勢力に依ること多かつたのであるが、この一事露國過激派の戰局並びに政局に於け影響の大を證明するに足るものである。

八

戰局の望みを喪ひ、米國の參戰に依つて士氣阻喪し、更に露國過激派政府の政策に依つて赤化しつゝあつた獨逸は、國内に於ける生活の困難より來る非戰熱と相待つて、正に點火を準備しつゝある爆藥であつた。ベートマン・ホルウエツクが一九一七年夏軍閥巨頭の壓迫に依つて掛冠を餘儀なくされて、所謂 "Zi gnofle" ミヒヤエーリス宰相の印綬を帶びたが、常に「余の解する所では "Wie ich es auffasse" を連發するのみで遂に軍閥の傀儡たるのみで何事も爲す所なくして去り、老衰して重要なる會議の座にも堪へさるヘルトリング後を襲ひ暫らく悲喜劇を演じたる後、最も平民的なりと稱せられたるバーデンのマックス公召されて難局に當らさるべからさることゝなつた。一年三ケ月の間に三度

び宰相が變つたこと其事が既に獨逸官僚政治の行き詰りを物語るものに外ならぬ。マックス公は時局の困難に際しての唯一の政治は責任分擔にありと思惟して、社會民主黨のバウアーを勞働大臣に、シャイデマンを無任所大臣に推した。中央黨の大立物エルツベルガーも亦入閣し、內閣は議會中心の政黨內閣の觀を呈した。

顧みるに英國の如きも戰局遷延すると共に、非常時に於ける非常手段として、從來の二大政黨交替の傳統を棄て、ロイドジョーヂの傘下にブルジョア二黨の聯立內閣を形成せるのみならず、勞働黨の代表者までも入閣せしめ、ヘンダーソンの如きは軍事內閣の一椅子を與へられ、擧國一致の實を擧げたに拘はらず、獨逸のユンカーは四面楚歌の苦境にありながら政權を私し、一九一八年十月に至つて始めシャイデマン等を入閣せしめたが、時期既に後れ大勢の趨くところを如何ともすることが出來なかつた。十月廿日カイゼルが社會黨出身の大臣及び次官に謁見を賜はつて、柄にもなき御世辭を振りまいたのは、失意の際の彼の淺薄と怯懦とを暴露する以外の意義もなかつた。殊に民衆の壓迫とマックス公の人氣取政策との結果政治犯者の大赦を敢行し、デットマン及びリーブクネヒト等が凱旋將軍の概を以て出獄して新たに革命運動を煽揚する自由を與へられたことは、人をしてホーヘンツオルレルン家の斷末魔の近きを感ぜしむるのみであつた。伯林には既にバルト、リヒャード・ミュラー、オスカー・コーン等の革命的勞働運動者あり、議會に於けるハーゼ、レデブール等の活動と相待つて、大事の到來を豫感せしむるに充分であつた。翻つて戰局も亦望みなく、十八年十月一日、ルーデンドルフはカイゼルの居間に無斷に入り來つて、宰相ヘルトリンクの後任の定まらざるを詰り、今日にも講和の提案をなさなければならぬと叫ぶと、カイゼルは「卿は二週間前に斯く云へばよかつたに」と答へ、主從相抱いて泣く殊勝な場面は見せず、流石は權利思想の發達せる文化國のことゝて、互に責任のなすり合ひをやつて、徒らに斷末魔を醜惡ならしめるのみであつた。實に內憂外患一時に迫まつて來た。革命の爆彈は單に點火を待つのみである。

爆彈の點火は「獨逸の未來は海上にあり」とカイゼルの誇りなる獨逸海軍政策の策源地キールより始まつた。而してキールの點火は燎原の火の如く獨逸全土を燒いて、四海は一ならざれども、獨逸聯邦の諸王は終りを告げた。革命の燎火がキールより擧がつたのは決して偶然ではない。十七年三月キールに社會民主黨の反對派が成立し、獨立社會黨の組織されると共に九百五十名の男女が之に加つた。而して海軍兵は戰線の陸兵と異なり地位の移動少なく、革命の傳道を受け易く、又獨逸海軍は潜航艇乘員を除き大體無爲閑散であつて、戰局に對して批評的なることが出來、或者に至つては所謂小人閑居して不善をなす心理を有してゐた。十七年中には海軍部内に秘密結社を生じ、獨立社會黨の機關紙を愛讀するものもあつた。二人の海軍兵は宣傳の材料と報告とを得んが爲めに獨立社會黨と聯絡せるが、此の事實は發見せれて二人は銃殺され、他の幾多の海兵は總計四百年の懲役刑に處せられた。併し革命運動の萌芽は芟除されず、十八年一月の全獨逸に擧りての大ストライキにはキールの波頭場勞働者の加はつたものも多かつた

此の暗流を察せず、獨逸陸軍の戰勝の望み絶え休戰條約の聲が揚つた時に、獨逸艦隊の司令部は英國に獨逸の大海軍をむざ〳〵引き渡すことを遺憾として、八萬人を犧牲とするも、潜水艇を潜ませて艦隊をヘリ、コーランドまで進み最後の冒險を試みんとした。多年妻子を離れて飢と寒に戰ひ來つた獨逸の海兵に取つては、休戰を前にしての無謀なる突擊は勿論堪へる所ではなかつた。斯くて彼等は出動命令を拒んだ。彼等の或者は逮捕せられ、「マルクグラフ」號のみにても百名に及んだ。併し同志は之を傍觀せず、既に十一月一、二日には集會を催して逮捕者の解放を叫び、三日には海兵及び勞働者の大示威運動が行はれ、腕力を以て監禁されたる同志を解放し、國際社會主義の萬歲を唱へ、共和國を要求した。カイゼル退位の叫びも亦素より熱烈なる贊同を受けた。一海軍中尉の率ひたる一隊は此等の示威運動者と衝突し、こゝに始めて流血の慘を生じ、三十名の死傷者を生じた。四日には海兵の蜂起は一般的となり、上官は全然無力と

なり、兵士會は承認された。監禁の海兵の解放も亦知事の認可するところとなり、二萬の武裝せる海兵と勞働者は赤旗を掲揚して、革命はキールに於て完全なる勝利を收めた。彼等の要求は、ホーヘンツォルレルン家の退位、戒嚴令の撤去、一九一七年の海軍陰謀の際の監禁者の解放、男女兩性に對する普通平等の選擧權の要求等を含んでゐた。越えて四日には多數社會黨中の鐵腕家ノスケが來つて運動を指揮し、七日には三百名の陸海軍代表者に依つて知事に選擧せられた。元來海兵等は獨逸社會黨のハーゼ、レデブール、コーン中の何れかを電報を以て招いたのであるが、政府にある多數社會黨の代表者は此の電報を押收して、先づ自派のノスケを遣はしたのである。若し獨立社會黨の有力家がキールの形勢を支配したならば、恐らく獨逸革命は其の性質を一變したであらう。之れ獨逸革命の一段の徹底を求むるものに取つては遺憾の極であつたのである。

革命は急速に傳播した。キールに揚つた革命の烽火は數日にして獨逸全土を火焰に包まんとした。五、六日にはハンブルク、リユーベック、ブレーメン相繼いで勞兵會の支配に歸した。シユレスウイック、ハンノーバーも之に次いだ。八日にはケルン、デユッセルドルフ、デユイスブルグ、ハッレ、ドレスデン、ライプチック、フランクフルト・アム・マイン、ミユンヘン其他中部南部獨逸は革命を經驗した。

元來バイエルンは農業國であつて、カトリック敎の勢力を有する所なるに拘はらず、伯林よりも早く革命を經驗したことは、寧ろ獨逸人の意外とする所であつた。勿論十一月九日は伯林の革命日にして、新獨逸の誕生日であるが、ミユンヘンが之に先だつて革命を通過したことは、伯林の革命、從つて獨逸の革命を容易ならしめた一原因である。バイエルン一帶に於ては十八年頃までは多數社會黨が勞働者間に勢力を有したるが、唯ミユンヘンに於てのみ、ハーゼルと共に獨社會主義中の人格者と稱せらるゝクルト・アイスナー……二者共に猶太人なることも特筆するを要する……は常に多數

派社會黨の主戰政策に反對して、周圍に少數ながら熱心なる勞働者を集めてゐたが、十八年一月の大示威運動に際して平和を絕叫せる演說に基づいて國事犯の罪名の許に檢擧され、重刑を課せらるべしと豫想されてゐた。元來彼に政府並びに多數社會黨の戰爭政策を防止する爲めには大なる犧牲を忍ばざるべからずと信じ、身を以て其の範を示さんとしたのであつた。然るにマックス公の內閣成立して十八年十月解放されるや、彼は直ちに戰爭中止の宣傳を始め、獨立社會黨並びにスパルタクス團の代辯者と認められ、獨立社會黨に代議士候補者に推された程であつた。彼はキールの暴動を耳にすると共に、七日を期して勞働者の大示威運動を企て、多數派社會黨のアウアーと共に演壇に立ち、米大統領ウイルソンの宣明した平和に應ずべしとの決議文を草し滿場の容るゝ所となつた。決議は更に進んで、カイザー並びに皇太子の退位の要求と、憲法の徹底的改正の要求にまで及んだ。會衆は市街を練り步いて、武器貯藏所を襲ひ、王宮の番兵の武裝を解除し、カイザー退位、共和國萬歲を叫び、政治犯者を解放した。更に軍隊が營所を脫して來り加はるに及んで、聯邦議會を占領し、議事堂に勞農兵會を開いてアイスを最初の議長に選擧した。會議は夜に及び、バイエルンを共和國とすることを宣明した。アイスナーは特に食物の配給に就きて農夫に訴へ、更に一般市民に向つて、革命を「急速に、容易に、確實に」達成する爲めに勞働者のみならず、市民一般の協力を要することを說いた。翌八日には第二回の勞農兵會が開かれ、アイスナーは閣員の名簿を讀み上げ滿場の承認を求めた。アイスナーは理想家的傾向の一記者に過ぎなかつたが、實際政治家の手腕をも兼ねたることは彼の閣員選定の手際にても見ることが出來る。彼は自から總理大臣兼外務大臣となり、文部大臣に多數派社會黨のホフマンを、內務大臣に多數派社會黨の首領アウアーを、財政大臣にヤッフェ教授を推した如き、一般を推すに足りる。アイスナーは憲法は將來の國民議會の決定に任すべきも、當分勞農兵會を以て議會に代へる旨をも宣言した。バイエルンの皇太子は十日白耳義のブルッセルより電報を寄せて、革命の

新組織は聯邦議會の決定すべきものであると主張したが、ルードウツツク三世及び皇后は八日自働車を驅つてミユンヘンを退き人民の利益の爲めに政局を退く旨を官吏軍人等をして新政府に協力すべきを勸め、其の末路を潔くした。

ミユンヘンは既に革命を完成した。然るに獨立社會黨、スパルタクス團の本部の所在地、殊にエミルー・バルトを盟主とする革命的秘密結社の所在地伯林は九日に至るまで革命を經驗しなかつた。之には理由がある。伯林は革命的諸團の所在地なるも、其は亦軍閥、官僚の本營でもある。革命と共に反革命の勢力も無視されない。況んや多數派社會黨は常に革命のサボタージユを試み、キール及びミユンヘンよりの電報を押收して民衆の革命熱の發揚を防がんとした。併しながら、待たれたる九日は遂に來た。奔流は常に其の流れ落つべき所に落ちた。八日の「フオルウエルツ」紙が「政府に於ける社會民主黨の勢力増加」を主張し、民衆に愼重なるべきことを勸告しつゝあつたに拘はらず、更に滑稽なるは十日の「フオルウエルツ」がエーベルトがマツクス公の依賴を受け總理大臣となつたと報じたに拘はらず、九日午前には革命は完全に伯林を支配し、シヤイデマンは革命に關して獨立社會黨と了解を求めんとしつゝあつたのである。而して一日總理大臣エーベルトは、其の忠勤を擢んづべき君主を喪つて了つた。カイゼルはエーベルトが總理大臣たることを内諾した當日に退位したからである。實に此の日のカイザーはブラウニングの所謂"Lost Leader"であつた。此等の事實に依つて獨逸社會民主黨が革命の單なる傍觀者であつたかゞ充分に證明される。シヤイデマンは或時云つた。獨逸が社會黨の掌中に入つた時は、其は既に崩解してゐたと。然り、落ちて來た熟柿は手に觸れると共に崩れて了つた。シヤデマンが革命は五年後れ過ぎたと遺憾がるが、借問す、五年以前には果して獨逸はシヤイデマン等社會黨諸君の採用する戰術を以て手中に收めることが出來たらうか。青柿ならば棒で叩き落さなければならない。落つるのを待つた後には、柿は手上で崩れるのみである。獨逸社會主義の陷つたヂレンマは、資本主義の成熟が社會主義に導くとの誤解され易き

一句から來てゐる。此の一句は彼等をして革命渦中にあつて、而も革命の傍觀者たらしめた所以である。

さもあれ、十一月九日は所謂新獨逸の誕生日である。以上革命の發生の前史を考察し來つた我々は、今や更に記念すべき十一月九日を起點とする革命の經過を研究しなければならぬ。發生の前史獨逸革命は何故不徹底であつて單なる政治革命と了りしか。多數派、獨立社會黨、スパルタクス團の主義政策の優劣如何。獨逸革命は何故に露國の轍を踏むことが出來なかつたか。はた又獨逸社會民主黨が多年の信條とせし正統マルクス主義なるものゝ實在の可能、並びに程度如何。殊に資本主義的社會はプロレタリアの獨裁政治の過渡期を經て常に無階級の社會主義的社會のミレニアムを將來すとの空想に對して、獨逸革命は何を訓ふるか。此等は余が次に獨逸革命の經路を研究するに當つて當面する問題であらねばならぬ。(續く)

モーセよりキリストへ

高橋誠一郎

一

最初の羅馬皇帝の即位する少しく以前に羅馬人の爲めに征服せられたる領域の中にパレスチナ若しくはユダヤと稱せらるゝ地方があつた。此の地方は征服者たる羅馬人よりも古きこと少くとも一千年の歴史を有するユダヤ民族の國土であつた。オーガスタス (Caius Julius Cæsar Octavianus Augustus)の時代を去る約一千九百年の古にユダヤ民族共同の祖先アブラハムは神エホバの彼れに云へる言葉に從つてカルデアの地をさまよひ出でたと彼れ等の傳說は物語る。(創世記第十二章第一—四節)。

アブラハムの孫ヤコブ(後のイスラエル)がエジプトに移住したのはブルクッシ(Karl Heinrich Brugsch)に從へば凡そ紀元前一千七百三十年の頃であつたと云ふ。恰も第一遊牧王朝のアペーパ(Arepa)王の治世であつたらしい。初め獨立を享有せる多數の小邦に分れて居つたナイルの地は次第々々に結合せらるゝことゝ爲つた。長い脅威であつた紀元前約第二十世紀に於ける「遊牧諸王」(Hyksos)の侵畧は是等の小邦をして絕望の極、第十八王朝(Thebe、即ちエジプト語のNast朝)諸王に對して專制權を承認するに至らしめた。長い奮鬪の後に是等の支配者は克く侵畧者を驅逐してエジプトの境界を擴張し、終にはスリヤ及パレスチナを抱有するに至つた。而も這般の釋放は一般庶民に對する多大なる費用を以て購はれたのである。此の王國の凡ゆる政權と富の大部分とは少數の支配階級の手中に集められた。之れに次げる第十九王朝の治下に於ては社會狀態は更らに一層堪へ難いものと爲つた。地方的貴族は消滅し、國王は獨裁專制の君主と

化して其の無責任なる手中に王國の大富源と其の臣民の生命とを悉く把握した。多數の有司は國王の名に於て全般の通商を管理し、其國土の一切の産物に對して二割と云ふが如き重税を徴收した。(Charles Foster Kent, The Social Teachings of the Prophets and Jesus, 1917, pp. 4,5.)。侵畧者驅逐以後のエジプトに於けるイスエル人の運命は他のセム人と等しく無殘なるものであつた。彼れ等は被征服者として遇せられ、屢々眞の奴隷と選ぶこと能はざる壓制に從つた。(Gaston Maspero, Struggle of the Nations, Eng. trans, of Histoire Ancienne, 1896, p. 88.)。

第十九王朝第四世の君主ラメセス(Ramses)二世は一方に於て善戰の勇士たると共に他方に於て偉大なる建築家であつた。彼れは其の治世をして永遠に顯赫ならしむるが爲めに、多數の巨大なる紀念物を建設せんとするの野心に捕へられたのであつた。彼れの淺ましい野心の跡は巨大なる石塊に殘つてエジプトの各地に看出される。全エジプトは悉く彼れの法外なる功名心を滿足せしむるが爲めに勞作しなければならなかつた。エジプト人は又た其の長き歴史中の此の時期に於て國内の供給のみを以て其の食料の必要に應ずることが出來なくなつた。彼れ等は貢物として他國から穀物を徴さなければならなかつた。(W. M. Flinders Pietrie, A Hstory of Ancient Egypt, 1895, vol. II, p. 93.)。斯くの如く食料の自給自足が破れたことは恐らくエジプト住民の勞働が農業から他の業務に轉じたるに由るものであらう。ラメセスをして隷屬民に苦しき抑壓を加へしめ、終には其の暴動を誘起するに至つたものは恐らく又た斯くの如くして生じたる財政難であつたであらう。(W. Cunningham, An Essay On Western Civilization in its economic aspects, ancient times, 1902, p. 33.)。

ラメセスの治世に至るまでは、ナイルのデルタから東流して荒野に向ふTunilatの川筋は牧羊者の使用に委せられてゐた。エジプトの奮記はピトムの水澤に其の羊を水飼はんが爲めに來りたるセム族の牧羊者に就いて述べてゐる。此處にヘブル人の祖先は時折、エジプトの徴税者に見舞はるゝ外は平穩無事に其の畜獸の群れを飼育して居つたのである。此の惠まれたる境遇の下に、イスラエルの子孫は急速に其の數を增加した。(出埃及記第一章第七節)。然しながらラメセス二世は此の豁谷の農業上の富源を開拓し、パレスチナ及びシリアに接近せる地方に其の遠征の根據として武庫と穀倉

とを備へんとするに急であつた。這般の變革を實行し、聖書に謂ゆる「府庫の邑ピトムとラメセス」とを建つるが爲めに、王は「督者を彼れ等の上に立て」、彼れ等に課するに苦役を以てしたのである。數多くして力强きも、何等の組織を有せざるヘブルの諸民族はエジプト王が巧妙なる勞働搾取の網の目に力なく捕へられたのである。然しながらイスラエルの子孫は苦しむに隨つて增殖の程度を增して行つた。爰にエジプト人に對する彼れ等の脅威があつた。斯くて彼等がヘブル人に課する勞役は愈々苛重の度を加へたのである。「エジプト人イスラエルの子孫を嚴く動作かしめ、辛き力役をもて、彼れ等をして苦しみて世を度らしむ、」同第十一、十四節)。と誌されてゐる(Kent op. cit., p. 6.)

「出埃及記」は預言者モーセの媒介を通じて、ヱホバがイスラエルの民をエジプトから救ひ出す物語である。若きモーセは其の同胞の受けつゝある暴虐を見るに忍びなかつた。彼れは其の手を以て工長の一人を撃殺し、其の種族の祖先を出したる荒涼たる曠野に遁走したのであつた。彼れは直ちに是れ等の乾燥せる草原と僅かに滋へる谿谷に營まれたる更らに自由に更らに民主的なる社會生活に融合した。彼れは其の泉源に於て彼れの種族の社會的傳説を味はつたのである彼れは平靜自由なる沙漠の大氣中に在つて特に之れと對比してエジプトに行はれつゝある巨大なる經濟的社會的不正を想見することが出來た。彼れは神の山ホレブに於て彼れを呼ぶ沙漠の神ヱホバの聲を聞いたのである。(同第三章第一——十節參照)。神は彼れ等の民族の味方にして、又た彼れ等を救ひ出すものなりと做すの意識は啻だにモーセをして預言者たらしめるのみならず、彼れが爾後、其の民族の爲めに勇敢なる努力を行ふに當つて常に彼れを指導せる所のものであつた。彼れの同族の意氣は長く彼等の上に課せられて來た無殘なる勞役の爲めに甚しく沮喪せしめられて居つた。而して初め彼れ等は曠野より歸れる此の預言者を疑つて居た。然しながら神の力は物質的、社會的、經濟的法則の作用を通じて現實世界に示顯する。ヱホバは恰く是れ等諸法則の人格化であつた。殘虐なる暴君ラメセス二世は既に死して、エジプトは彼れが强搾政策の有害なる影響を痛切に感ずるの時に逢着して居た。ヱホバは凡ゆる自然的、社會的、現象の直接且つ究竟の原因と看做された。凡そ紀元前約一千二百年の交に急速に相次いでエジプト王國を襲へる外冦、王家の腐敗、混亂無秩序、之れより生ずる不衛生なる狀態、惡疫の流行、及び急激なる勢力の潰崩は古代ヘブルの史家によつ

てエホバが其の祖先を釋放するが爲めにモーセの請求に由つて行へる特殊の奇蹟であると信ぜられた。(Kent, op. cit., pp 8, 9, 10.)

二

ヘブル人がパレスチナに進入た時、彼れ等は其の平野と谿谷とがカナン人と稱する著しく發達せる農耕の民によつて占領せられつゝあるを見た。最初ヘブル人の移住したのは高地であつた。此處に彼れ等は猶ほ依然として天幕生活を持續し、其の遊牧民の風習を失ふことがなかつた。彼れ等の數が增加するに伴れて彼れ等はカナン人と混合するに至つた。例へばシケムの町に於てはヘブル人とカナン人とは雜居し、雜婚し、明かに同一の殿堂に於て其の「契約の神」バアルベリテを禮拜して居つた。而も中央パレスチナのヘブル民族がハゾールに於て世を治むるカナンの王ヤビンの支配に委せられ、鐵の戰車九百輛を有する其の將軍シケラによつて二十年間甚しく虐遇せられたる時、彼れ等は女預言者デボラに鼓舞せられ、戰士バラクに指揮せられて、シケラ及び其の戰車と其の群衆とをキシオン河に引き寄せて之を破つた。(士師記第四章第二節以下)。

此の大勝はイスラエルの子孫に中央カナンの支配を與へた。然しながらカナン文明の權威は是れに由つて排除せらるゝことを得なかつた。「出埃及」の經驗と唯一の神エホバの統率とに由つて統一せられて來た人民はカナンの地に定住するに至つて其の全一を失つた。モーセの如き一預言者の嚮導の下に於ける單一なるエホバの支配は爰に消えて、幾多の地方的統率と其の定住地に對する地方的管理とが生じた。而も遊牧時代より農耕時代への過渡はパレスチナの特殊の自然的性質に基いて幸にも急激ではなかつた。イスラエルは猶ほ永續鞏固なる政府に關する概念を有して居らなかつた。彼れ等は單に强固なる統治が時々彼れ等を統率するの必要から生じ、斯くの如き必要が終ると共に歇むものであると考へて居た。村落と都市とは舊時の民族若しくは種族に代つた。農業耕作法が次第に永續的集約的と爲るに伴れて、氏族と稱する大經濟單位は其の經濟上の行動に於て制限を受くること多く、不便を感ずること次第に大と爲つて氏族組織は終

に崩壞するに至るのである。然しながら遊牧の過渡時代に在つて急激なる社會的變化を緩和するに與つて力のあつたものは新社會單位たる家族の力の及ばざる事業を行ふに當つて、從前の血族大團體が地域的組織體として一致行動することであつた。而してイスラエルの民が其の共同の敵に對して一時的統率の必要を感じたる時、彼れ等は必ず其の種族的團結の守護神たるヱホバの聲を聞いたのである。

蝗蟲の如き多數の遊牧民「ミデアン人、アマレキ人及び東方の民、上り來りて押寄せ、イスラエル人に向つて陣を取り地の產物を荒してガサにまで至り、イスラエルの內に生命を繼ぐ可き物を遺さず、羊も牛も驢馬も遺さ」ざるに至つた時、ミデアン人に奪はれざらんが爲めに酒榨の中に於て麥を打ちつゝありしギデオンにイスラエルを救ひ出す可き神の命令は下つたのである。(士師記第六章一節以下)。ギデオンはヘブル最初の地方的君主であつた。支配者はヘブルの思想に從へば、國民を代表し指導し、其の共同の利益を擁護するが爲めに彼れ等によつて選出せられたる人民の從僕であつた。ギデオンの妾腹の子アビメルクが白銀を散じて遊蕩無賴の徒を傭ひ、彼れ等の力によつて其の兄弟を殺し、三年間暴君として君臨したる時、彼れを擁立せるシケム人は終に叛起したのである。(同第九章)。ペリシテ人侵入の脅威に由つてヘブル民族の各分派は共同の指揮者の下に能く結合的行動を行ひ得るが爲めに其側々の權威を放棄するの已むなきに至つた。爰にヘブル王國は預言者サムエルの嚮導をベニヤミン人サウルの統率の下に建設せられた。而も爰に謂ゆる「王國」は一般普通の意義に於ける王國に非ずして、寧ろイスラエル民族の聯合であつた。サウルは「王」と呼ばれた。而も彼は單に有力なる族長と看做されたるに過ぎない。彼れは事實族長の民主的規模を維持して居つた。サウルはギベアの丘耕の柳樹下に朝廷を開いてゐた。(「撒母耳前書」第二十二章第六節)。ヱホバがサウルを拋棄せるの事實は又イスラエルの王はイスラエルの神に服從せざる可からずと云へる後世への教訓を示すものである。而して彼に代れるダビデは彼れがイスラエル人の民主的政治思想に忠實なりし間は彼れ等を心服せしむることが出來た。

ソロモンの治世は物質的光輝に滿てる華麗なる一場の夢であつた。此の時代に於ける外部的光彩は蓋し其の內部に於ける不平等の横溢せる結果に外ならざるものである。レバノンの石坑にもオーマン海の船舶中にも單に一部少數人士の

奢侈享樂の爲めに幾千の民衆は憔悴しつゝあつたのである。ギデオンサウル又びダビデは明かに人民の任意的寄附外征の分捕品及び被征服民の進貢に依つて其の支出を支持したのであつた。斯くの如き財源は決してソロモンが法外の支出に應じ得るものではなかつた。彼れは土地及び人民を以て同王に屬すると做すカナン及びエジプトの思想を採用して、先づ其の領域内に殘存せる被征服民の子孫に强制勞働を課したのである。「ソロモン王の徴募人を與せし事は是れなり、即ちヱホバの家と自己の家とミロとエルサレムの石垣とハゾルとメギドンとゲセルを建てんが爲めなりき。總べてイスラエルの子孫に非ざるアモリ人、ペリジ人、ヘテ人、ヒビ人、エブス人の殘れる者、其の地に在りて彼れ等の後に殘れる子孫、即ちイスラエルの子孫の滅し盡すことを得ざりし者にソロモン奴隷の徴募を行ひて今日に至る。」(「列王紀略上」第九章第十五、二十、二十一節)。而も彼れはイスラエルの子孫の一人をも奴隷とすることがなかつた。(同第二十二節)

然しながらイスラエルの民は食料の徴收に於て堪へ難い負擔を荷つた。ソロモンはイスラエルの全土に代官を置いた。彼れ等は王と其の家計の爲めに食料を準備した。即ち各人は一ケ年に一ケ月づゝ食料を供へたのである。(同第四章第七節)。ソロモンの一日の食物は細麪三十石、粗麪六十石、肥えたる牛十、牧場の牛二十、羊一百、其の外に牡鹿、羚羊小鹿及び肥えたる禽である。(同第二十二、三節)。「ソロモン戰車の馬の廐四千、騎兵壹萬二千を有てり。彼の代官等各々其の月にソロモン王の爲め及び總べてソロモン王の席に來る者の爲めに食を備へて缺くる所なからしめたり。又た彼れ等各々其の職に循ひて馬及び疾足の馬に食はする大麥と藁を其の馬の在る處に攜へ來れり」。(同第二十六、七、八節)ソロモン王はヌイスラエルの貿易を獨占して居つた。(同第九章第二十六—八節、第十章第二十二、二十八、九節)。彼は武力に依つて能く其の臣民を抑壓することが出來た。然しながら彼の死と共に、曾てシロ人の預言者アヒヤがヤラベアムに告げたるが如く、北部の諸族は直ちに叛起したのである。(同第十一章第二十九節以下參照)。

洵に後世の記者がサエムルの口を藉りて王を求むるイスラエルの民に告げたる神言はソロモンの治世に於て事實と爲つて現れたのである。「汝等を治むる王の常例は斯くの如し、汝等の男子を取り、己れの爲めに之れを立てゝ車の御者と爲し、騎兵と爲し、又た其の車の前驅と爲さん。又た之れを己れの爲めに千夫長、五十夫長と爲し、又た其の地を耕し

其の作物を刈らしめ、又た武器と車器とを造らしめん、又た汝等の女子を取りて製香者と爲し厨婢と爲し、炙麵者と爲さん。又た汝等の田畝と葡萄園と橄欖園の最も善き所を取りて、其の臣僕に與へ、汝等の穀物と汝等の葡萄の十分一を取りて其の官吏と臣僕に與へ、又た汝等の僕婢及び汝等の最も善き牛と汝等の驢馬を取りて己れの爲めに働かしめ、又た汝等の羊の十分一を取り、又た汝等を僕と爲さん」と云へるもの是れである。(「撒母耳前書」第八章第十一―十七節)。

三

將軍エヒウが預言者エリシヤの煽動に由つて腐亂せる其の主アハブの家を亡したのは紀元前約六百四十二年のことであつた。彼れの時代に於てダマスカスの王バザエルはイラエルの四境を侵し、ヨルダンの東に於てギレアデの全土カド人、ルバン人、マナセ人の地を侵し、アルノン河の邊なるアロエルよりギレアデに至り、バシヤンに及んだ。(「列王紀略下」第十章第三十二、三節)。エヒウの子ヨアハズは唯だ僅かに騎兵五十人、戰車十輛、歩兵一萬人を殘されたるのみであつた、蓋しスリアは塵の如くに彼等を蹂躪せるが故である。(同第十三章第七節)。其の郷土を防護するが爲めに出陣せるヘブルの中層階級は或ひは戰場に斃れ、或ひは窮乏疲殘の身と爲つて歸國した。イスラエル王國の富源は涸された。然るに紀元前第八世紀の初めに於て戰運は轉換した。スリアの王ハザエルはヨアハズの一生を通じてイスラエルを惱したのであるが、彼れ死して其の子ベネハダデ之に代るに及んで、ヨアハズの子ヨアシは三度び之れを敗つて曾つて劫掠せられたるイスラエルの諸邑を奪ひ還したのである。(同第十三章二十四五節)。

戰利品はヨアシの寶庫に流れ込んで、其の貴族と寵臣とを富裕ならしめた。平和はイスラエルの貴族と富裕階級をして其の天然の大富源を開發するを得せしめた。貿易は又た急速に彼等の富を增大せしめた。「ギレアデはヨルダンの彼方に臥し居る、何故にダンは舟の傍らに止まりしや、アセルは濱邊に坐して其の港に臥し居る」(「士師記」第五章第十七節)。イスラエル民族中の或るものは既に早く「士師記」の時代に於て海濱の便を使用して能く貿易を營み得るの地位に在つたのであるが、陸路の通商は海路のそれに比して遙かに重要なる地位を占めて居つた。當時各地より發したる隊

商の通路が集合し、是れよりして又た彼等が種々なる方面に分岐する極めて重要なる商業の中心は死海の南約五十羅馬哩の都市ペトラであつた。一の通路は殆んど紅海の海岸線と平行して南西アラビヤより來るものであつて、アラビヤ・フエリックス及びエテオピアの産物を齎し、他はペルシヤ灣から西寄りの方向に於て眞直ぐに沙漠を横切るものであつて之れに沿ふて東洋の産物がペトラに運ばれるペトラから一路はギレアデを過ぎヨルダンの河筋を走つて北方ダマスコに通じ、他はガザに向つて西走し、其の重要なる支路はエルサレムに向ふのである(Cunningham, op. cit., p. 45.)

紀元前第八世紀の前半を通じて、北部イスラエルの民は單純なる牧畜、農耕の民の境涯を脱出した。都市は村落に代り、商業の收益に急激なる變化を完成した。有力なる貴族及び富裕階級は其の生活の本據を首都若しくは大都市に移した。其の間に中層階級は勝敗常なき戰爭の結果として多くは隷民の境涯に墮落した。彼等は法外なる利率を以て富裕なる貴族より借財を行はざるを得ざるに至れるが爲めに、啻だに彼れ等が抵當に供したる土地のみならず、其の自由をも併せて失つたのである。苛重なる課税と富裕なる支配階級によつて司られたる法廷に於ける不正なる判決とは其の隷屬を完たからしたのである。豪奢と虛飾とに對する憧憬は富裕なる支配者をして彼れ等が貪婪と適法化せられたる不正との犧牲たる貧民の苦痛に對して無感覺たらしめた。北部イスラエルは其の一切の外觀に於て繁榮であり強大であつた。而も內部に於ては其の市民の大多數は少數の支配階級の爲めに非道なる強搾を受けて窮乏の極に達した。特殊の階級的特權、職權の濫用、不當なる課税の分配及び不正なる民衆の搾取は第八世紀に於てヘブルの預言者を奮起せしめたる社會的罪惡であつた。(Kent, op. cit., pp. 39, 40.) 洵に Kautzsch 教授が Geschichte des alttestamentlichen Schriftums 中に言へるが如く、公道と正義とを主張し、窮乏無告の狀態に在る者を壓迫するの非行を戒告するはアモス以後に於ける預言者の教訓のアルフアにして又たオメガであつた。

テコアの牧者アモス及びベエリの子ホセアが北部イスラエルの社會的不正に對して非難の聲を上げたると等しく、アモツの子イザヤはユダの王國に於て其の根本的社會原理を提唱したのである。彼れの時代に於けるユダの社會狀態は北部イスラエルの其れと甚しく類似して居つた。ユダはイスラエルに比して其富裕繁榮の程度と外來思想の影響を受くる

割合に於て劣つて居つた。然しながら西紀元七百九十二年より同四十年に亘れるウジヤの長き治世を通じて後れ馳せながら繁榮の潮は終に南部の王國に流れ込んだ。ウジヤ王はペリシテ人を破つて、其の境域を西部の平原中に深く推し進めた。アンモニ人はウジヤに貢を納れた。彼れは平野にも平地にも家畜を持ち、又た山々及びカルメンには農夫と葡萄の栽培者を有して居つた。(「歴代志畧下」第二十六章第六、八、十節)。エドム人の征服は又たエラテの港を通じてアラビア及びアフリカと通商を開くに至らしめ國外の物産と共に其の習慣及び思想はユダの王國に流れ込んだ。王室の偏寵と有利なる通商とは富裕なる支配階級を發達せしめた。其の結果として昔時の單純素樸なる生活と多幸なる中層階級とは急速に消滅した。北部の王國に行はれたると等しき社會的罪悪は又たユダの王國に看出されたのである。(Kent, op. cit., p. 60.)。

彼れ等預言者は其の種族神エホバの名に於て僧侶と國王と貴族との上に叱責を加へた。而して彼れ等の威力は古代の慣習と傳説とを存續せしむるの效が大であつた。而してスリア及びアツスリアに對する悪戰苦闘の後、西紀前五百八十六年を以てユダヤ人がネブカデネザルに屈從し、奴隷としてバビロンに拉し去られたる時、彼れ等の民族的組織と禮拜とは彼れ等がペルシヤ人のアツスリア人撃破後、其の郷土に送還せられて西紀前約五百二十年にエルサレムの宮を再建するに至るまで再び彼れ等を結合したのであつた(「以士喇書」第一章第一節以下參照)。而も西紀前百七十五年より同六十四年に亘れるアンチオカス・エピフアネスの兇猛なる迫害によつてユダヤ人の苦痛が堪え得ざるものと爲り、ユダヤ教の存在が危くなつた時、富裕なる貴族と僧侶とは復たもユダヤ人の民族的同胞主義を侵害するに至つた。西紀前百四十年を以て彼れ等は相結合してシモシ・マカビウスを以て世襲的君主及び教主たらしめた。政治的渇想は此の民族の間に目覺めつゝあつた。神は軈がてユダヤ人の間に其の全能なる王國を建設し、全世界は神の指定せるもの、即ちメシヤの首都エルサレムに從屬す可しと爲すの希望が熾烈と爲つた。殘忍な内爭が總べての者の注意を吸收した。エルサレムの宮に集中せる「儀式主義」と宗教をして戒律の保持に歸せしめんとする「戒律主義」とが捕囚前の預言者によつて唱道せられたる倫理的社會的理想に代つた。

有名なるユダヤの史家ジョーシーフス(Flavius Josephus, Joseph ben Matthias)は其の「猶太戰記」に於て當時ユダヤに三大思潮の勃興せることを記してゐる。パリサイ派、サドカイ派及びエッセネ派が是れである。(B. II. Jel. VIII. 二)。サドカイ派は貴族及び富裕階級から成立し、マカビウス家の黨與を形成する。彼れ等の中から文武の官吏は選ばれる。彼れ等は理論と信仰に於て保守主義者であり、實行に於て利己的なる機宜主義であつた。彼れ等は宗教上の問題よりも俗界の問題を重じた。彼れ等は絶對に傳說及び「口述の律法」を排斥するものではないが、「モーセの五書」中に明瞭に表明せられたる教儀のみを以て遵守す可きものと看做し、ラビ即ち職業的法教師が此の成文法を諸般の生活方面に適用するに際して下したる教訓を以て從屬的のものと思料した。等しく彼れ等は正確に靈魂の不滅を否定することはないが、死後に於ける審判の觀念を拒否した。諸般の教理とモーセの法典に對する字義的解釋とに由つて、彼れ等は其の司法に於て極めて峻嚴であつた。

パリサイ派は前者に對して一般民衆黨の地位に在つた。彼れ等は肉體の復活、天使及び靈魂の存在、神の攝理と命令經典の正經たる、權威及び宗門傳說の權威を固執して居つた。彼れ等は律法が直接に答ふることなき多數の問題に備るが爲めに神がモーセに與へたる口述傳說の理論を採用する。彼れ等は鮮明なる政黨を形成することはなかつたのであるが、政治上に於ては强烈なる排外主義者であつた。彼れ等多數は社會の奇蹟的變革を期待し、禮式的律法の嚴正なる遵奉を以て宗教の主要なる目的と看做した。從つて彼れ等の首たる關心事は社會問題ではなかつた。パリサイ派の分派にトロッテ派がある。エッセネ派は實際生活に一種の共產主義を誘入せるものではあつたが、而も彼れ等は嚴然として其の時代の社會問題に面接するよりも寧ろ之れを嫌避せる禁慾主義者の群れであつた。(「三田學會雜誌」第十七卷第三號所載拙稿「エッセネ教團の共產主義」參照)。尙ほ以上の四派に就いては Karl Kautsky, Der Ursprung des Chris tentums, 12. Aufl., 1922, S. 283—337.參照。其處には前揭ジョーシーフスの豐かなる引用が看出される)。

基督紀元の初めに於てユダヤ人が熱望せる所のものは禮式主義と虛妄なる神學の拘束を截斷し、彼等に與ふるに更らに精神的なる理想と仰望とを以てし、彼れ等の種族と時代の社會問題に其の眼を向け、斯くて又た彼等の生命其の者を將

しつゝある致命的昏睡狀態より彼れ等を醒覺す可き新たなる社會的預言者であつた（Kent, op. cit., p. 166.）。

四

基督の社會思想はヘブルの社會概念より直接に生じたるものである。アモス、ホセア及びイザヤは彼れが社會教理の路を開いた。ユダヤの聖賢は彼等預言者の言葉を反響した。彼等は懶惰者が社會の負擔たることを指摘した。「惰る者の之れを遣す者に於けるは酢の齒に於けるが如く、烟の目に於けるが如し」（「箴言」第十章第二十六節）。彼等は施す者却つて其の財を增し、與へざる者却つて貧しきに至ることを敎へた。「穀物を藏めて賣らざる者に民に詛はる、然れども賣る者の首には祝福あり」（同第十一章第二十四、六節）。少くも四世紀前に於て社會的市民ヨブは基督の根本敎理の多くを預示してゐた。彼れは神の燈光彼の頭上に輝き、神の光明によりて暗黑を歩める過ぎし年月を追想して言ふ「我が事を耳に聞ける者は我れを幸福なりと呼び、我れを目に見たる者は我が爲めに證據を爲しぬ。是は我れ助力を求むる貧しき者を拯ひ、孤子及び助くる人なき者を拯ひたればなり。亡びんとせし者我れを祝せり。我れ又た寡婦の心をして喜び歌はしめたり。我れ正義を着、又た正義の着る所と爲れり、我が公義は袍の如く、冠冕の如し我は盲者の目と爲り、跛者の足と爲り、貧しき者の父となり、知らざる者の訴訟の由を究め、惡しき者の牙を折り、其の齒の間より獲物を取り出せりと」（「約百記」第二十九章第十一、十七節）。又た曰く「我れ若し貧しき者に其の願ふ所を獲せしめず、寡婦をして其の目を衰へしめし事あるか。」又は我れ獨り自ら食物を啖ひて、孤子に之れを啖はしめざりしこと有るか。我れ衣服無くして死なんとする者、或ひは身を覆ふ物なくして居る人を見し時に、其の腰若し我れを祝せず、又た彼れ若し我が羊の毛にて溫まらざりし事あるか。我れを助くる者の門に居るを見て、我れ孤子に向ひて手を上げし事あるか。然ありしならば肩骨よりして我が肩落ち骨を離れて我が腕折れよ」と（同第三十一章第十六、七、十九―二十二節）。彼れは尙ほ明確に人が神とマンモンとに等しく仕ふること能はざるを敎へた。「我れ若し金を我が望みと倣し、精金に向ひて汝我が所賴なりと言ひしこと有るか。我れ若し我が富の大なると我が手に物を多く獲たるとを喜びしことあるか。是も亦裁判人に罪

せらる可き惡事なり、我れ若し斯く爲せし事あらば、上なる神に背きしなり」(同二十四、五、二十八節)。**彼れは未だ曾つて異郷民に對してすら**奉仕するの機會を失へることがなかつた。(同第三十二節)。彼れは未だ曾つて如何なる階級を**も搾取せることがなかつた。**「我が田圃號呼りて我れを攻め、其の阡陌悉く泣き叫ぶあるか。若し我れ金を出さずして**其の產物を食ひ、又は**其の所有主をして生命を失はしめし事あらば、小麥の代りに蕀藜生へ出で、大麥の代りに雜草生ひ出づるとも善し」(同第三十九、四十節)。

ユダヤの政治上の獨立は約一世紀間繼續した。國民の經濟生活は强烈と爲り、農業は隆盛に赴き、手工及び商業は尊重せられて、ラビ及び學者すら其の生存の基礎として肉體的勞働を行ふを以て一個の義務と看做した。下層中流階級の節約と勤勉と敬虔と道義とは當時に於て一般に行はれつゝある情操であつた。而も斯くの如き狀態は長く持續することがなかつた。西紀前六三年羅馬の將軍大ポンペイアス(Cnaeius Pompeius Magnus)はスリアを征服し、パレスチナに侵入して、恰も司祭の軋轢がエルサレムに於て激甚なりし際に、羅馬の步兵隊は此の都を襲擊し、而してポンペイアスは神殿の至聖所に這入つてユダヤ人を憤激せしめたのである(M. Beer, Social Struggles in Antiquity, Eng. trans. by H. J. Stenning, 1922, pp. 184—185)。ユダヤ人が其の獨立に對する最後の奮鬪に際してサドカイ人は大部分羅馬に黨したのである。羅馬の統治者は彼れ等によつて征服せられたる人民の內部的の事項に干涉するよりも、寧ろ地方の有司をして迅速なる租稅の納付と命令の施行に對して責任を有さしむるの方針を取つた。而して彼れ等の採れる不公平なる徵收法はユダヤ人の間に抑へ難い憤怒の情を生ぜしむるに至つた。等しく無法貪吝なりしものは一般庶民に對するユダヤの祭司の態度であつた。而して又た當時ユダヤの社會に於ては富を不當に重要視する傾向が著く强烈であつた。政治上の獨立を失へる彼れ等人民の間には只管私利のみを念とする節ない個人主義が跋扈跳梁して居つた。

斯くの如き時に當つてヘブル最後の預言者ヨハネはバプテスマを受けんが爲めに來れる衆人に向つて人類の同胞たることを言明し、道德の關係より生ずる義務を說いた。彼れは「我れ等何を爲す可きや」と問へる人々に對して「二つの衣服を有てる者は有たぬ者に分け與へよ、食物を有てる者も亦然る可し」と敎へ、徵稅吏に對しては「定例の稅銀の外に多

く取ること勿れ」と云ひ、兵卒に對しては「人を脅やかし或ひは誣ひ訴ふることを爲す勿れ、得る所の給料を以て足れりと爲す可し」と答へたのである。(「路加傳」第三章第十一、十三、十四節)。

五

基督の經濟的教旨は著しく個人主義的であつた。然しながら其は個人の利益と社會の其れとが絶對に一致するの點に到達するのである。既に波斯時代の後期、殊に又た希臘時代を通じてユダヤの聖賢は豪富は神を離れしめ、極貧は神を汚すものであつて、至高の經濟的理想は兩者の中間に存するものと觀じた。(「箴言」第三十章第八、九節。基督も亦た明かに富其の者を敵視する者ではなかつた。而も彼れは個人の永遠の幸福より觀て、必要以上に財貨を所有するの非なることを認めた。基督は彼れに向つて限りなき生命を得んが爲めに如何なる善事を行ふ可きやを問へる少年に答へて曰ふ「全たからんことを欲はゞ、往きて汝が所有を賣りて、貧者に施せ、然らば天に於て財あらん、而して來りて我れに從へ」と。而も少年は此の言葉を聞いて憂へ去つた。彼れの産業大なりしが故である。イエス其の弟子に告げて云ふ「誠に汝等に告げん、財を恃む者は天國に入ること難し。又た汝等に告げん、富める者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却つて易し」と(「馬太傳」第十九章第十六、二十一——四節「馬可傳」第十章第十七、二十一——五節)。

然しながら恰も基督が羅馬に對する自由戰の爲めに熱火の如くに燃えたる一切の革命主義者及び國民主義者と絶縁し(Beer, op. cit. p. 188ff.)初期の基督教徒が市民的生活を廢棄し一切の現世的統治と沒交渉なる態度を取れると等しく、彼れと其れと其の弟子とは人は須らく富貴に對して無關心の態度を養ひ、私利に對する一切の誘惑から防護せられなければならぬことを教へた。娑婆世界を厭離するは即ち之れを征服する所以である。現在の富を棄つるは即ち永遠の富を獲得する所以である。(大正十二年版拙著「協同主義への道」三二六——七頁參照)。基督は幾多の場合に於て財貨の問題を掲げ、金錢上の比喩を用ひてゐるが、斯くの如きは彼れが神と人間との間の關係を商業的に觀んとする當時のユダヤ思**想を其まゝに採つて精神上の問題を說明せるものであつて、決して社會經濟上の意見を披瀝せるものではない。馬太傳第**

二十章十五節、同第二十五章第十四節、及び「路加傳」第十二章第十六——二十一節に示されたるものゝ如きは是である。「人は二人の主に事ふること能はず、そは此れを惡み、彼れを愛しみ、此れを親しみ、彼れを疎む可ければなり。汝等神と財に兼ね事ふること能はず。是の故に我れ汝等に告げん、生命の爲めに何を食ひ、何を飲み、又た身體の爲めに何を着んと憂ひ慮ふこと勿れ、生命は糧より優り、身體は衣よりも優れるものならずや」。(「馬太傳」第六章二十四、五節)。天空の鳥は稼くことなく、穡ることをせず、倉に蓄ふることがない。而も天の父は之を養ふ。野の百合は勞めず紡がざるものである。而も神は之れを美裝する。神の國を求むるものに對しては天の父は一切の必需品を與へる。而して神の國に至るの道を遮る所のものは現世的憂慮と貨財の誘惑とである。(「馬可傳」第四章第十九節、「馬太傳」第十三章第二十二節)、基督は飽くまでも精神的價値に歸依するものである。貸付に對する基督の所言は又た善く現世的報酬に對する彼れの態度を示すものである。新約全書が凡ゆる原始的立法によつて絕對に不公正なるものとして排斥せられたる利子の徵收に觸れたるは唯だ「路加傳」第六章第三十五節の一句のみである一般に流傳せる拉典譯(Vulgata)に從へば此の章句は「汝等仇を愛し、又た善を爲し、何物をも望まずして貸し與へよ(mutuum date, nihil inde sperantes)然らば其賞賜は大なり」と解釋せられてゐる。然るに改譯は之れを「毫も絕望することなくして(nihil desperantes)貸し與へよ」と解釋してゐる。(George O'Brien, An Essay on Mediæval Economic Teaching, 1920, p. 166.)。之れを後者の意に解する時は債務者が債務を履行すると否とに論なく、天惠を信じて懸念なく貸與す可きを勸告せるものであつて全然徵利の問題に觸接することがない。而して之れを前者の意に解釋すれば一見新約の福音は全然利子の徵收と相容れざるの觀があるが恐らく其の眞意は何等物質的現世的の報酬を期待せずして、永遠の天惠を信じて貸與す可きことを命じたものであらう。(「三田學會雜誌」第十五卷第七號所載、「基督教會と徵利問題」)。

貧民に對する基督の態度は極めて同情の深いものであつた。「凡べて勞れたる者、又た重きを負へる者は我れに來れ。汝等を息ません」(「馬太傳」第十一章第二十八節)。「牧者なき羊の如く、衆人悲み又た流離に罹りしが故に之れを見て憫み給ふ」(同第九章第三十六節)。「汝等貧しき者は幸ひなり、神の國は卽ち汝等の所有なればなり」(「路加傳」第六章第二

十節）。然しながら福音が主として貧民に向つて說かれたのは貧民其の者が富者よりも之れを要求すること大たりしが爲めでもなければ又た彼等が特に虐遇せられたが爲めでもなく、彼等が其の必要を知覺せるが爲めであつた。基督は決して貧困を根絕せんとはしなかつた。「窄き門より入れよ。沈淪に至る路は濶く、其の門は大なり、此より入るもの多し。生に至る路は窄く、其の路を得るもの稀れなり」（馬太傳第七章第十四節）。彼れは人をして肉體的拘束裡に在つて精神的自由の境涯に高揚せしめんとするものである。彼れは其の民をして貧富を超絕せる絕對の界域に安居して無限無窮の富を獲せしめんとするのである。

モーセは其の民をエジプト人の手より救ひ出し、乳と蜜との流るゝ地、即ちカナンの土に誘つた。而も基督は社會的正義を叫ぶヘブルの預言者に導かれながら、物質的幸福の外に精神的王國を建設せんとした。「キシの子サウルは其の父の驢馬を尋ねて、王國を發見した」。イスラエル人は長くmishpatを求めて、終に社會的不正の裡に在つて個人の心胸に發生する「神の國」を看出した。

（附記）余は近く「舊約全書に現れたる社會思想」（三田學會雜誌第十七卷第一、二號）を草したるを以て、爰には同篇中に記されたる一行の文字をも反復せざることを努めた。若し本篇の讀者にして同篇をも併讀せらるゝならば、筆者に取つては非常なる幸福である。



フィヒテの哲學に於ける倫理的個性主義と經濟的社會主義

雜誌『改造』のために

ハインリッヒ・リッケルト
（ハイデルベルヒ）

問　題

通常、個性主義と社會主義とは、二つの世界觀として、相互に對立するものであると考へられ、從つて、その一方は他方のものと結び着けることの出來ないものであると見做されてゐる。斯樣な一般的の考へ型が、固守される限りは、

フイヒテの思惟は、それ自身において不整合なるものとしての觀を呈するであらう。一方に於いては、この哲學者は、個性主義者のうちに數へられてゐる。而して、或る點に於いては、このこともまた確かに適中してゐるのである。けれども、他方に於いては、この思想家は、——一般にそして正當に信じられてゐるやうに、——近世に於ける最初の社會主義者に屬してゐる。否、彼は實に、鎖國的商業國家に關する著述の中では、異常に進展せる社會主義をば、代表してゐたのであつた。しからば、フイヒテに於ける個性主義と社會主義との結合は、これを如何に理解すべきであるか？彼の哲學は、實際上不整合なるものであつて、原理上排他的なる二つの傾向が、同時に共處に併存してゐたのであらうか？　このことは、吾々がフイヒテの政治論の哲學的基礎に關して究明せんと試みるときに、直ちに吾々の當面させられるところの問題である。

　この際惹起せらるるところの種々の難點は、フイヒテに於ける社會主義と並びに個性主義との概念を、精細に規定することによつてのみ、これを排除することが出來る。およそ社會主義と言ひ個性主義と言ふも、これら常用の通語は、甚だ多義的であつて曖昧である。それ故に、若しも、これらの詞語が、何らの解説をも加へられずに、哲學上の思想を表明するがために、使用されるならば、その意味するところは、極めて薄弱であるか、乃至は全く無意味である。確かに、フイヒテは、『個性主義者』であつた。然かも、樣々の點よりして然りであつた。殊に、彼の倫理説は、何よりも先づ個體の意志を基本とするが故に、まさしく個性主義的と呼ばるべきであらう。しかしながら、然ればとて、この哲學者は、いかなる點においても全く個性主義者でなければならないのか？　ここに經濟的生活に關する見解をのみ考へるならば、抑も個性主義と社會主義との差別は、何を意味するのであるか？

　然るとき、およそ經濟の統制をば、獨り個々なる個體の衝動にのみ委托せんとするが如き教説を、個性主義的と謂ふ。殊に、この主義に從へば、國家は專ら法律（權利）の擁護を事とすべきであつて、多くの個體が法律（權利）を侵害せざる場合には、經濟機關なるものは自ら廢棄せらるべきものであると考へられる。かくて、個性主義的なる經濟政策は、純粹なる法律國家の概念を以つて、行動するのである。然るにこれに反して、社會主義は、かゝる法律國家を以

つては、滿足しようとしない。社會主義の要求する國家は、經濟的生活をも統制して、かくて一の社會國家たるに至るべき國家である。勞働の政策的組織こそは、まさしく、最普遍的なる社會主義的要求として、標榜せられ得るところのものである。

個性主義と社會主義との對立をば、斯樣に、經濟的範圍にのみ限るときには、何故に倫理的なる個性主義者が、ただ純粹なる法律國家にも左袒して、社會國家をば拒斥しなければならないかといふ事は、これを理會することが出來ない。ここには何らの必然的聯絡も存在しないといふ事は、またこれ以上に經濟的社會主義なるものに關してより精細なる規定を試みることなくしても、明らかである。それ故に、フイヒテは一面に經濟的の社會主義を代表したるものなるが故に、彼はここを以つて、その倫理的に個性主義的なる確信との撞着に陷るべく餘儀なくされたと言ふことは、決して最初から確定の事實ではあり得ない。

否、吾々は、この二種の個性主義の分裂から超越し、更に一歩を進めて、次の樣に問はなければならない。吾々は、恐らくは、フイヒテの經濟的社會主義をもつて、彼の倫理的個性主義の必然的なる歸結として、これを理解することが出來ないであらうか？ そして、實際、ここには一の緊密なる聯絡が存立してゐるのである。この點を明らかにするがために、吾々は、先づ、如何なる意味においてフイヒテの哲學が『個性主義的』と呼ばるべきであるかを示さう。そして次には、哲學上の個性主義者としてのフイヒテが、如何なる根據からして、經濟上の個性主義をば攻擊して、遂に國家に依る勞働組織に對する徹底せる社會主義的要求を展開するに至つたかを考へよう。此處からして、また政策上の社會主義と哲學的理論との原理的關係に關しても、多分の光明が投ぜられるに相違ない。

フイヒテの個性主義

フイヒテの思惟が、如何なる個性主義的面目を保有するかを、究明するがためには、吾々は、カントに對する彼の位置を考へるのが一番いい。然るとき、次のことが示されるであらう。即ち、個性主義なるものは、カントの自由の概念

と、緊密に連繫するものであつて、しかも、カントに於いて、この自由は、二重の――即ち消極的と積極的との――意味において存立するが如く、またフイヒテにあつても、その個性主義は、二重の意味において語られることが出來るのである。即ち、一面において、個體としての人間は、自然の普遍的强迫から、消極的に自由であるが、またこれとともに、彼は、たゞ己れ自らを行爲に對して規定することにおいて、積極的に一の個體的自由をば所有するものである。然し乍ら、吾々の問題にとつて重要なるべき總ての概念を鑑査せんがためには、か樣に區別することも未だなほ充分ではない。フイヒテに於いては、尙ほ第三の彼に固有なる一の傾向が加はつてゐる。此の傾向は、彼の文化の概念と結合してゐるものであつて、而して、すべての文化が歷史的生命を通して實現されるものである限り、簡單な用語を用ゐるならば、吾々はこれをまた歷史的個性主義と呼ぶことが出來るであらう。フイヒテの個性主義の、經濟的社會主義に對する關係を尋ねるに先つて、吾々は、この個性主義と云ふ言葉の三つの意味を、別々に說明しておかう。然うすれば、フイヒテにおける個性主義と社會主義との相互の矛盾と言ふが如き言說が、何故に、陳べられてはならないかと云ふ事が明らかになるであらう。そして、これと聯關して、後には、兩者の必然的聯絡が明かに陳べられるに至るであらう。

カントは、何よりもまづ、フイヒテを定命論から釋放したことによつて、フイヒテの精神的展開の上に決定的の影響をあたへた。およそ、人間は、あらゆる點に於いて、自らを圍繞する自然によつて支配せらるゝものであり、從つて個體としては、全く虛しきものとなるといふことを、人間は恐るゝを要しない。彼は、寧ろ、客觀者の普遍的因果關係に對して、疑ふべくもなく、主觀としての乃至自我としての獨立性を有つてゐる。而して、既に此の主觀主義は、哲學に、一の個性主義的特質を賦へるものである。もとより、かかる主觀主義は、それだけでは、ある特殊なそして（人々が欲むならば）制限せられたる種類の個性主義に導くであらう。蓋し、自然の强迫から自由なるものは、感性的の個體ではなくて、實に『純粹』なる自我である。そして次の樣に問ふことが出來るのである。即ち、人間をして、感性界の一構成肢たらしめてゐる總てのものを度外視するならば、しかるとき、およそ個體には、なほ個體的なるべき何物が殘されてゐるか？　ここには、確かに、困難なる問題が橫はつてゐるが、ここでは併し乍らそれをこれ以上解釋すること

が出來ない。蓋し、人々が、この問題を如何に解決しようとも、およそ自由なるものは、感性界における行爲のための意義價値を保持せんがためには、如何にもして、感性的なる個體そのものにおいて顯現しなければならない。否、まさしく個體的人格としてこそ、人間は、餘すところなく自然の中に融沒してはならないのである。然らずんば、因果の強迫から自由であるといふことも、人格者としての彼にとつて、何らの價値をも有たないであらう。

フイヒテの哲學が、個性主義的と呼ばるべき所以の、第一の意義がここから生れてくる。即ち、吾々の謂はんと欲するところのものは、主觀實在の個性主義、若しくは、本體論的個性主義である。それに從へば、人間は、主觀として、その個體的存在においてもまた、とにかく獨立であると言ふ。フイヒテの思惟のこの側面に關しては、これ以上詳論するの必要はない。蓋し、經濟的社會主義の問題にとつては、個體の本體論的獨立性といふことは、それだけでは、なほ何ら本質的の意義を有つてはゐないからである。

個體的存在の自由は、因果的束縛の缺除といふこと以外、にそれ以上の何物をも意味せざるかぎり、吾々の既に言つた樣に、それは消極的である。倫理の領域において而めて、自由の概念は、積極的に構成される。そして、この領域においてもまた、主要なる問題は、個體の自由である。蓋し、その個體的意志をば、他者によつて外部から規定せしめられず、反つて己れ自ら法則を與うる所の人間、換言すれば、全く己れ自らの良心の聲によつて導かるる所の人間は、倫理的に自由である。自律の爲めに、他律を排して立つ者は、しかすることによつて、乃ち、重心を個體の上に置く。その限り、また彼は個性主義者と銘せらるべきである。自由なる人格の個體的良心の裡に、窮極の倫理的準矩が存するといふ此の教説を、吾々は、先きに述べたる本體論的個性主義と區別して、簡單に自律的個性主義と呼ぶことが出來るであらう。

併し乍ら、この自律的個性主義と雖も、フイヒテにあつては、彼が、こゝに謂はれたる個體を以つて、直ちに感性的個體と同一視せんとするが如き種類のものではない。それ故に、かゝる個性主義は、現代に於いて多くの人々が、倫理的個性主義としきかば、直ちに想到するが如き見解――それは必ずや如何なる社會主義にも反對なるものと考へら

れてゐるが故に、吾々の問題にとつて重要なるものとなるであらうが――――と混交せられてはならない。およそ、人間は、かれ自らの個性を完成すべきであつて、その際、彼は、全く排他的にたゞ己れ自らのためにのみ惱むべきであり同胞他者の個性のために思ひ亂るべきではないと言ふ要求が、既に屢々なされてゐた。かくて、このことは、『自主生活完成』の理想へと導いて行く。即ち、奴隷道德としての社會主義に反抗するところの、君主道德へと導いてゆく。

フイヒテの自律的個性主義は、かゝる超人の個性主義に對しては、峻嚴に反對すべきものである。蓋し、意志をば規定する個體的良心の裡に、常に顯現する一の契機は、同時にその個體を羈束して、彼が特にその感性的個性の放縱輕忽なる自己完成に奔るを防禦するからである。確かに、自律的なる人間は、己れ自ら、その個性的法則をば賦へるのである即ち、彼が、その個性的決斷よりして、たゞ彼れ自身の良心の聲をのみ認承するときにして、甫めて、彼は倫理的である。併し乍ら、同樣に確かに、また彼自らは、斯くすることをもつて、單なる彼自身より以上なる一の法則をば賦へるものである。否、彼は、實にかくすることにおいて、彼の感性的個性をば、法則のもとに從屬せしむるものである、自律的個性主義の要求するところは、自らが主たること（自己主裁）に非ずして、寧しろ自らを支配すること（自制）である。而して、他者の個性を輕侮するが如きは、如何なることゝ雖も、これと調和すべきものでないといふことを、フイヒテは、常に、最も精銳に强調してゐたのであつた。既に一七九四年に、彼は宣言した、吾々が他者の自由をば尊重せざる限り、吾々自らが、己が自由と自己活動性との感情に、未だなほ成熟せざるものであると。此の未熟こそは、彼にとつて、奴隷道德を意味してゐた。『吾々は奴隷であり、奴隷を有つことを欲してゐる。自らを他人の主であると考へる者は、すべて、彼自ら一個の奴隷である。』而して、彼の『君主道德』に曰く、『自己を圍繞するすべてのものを、自由たらしめんと欲する者のみが自由である。』

かくして、フイヒテの自律的個性主義は、かの感性的個體をば絶對的に定立し、從つて――所謂君主道德なるものが結局敢て爲すが如く――あらゆる種類の社會主義に反抗するが如き見解とは、明らかに區別される。寧しろ、自律の個性主義は、フイヒテにおいては、一の倫理的社會を要求するものであることが、こゝに既に明らかである。

併し乍ら、フィヒテの思惟が、如何なる程度において、個性主義的と呼ばれ得るかを、あらゆる點において、明確に理會せんがためには、個性主義に關する此の第二の規定と雖も、なほ未だ充分ではない。倫理的自由は、抽象的に形成せられて、感性に對立する。しかも、個體的なるものが、感性的なるものゝ上に基くかぎりにおいて、かの自律性は、それ故に、人間をば高めて其の個體的存在以上に騰揚せしむるものである。從つて、感性的個體そのものは、たゞそれだけ單獨に考へられたる限り、消極的意味に於いてもまた積極的意味に於いても、自由であると謂ふことは出來なかつた。併し乍ら、フィヒテは、倫理的個體と感性的個體との一つの斯かる分裂の狀態に停滯してあることを得なかつたのである。このことは、彼の革命に關する述作の中で展開せられたる、文化の概念から導かれて來る。吾々は、國家と社會とにおいて、文化人として、感性の文化をもつて事としなければならない。然らば今や次のことを示すべきである。こゝから出でゝ如何にして、フィヒテの思惟は、感性的個體に對してもまた決定的の意義價値を賦與し得たるが如き性質の、一個性主義的傾向を具有するに到らざるを得なかつたのであるか。

フィヒテの文化の概念が理解されてあるならば、直ちに、その原理は簡明である。およそ感性なるものは、たゞに征服せらるべきものたるに止まらずして、寧ろまた同時に、巧怜にして且つ有用なる奉仕者たるべきであるが故に、如何なる人も、まさにその感性的個性を具有することをもつて、重要なるものとなる。すべての人間は、一人々々、個性的に異別である。しかも、個體が活動せんと欲する力場、即ち文化聯絡の場においては、其處に、個體が、彼自らの個性によつて制約せられたる本分――卽ち、特質的乃至特殊的本分を滿たすときにして、而めて、彼は成果ある活動にいそしむものたるを得るのである。かくてこゝに到れば、かの本體論的個性主義並びに自律的個性主義に存するものとは、全く異れるなほ他の一個性主義へと吾々は到達する。

次の事に考へ到るならば、このことは殊に明らかになるであらう。およそ人類の歷史的展開の過程は、一回性的一時性的經過を表すものであつて、しかも此の過程は、知られざる過去よりして知られざる未來へと邁進し、而して、この現在において、各々の人間は、――彼が、人性の進步に寄與せんと欲するとき――その特殊的なる一回性的

位置にあつて、自らかゝる過程の構成肢として、この過程に組合されるのである。この事を遂次的に更に追究してゆくならば、遂に、吾々は、歴史展開に對する個體の意義を理解し得るに到るであらう。フイヒテに於いては、もとより、この點に關する充分なる釋明は、常に必ずしもこれを見出すことが出來ない。殊に、こゝに豫め先づ以つて、これを明らかにすると言ふことはもとより不可能である。歴史的特殊性の意味、並びに、（他者をもつて代ふ可からざる）不可交替性における生命個性の意味、從つて、時間的なる人間の感性的存在にもまた具有せらるゝところの個體的特質性の意義。フイヒテは、たゞ漸次的に、これらをば評價し尊重することが出來たのである。此の點に關して、兎に角、彼が、最も徹底せる結論を開陳せるは、確かに、かれの獨逸國民に告ぐるの講演においてゞあるが、併し乍ら、こゝにさへもなほ、全く歴史的に完成せられたる意識にとつては、恐らくは非歴史的と思はるゝが如き、多くの面目が呈示されてゐる。フイヒテに於いては、歴史的思惟は、決して充分なる歸結にまでは展開しなかつたのである。併し乍ら、他面に於いては、感性的生命における人間の個體的異別性尊重の素地は、彼に於いて既に夙く現れてゐる。そして、吾々は、彼の個性主義を規定せんがためには、此の點に着目しなければならない。

かくて、例へば、學者の本分に關する第三の講演は、社會における階級（立場）の異別性（不同性）に就いて論じてゐる。勿論、あらゆる社會の窮極の目的は、フイヒテにとつて、その僚友總ての完全なる平等であるべきであるけれども、併し乍ら、彼は、同時に、現在においては斯かる平等の存在しないといふ事、並びに、人間はそれ故に『何らか一の特殊なる專門の一科を把握すべく』余儀なからしめられたるものであつて、『暫らくこれを完全に盡すことが、彼にとつて、殆ど最も直接なる問題である』といふ事を、明らかに知つてゐる。こゝからして、文化生活のすべての歴史的進歩のために、個體的特質性を積極的に尊重するに到るべき道程が、開けなければならなかつた。實に、既に一七九四年においてフイヒテにとつては、すべての人は、『己が存在を完全に意識するに到らんとする最初の人間の展開から、はるかに永遠にまでも及べる偉大なる連鎖の、必然的なる一連環』である。如何なる人もすべて自ら次の如く言ふべきである。人間の中にあつて、嘗て偉大なりしすべてのもの、賢明なりしすべてのもの、高貴なりしすべてのもの、――世

界の青史に輝せられて、私がその名を讀むが如き人類の恩人、――――彼等はすべて、私のために、勞作したのであつた。私は彼等の收穫となつて、やつてきた。私は、彼等の住んでゐた大地をば踏んでゐる。彼等の榮を攢ぐべき足跡をば踏んでゐる。彼等が中絕せざるを得なかつた處に、私は更に多くを建設することが出來る。彼等が未完成のまゝに遺さざるを得なかつた光輝ある殿堂をば、私はその完成に近づけることが出來る。

こゝに、吾々が、吾々自らの個性に想到するならば、如何に、このことを理解すべきであるか？　フイヒテは、それを明瞭に述べてはゐない。けれど、それは、彼の文化の概念から、必然的に歸結される。人間は、またその感性的個性をも琢磨完成することによつてのみ、彼が自ら課さざる可らざるところの任務をば、企劃し遂行することが出來るのである。彼は、人性展開の道程に於いて、彼が全體中の特殊なる一員として、彼より異別なる他者よりも、よりよく爲し能ふところの事を、爲なければならない。一個の個性的なる鏈環であることなくしては、彼は、かの偉大なる連鎖の必然的なる鏈環ではあり得ないであらう。彼がその同胞他者と全く等しきものたるかぎり、彼は、その同胞中の任意なる一員によつて、置き換へられ得るであらう。從つて、彼は、偶然なるものたるに止るであらう。

此の歷史的個性主義は、社會に於ける階級の異別性に關する講演の結論的思想の中に、完くこめられてゐる。其處に、フイヒテは、個々なる人間は、何人と雖もすべて、文化のための勞作に際して、――――彼の先驅者たちがこれを中絕したると同樣に、――――何時か、一たびは中絕しなければならないであらうと言ふ異論的見解を、ば彼自ら提出する。しかも、まさに此の點においてこそ、彼は、すべての中で最も崇高なる思想を見出してゐる。「私が、かの崇高なる課題に、手を着けるとき、私は、決してこれを完成することはないであらう。かくて、確かに、これを敢行することが、私の本分（規定）であるが故に、私は決してその活動を中絕する能はざるものであり、從つてまた、決してこれを中絕すべきものではないのである。死と呼ばるゝものも、私の事業を破碎することは出來ない。蓋し、私の事業は完成せらるべきであり、しかも、それは永遠に完成せられ能はざるものなるが故に、是を以つて、私の實在には、何らの時間的規定も與へられてなく、私は永遠であるからである。私は、かの偉大なる課題を、企劃し敢行することをもつて、同時に

自ら永遠性を把握したものである。』かくて永遠たるべき自我が、若しも、地上にあつてその個性を通して作用せず、從つて、その個體的本分（規定）を充足しない場合には、如上の思想は、すべての意味を失ふであらう。從つて、――――吾々は結論することが出來る、――――人類の歴史的展開の道程に於いては、たゞに異別なる諸階級が存在しなければならないのみでなく、またそれら諸階級の內部において、各個人は、それぞれ異別なる任務を有たなければならない。そして、そのかぎり、彼の屬する階級の自餘すべての構成肢からは異別なる、彼自らの個體的異別性の完成にいそしまなければならない。かくの如くして、こゝに吾々は、第三種の個性主義に到達した。個體の本體論的獨立性も、並びに個體の良心による自律的規定の倫理的自由性も、この第三種の個性主義を通してこそ、而めて、人間の文化勞作に對して、彼等の充足實現を見出すのである。

併し乍ら、同時に次のことは明らかである。もとより、感性的個性は、この歴史的思惟の個性主義によつてこそ、かの本體論的個性主義乃至自律的個性主義によつてよりも、より偉大なる意義を獲得するものではあるけれども、しかも此の歴史的思惟の個性主義と雖も、感性的個體をば絶對化して、從つて社會主義的努力に反對することからは、遙かに異つてゐる。否寧しろ、こゝに、感性的個體が重要なるものとなるが故にこそ、フイヒテの個性主義に具備せられたる團體思想の關係が、曾てよりも一層明晰に現れてくるのである。若しも、個體が、一社會における構成肢として作用することが出來ないならば、かゝる個體は、歴史的に全然無意義（價値）なるものであらう。一つ一つに切り離されて、たゞ獨り己れ自らにのみ意欲するところの、孤立せる個體としては、彼は、文化の進歩のために、何ものをも貢獻しないであらう。かくて、こゝに既に、フイヒテの個性主義は、必然的にさへも、團體思想と結びついてゐるものであることが、明らかになる。そして、個性主義と經濟的社會主義との間に存する矛盾と言ふが如き考へ方が、何故に云々されてはならないかといふことが、此處に充分に明白になるであらう。人間は、實に、個體として、個體的に作用しなければならない。併し乍ら、彼が、彼の個性を提げて、より大なる個性的全體に組合する時にして而めて、彼は、個體として、同時に、超個體的意義を享受するのである。單なる個體としては、彼は、彼自らの個體的本分（規定）をすら

も、倘ほ未だ充さざるものである。

フイヒテの個性主義の、經濟的社會主義に對する關係を、理會するがために必要なる限りにおいて、彼の個性主義をば、その種々なる構成部分に從つて、闡明するがためには、以上で足り得るであらう。フイヒテの個性主義を以つて、社會主義的傾向と、たゞに結合せしむるのみでなく、更に、その結合をして、必然的なるものとさへもしてゐるところのものが、何であるかを究明するがために、今や吾々は、如何なる道程を取るべきであるかと云ふことは、フイヒテの思想とカントの自由論とを提携せしめつゝある思想關係からして、既におのづから明らかである。別々に展開せられたる如上三類の概念のうちで、自律的個性主義の概念が、此の問題にとつて、明かに最も重要なるものである。人間は、己れ自らを規定せんがためには、その實體的存在においてもまた、自由でなければならないが故に、本體論的個性主義は、自律的個性主義に對しては、Conditio sine qua non（缺く可からざる條件）として、これに先行する。歷史的個性主義は、感性的個體的に形成せられたる文化生活（そこに吾々が自由活動的であるところの）の上に自律の理想を適用するに當つて、結論として生じてくる。それ故に、實際、社會政策的要求に對して、眞に基礎的であり得るものは、たゞ自律的個體の自由性のみである。されば、吾々が、倫理的自由の理想と、經濟的生命との間に存立する關係をば、フイヒテの所有（財産）の概念がこれを說明するところに從つて、理解し得たあかつきには、こゝから、同時に、倫理的個性主義と經濟的社會主義との必然的結合に關してもまた、明瞭なる釋明が成立して來なければならない。

社會主義への過渡

フイヒテに於ける社會主義的原理は、一七九六年の自然法論に於いて、初めて、充分なる展開に達し、顯かに現はれてゐる。それ故に、此の述作の思想は、就中、吾々の問題を解決するに當つて、準規たるべきものである。けれども、國家に關して論じつゝある初期の諸述作を、併せて考慮することが望ましい。これらの述作の構成要素は、なほ未だ、個性主義的なる經濟說と融和するものであり、また、經濟生活への國家の干涉をば、明らかに拒斥するが如く思はれるもの

であるが、かくの如き思想要素こそ、反つて寧しろ對照的に、後年の徹底せる社會主義的制作の原理を、愈々分明に露出せしむるが故に、吾々にとつては、敎ふるところが甚だ多いであらう。

フイヒテは、必ずしも、常に社會主義者ではなかつた。然かも、必然的に彼をば社會主義に導くに至つたる財産の概念をば、彼が既に所有してゐた時においてさへも、なほ未だ必ずしも社會主義者ではなかつた。併し乍ら、フイヒテに於いて、抑も經濟的個性主義は、現に、如何なる命題となつて現れてゐるかを、吾々は精細に確定しなければならない。即ち、政策的に個性主義的なる響を傳へるものゝすべてが、吾々の研究關係にとつて、効力あるものではないのである。されば、吾々は、先づ、外見上にのみ反社會主義的傾向を表示するが如き言語について、その原理を理解すべく求めよう。

例へば、學者の本分に關して多樣に說述せられたる講演の中で、『統御(政府)をば無用のものたらしめることが、即ちすべての統御(政府)の目的である。』と言ふ言辭に逢着するならば、かゝる見解は、社會主義と結合する能はざるものであると、考へることも出來よう。そして、人々は、實際またその樣に考へたのであつた。併し乍ら、その思想の脈絡を注意するならば、此處には、權利國家か將た社會國家か、二者その何れをとるかといふ問題に關しては、未だ何事も語られてはゐないと言ふことを識るであらう。即ち、此の命題には、『國家は、單なる手段たるにすぎざる總ての人間的制度と同樣に、己れ自らの廢滅へと赴くものである。』と言ふ言葉が先行してゐる、そして、此の命題のあとには、次の如き言葉が續いてゐる。『確かに、現在が、未だなほ其の時期ではない。そして、其の時までには、何萬年乃至何百萬年かゝるかを、私は知らない。そして、一般に此處には、人生に於ける何らかの適用について語るものではない。』斯くの如き思想は――社會の窮極の目的は、その僚友すべての全き平等であり、從つて、すべての個體的異別性の廢滅であると訓へるところの前述の敎說と同樣に、――現在を以て事とすべき社會政策の上に、直接の影響を與へることは出來ない。蓋し、社會國家のみならず、法律國家もまた、フイヒテによつては、單なる手段たるにすぎざる人間的制度のうちに數へられて、從つて、彼等自らの廢滅に赴くものであると考へられる。それ故に人は法律、國家を以て甘んずべきである

か、或は、これを社會國家たるべく改造すべきであるか、と言ふ問題にとつては、窮極の目的といふが如きものは既に無意義である。フイヒテは、彼が既に意識的なる社會主義者となつた時にもまた、統御（政府）の窮極の目的はすべての統御そのものを無用なるものたらしめることであると言ふ確信を固執した。實際に彼はこれを固執することが出來たのであつた。蓋し彼の社會主義に於いては、時間的に制約せられたる暫時的の國家は、たゞ專ら法律（權利）の擁護のみを任とすべきであるか、將た、經濟生活にもまた干渉すべきであるか、その何れなるかゞ、彼には獨り、たゞ疑問であつたが故である。この問題に關しては、學者の本分に關する講演から引用された上述の諸命題も、乃至これに類似せるフイヒテの諸言説も、何等決定的の陳述を提供しようとはしない。それ故に、吾々の問題を辿るに當つては、前きに要求せられたる人間すべての平等觀からと同樣に、これらの言説からも眼を轉じなければならない。これらの言説が陳述されたのは、フイヒテ自らの最初の經濟的個性主義といふが如きものを求むることの不可なる所以を示さんがためのみであつた。

　革命に關する述作に現れたる若干の命題は、これと關係を異にしてゐる。これら命題の、明らかに表明するところによれば、フイヒテは、一七九三年には、なほ未だ、彼自らの思想の歸結に關して、充分に明識してはゐなかつたのである。即ち、こゝには、所謂古典的なる國民經濟主義の、經濟的に個性主義的なる見解に對する駁論において、缺けるところがあるのみでなく、またフイヒテ自身、この古典的國民經濟主義と同樣に、經濟生活をば、その本質的の部分において、放任しておかうと考へてゐる。このことは驚くべきことである。何となれば、この『自由主義的』思想の根抵には、すべての個體の經濟的關心（利害關係）の『自然的調和』といふ見解が、橫はつてゐるからである。しかも、フイヒテが、感性的自然本性と倫理的自由とを分別して、更に、この兩者をば、彼自らの仕方において、即ち文化の概念において前めて、再び相互に結合し得るに到つた時には、彼は最早、この自然的調和をば、眞摯に信じることは出來なかつたのである。それにも拘らず、一七九三年においては、彼は、重農論者の教説と一致するが如き言説を吐露してゐる。吾々は、それらを注目しなければならない。

かくて、例へば、フィヒテは次の樣に說明する。土地所有者は、絕えず、吾々の必需品の價格を騰貴せしむるものであり、從つて、所有土地そのものは、現金換算の價値において、絕えず騰貴するものである。これに反して、農夫は、なほつねに、謂はば土地財産の一部分であるか、或は、無報酬乃至均衡を失へる小額の勞銀にて、地主のための義務勞役に服するものかである。彼は、今日において、憐むべき窮乏の生計のほか、何物をも所有せず、また決して何物をも所有しないであらう。それ故に、土地所有者は、たゞその浪費を制限しさへすれば、國民全資財の獨占的所有者たることが出來たのであらう。斯くの如き狀態が、排除せられざる可からざる凶事であることは、勿論フィヒテにとつて、自明の事柄である。併し乍ら、此の排除の目的のために、彼が暗示するところの手段は、決して、經濟的社會主義の意味において、考へられてはゐない。フィヒテは、寧しろ、次の如き要求に自らを制限する『人間の自然的繼承財の交易を解放せよ、人間の力能の自由交易を與へよ』是をもつて、彼は、專ら、何らかの特權の排除を要求するものである、法定的なる農民の解放を要求するものである。かくて 必要なることのすべては、こゝから結果して成起すべきである。『諸君は、注目すべき光景を視るであらう。土地財産並びにすべての財産の收益は、その財産所有の大きさに反比例する。必ずや常に不當なるべき暴戾なる耕農法規がないならば、地面は、おのづから、漸次に、多くのものに分配されるであらう。そして、諸君の問題は、解決されるであらう。』

これらの命題の示すところによれば、フィヒテは、革命に關する述作の中で、己れ自らの勞働によつて生活し得べき人間の權利をば、理想としたことによつて、既に、社會主義の目標を追求したものであつたけれども、併し乍ら、彼のこの目標の實現に關しては、尠くとも部分的には、單なる法律の擁護によつて、これを達成し得るものであると考へてゐたのである。このことは、如何にして、可能であつたか？フィヒテは、こゝでもなほ、自由といふ詞語の多義性のために、惑はされてゐたものの如くに思はれる。彼は、農民の『解放』を欲した。かくして、彼等をば、自然的經濟的力能の『自由なる行動（勝敗）』に委せんがためであつた。先驗的理想主義の若き學徒、倫理的自律の教說を奉ずる若き學徒、わがフィヒテは、彼が一とたび其の財産の概念を見出してのち、長く引き續いて、純粹自然的個體の法定的自由

が、倫理的個體の自律性と一致するものであることを、信ずることが出來たであらうか？經濟的文化に關する彼の思想の、一層展開せらるゝに當つては、フイヒテは、實に、一の異れる結論に達してゐる。このことから、次の事が明らかになる。即ち、最初の政治的著述は、經濟的個性主義と經濟的社會主義とに存在する不分明なる中間情態を表現するところの、過渡的現象を意味するものである。勞働權の所有の概念に想到するならば、吾々は、フイヒテは當時なほ未だ、かれ自身の社會主義をば理解してゐなかつたのであると、謂はなければならない。

併し乍ら、かかる事情こそは、實に、吾々の問題にとつては、興味多きものである。即ち、フイヒテをば社會主義に導いたる諸概念、就中かれの財産（所有）の概念は、――彼の時代に事實的に現存したる經濟的生活の考察から、これらの概念をば、彼が導き出したものであつたと言ふ意味に於いては、――「政策的」なるものだつたのでない、と言ふ事が、新たに、如上の事情から明らかになる。これらの概念は、寧しろ、彼の哲學上の原理から、生れたものであつた。それ故に、これらの概念が、漸く進展成熟して愈々徹底的なる完成を得るに及んで、甫めて、これらの概念の中に最初から秘められてゐた社會主義的傾向が、フイヒテその人にとつて、漸く分明に現れて來たのである。從つて、フイヒテの倫理的個性主義的傾向の哲學と、彼の社會政策との間に存立する概念的聯絡に關して、充分なる洞察を得んがためには、吾々は、僅かに尙ほたゞ一歩を進めて、彼の思想を追究すればいゝのである。即ち、此思想家を導いて、彼自らの概念の徹底的歸結をば、完全に意識せしむるに到つたる最後の一歩を、こゝに追究することが心要である。

社會主義の展開

一七九六年の自然法論においては、倫理的に理性的なる國家は、專ら法律的の任務にのみ、自らを制限すべきものでなくて、また經濟的の生活をも統制すべきものである事が明らかに認められてゐる。若しも單に、既に現存せる財産（所有）のみが、獨り擁護されるならば、しかる時は――一部の人間から、その全財産（所有）をば掠奪し、是を以つて、一素財に對する自由勞働のあらゆる可能性を掠奪して、從つて、彼等が此の世界の過程に於いてその倫理的理性本分

を充すことを、不能ならしめるが如き情態が、そこに成立するであらう。斯くの如きことは、如何なる事情のもとに於いても、斷然阻止せられなければならない。そして、社會主義的要求は、是を以つて、基礎づけられてゐるのである。既に、革命に關する述作中に包有せられたる所有（財產）の概念の歸結は、今や、充分に展開されるであらう。各人はその勞働によつて生活し能ふべきであると言ふ理性的なる國家制度の理想を、實現するがためには、法律國家を以つてしては、如何なる仕方においても、所詮不充分である。これがためには、廣汎なる國家的の勞働の組織が必要である。おのづから自然に將來することの決してあらざるものを、意圖的に招致するが如き、勞働の國家的組織が必要である。かくて、法律國家は、社會國家たるべく、改造されなければならない。此の思想の中にこそ、自然法論が教ふるが如き經濟的社會主義の、決定的原理がある。そして、ここからして、爾餘すべての事柄が、闡明されるであらう。

次いで、鎖國的商業國家に關する述作は、自然法論が基礎づけたものを、更に一層詳細に展開した。そして、吾々は是と相俟つて、此處に、經濟的個性主義が最も決定的に拒斥されてあるを見出す。其處には、明らかに、次の如く謂はれてゐる。今日までの國家は、現在市民が有るがまゝの占有狀態に、法規の力によつて、彼等の財產現狀を維持すべき機關として、たゞ一面的且つ不充分に、把住せられたるものである。國家のより根本的なる義務は、寧しろ、各人をして、彼に屬すべき占有（財產）をば、初めて確りと所有せしむる點に存すべき所以が、看過されてゐたのである。併し乍ら、政策上の無政府主義が漸次に止揚せらるゝと同樣に、また商業上の無政府狀態が止揚せられることによつてのほかは、斯くの如き義務の遂行は不可能であらう。——經濟的個體的關心（利害關係）に關して、おのづから個體的倫理的自由性に導くべき、かの自然的調和に對する信仰のすべてをば、根底から失つてしまつた人のみが、如上の言を爲すことが出來たのであつた。今や、フイヒテは、知つてゐる。經濟生活を、趣くがまゝに放任するならば、商業的公衆（商業界）の間に、總てのものに對する總てのものゝ無限の戰鬪が、——即ち、購買者と販賣者間の戰鬪として、——成起するであらう。しかも、世界の人口が多ければ多いほど、此の戰鬪は、愈々激烈に、愈々不正なるものとなりその結果するところは、愈々危險なるものとなるであらう。自然的性狀の單純なる生活狀態に於いては、大なる損害な

しに經過したものが、必要の增大するに從つて、最も殘忍なる不正となり、大なる不幸の源と變る。勞働者は、益々貧乏になり、勤勉なる家族も、漸く、貧乏に墮落し、將た、不正なる國民を棄てゝ移住するであらう。要するに、――フイヒテの思想を總括すれば、――人間は、互に亡ぼすべく全く自由たらんと欲するが故に、何人と雖も、彼の勞働の繼續に際しても、彼の境遇の繼續は、毫もこれを保證されてゐないのである。

吾々は知る。今や、フイヒテは、經濟的自由と、倫理的自由とを、相互から峻別する。而して、此處に現れてゐるより以上に積極的には、彼は、經濟的個性主義を拒むことが出來なかつたのである。今や吾々にとつては、たゞ次の點のみが重要なる問題として殘されてゐる。即ち、フイヒテの經濟的社會主義は、個性主義的傾向と、單に一般的に結合し得るものたるに止まらずして、――吾々が特にフイヒテの哲學的個性主義の特別なる特質として擧げたところのものの根本原理と、まさに必然的に聯關するものであると言ふ所以をば、明瞭に解釋することが問題である。此の目的のために、吾々は、再び、此の個性主義の諸側面を、別々に考察しよう。根底に於いては、すべては單純である。

個體をば、因果關係の強迫から解放し、從つて、人格をば、その單なる自然的存在への對立に齎すところの、本體論的思想は、既に、勞働關係と並びに人格者の所有（財產）とに關する統制をば、經濟的生命の感性的衝動に放任して置く事を、拒絕する。若しも、斯くの如き仕方において、個性主義者が自由活動の理想とし視するものとの和合が、招致されたとしても、それは最も稀有なる偶然事にすぎないであらう。フイヒテは、第一人者として、このことを達觀したされば、かの革命に關する述作中の二三の命題に、なほその面影の存するが如くに、彼が最初個性主義的經濟主義を奉持したことは、此の理由からして既に、一箇の矛盾であつた。それは、彼の思想が愈々決定的に、愈々完全に、大成せられたるにつれて、彼自ら排除せざる可からざるに到つた所の、一箇の撞着であつた。彼は、因果的に規定せられたる自然（本性）に對しては、決して、文化生命の本質的なる要素たることを容許することが出來なかつた。從つて、經濟生活なるものが、所有（財產）の概念を通して、彼にとつて、優れて本質的なる文化の一要素となるに到つては、彼は、また、經濟的個性主義者たるに留まることが出來なかつたのである。既に、彼の理解したるが如き本體論的獨立性の自由は、

自由主義經濟主義的によつて代辨せらるゝが如き自由とは、決して一致するものではなかつた。寧しろ、經濟的個性主義の所謂自由なるものは、個體をば經濟的生命の自然的因果過程に委棄したることによつて、實に、個體をば不自由たらしむるに到るべきものであつたであらう。かゝる歸結は、消極的自由性の本能論的個性主義からして既に、原因あつて結果したものであつた。經濟的關心（利害關係）の自然的行動（勝敗）に於いては、個體は、決して自由ではなかつたのである。

フイヒテの積極的倫理的乃至自律的個性主義もまた、――而して結局、彼の歷史的個性主義もまた同樣に、――經濟的社會主義に赴かなければならなかつたと言ふことは、今や等しく明白である。個體をば、文化勞作の連鎖に於ける個體的鎖環としてもまた、自由なるものとして保持せんことを欲する者は、人間的團體の形式としての國家に對して次の如き任務を賦課しなければならない。即ち、己れ自らの良心に從つて、人類の文化に於ける共働作用に向つて、自律的に自らを規定せんとする個體の各々が、感性的なる個體として、かれが個性の完成に、またかれが個體的本分（規定）の充足に、自由に活き得るが如くに、然かく、經濟生活を組織すべき任務が、國家に對して課せられなければならない。それ故に、フイヒテが、一の社會主義的經濟主義を代表するに到つた事は、――要するに、彼の倫理的個性主義的要求からして、彼の文化の概念との聯絡において、當然成起すべきであつたところの歸結をば、敢然として採用したことに外ならない。彼によつて熱望追求せられたる文化の向上を實現せんがためには、法律國家を以つてしては、不足であつた。それ故に、それは、必然的に、社會國家たるべく、改造せらるべきであつた。かくて、まさしく次の如く言ふことが出來る。フイヒテは、彼の倫理的個性主義並びに彼の歷史的個性主義的文化理想が、經濟的個性主義によつて脅かされたるを見たるが故に、彼は、經濟的社會主義者となつたのである。然る限り、彼の社會主義と彼の個性主義との間には、獨り何等の矛盾も存立しないと言ふばかりではなく、寧しろ、兩者は、體系全體の中で、必然的に、相互に聯繫するものである。それ故に、フイヒテが、彼の哲學をば、愈々徹底的に思惟し大成したるにつれて、また愈々緊密に、この兩者は相互に結合したのである。

吾々の所論を促したる問題は、ここに原理的に決定された。そして、今や、なほその確證と闡明とに資せんがためにたゞ極めて僅かの所論が、追加されるであらう。乃ち、フイヒテに於いて、その哲學的思想と經濟上の社會主義的政策との、上述の如き相互聯絡は、また個々の細目的論述に於いて、如何に現れてゐるかと言ふことを、就中、明示せんとするものである。

倫理的個性主義者が、政策家として、單に、個體の感性的生存に必要なるものゝ最少限度を、要求したる場合のみでなく、また、人間各々の感性的存在が、眞に『正しく人間的に』即ち倫理的に自由に、形成せられ得るが如くに、然かく、國家によつて經濟生活が統制せらるゝを見んと欲したる場合にも、吾々は、全く當然の歸結としてこれを理解する。フイヒテは、鎖國的商業國家論の中で、屢々引用せられたる言葉を以つて、次の如く言ふ『人間は勞働すべきである。然し乍ら、その重荷の下に於いて眠りに入り、酷使し盡されたる體力の極めて乏しい休養のあとで、再び同じ重荷の運搬に驅り立てられる馱獸の如くに、勞働すべきではない。人間は、不安なく樂しみと悅びを以つて、勞働すべきであるそして、彼の精神と彼の眼とを、天に高めんがための、餘裕の時を保存すべきである。蓋し、人間は天を眺むべく作られてゐる。彼は、まさしく彼の馱獸と共に、食むべきでない。彼の身體の構造が、馱獸の身體の構造と區別されてゐると同樣に、彼の食餌は後者の飼料から區別せられ、彼の住居は後者の廐舍から區別されてあるべきである。彼は實に苟くも人間であるが故に、これは彼の權利である。』

此等の命題は、樣々の意味に於いて、吾々にとつて、注目すべき價値がある。即ち、先づ第一に、フイヒテの文化概念に於いて表現せらるべき、人間の感性的存在と倫理的價値との緊密なる聯絡を、こゝに再び、これらの命題が示表してゐる。次に更らに、若しも、フイヒテの社會政策が、全然彼の倫理的個性主義的原則に基づいて立つものでなかつたならば、此等の命題は理解すべからざるものであらう。蓋し、純粹に經濟的なる概念からは、人々は、如何にして、勞働は『人間に値ひするもの』であると言ふ要求をば、演繹せんとするのであらうか？　最後に、フイヒテの社會主義は、また、彼の革命に關する著述と殆んど同時代に現れたる、佛蘭西の共産主義的傾向からも、原理的に區別せらるべ

き所以が、こゝに明らかに爲されるのである。このことは、フイヒテの政策の理想主義的性格をば、明らかに闡明するが故に、なほ特に注目せらるゝであらう。

佛蘭西の共産主義において、一般に、一つの哲學的基礎について語らんと欲するならば、吾々は、これを幸福論的若しくは功利主義的と、呼ばざるを得ない。即ち、此處では、幸福への關心に於いて、乃至、利用への關心に於いて、新たなる所有（財産）の分配が要求されるのである。フイヒテに於いては、このことに關しては、決して何事も言はれてはゐない。彼の自律的個性主義なしには、彼は、決して何らの社會主義的要求にも、到達しなかつたであらう。されば假令、彼が、其の成果に於いては此處彼處に、共産主義と接觸しようとも、併し乍ら、彼の結論の幹本たるべき根本の原則は、あくまで原理的にこれと異るものである。そして、このことが、吾々の問題關係に於いて、就中重要である。フイヒテが、彼の社會主義に於いて、主要なる問題とするところは、感性的本體の主觀的狀態ではなくて、——寧しろ、人間が、世界全體者の裡に於いて、その超感性的本分（規定）を充さんとするに當つて、これを制約するところの感性的條件である。而して、此の思想もまた、剩す所なく、彼の體系中に組合される。即ち、若しも吾々が、感性的本體として、吾々の勞働によつて生活すること能はず、また財産を所有すること能はざるものであるならば、世界展開過程の構成肢として、自ら永遠を把握することが、吾々には、また許されてゐないのである。

かくて、日々の物質的要求は、超時間的なる形而上學的理想と、最も内的なる結合に齎されてゐる。思惟は、存在のあらゆる深みとあらゆる高みとを貫徹する。フイヒテは、かれの文化の哲學に於いて、——人間の自ら定立し得る窮極の目標をば規定したあとで、——また日常の麵麭のための配慮をも、彼の考察の圏内に引き入れなければならなかつたおよそ、文化人にとつては、たゞ感性的に羈束せられたる存在に於いてのみ、不可見の世界理性が、その可見の表現を見出すが故である。かくして、フイヒテが政策家として欲求したるところは、プラトーが既にその政治論（國家篇）に於いて欲求したるところに劣らない。而して、彼は、彼自ら斯かるプラトー的目標を抱懐するものなることを、自ら識つてゐたのであつた。蓋し、既に一七九三年、カントへの書簡の中で、彼は、彼の哲學上の構想をば、純粹理性批判中

の一章節に結びつけてゐたのであつたが、此の章節は、實に、プラトーの國家論に論及して、今日に到るまで充たされざるがまゝに遺されたる學的理想として、これを論述したる箇所であつたのである

最後に、フイヒテの社會主義と彼の倫理的個性主義との結合に關して、幾分以上とは反對の側面から、これを明瞭ならしむるが如き、なほいま一つの點を陳述しておかう。國家に於いて、勞働可能性と並びに所有（財産）とを保證することは、——容易に理會せらるるが如く、——やがてまた私的生活に關しても、立ち入つてこれを統制するの擧に赴かなければならなかつた。而して、ここには、個體的の意志決定を拘束制限するの危險が、横はつてゐた。フイヒテは、かれの實踐的提案の如何にも峻烈なるにも拘らず、倫理的個性主義者として、此の點に關して盲目であることは出來なかつた。されば、彼は、此の點を商量して、社會主義にまた努めて限界を與へんとするものなることを示してゐる。（土地財産は例外として、）私有財産の廢除に關しては、若しくは、家族の廢絶に關しては、彼は何事をも知らうとは欲しなかつた。そして寧しろ、彼は、社會國家內部の個體のために、能ふかぎり制限せられざる個體的保證の範圍を、確保し保護することを熟慮してゐたのであつた。鎖國的商業國家論に於いては、もとより、此の點に關して注目すべきものは殆んどないけれども、併し乍ら、自然法論の中では、それは愈々鮮かに現れてゐる。即ち、此處では、フイヒテの社會主義は、殊に、彼が『家』と呼んだ所のものに於いて、堅固なる限界的障壁を見出してゐる。言葉の最も廣い意味での箱なにびとかが賃借してゐる居室、女中の手匣、郵便に託される行李、斯くの如きは、如何なる意味においても、國家的干渉から離れて『自由』に支持せらるべきである。其の中に何があるかと言ふことは、國家はこれを知りもしないし、また知るべきでもない。鎖鑰は、國家の權力と私人の權力との堺界を作してゐる。私の家にあつては、私自らは、國家に犯されず、また害はれない。時として、フイヒテは、戲謔を交へた堅實さを以つて、緊しくこの『家の權利』をば擁護した。戶口に錠のかかつてゐないところ、そこは訪れることが許される。そして、『おはいりなさい。』これが甫めて、室に入るべき權利の確定を意味してゐる。斯くの如き諸々の細目もまた、吾々は、これを、フイヒテの政策全體の根底に横はる一般的なる原理からして、理解しなければならない。然るとき、吾々は、あたかも窮極の核心に逢着するであら

う、――即ち、吾々が、さきに、倫理的個性主義なるものとして、その様々なる要素において、特性づけ且つ限定したる所のものに、到る所に於いて、際會するであらう。

併し乍ら、ここには最早、これ以上に、更らに多くの細目に渉ることが問題ではない。たゞ單に、フイヒテの社會主義のロゴス即ち理性と、それが彼の哲學體系に於いて終結してゐることと、――要するに、彼の社會主義に於いて本來哲學的なるものをば、意識に齎すことだけが重要だつたのである。フイヒテは、政策家としてもまた、あくまで恒に哲學者であつた。蓋し、『哲學する』とは、即ち、部分をば全體との結合に於いて考察するの謂ひである、萬有を貫き統ぶるロゴスをば認識するの謂ひである。さればフイヒテは、彼が自然的人間の肉體的困苦に關して論ずる時に於いてさへも、如上の如くして、特殊者と普遍者とをば、一の包括的聯絡に、結合すべく努力するものであることを示した。彼の力强い現實感にとつては、人間的なるものも、決して、見知らざる他事ではなかつた。彼が、思惟に於いては、更らに然かく高く、すべての地上的なるものをば超えて、自らを高め得たであらうとは言へ。（譯者曰。本篇の讀者は、改造昨年六月號所載の同じ著者による論文「フイヒテの社會主義の哲學的基礎」を參照せられたい。その論文の內容は、恐らくは、本篇の理解のために、必要にして有効なる前提と見ることが出來るであらう。）

mus besonders an dem, was er das Haus nannte, eine feste Schranke. Das Gehäuse im weitesten Sinne des Wortes, das Zimmer, das Jemand gemietet hat, die Lade der Dienstmagd, der Koffer, der auf die Post gegeben wird, sind in jedem Sinne von staatlichen Eingriffen „frei" zu halten. Der Staat weiss nicht und soll nicht wissen, was darinnen ist. Das Schloss bildet die Grenzscheidung der Staatsgewalt und der Privatgewalt. In meinem Hause bin ich selbst dem Staate heilig und unverletzlich. Bisweilen hat Fichte dies Hausrecht mit einem Nachdruck verteidigt, der ans Drollige streift. Wo kein Schloss die Tür schützt, da ist anzuklopfen, und erst das "Herein" bedeutet die Rechtsentscheidung, das Zimmer zu betreten. Auch solche Einzelheiten muss man aus dem allgemeinen Prinzip verstehen, das der ganzen Politik Fichtes zu Grunde liegt. Dann stösst man als auf den letzten Kern überall auf das, was wir als ethischen Individualismus in seinen verschiedenen Bestandteilen charakterisiert und umgrenzt haben.

Doch im Uebrigen kommt es hier auf Einzelheiten nicht weiter an. Es galt lediglich, den Logos oder die Vernunft des Fichteschen Sozialismus und sein Beschlossensein im System, kurz das eigentlich Philosophische daran zum Bewusstsein zu bringen. Auch als Politiker ist Fichte stets Philosoph geblieben, denn Philosophieren heisst: die Teile in Verbindung mit dem Ganzen betrachten, den Logos erkennen, der Alles durchwaltet. Auf diese Weise das Besondere mit dem Allgemeinen zu einem umfassenden Zusammenhange zu verknüpfen, zeigte sich Fichte sogar dann bestrebt, wenn er von den leiblichen Nöten des natürlichen Menschen handelte. Seinem starken Wirklichkeitssinne war nichts Menschliches fremd, mochte er sich auch beim Denken noch so hoch über alles Irdische erheben.

Eigentum haben, so ist es uns auch nicht vergönnt, als Glieder des Weltentwicklungsprozesses die Ewigkeit an uns zu reissen.

So sind die materiellen Bedürfnisse des Tages mit den zeitlosen metaphysischen Idealen in innigste Verbindung gebracht. Das Denken durchläuft alle Tiefen und alle Höhen des Daseins. Fichte musste in seiner Philosophie der Kultur, nachdem er die letzten Ziele, die der Mensch sich stellen kann, bestimmt hatte, auch die Sorge für das tägliche Brot in den Kreis seiner Betrachtung ziehen, da für den Kulturmenschen nur im sinnlich gebundenen Dasein die unsichtbare Weltvernunft ihren sichtbaren Ausdruck findet. Fichte wollte als Politiker somit nichts geringeres, als Plato in seiner Politik gewollt hatte, und er wusste, dass er sich ein solches Ziel steckte, denn in einem Brief an Kant knüpfte er schon 1793 seine philosophischen Pläne an eine Stelle der Kritik der reinen Vernunft an, die auf die platonische Republik als auf ein bisher unerfüllt gebliebenes wissenschaftliches Ideal hinwies.

Endlich sei noch ein Punkt erwähnt, in dem die Verbindung von Fichtes Sozialismus mit seinem ethischen Individualismus gewissermassen von der entgegengesetzten Seite als bisher deutlich wird. Die Sicherung der Arbeitsmöglichkeit und des Eigentums im Staate musste, wie man leicht versteht, zu weitgehender Regelung auch des privaten Lebens führen, und darin lag die Gefahr einer Beschränkung der individuellen Willensentscheidungen. Als ethischer Individualist konnte Fichte dafür trotz aller Gewaltsamkeit seiner praktischen Vorschläge nicht blind sein. Er zeigt sich daher bemüht, mit Rücksicht hierauf dem Sozialismus auch Grenzen zu ziehen. Von einer Abschaffung des Privateigentums (mit Ausnahme des Grundeigentums) oder von einer Beseitigung der Familie wollte er nichts wissen, und auch sonst war er darauf bedacht, den Individuen innerhalb des Sozialstaates eine Sphäre der möglichst unbeschränkten individuellen Bestätigung zu sichern. Im geschlossenen Handelsstaat ist davon freilich wenig zu merken, aber im Naturrecht zeigt es sich um so deutlicher. Hier findet Fichtes Sozialis-

gebildet ist. Er soll nicht gerade mit seinem Lasttier essen; sondern seine Speise soll von desselben Futter, seine Wohnung von desselben Stalle sich ebenso unterscheiden, wie sein Körperbau von jenes Körperbau unterschieden ist. Dies ist sein Recht darum, weil er nun einmal ein Mensch ist."

Die Sätze sind in mehrfacher Hinsicht für uns beachtenswert. Einmal zeigen sie wieder den engen Zusammenhang von sinnlichem Dasein und sittlichem Wert des Menschen, der in Fichtes Begriff der Kultur zum Ausdruck kommt. Sie wären ferner nicht verständlich, wenn Fichtes Sozialpolitik nicht völlig auf seinen ethisch individualistischen Grundsätzen beruhte, denn wie wollte man aus rein wirtschaftlichen Begriffen die Forderung ableiten, dass die Arbeit „menschenwürdig" sei? Und endlich kommt hier ans Licht, wie prinzipiell sich Fichtes Sozialismus auch von den mit seiner Revolutionsschrift ungefähr gleichzeitig hervorgetretenen kommunistischen Tendenzen in Frankreich unterscheidet. Das sei noch besonders hervorgehoben, weil es den idealistischen Charakter der Politik Fichtes hell beleuchtet.

Will man bei dem französischen Kommunismus überhaupt von einer philosophischen Grundlage reden, so muss man sie eudämonistisch oder utilitarisch nennen. Im Interesse des Glücks oder des Nutzens wird hier die neue Verteilung des Eigentums verlangt. Davon ist bei Fichte nie die Rede. Ohne seinen autonomen Individualismus wäre er zu keiner sozialistischen Forderung gekommen. Mag er sich daher auch im Resultat hie und da mit dem Kommunismus berühren, so bleiben die Grundsätze, aus denen seine Ergebnisse stammen, prinzipiell andere, und das ist in unserem Zusammenhange vor allem wichtig. Nicht auf das subjektive Befinden des Sinnenwesens, sondern auf die sinnlichen Bedingungen, unter denen der Mensch seine übersinnliche Bestimmung im Weltganzen erfüllt, kommt es Fichte bei seinem Sozialismus an, und auch dieser Gedanke ordnet sich restlos in sein System ein: können wir nämlich nicht als Sinnenwesen von unserer Arbeit leben und

vertrat, tat er nichts anderes, als dass er rücksichtslos die Konsequenz zog, die sich aus seinen ethisch individualistischen Forderungen im Zusammenhange mit seinem Kulturbegriff ergab. Zur Realisierung des von ihm erstrebten Kulturfortschrittes reichte der Rechtsstaat nicht aus. Deshalb war er notwendig zum Sozialstaat umzubilden. So kann man geradezu sagen: weil Fichte durch den wirtschaftlichen Individualismus seinen ethischen Individualismus und sein geschichtlich individualistisches Kulturideal bedroht sah, ist er zum wirtschaftlichen Sozialisten geworden. Insofern besteht zwischen seinem Sozialismus und seinem Individualismus nicht nur kein Widerspruch, sondern beide hängen im Ganzen des Systems notwendig mit einander zusammen und haben sich daher denn auch um so enger mit einander verknüpft, je konsequenter Fichte seine Philosophie durchdachte.

Damit ist die Frage, von der wir ausgegangen sind, im Prinzip entschieden, und nur Weniges sei jetzt noch zur Bestätigung und Verdeutlichung hinzugefügt. Vor allem ist zu zeigen, wie auch in Einzelausführungen der dargelegte Zusammenhang der philosophischen Gedanken mit der wirtschaftlich sozialistischen Politik bei Fichte zu Tage tritt.

Wir verstehen es als durchaus konsequent, wenn der ethische Individualist als Politiker nicht allein das Minimum dessen verlangte, was zur sinnlichen Existenz des Individuums notwendig war, sondern wenn er das Wirtschaftsleben durch den Staat so geregelt wissen wollte, dass die sinnliche Existenz jedes Menschen sich in Wahrheit „recht menschlich", d. h. sittlich frei gestalten konnte. „Der Mensch soll arbeiten; sagt Fichte im geschlossenen Handelsstaat mit oft zitierten Worten, aber nicht wie ein Lasttier, das unter seiner Bürde in den Schlaf sinkt und nach der notdürftigsten Erholung der erschöpften Kräfte zum Tragen derselben Bürde wieder aufgestört wird. Er soll angstlos mit Lust und mit Freudigkeit arbeiten und Zeit übrig behalten, seinen Geist und seine Augen zum Himmel zu erheben, zu dessen Anblick er

einstimmung mit dem zustande käme, was dem Individualisten als Ideal freier Betätigung vorschwebt. Das hat Fichte als Erster gesehen. Sein anfängliches Bekenntnis zur individualistischen Wirtschaftsdoktrin, das in einigen Sätzen der Revolutionsschrift noch hervortritt, war schon aus diesem Grunde eine Inkonsequenz, die er beseitigen musste, je entschiedener und vollständiger seine Gedanken sich ausbildeten. Er konnte der kausal bestimmten Natur keinen wesentlichen Bestandteil des Kulturlebens überlassen, und er konnte daher auch nicht wirtschaftlicher Individualist bleiben, sobald das Wirtschaftsleben durch den Begriff des Eigentums für ihn zu einem eminent wesentlichen Bestandteil der Kultur geworden war. Schon die Freiheit der ontologischen Selbständigkeit, wie er sie verstand, fiel mit der Freiheit, für welche die liberale Wirtschaftsdoktrin eintrat, in keiner Weise zusammen. Vielmehr musste die sogenannte Freiheit des wirtschaftlichen Individualismus dazu führen, das Individuum dadurch unfrei zu machen, dass man es dem natürlichen Kausalverlauf des ökonomischen Lebens überantwortete. Diese Konsequenz ergab sich schon aus dem ontologischen Individualismus der negativen Freiheit von der Ursache. Im natürlichen Spiel der ökonomischen Interessen war das Individuum in keiner Weise frei.

Dass auch der positiv ethische oder autonome und nicht minder endlich der geschichtliche Individualismus Fichtes zum wirtschaftlichen Sozialismus führen musste, liegt jetzt ebenfalls auf der Hand. Wer das sittliche Individuum auch als individuelles Glied im Zusammenhange der Kulturarbeit frei erhalten will, muss dem Staat als der Form der menschlichen Gemeinschaft die Aufgabe zuweisen, das Wirtschaftsleben so zu organisieren, dass jedes Individuum, welches nach eigenem Gewissen sich zur Mitwirkung an der Kultur des Menschengeschlechtes autonom bestimmen will, als sinnliches Individuum frei der Ausbildung seiner Individualität und der Erfüllung seiner individuellen Bestimmung leben kann. Indem Fichte daher eine sozialistische Wirtschaftsdoktrin

Glauben an eine von selbst zur individuellen sittlichen Freiheit führende natürliche Harmonie der wirtschaftlich individuellen Interessen gründlich verloren hatte. Jetzt weiss Fichte: überlässt man das Wirtschaftsleben sich selbst, so entsteht ein endloser Krieg Aller gegen Alle im handelnden Publikum, als Krieg zwischen Käufern und Verkäufern, und zwar muss er um so heftiger, ungerechter und in seinen Folgen gefährlicher werden, je mehr die Welt sich bevölkert. Was bei der einfachen Lebensweise der Naturen ohne grosse Bedrückung abging, verwandelt sich nach erhöhten Bedürfnissen in das schreiendste Unrecht und in eine Quelle grossen Elends. Der Arbeiter verarmt und fleissige Familien verkommen in Mangel oder wandern aus von einem ungerechten Volk. Kurz, so fasst Fichte seine Gedanken zusammen, keinem ist für die Fortdauer seines Zustandes bei der Fortdauer seiner Arbeit im mindesten die Gewähr geleistet, denn die Menschen wollen durchaus frei sein, sich gegenseitig zu Grunde zu richten.

Wir sehen: jetzt trennt Fichte wirtschaftliche und sittliche Freiheit scharf von einander, und entschiedener, als es hier geschieht, konnte er den wirtschaftlichen Individualismus nicht ablehnen. Es kommt nun für uns darauf allein noch an, dass wir ausdrücklich darlegen, weshalb Fichtes wirtschaftlicher Sozialismus mit individualistischen Tendenzen nicht nur im Allgemeinen vereinbar ist, sondern notwendig mit den Grundprinzipien grade dessen zusammenhängt, was wir als Fichtes philosophischen Individualismus im Besonderen charakterisiert haben. Zu diesem Zwecke betrachten wir wieder die verschiedenen Seiten dieses Individualismus gesondert. Im Grunde ist alles einfach.

Schon der ontologische Gedanke, der das Individuum vom Zwange des Kausalzusammenhanges befreit und so die Persönlichkeit in einen Gegensatz zu ihrem bloss natürlichen Sein bringt, schliesst es aus, dass den sinnlichen Antrieben des wirtschaftlichen Lebens die Regelung der Arbeitsverhältnisse und des Eigentums der Personen überlassen bleibt. Es wäre nur der sonderbarste Zufall, wenn auf diesem Wege eine Über-

Der Durchbruch des Sozialismus.

Im Naturrecht von 1796 ist unzweideutig erkannt, dass der sittlich vernünftige Staat sich auf juristische Aufgaben nicht beschränken darf, sondern auch das wirtschaftliche Leben zu regeln hat. Wird lediglich das bereits vorhandene Eigentum geschützt, so entstehen dabei Verhältnisse, die einen Teil der Menschen alles Eigentums und damit jeder Möglichkeit einer freien Arbeit an einem Stoffe berauben, sie also unfähig machen, ihre sittlich vernünftige Bestimmung im Weltprozess zu erfüllen. Das muss unter allen Umständen verhindert werden, und damit ist die sozialistische Forderung begründet. Die Konsequenzen des Eigentumsbegriffs, den schon die Revolutionsschrift hatte, werden jetzt voll entwickelt. Zur Verwirklichung des Ideals jeder vernünftigen Staatsverfassung, dass Jedermann von seiner Arbeit soll leben können, genügt der Rechtsstaat in keiner Weise. Dazu bedarf es einer weitgehenden staatlichen Organisation der Arbeit, die das herbeiführt, was von selbst nie kommen wird. Der Rechtsstaat ist also zum Sozialstaat umzubilden. In diesen Gedanken haben wir das entscheidende Prinzip des wirtschaftlichen Sozialismus, wie das Naturrecht ihn lehrt, und von hier aus wird alles Andere klar.

Die Schrift über den geschlossenen Handelsstaat führte dann das weiter aus, wozu das Naturrecht den Grund gelegt hatte, und wir finden dementsprechend in ihr die entschiedendste Ablehnung des wirtschaftlichen Individualismus. Ausdrücklich heisst es dort, der Staat sei bis jetzt nur einseitig und halb aufgefasst als Anstalt, den Bürger in dem Besitzstande, in welchem man ihn findet, durch das Gesetz zu *erhalten*. Die tiefer liegende Pflicht des Staates, jeden in den ihm zukommenden Besitz erst *einzusetzen*, habe man übersehen. Die Erfüllung dieser Pflicht aber sei nicht anders als dadurch möglich, dass die Anarchie des Handels ebenso aufgehoben wird, wie man die politische Anarchie allmählich aufhebt. So konnte nur ein Mann sprechen, der jeden

Rechtsschutz für erreichbar hielt. Wie war das möglich? Es sieht fast so aus, als habe sich Fichte hier noch von der Vieldeutigkeit des Wortes Freiheit täuschen lassen. Er wollte den Bauer „befreien", um ihn dann dem „freien Spiel" der natürlichen wirtschaftlichen Kräfte zu überlassen. Konnte der Jünger des transzendentalen Idealismus und der Lehre von der sittlichen Autonomie, nachdem er einmal seinen Begriff des Eigentums gefunden hatte, auf die Dauer glauben, dass die juristische Freiheit der rein natürlichen Individuen mit der Autonomie der sittlichen Individuen zusammenfalle? Bei der weiteren Entwicklung seiner Gedanken über die wirtschaftliche Kultur ist Fichte zu einem anderen Ergebnis gekommen, und das zeigt. die erste politische Schrift bedeutet eine Uebergangserscheinung, die eine unklare Mittelstellung zwischen wirtschaftlichem Individualismus und wirtschaftlichem Sozialismus zum Ausdruck bringt. Denkt man an den Eigentumsbegriff des Rechtes auf Arbeit, so muss man sagen, dass Fichte seinen eignen Sozialismus damals noch nicht verstand.

Für unser Problem ist jedoch grade dieser Umstand von Interesse. Er zeigt nämlich von Neuem, wie wenig die Begriffe, die Fichte zum Sozialismus führten, vor allem sein Begriff des Eigentums, in dem Sinne „politisch" waren, dass er sie aus einer Betrachtung des faktisch vorhandenen Wirtschaftslebens seiner Zeit abgeleitet hatte. Sie stammten vielmehr aus seinen philosophischen Prinzipien, und deshalb ist erst durch ihre allmählich fortschreitende, immer konsequentere Ausgestaltung die sozialistische Tendenz, die von vornherein in ihnen steckte, für Fichte selbst deutlich zu Tage getreten. Um einen vollen Einblick in den begrifflichen Zusammenhang zu gewinnen, der zwischen Fichtes Sozialpolitik und seiner ethisch individualistisch gerichteten Philosophie besteht, brauchen wir daher seine Gedanken nur noch den einen Schritt weiter zu verfolgen, der den Denker dazu führte, sich der Konsequenzen seiner eigenen Begriffe ganz bewusst zu werden.

Individuen zu Grunde liegt, an die Fichte ernsthaft nicht mehr glauben konnte, nachdem er die sinnliche Natur von der sittlichen Freiheit geschieden und beide erst auf seine Weise in der Kultur wieder mit einander verbunden hatte. Trotzdem gibt er 1793 Stellen, die mit den Lehren der Physiokraten übereinstimmen. Auf sie haben wir zu achten.

So setzt Fichte z. B. auseinander, dass der Landeigentümer unablässig die Dinge verteuert, die wir haben müssen, und dass eben dadurch die Ländereien selbst unablässig im Werte gegen das bare Geld steigen. Der Landbauer dagegen ist noch immer entweder ein Stück des Grundeigentums oder tut Frohndienste unentgeltlich oder um unverhältnismässig geringen Lohn. Er hat nichts und wird nie etwas haben als den kümmerlichen Lebensunterhalt auf den heutigen Tag. Der Gutsbesitzer brauchte deshalb nur seinen Luxus einzuschränken, um zum ausschliessenden Besitzer aller Reichtümer der Nation zu werden. Das ist für Fichte selbstverständlich ein Übelstand, der beseitigt werden muss. Aber das Mittel, welches er zu diesem Zweck angibt, ist garnicht im Sinne eines wirtschaftlichen Sozialismus gedacht. Fichte beschränkt sich vielmehr auf die Forderung: „gebt den Handel mit dem natürlichen Erbteil des Menschen, mit seinen Kräften, frei.“ Er verlangt also lediglich eine Beseitigung gewisser Vorrechte, eine juristische Bauernbefreiung. Daraus soll Alles sich ergeben, was not tut: „Ihr werdet das merkwürdige Schauspiel erblicken, dass der Ertrag des Grundeigentums und alles Eigentums in umgekehrtem Verhältnis mit der Grösse desselben stehe, der Boden wird, ohne gewalttätige Ackergesetze, die allemal ungerecht sind, von selbst allmählich sich unter mehrere verteilen, und Euer Problem wird gelöst sein.“

Solche Sätze zeigen, dass Fichte in der Revolutionsschrift zwar schon die Ziele des Sozialismus verfolgte, indem er das Recht des Menschen, von seiner Arbeit leben zu können, zum Ideal machte, die Verwirklichung seiner Ziele aber wenigstens zum Teile durch blossen

mögen, und es ist überhaupt hier nicht von einer Anwendung im Leben die Rede". Solche Gedanken können auf eine Sozialpolitik, die es mit der Gegenwart zu tun hat, ebenso wenig einen direkten Einfluss bekommen wie die vorher erwähnte Lehre, dass der letzte Zweck einer Gesellschaft die Gleichheit aller ihrer Mitglieder, also die Vernichtung aller individuellen Verschiedenheiten sei. Die letzten Zwecke sind für die Frage, ob man sich mit dem Rechtsstaat begnügen dürfe odor ihn zum Sozialstaat umzubilden habe, schon deshalb bedeutungslos, weil nicht nur der Sozialstaat, sondern auch der Rechsstaat von Fichte zu den menschlichen Institutionen gezählt wird, die blosse Mittel sind, also auf ihre eigne Vernichtung ausgehen. Fichte hat denn auch an der Ueberzeugung vom letzten Zweck der Regierung, alle Regierung überflüssig zu machen, festgehalten, als er längst zum bewussten Sozialisten geworden war. Er konnte das, da bei seinem Sozialismus ihm allein in Frage stand, ob der zeitlich bedingte, vorläufige Staat sich auf den Rechtsschutz zu beschränken habe oder auch in das Wirtschaftsleben eingreifen solle. Darüber wollen die angeführten Sätze aus den Vorlesungen über die Bestimmung des Gelehrten oder ähnliche Äusserungen Fichtes nichts aussagen, und deshalb ist in unserm Zusammenhang von ihnen ebenso abzusehen wie von der geforderten Gleichheit aller Menschen. Sie wurden nur erwähnt um zu zeigen, wo man Fichtes anfänglichen wirtschaftlichen Individualismus nicht zu suchen hat

Anders steht es mit einigen Sätzen aus der Revolutionsschrift. Sie bringen deutlich zum Ausdruck, dass Fichte im Jahre 1793 über die Konsequenzen seiner eignen Gedanken noch keine volle Klarheit besass. Es fehlt hier nicht nur an Polemik gegen die wirtschaftlich individualistische Doktrin der sogenannten klassischen Nationalökonomie, sondern Fichte will wie diese das Wirtschaftsleben in wesentlichen Teilen sich selbst überlassen. Das ist auffallend, weil den „liberalen" Gedanken eine Ansicht von der „natürlichen Harmonie" der wirtschaftlichen Interessen aller

Der Uebergang zum Sozialismus.

Zum vollen Durchbruch ist das sozialistische Prinzip bei Fichte erst im Naturrecht von 1796 gelangt, und die Gedanken dieses Werkes sind daher vor allem bei der Lösung unseres Problems massgebend. Doch empfiehlt es sich, die früheren Schriften, in denen vom Staate die Rede ist, mit zu berücksichtigen. Grade die Bestandteile in ihnen, die mit der individualistischen Wirtschaftsdoktrin noch verträglich sind, oder in denen das Eingreifen des Staates in das Wirtschaftsleben ausdrücklich abgelehnt zu werden scheint, werden für uns lehrreich, da sie durch den Kontrast das Prinzip der späteren, konsequent sozialistischen Werke um so deutlicher zu Tage treten lassen.

Nicht immer war Fichte Sozialist, und zwar auch dann noch nicht, als er den Begriff des Eigentums schon hatte, der ihn notwendig zum Sozialismus führte. Doch müssen wir genau feststellen, in welchen Sätzen sich bei ihm wirklich wirtschaftlicher Individualismus findet. Nicht alles nämlich, was politisch individualistisch klingt, lässt sich für unsern Zusammenhang verwerten. Wir suchen daher zuerst, das Prinzip solcher Äusserungen zu verstehen, die nur scheinbar eine antisozialistische Tendenz zeigen.

Stösst man z. B. in den mehrfach erwähnten Vorlesungen über die Bestimmung des Gelehrten auf die Worte: „es ist der Zweck aller Regierung, die Regierung überflüssig zu machen," so kann man meinen, dass eine solche Ansicht mit Sozialismus unvereinbar sei, und man hat das auch getan. Achtet man jedoch auf den Zusammenhang, so erkennt man, dass hier über die Alternative: Rechtsstaat oder Sozialstaat, noch nichts gesagt ist. Es gehen dem Satz die Worte voran: „der Staat geht ebenso wie alle menschlichen Institute, die blosse Mittel sind, auf seine eigne Vernichtung aus," und es folgen ihm die Worte: „jetzt ist der Zeitpunkt sicher noch nicht, und ich weiss nicht, wie viele Myriaden Jahre oder Myriaden von Myriaden Jahren bis dahin sein

um, das allein sich selbst will, würde es für den Fortschritt der Kultur nichts leisten. So zeigt sich schon hier der Individualismus Fichtes mit dem Gemeinschaftsgedanken sogar notwendig verknüpft, und es wird vollends deutlich, warum von einem Widerspruch zwischen Individualismus und wirtschaftlichem Sozialismus nicht die Rede sein darf. Der Mensch muss als Individuum individuell wirken, aber erst, wenn er sich mit seiner Individualität einem grösseren individuellen Ganzen einordnet, bekommt er als Individuum zugleich überindividuelle Bedeutung. Als blosses Individuum erfüllt er seine individuelle Bestimmung noch nicht.

Das kann genügen, um Fichtes Individualismus nach seinen verschiedenen Bestandteilen soweit zu klären, als es für ein Verständnis seines Verhältnisses zum wirtschaftlichen Sozialismus notwendig ist. Schon aus dem Zusammenhang, in dem Fichtes Gedanken mit Kants Freiheitslehre stehen, ergibt sich, auf welchem Wege wir jetzt nach Klarheit darüber zu suchen haben, was diesen Individualismus mit einer sozialistischen Tendenz nicht nur vereinbar macht, sondern sogar notwendig verbindet. Offenbar ist von den drei gesondert entwickelten Begriffen der des autonomen Individualismus für dies Problem der wichtigste. Der ontologische Individualismus geht ihm als conditio sine qua non voran, da der Mensch auch in seinem realen Sein frei sein muss, um sich selbst zu bestimmen. Der geschichtliche Individualismus ergibt sich als Folge bei der Anwendung des Ideals der Autonomie auf das sinnlich individuell gestaltete Kulturleben, innerhalb dessen wir frei tätig sind. In Wahrheit grundlegend für sozialpolitische Forderungen kann demnach nur die Freiheit des autonomen Individuums sein. Haben wir daher die Beziehungen verstanden, die zwischen dem Ideal der sittlichen Freiheit und dem ökonomischen Leben besteht, wie Fichtes Begriff des Eigentums sie hergestellt hat, so muss daraus zugleich Klarheit auch über die notwendige Verbindung des ethischen Individualismus mit dem wirtschaftlichen Sozialismus entstehen.

seine Vorgänger aufgehört haben, und er findet gerade darin den erhabensten Gedanken unter allen: „ich werde, wenn ich jene erhabene Aufgabe übernehme, nie vollendet haben; ich kann also, so gewiss die Übernehmung derselben meine Bestimmung ist, ich kann nie aufhören zu wirken und mithin nie aufhören zu sein. Das, was man Tod nennt, kann mein Werk nicht abbrechen; denn mein Werk soll vollendet werden, und es kann in keiner Zeit vollendet werden, mithin ist meinem Dasein keine Zeit bestimmt, und ich bin ewig. Ich habe zugleich mit der Uebernehmung jener grossen Aufgabe die Ewigkeit an mich gerissen." Dieser Gedanke würde jeden Sinn verlieren, falls das Ich, das ewig werden soll, auf Erden nicht durch seine Individualität wirkte und so seine individuelle Bestimmung erfüllte. Es muss demnach, können wir folgern, im geschichtlichen Werdegange der Menschheit nicht nur verschiedene Stände geben, sondern innerhalb der Stände muss jeder Einzelne eine verschiedene Aufgabe haben und insofern an der Ausbildung seiner individuellen Verschiedenheit von allen anderen Gliedern seines Standes arbeiten. Damit kommen wir dann zur dritten Art des Individualismus, durch welche die ontologische Selbständigkeit des Individuums und die sittliche Freiheit der autonomen Bestimmung durch das individuelle Gewissen für die Kulturarbeit des Menschen erst ihre Erfüllung findet.

Zugleich ist jedoch klar, dass auch dieser Individualismus des geschichtlichen Denkens, obwohl durch ihn die sinnliche Individualität eine grössere Bedeutung erhält als durch den ontologischen und den autonomen Individualismus, weit davon entfernt ist, das sinnliche Individuum zu verabsolutieren und dadurch in einen Gegensatz zu sozialistischen Bestrebungen zu geraten. Ja grade weil hier das sinnliche Individuum wichtig wird, treten die Beziehungen zum Gemeinschaftsgedanken, die Fichtes Individualismus hat, deutlicher als bisher zu Tage. Das Individuum wäre geschichtlich völlig bedeutungslos, wenn es nicht als Glied in einer Gesellschaft wirken könnte. Als vereinzeltes Individu-

Gleichheit aller ihrer Mitglieder sein soll, so ist er sich doch zugleich darüber klar, dass es in der Gegenwart eine solche Gleichheit nicht gibt, und dass der Mensch daher genötigt ist, „irgend ein besonderes Fach zu ergreifen, dessen vorläufige völlige Erschöpfung ihm etwa am nächsten liegt." Von hier aus musste der Weg zu einer positiven Würdigung der individuellen Eigentümlichkeiten für jeden geschichtlichen Fortschritt des Kulturlebens führen. Ja, schon 1794 ist für Fichte jeder „ein notwendiges Glied der grossen Kette, die von der Entwicklung des ersten Menschen zum vollen Bewusstsein seiner Existenz bis in die Ewigkeit hinaus geht." Jeder darf sich sagen: alles was jemals gross und weise und edel unter den Menschen war, diejenigen Wohltäter des Menschengeschlechts, deren Namen ich in der Weltgeschichte aufgezeichnet lese, sie alle haben für mich gearbeitet; ich bin in ihrer Ernte gekommen; ich betrete auf der Erde, die sie bewohnten, ihre Segen verbreitenden Fussstapfen. Ich kann da fortbauen, wo sie aufhören mussten, ich kann den herrlichen Tempel, den sie unvollendet lassen mussten, seiner Vollendung näher bringen.

Wie haben wir das zu verstehen, wenn wir dabei an unsere Individualität denken? Fichte sagt es nicht ausdrücklich, aber es folgt mit Notwendigkeit aus seinem Begriff der Kultur: die Aufgabe, die der Mensch sich stellen muss, kann er nur durch Ausbildung auch seiner sinnlichen Individualität in Angriff nehmen. Er hat im Entwicklungsgange der Menschheit das zu tun, was als besonderes Glied im Ganzen er besser zu tun vermag als andere, die anders sind als er. Ohne ein individuelles Glied zu sein, wäre er kein notwendiges Glied der grossen Kette. So weit er seinen Mitmenschen gleicht, könnte er durch jeden beliebigen von ihnen ersetzt werden und bliebe daher zufällig.

Vollends steckt dieser geschichtliche Individualismus in dem Schlussgedanken der Vorlesung über die Verschiedenheit der Stände in der Gesellschaft. Fichte macht sich dort den Einwand, dass jeder einzelne Mensch bei der Arbeit an der Kultur einmal aufhören müsse, wie

seiner sinnlichen Individualität wichtig. Alle Menschen sind unter sich individuell verschieden, und im Zusammenhang der Kultur, in welcher das Individuum wirken will, vermag es mit Erfolg erst dann tätig zu sein, wenn es darin eine durch seine Individualität bedingte, d. h. eigenartige oder besondere Bestimmung erfüllt. So kommt man zu einem noch ganz anderen Individualismus, als er im ontologischen und autonomen Individualismus vorliegt.

Das wird besonders klar, wenn man daran denkt, dass der geschichtliche Werdegang des Menschengeschlechts einen einmaligen, zeitlichen Verlauf darstellt, der aus einer unbekannten Vergangenheit her einer unbekannten Zukunft entgegenstrebt, und dem in der Gegenwart jeder Mensch an seiner besonderen einmaligen Stelle sich als Glied einzuordnen hat, falls er am Fortschritt der Menschheit mitwirken will. Verfolgt man das Konsequent weiter, so gelangt man dazu, die Bedeutung des Individuums für die geschichtliche Entwicklung zu verstehen. Bei Fichte ist volle Klarheit über diesen Punkt freilich nicht immer und besonders nicht von vornherein zu finden. Erst allmählich hat er den Sinn der historischen Besonderheit und Individualität des Lebens in ihrer Unersetzlichkeit und damit die Bedeutung der individuellen Eigentümlichkeit auch des sinnlichen Daseins der Menschen in der Zeit zu würdigen vermocht. Am weitesten ist er in dieser Hinsicht wohl in seinen Reden an die deutsche Nation gekommen, obwohl sogar sie noch manchen Zug aufweisen, der einem geschichtlich durchgebildeten Bewusstsein als unhistorisch erscheinen wird. Zur vollen Konsequenz hat sich das geschichtliche Denken bei Fichte niemals entwickelt. Andererseits jedoch finden sich bei ihm Ansätze zu einer Würdigung der individuellen Verschiedenheiten der Menschen im Sinnenleben schon früh, und darauf haben wir zu achten, um seinen Individualismus zu bestimmen.

So handelt z. B. die dritte Vorlesung über die Bestimmung des Gelehrten von der Verschiedenheit der Stände in der Gesellschaft. Wenn auch der letzte Zweck aller Gesellschaft für Fichte die völlige

Individualität unvereinbar ist, hat Fichte stets aufs schärfste hervorgehoben. Schon 1794 erklärte er, dass, solage wir nicht die Freiheit der Anderen respektieren, wir selbst noch nicht zum Gefühl unserer Freiheit und Selbsttätigkeit gereift sind. Diese Unreife bedeutete für ihn Sklavenmoral: „Wir sind Sklaven und wollen Sklaven halten. Jeder, der sich für einen Herren Anderer hält, ist selbst ein Sklav." Seine „Herrenmoral" lautete: „Nur derjenige ist frei, der alles um sich herum frei machen will."

So hebt Fichtes autonomer Individualismus sich deutlich von den Ansichten ab, die das sinnliche Individuum absolut setzen und deshalb jede Art von Sozialismus bekämpfen, wie die Herrenmoral es konsequenterweise tut. Schon hier zeigt sich: der Individualismus der Autonomie fordert bei Fichte eine sittliche Gemeinschaft.

Doch auch die zweite Bestimmung des Individualismus genügt noch nicht, um in jeder Hinsicht erkennen zu lassen, wie weit Fichtes Denken individualistisch genannt werden kann. Die sittliche Freiheit steht abstrakt formuliert im Gegensatz zur Sinnlichkeit, und soweit das Individuelle auf dem Sinnlichen beruht, erhebt die Autonomie daher den Menschen über seine individuelle Existenz. Daher konnte das sinnliche Individuum, solange es für sich genommen wurde, weder im negativen noch im positiven Sinne frei heissen. Bei einer solchen Trennung des sittlichen und des sinnlichen Individuums konnte Fichte jedoch nicht stehen bleiben. Das folgt aus seinem in der Revolutionsschrift entwickelten Begriff der Kultur. Wir haben es als Kulturmenschen in Staat und Gesellschaft mit einer Kultur der Sinnlichkeit zu tun. Es gilt jetzt, zu zeigen, wie von hier aus Fichtes Denken eine individualistische Tendenz von der Art annehmen musste, dass sie auch dem sinnlichen Individuum entscheidende Bedeutung beilegte.

Das Prinzip ist, sobald man Fichtes Kulturbegriff verstanden hat, einfach. Da die Sinnlichkeit nicht nur unterjocht, sondern zugleich ein geschickter und tauglicher Diener werden soll, wird jeder grade mit

ellen Willen nicht von aussen her durch Andere bestimmen lässt, sondern sich selbst das Gesetz gibt, oder sich ausschliesslich von der Stimme seines eigenen Gewissens leiten lässt. Wer gegen die Heteronomie zu Gunsten der Autonomie eintritt, verlegt damit also den Schwerpunkt auf das Individuum und ist insofern wieder als Individualist zu bezeichnen. Im Unterschiede von dem ontologischen Individualismus können wir die Lehre, dass im individuellen Gewissen der freien Persönlichkeit das letzte sittliche Kriterium ruht, kurz den autonomen Individualismus nennen.

Doch auch er ist bei Fichte nicht von der Art, dass er das Individuum mit dem sinnlichen Individuum gleichsetzt. Er darf daher nicht mit einer Ansicht verwechselt werden, die in unseren Zeiten Vielen nahe liegt, wenn sie von ethischem Individualismus hören, und die deshalb für uns wichtig wird, weil sie jedem Sozialismus feindlich gesinnt sein muss. Schon oft hat man die Forderung gestellt, der Mensch solle seine Individualität ausbilden und sich dabei ausschliesslich um sich selbst, nicht aber um die Individualität seiner Mitmenschen kümmern. Das führt dann zum Ideal des „Sichauslebens“ oder zur Herrenmoral, die den Sozialismus als Sklavenmoral bekämpft.

Dem Individualismus des Übermenschentums ist Fichtes autonomer Individualismus schroff entgegen zu setzen, denn im individuellen Gewissen, das den Willen bestimmt, kommt stets ein Moment zum Ausdruck, welches das Individuum zugleich bindet und ihm besonders jedes rücksichtslose Sichausleben seiner sinnlichen Individualität verwehrt. Gewiss gibt der autonome Mensch sich selbst sein individuelles Gesetz, d. h. er ist sittlich erst dann, wenn er aus individuellem Entschluss heraus nur die Stimme seines eignen Gewissens anerkennt. Aber ebenso gewiss gibt er sich damit ein Gesetz, das mehr ist als nur er selbst, ja er ordnet damit seine sinnliche Individualität dem Gesetze unter. Nicht Selbstherrlichkeit, sondern Selbstbeherrschung verlangt der autonome Individualismus, und dass damit jede Verachtung der fremden

Entwicklung ein, dass er ihn vom Determinismus loslöste. Der Mensch braucht nicht zu fürchten, von der ihn umgebenden Natur in jeder Hinsicht beherrscht und so als Individuum nichtig zu werden. Er besitzt vielmehr gegenüber dem allgemeinen Kausalzusammenhang der Objekte unbezweifelbare Selbstständigkeit als Subjekt oder als Ich. Schon dieser Subjektivismus gibt der Philosophie einen individualistischen Zug. Freilich führt er für sich allein zu einem Individualismus von besonderer und, wenn man will, eingeschränkter Art, denn frei vom Zwange der Natur ist nicht das sinnliche Individuum, sondern das „reine" Ich, und man kann fragen: was bleibt an dem Individuum noch individuell, wenn man von allem absieht, wodurch der Mensch zu einem Gliede der Sinnenwelt wird? Darin steckt gewiss ein schwieriges Problem, das hier jedoch nicht weiter zu erörtern ist. Denn wie man es auch lösen mag, die Freiheit muss, um Bedeutung für das Handeln in der Sinnenwelt zu erhalten, sich irgendwie auch im sinnlichen Individuum äussern, ja grade als individuelle Persönlichkeit darf der Mensch nicht restlos in der Natur aufgehen. Sonst hätte das Freisein vom Ursachenzwang für ihn als Person keinen Wert.

Hieraus ergibt sich die erste Bedeutung, in der Fichtes Philosophie individualistisch zu nennen ist. Wir wollen von einem Individualismus des realen Seins der Subjekte oder von einem **ontologischen** Individualismus sprechen. Nach ihm ist der Mensch als Subjekt auch in seinem individuellen Sein irgendwie selbständig. Näher braucht auf diese Seite des Fichteschen Denkens nicht eingegangen zu werden, da für die Probleme des wirtschaftlichen Sozialismus die ontologische Selbständigkeit des Individuums für sich allein noch keine wesentliche Bedeutung besitzt.

Die Freiheit des individuellen Seins ist, wie wir schon sagten, negativ, insofern sie nichts anderes als Abwesenheit des kausalen Zwanges bedeutet. Positiv gestaltet sich der Freiheitsbegriff erst in der ethischen Sphäre, und auch in ihr kommt es auf die Freiheit des Individuums an. Denn sittlich frei ist der Mensch, der seinen individu-

istisch" zu nennen ist, und schon dann zu, aus welchen Gründen Fichte als philosophischer Individualist dazu kam, den wirtschaftlichen Individualismus zu bekämpfen und schliesslich weitgehende sozialistische Forderungen für die Organisation der Arbeit durch den Staat zu entwickeln. Von hier aus muss Licht auch auf das prinzipielle Verhältnis von politischem Sozialismus und philosophischer Theorie fallen.

Fichtes Individualismus.

Um festzustellen, welche individualistischen Züge das Denken Fichtes trägt, knüpfen wir am besten an seine Stellung zu Kant an. Dann wird sich zeigen: der Individualismus hängt eng mit Kants Begriff der Freiheit zusammen, und wie es bei Kant Freiheit in doppeltem Sinne gibt, nämlich negativ und positiv, so kann man im doppelten Sinne auch von Individualismus bei Fichte sprechen. Einmal ist der Mensch als Individuum negativ frei vom allgemeinen Zwange der Natur, und ausserdem besitzt er positiv eine individuelle Freiheit, indem er nur sich **selbst** zum Handeln bestimmt. Doch genügt diese Unterscheidung noch nicht, um alle Begriffe, die für unser Problem bedeutsam werden, zu überschauen. Es kommt bei Fichte noch eine dritte, ihm eigentümliche Tendenz hinzu, die mit seinem Begriff der Kultur verknüpft ist, und die man, insofern alle Kultur durch das geschichtliche Leben verwirklicht wird, um ein kurzes Schlagwort zu haben, auch als geschichtlichen Individualismus bezeichnen mag. Wir legen die drei Bedeutungen des Wortes Individualismus gesondert dar, bevor wir nach der Beziehung von Fichtes Individualismus zum wirtschaftlichen Sozialismus fragen. So wird klar werden, weshalb von einem Widerspruch zwischen Individualismus und Sozialismus bei Fichte nicht gesprochen werden darf. Daran hat sich dann später die Aufzeigung ihres notwendigen Zusammenhanges anzuschliessen.

Kant wirkte vor allem dadurch entscheidend auf Fichtes geistige

dividualist," und zwar in mehrfacher Beziehung. Zumal seine Sittenlehre wird man individualistisch nennen dürfen, da es ihr vor allem auf den Willen des Individuums ankommt. Muss darum dieser Philosoph aber in jeder Hinsicht ein Individualist gewesen sein? Was bedeutet der Unterschied von Individualismus und Sozialismus, wenn man dabei nur an die Ansichten über das ökonomische Leben denkt?

Individualistisch heisst dann die Doktrin, welche die Regelung der Wirtschaft lediglich den Antrieben der einzelnen Individuen anvertraut. Insbesondere der Staat soll nach ihr sich auf den Schutz des Rechtes beschränken und das Wirtschaftsgetriebe sich selbst überlassen, falls die Individuen das Recht nicht verletzen. So arbeitet die individualistische Wirtschaftspolitik mit dem Begriff des reinen Rechtsstaates. Mit ihm will sich dagegen der Sozialismus nicht begnügen. Er verlangt einen Staat, der auch das ökonomische Leben regelt und so zum Sozialstaat wird. Politische Organisation der Arbeit ist garadezu das, was man als die allgemeinste sozialisticche Forderung bezeichnen kann.

Beschränkt man in dieser Weise den Gegensatz von Individualismus und Sozialismus auf das wirtschaftliche Gebiet, dann ist nicht einzusehen, warum der ethische Individualist sich auch zum reinen Rechtsstaat bekennen und den Sozialstaat ablehnen muss. Dass hier kein notwendiger Zusammenhang vorliegt, leuchtet ein, auch ohne dass man eine genauere Bestimmung des wirtschaftlichen Sozialismus vornimmt. Jedenfalls steht nicht von vornherein fest, dass Fichte, indem er einen wirtschaftlichen Sozialismus vertrat, dadurch zu einem Konflikt mit seinen ethisch individualistischen Überzeugungen getrieben wurde.

Ja, wir müssen über die Trennung der beiden Arten von Individualismus hinaus einen Schritt weiter gehen und fragen: haben wir nicht vielleicht Fichtes wirtschaftlichen Sozialismus als notwendige Folge seines ethischen Individualismus zu verstehen? Es besteht hier in der Tat ein enger Zusammenhang. Um über ihn zur Klarheit zu kommen, zeigen wir zunächst, in welchem Sinne Fichtes Philosophie „individual-

Ethischer Individualismus und wirtschaftlicher Sozialismus in Fichtes Philosophie.

Für die Zeitschrift „Kaizo".

von Heinrich Rickert (Heidelberg).

Das Problem.

Es ist üblich, Individualismus und Sozialismus als zwei Weltanschauungen einander gegenüber zu stellen und dann anzunehmen, dass die eine mit der anderen unvereinbar sei. Solange man an einer solchen allgemeinen Formel festhält, wird das Denken Fichtes als in sich widerspruchsvoll erscheinen. Man zählt den Philosophen einerseits zu den Individualisten, und in gewisser Hinsicht ist das auch zutreffend. Andererseits jedoch gehört dieser Denker, wie allgemein und mit Recht angenommen wird, zu den ersten Sozialisten der Neuzeit, ja er hat in seinem Buch über den geschlossenen Handelsstaat einen ungewöhnlich weitgehenden Sozialismus vertreten. Wie ist die Vereinigung von Individualismus und Sozialismus bei Fichte zu verstehen? War seine Philosophie wirklich so inkonsequent, dass in ihr zwei sich im Prinzip ausschliessende Tendenzen nebeneinander Platz fanden? Das ist das Problem, vor das wir gestellt werden, sobald wir versuchen, über die philosophischen Grundlagen von Fichtes Politik zur Klarheit zu kommen.

Die Schwierigkeiten, die sich dabei ergeben, kann mann dadurch allein beseitigen, dass man die Begriffe des Sozialismus und des Individualismus bei Fichte genau bestimmt. Die üblichen Schlagworte sind sehr vieldeutig, und es ist mit ihnen daher noch wenig oder garnichts gesagt, wenn man sie ohne weitere Zusätze zur Kennzeichnung von philosophischen Richtungen verwendet. Gewiß war Fichte „In-

直輔の夢

里見弴作（忽十版）

谷崎氏の「愛すればこそ」と共に大正十一年度創作壇の二大收穫と稱せらるゝ「直輔の夢」は東京市の瀆職事件に連坐せる某重役と、肺に惱める一青年と同病に懊惱せる藝妓上りとの深刻な戀愛關係を描寫した纒綿たる情緒を一流の麗筆にて描き出したものだ、人生を呪ふもの、自分の運命を朝夕に相しながら愛慾を捨つる能はざる氣持は本書によりて著しく我々の心胸を撲つ、本書には大阪毎日にて好評嘖々たりし「甘酒」の大長篇をも收めた。

純藝術的の代表的小說

◇四六判上製◇
定價壹圓八十錢
◇送料十七錢◇

◇東京芝區愛宕下町◇
改造社
◇振替東京八四〇二◇

猶太人研究

猶太古典に表れたるユートピア

渡邊善太

一

ユートピアは、現在に對する不滿と、より良き將來に對する憧憬の感ぜられるところには、何處にでも育ちます。昔に「共和國」を産み出した希臘や、「神の都」を産み出した羅馬や、「新アトランテス」や、「ニユース・フラム・ノーホエヤー」を産み出した英國に於てのみではありません。ユートピヤ發生の此二條件を強く感じたといふ點に於ては、此處に述べやうとする猶太民族も、決して他の何れの民族にも劣るものではありませんでした。

世界中に知れわたつてゐる「エデンの園」の傳説が（創世記二章三章）、猶太民族の間にあるといふ事は、既に彼等が現在に對して不滿を感じ、より好き世界に憧れたといふ事の、好い證據であります。此傳説は、猶太古典中の創世記の材料として用ひられた「ヤーエ文書」と稱ばれる、紀元前第九世紀の中葉に記された一文献の中に保存されてゐるもので、古代の猶太民族――嚴重に云へばヒブル民族――の間に、痛切に感ぜられた人間苦の起源に對する説明として、徐々に成り立つたものであります。其中には、「出産の苦痛」と「勞働の苦惱」との人間苦の二方面は、エホバ神に對する人間の不從順から來たといふ事と（創世記三〇十六、十七）其刑罰を受くる以前には、人間はエデンの園と稱ふる綠地で、何の苦痛もない生活を營んで居たと述べられて居ります。今より三千年前に人間苦の此二大事實を説明せんと努めた此猶太民族とは、いつたい如何なる民族であつたでせうか。

ヒブル民族は、――猶太民族の古代の名――、セム人種の一支派でありました。彼等は其故地であるアラビヤの沙漠を、經濟的窮乏の爲に余儀なく棄てゝ、カナンの沃地（パレスチナ）に侵入してから（紀元前一二五〇年頃）、其南王國の首府エルサレムが滅びる迄は（紀元前五八六年）獨立した國家を有して居りましたが、それ以後はダビデの武威ソロモンの榮華は跡形もなくなつて、民族中の貴族階級及び知識階級は、自國を滅ぼしたネブカドネザル王の國、即ち新バビロンへ移されて虜囚の憂目を見、故地に遺つた下層民もバビロン軍の鐵蹄に踏み荒された田園を眺め乍ら、悲憤の涙にくれるといふ運命に陷りました。然も西部アジヤの權威者がバビロンのネブカドネザルから、波斯のサイラスに移り（紀元前五三八年）、再度希臘のアレキサンダーに移り（紀元前三三二年）アレキサンダーの死後其國が四分五裂し、途中樣々の變化を經て天下は遂に羅馬のものになつても、此憐れな猶太人には一日として浮き目はなかつたのであります。漸くにして政治的壓迫者の笞を逃れたかと思へば、何時か宗教的迫害者の手中に自己を見出し、漸くにして之を逃れたかと思へば、三度び身は經濟的收斂者の搾木の中に移つてゐた、といふ樣な狀態でありました。マカビヤ家の時代以後一時小康を得た樣でありましたが（紀元前二世紀）、それも束の間で遂に其都エルサレムは羅馬の爲に最後の打擊を加へられ（紀元七十年）、彼等は民族ゝ體として、國家無き流轉の民となり、現代に到つて居ります。現代に於てすらも反猶太精神（Anti-semitism）は益々盛になりこそすれ、衰へは致しません。露西亞、墺太利匈牙利等に於ける彼等の苦痛は周知の事であります。

斯くの如き民の間に「現在に對する呪詛の聲」の擧げられない筈はありません。「斯くていくその時を歷たまふや？」とは此呪ひの聲の表象的の語となつたのであります。バビロンの虜囚地に在つては彼等の中の詩人は

「我等バビロンの河の邊に坐り、シオンをおもひ出でて涙を流しぬ。我等其邊の柳に我琴を掛けたり。そは我等を虜にせしもの我等に歌を求めたり。我等を苦しむる者我等に己を歡ばせんとてシオンの歌一つ歌へと云へり。我等外邦にありて、いかでエホバの歌を歌はんや。エルサレムよ、若し我爾を忘れなば我右の手に其巧を忘れしめ給へ。」

（詩篇百卅七篇）

と歌ひました。又荒れ果てた故郷パレスチナに止つた詩人は

「あゝ哀しい哉、古昔は人のみちたりし此都邑、今は淒しき樣にて坐し、寡婦の如くになれり。嗟もろ〳〵の民の中にて大なりし者、もろ〳〵の州の中に女王たりし者、今は反つて貢をいるゝ者となりぬ……わが民の中なる尊き人は、從前には雪よりも皎潔に乳よりも白く珊瑚よ

りも橙紅色にして其形貌の美はしきこと藍玉の如くなりしが、今はその面くろきが上に黒く、街衢にあとも人に知られず、其皮は骨にひたと貼き乾きて枯木の如くなれり‥‥我民の女のほろぶる時には情愛深き婦女等さへも手づから己の子等を煮て食となせり」(エレミヤ哀歌一章一節及四章七——十節)

と歌ひました。或はマカビヤ時代にスリヤ王の信仰迫害の笞の下に悩んだ時は、

「我等は終日汝(神)の爲に死にわたされ、屠られんとする羊の如くせられたり。主よ醒め給へ。如何なれば眠り給ふや起き給へ。我等を永久に棄て給ふなかれ」(詩篇四十四篇廿二節以下)

と呻吟の聲を擧げました。斯くして此民の間には徐々に「よりよき社會」に對する憧れが生れてまゐりました。

是等の種々の時代の間に産み出されたユダヤ文學は、種々の編纂者の手を經た上聖經とせられ、今日迄「舊約書」として傳へられて居ります。

此ユダヤ文學の中には、よく研究してみると、明瞭な三つの思潮が流れて居る事が分ります。即ち預言的潮流、祭司的潮流及び賢人的潮流でありまして、各々際立つた特徴を持つて居ります。第一の預言的潮流は宗教の倫理的道德的方面を重んじ形式及び供物を輕んじ、第二の祭司的潮流は是と全く反對に供物及び形式を第一とし倫理的方面を第二と考へ、第三の賢人的潮流は思索的哲學的でありまして、第一は人の意志に訴へ、第二は情緒に訴へ、第三は智性に訴へるといふ傾向がありました。三者共一般の人々の間には非常に尊敬せられて居りまして「それ祭司には律法あり、賢人には謀畧あり、預言者には言ありて失せざるべし」(エレミヤ十八章十八節)と記されて居る位であります。

是等三種の思潮はヒブル王國が滅びて(紀元前五八六年)、民族が征服者の鞭の下に悩む樣になると共に、それ〲特徴ある文學を産み出しました。即ち祭司的潮流からは「祭司文學」が産れ、預言的潮流からは「默示文學」が産れ、賢人的潮流からは「智慧文學」が産み出されました。此三種の文學を見ると、其の何れにも共通して居るのは「現在に對する呪詛と、より良き世界に對する憧憬」とでありまして、此精神は遂に此三文學をして、それ〲強く特徴づけられたユートピアを作り出させるに至つたのであります。

二

保守的な祭司等の眼は、現在が呪はしくなればなる程、過去に向けられるのでありました。彼等にとつては、神の外知る事の出來ない未來を考へるのは、余りに僣越で、又余りに冒險な事でありました。玆に於てか彼等のユートピアは何時か過去の

世界にうちたてられる樣になりました。此過去に立てられたユートピアには、不思議に王といふものが取り除かれて、「人と神のみ」の世界が見出されます。是が爲に第一世紀の猶太の歷史家 Josephus（ヨセフス）は之を新しい語で 'Theokratia'（テオクラチア） (contra Apionem 2:17 ——神政國) と稱んで居ります。

祭司達が其ユートピアを「神政國」としたのは、彼等としては至極無理の無い事でありました。彼等は自國の過去を顧み、其盛衰の跡を辿ります時に、多くの王達の女色に溺れた事や、異教に心醉した事や、民を壓迫し殘虐であつた事などを見出しましたので、其故國の滅亡の原因の一つは民の背信であつた事は勿論ですが、然し其の大部分は指導者の地位にあつた是等王達の歷代の秕政の爲であると考へました 亡國の悲哀は轉じて、人間の政治に對する呪詛となつて現はれる樣になりました。斯うなると、過去に向けられた彼等の眼は、尙ほも尙ほも遡き過去に向けられて、ヒブル民族の間に未だ王政のあらざりし時に迄遡りまして、「其時に神と人との理想的社會が在つたらう」といふ氣持が出來、それが轉じて「……在つた筈だ」、再轉して「然り、事實在つたのだ」といふ風になりました。

彼等の氣持が一度此處に到りますと、其ユートピアを建設する材料は、斷片乍ら澤山ありました 紀元前九世紀中葉頃から傳へられた一斷片や(出埃及記十九章三——九節)、「契約の書」(同廿一章——廿三章十七節) と名付くるもの等は其主なるものでありました。材料が備へられ、憧憬が燃やされ、機が熟してバビロンの虜囚地にある祭司達は其過去的ユートピアの文學的描寫に着手致しました(紀元前五百年?)。斯くして作り上げられた此ユートピアの全景は、現今の舊約書中に傳へられたモーゼ五書の一部分中「祭司法典」に見出されます(出埃及記十二章——レビ記全體——此中には幾分の異分子も含まれて居るが大體をとる)。此過去に描かれた祭司的ユートピアは——神政國（テオクラチア）——ヒブル王政以前民族が埃及の壓迫からは脫れたが、未だカナンの沃野(パレスチナ)に入らない前、指導者モーセと共に彷徨ふて居たといふ、アラビヤの沙漠及び神の山シナイを**背景**として描かれて居ります。此ユートピアで先づ最初に目に付くのは、**基礎**であります。是は神のみの社會でもなく人のみの社會でもなく、「神と人との契約」を基礎として立つて居ります。

「然らば汝等若しよく我が言を聽き我契約を守らば、汝等は諸の民に愈さりて我寶となるべし」(出埃及記十九章五節)

といふ神の言に對して、民は

「エホバの言ひ給ひし處は皆我等之を爲すべし」(同八節)

と答へて居ります。即ち神から提出された條件を民が遵奉する

といふので、此國の基礎が出來たのであります。隨つて此基礎の上に立つ此理想國は、其國是の根本義も此基礎に順ずるものでなければなりません。

「汝等は我に對して祭司の國となり、聖き民となるべし」（同六節）

玆に此ユートピアの目的或は理想ともいふ可き大精神が現はれて居ります、「祭司」とは人を代表して神の前に立つものでありますから、「祭司の國」と云へば、世界の諸國民を代表して神の前に立つ可き國民といふ意味になります。即ち此理想國は祭司の役目を世界の諸國民に對して行ふといふので、異邦諸民族の罪も汚も過も凡て之を執成し、其れに對して神の前に全責任をもつといふ大理想であります。是は人を代表して神の前に立つといふのでありますが、他方には神を代表して人の前に立つと云ふ方面も言ひ表はされて居ります。即ち「聖き民」とは聖き神を諸國民の前に現はした言であります。「聖き」とはヒブル語では「分つ」或は「隔離する」と云ふ意味で、元來は宗教に於けるタブーを意味しましたが、此場合には自民族の爲にのみ費された凡ゆる力を、神の爲にのみ用ひるといふので、現代的に言へば此言の意味は、凡ての行爲に於ける動機の轉換とでも云ひませうか。即ち此理想國の目的には兩面あつて、一は諸國民を指導し之を代表し、他は其前に神を代表するといふのであります。

大基礎と大理想とが明かにせられました次には、愈々契約者なる神と人との會合の場所が此ユートピアの中心に出來なければなりません、而して「我イスラエルの人々の中に居りて、彼等の神とならん」（出埃及記廿九章四十五節）といふ契約完成の次に次の設備が爲されなければなりませんでした。

「彼等我爲に聖所を作るべし、我彼等の中に住まん」（同廿五章八節）

即ち理想國の中心として神が人の間に住む爲に其居所が作らるべきでありました。然し基礎が双方の合意的契約に由るのでありますから、契約者の一方なる神の命令のみで之を爲す事は出來ません。

「イスラエルの人々に告げて、我に献物を持ち來れと云へ。凡て其心に好んで出すものよりは、汝等我に献ぐる處のものを取るべし」（同二節）

即ち他方の自由意志で「其心に好んで」爲さるべきでありました。斯くして複雜な「幕屋」（Mishkan—Tabernacle）が民の間に神の爲に立てられました。

此神の居所としての幕屋又は聖所の中心は「神の櫃」——證の上に「贖罪所」を載せ中には律法の記された石板の納められて居る——櫃であります（同廿一節）。民は成程神より提出

された凡ての條件を果たすと約束してはみたものゝ、其處には之を守り得ない場合の一種の危惧がありました。律法の石板は神の條件又は要求の表象（シムボル）──モーゼガシナイ山で神から受けた物──でありますから、契約を基礎としてゐる此國の中心に置かれなければなりませんけれども、上述の危惧がある爲に、此石板を納めた此櫃の上に「贖罪所」が置かれました。「贖罪所」とはヒブル原語では普通「覆ふもの」と解釋せられ、民が此神の條件を少しでも果し得なかつた場合に、其失敗を「覆はれたい」といふ願の表象（シムボル）でありました。彼等は玆に人間の弱さを肯定して、萬一の場合に恩惠を求め得べき準備を表象したのであります。

神人間の契約が成就され、神が民の中に住む樣にはなりましたが、然しまだ其事に具體的交渉に當る可き双方の**代表者**が無ければなりませんでした。其處で

「民をして我汝と語るを聴かしめて汝を長く信ぜしめん」（同十九章九節）

とて、モーゼが神の代表者として選ばれました。王政に懲りた祭司達には、最早サウル王ダビデ王の如き、人に拔きんでた伎倆も、ソロモンの如き智慧も、アハブ王の如き外交的手腕も、神へ代表者たるべき資格とは思はれませんでした。ましてや「世襲的權利」等は、人をして其同胞の前に神の代表者たらしむべき資格とは考へられませんでした。彼等に考へ得られた其唯一の資格は「神と語つて」神の旨を知り得るといふ事のみでありました。之に對して、傳說に現はれた神の人モーゼは實に理想的の型でありました。

次には民全體を代表する者が見出されなければなりません。之に對しては、モーセの兄弟アロンが選まれ「神に對ひて祭司の職」を──民の代表者として──行ふ可きものとして選まれました。是が所謂祭司の長の職であります（同廿八章、廿九章）。此祭司長の服裝は全部表象的に出來て非常に復雜でありますが、特に其準備中の一點と服裝中の一點とに興味の感ぜられるものがあります。祭司長たる可きアロンは、先づ順序として、供物たる可く屠られた動物の血で、「右の耳の端、右の手の拇指、右の足の大指」を潔められるといふ事でありました。是は元來は前述のタブー的潔めを指したものですが、實に面白い表象的の言ひ表はしで、民を代表して神の前に立つ可き彼は、民の要求と愁訴とを聴き分く可き鋭敏な「耳」を持たなければなりません。又其凡ゆる行爲の表象なる「右の手」と其生活の歩みの表象たる「右の足」の潔めらる可きを言ひ表はしたものであります。又其服裝中の興味あるものは、十二箇の寶玉にイス

ラエル――ヒブル民族――十二族の名前を彫刻したものを、それ〲適當に仕立てゝ「肩と胸」の上に置くといふ事であります。是は言ふ迄もなく全民族に對する責任を負ひ、又全心情をもて神前に於て之に當る、と云ふ事を表はしたものであります(同廿九章廿節及廿八章十二節、廿九節)。で神を代表する預言者としてのモーゼ、民を代表する祭司としてのアロン――理想的代表者の型が出來ました。

偖て契約は完成し、それ〲の代表者が出來た上は、注意の上にも注意して神人の**交渉**の滑かなる樣に謀られなければなりません。其處で鐵と鐵との摩擦を滑かならしめる油の樣に、神人間の摩擦を滑ならしめる「五種の供物」が具へられました(レビ記一章七章)。即ち神人の關係を最もぎこちなくするものは、人の側に於ける「罪」即ち神を無視した態度でありますから、之に對して是等の供物が考へられたのであります。「罪祭(ざいさい)」は人の宗教的罪惡の爲、「愆祭(けんさい)」は社會的罪惡の爲、「燔祭(はんさい)」は個人の生活の凡ゆる動機を全く神の爲めにするといふ表象となつて居る――如きものでありました。

此理想國の宗教的及び精神的方面は以上に述べ來つた如くでありますが、次には此國の支へらるべき實際の生活方法即ち**物質的方面**が考へられなければなりません。祭司達に由れば、此國の民等は四十年間アラビヤ沙漠を彷徨する間に、此ユートピアの理想に從つて充分に教育され、其教育が終つた處で、彼等の所謂「乳と蜜の流るゝ地」――カナン又はパレスチナ――即ち理想境の實現さるべき「理想の地」を獲得して、其處に此理想國の理論と實際と、理想と現實とを一致完成すべきでありました。而して沙漠の彷徨中には、天來の不思議なる食物「マナ」を以て養はれ(出埃及記十六章十四――卅五節)カナンの地を獲得した後には其地を過不足なく抽籤に由つて各人の間に分配すべきでありました(ヨシア記十三章――廿四章)。こんな風に沙漠に於て懷かれた理想はカナンに於て實現される筈で、理想的プログラム作成の間は天來の食物で養はれ、理想實現の曉には分配せられた不動産に由つて生活するといふ大規模の經濟的の計劃であつたのであります。

斯く組立てられた祭司的ユートピアの全景を眺めますと、其叙述の中に、二三の燿いてゐる強い**理想の光**が見えます。いつたい此理想國の叙述は大部分が煩瑣な砂を嚙む樣な、律法的文字で固められて居りますから、多くの讀者はそれに飽き飽きして、遂に此燿けるものを見つけないで仕舞ひますが、是は甚だ惜しまるゝ事であります。

玆に燿やいて居るものゝ第一は其社會的理想、或は對社會態

度の原則であります。祭司達は此プログラムを作る時に對社會態度の原則としては、古くから傳はつて居る「復讐法」(Lex Talionis——出埃及記廿一章廿三——廿五)即ち

「生命にて生命を償ひ、目にて目を償ひ、齒にて齒を償ひ、手にて手を償ひ、足にて足を償ひ、烙にて烙を償ひ、傷にて傷を償ひ、」

といふ原則を採用し、改めて之を自己の言葉で述べ更へて迄高調しました(レビ記廿四章十九——廿二節)。此原則は一見非常に慘酷に見えますが、決して慘酷ではありません。若しも是が社會に字義通り行はれるならば、眞の平和の世界が現出するでありませう。此原則の根柢に橫はる思想は、人間の同權或は同價値といふ事であります。即ち言ひ表しこそ「害」の場合のみにしてありますが、是は凡ての方面に於て各人は同格の取扱を受くる事を意味して居ります。然して原則としては之を採用した祭司達も「祭司の國、聖き民」たるべき大理想を考へてみるとき、此復讐では滿足する事の出來ない或感じの起るのを禁ずる事は出來ませんでした。成程受けた害丈けの償をする事は正しい、加へた丈の害の報を受けるのは當然であらう。然し其當然の權利をも主張しない處に、其國の使命を全うする爲の最良の方法があるのではあるまいか。同時に其神が自分等の社會全體に行はれる時に、彼の理想國はより圓滿に、より平和に行く事が出來るのではあるまいか。とは彼等の衷に段々强くなつて來た感じでありました。

「汝仇をかへす可からず。汝の民の人々に對ひて怨を懷くべからず。己の如く汝の隣を愛すべし、」(レビ記十九章十八節)

とは、此感じを突き詰めた時到達し得た彼等の社會的理想でありました。私共は砂原の様な律法の中に此寶玉を見出して實に驚かさるを得ません。

輝いてゐる第二のものは經濟的理想ともいふべきものであります。前述の如く此理想國の民はアラビヤの沙漠で天から降つた「マナ」といふ「莞の實の如くにして白く、其味は蜜を入れたる菓子」の如きもので養はれました(出埃及記十六章十四——卅一節)。彼等は此マナを毎日各自集めましたが、人々の體力技能等の相違に由て集むる所に多いと尠いとがありました。然し

「オメル(桝)をもて之を量るに、多く斂めしものにも餘る處なく、尠く斂めしものにも足らぬ處なかりき」(同十八節)

とある如く、之を分配した時に過不足は出來ませんでした。此マナは又今日集めたものを蓄積して翌日に亘る事は出來ませんでした。

「或者は之を朝迄殘したりしが、蟲たかりて臭くなり……人々其喰ふ

處に從ひて朝毎に之を集めしが、日熱くなれば消ゆ」(同廿、廿一節)

此言葉は三つの事を教へて居ります。即ち技能に從つて勞働し、必要に應じて與へられ、而して、同胞を絞取する爲の資本の蓄積は許されない、といふ事であります。祭司達は勿論今日の社會主義の經濟學者の教ふる處の如きを、意識したのではありませんが、其經濟的平等の要求が玆に到らしめたものでありませう。猶太人であるとを兎角忘れられ勝のカール・マルクスが、其死ぬる八年前に其友達のブラッケに書いた一本の手紙があるさうですが、其中に「各人は其能力に應じて、各人には其慾望に應じて」(Jeder nach seinen Fähigkeiten, Jeden nach seinen Bedürfnissen.) といふ言葉を用ひて居るとのことです。河上博士は(社會問題研究八一五頁)之を説明して『玆に「各人は其能力に應じて」とあるのは、各人は其能力に應じて富の生産の爲に勞働するといふ意味であり、「各人には其慾望に應じて」とあるのは、各人には其慾望に應じて社會の富を消費せしむるといふ意味で、之が共産主義の根本的原則を、最も簡明に言ひ現はしたものだ』といふて居られる。二千五百年前の猶太の祭司的ユートピアの經濟的原則が、其子孫なる正統派社會主義の開祖の教ふる處と一致して居るのは頗る面白い事であります。

是等二つの――社會的及び經濟的――理想は、理想國の面白い一つの制度の中に具體化されて居ります。此ユートピアには七日目毎に來る「安息日」、一年三度の所謂「三大節筵」、七年目毎に來る「安息の年」、七々四十九年毎に來る「ヨベルの年」(Jubilee—Yobel) 等の節會がありましたが(レビ記廿三章、廿五章)、其中でも最後の「ヨベルの年」は非常に興味のあるものであります。此ヨベルの年の定めは、歴史上に行はれた形跡は全く無く、祭司達の空想の産物だと云はれて居る程、それ程此ユートピアの理想をよく表はすものであります。其プログラムに從へば、毎五十年目の七月十日には、鳴り渡るラッパの音と共に、此理想國中の凡ての民に、全き「自由」が宣言せられます。而して凡ての人は「各其産業に歸り、各其家に歸る」(廿五章九、十節)事が出來ます。即ち賣却質入等に由て其不動産を失つた者は無條件で之を回復し、借金等の爲に奴隷となつて身體の自由を失つた者も、無條件で全き自由を與へられ、其家に歸る事が出來るといふ規定であります。

元來此理想國の民は沙漠の彷徨を終つて、マナを以て養はるゝ時代が過ぎると「乳と蜜の流るゝ國」を獲得し、抽籤に由つて分配せられた産業――不動産――に由つて生活する計劃であつたといふ事は、前述の如くであります。祭司達の理想が一分一厘

相違なく此國に行はれゝば、貧民もなく奴隷もなく、凡てのものが鼓腹して樂しむべきでありますが、然し此處に一つ大なる危惧が祭司達の心にありました。其れは外でもなく、人間天賦の智力技能の相違から余儀なく起る樣々の不平均といふ事であります。何んなに此ユートピアの理想が公平、平等といふ事になりましても、技能の相違に由つて長年月の間に起る不平均、不平等を防ぎ得るだらうかといふ懼がそれでありました。

此「ヨベルの年」といふ規定は、此懼に具へる爲の制度でありました。卽ち甲と乙との技能の相違から、乙は段々損をし、甲は段々蓄財し、中頃乙は甲から借金をし、遂には其不動產をも奪はれ、終りに其身體の自由をも賣つて奴隷となるといふ場合を假定し、斯かる場合には此ヨベルの年の規定に由て、甲乙間に如何なる個人的契約があらうとも、律法の權威に由つて、乙に其不動產を返し、其自由を回復せしめるといふ事にしたのであります。卽ち此制度に由つて自然に弱者として生れた乙を、自然に强者として產れた甲の手から救ふ事にしたのであります。斯くの如くヨベルの年が規定された事に由つて、不動產の喪失から起る經濟的理想實現の阻害せられる事を防ぎ、個人の自由の拘束に由つて生ずる社會的理想實現の障害を除かうとしたのであります。斯くして、祭司達は考へました、如何なる理由ありとも少數者が土地を獨占して、多數者から食を奪ふといふ樣な事は、此ユートピアに於ては有り得可き事では無いと。何故なら地は、民各と契約を結び此理想國を建設した「神の有」でありますから（レビ記廿五章廿三節）。

以上述べた處が過去に視られた祭司達のユートピアであります。若し猶太の人々が是等の凡ての律法制度を遵守し、其理想を何處迄も追求したならば、此ユートピアは永遠のものであつたらうとは、祭司達の考へた處でありました。

「汝等我法度を行ひ、又我律法を守りて之を行ふ可し。然せば汝等安泰に其地に住む事を得ん。地は其產物を出さん。汝等は飽く迄も喰ひて安泰に其處に住む事を得可し」（レビ記廿五章十八、十九節）

とは神の聲として祭司達の聽いたものでありました。

三

過去に建てられた祭司的ユートピアは、消極的な祭司達自身をば滿足させる事が出來ませんでした。就中積極的な**預言者**達――及び默示文學者――は之に對して最も不滿を感じたのでありました。彼等の一人なるエレミヤは先づ祭司的理想國の史實性を破壞しやうとして

「我汝等の先祖を埃及より導き出し日に、燔祭と犧牲とに就きて語りし事なく、又命ぜし事なし」（同七章廿二節）

と叫びました。玆に於てか祭司達に挑戰した預言者達は、彼等自身のユートピアを建設しなければならなくなりました。其結果は未來に建設された預言者的ユートピア——メシヤ王國——となり、舊約書の預言文學中に遺されて居ります。

未來の預言者的ユートピアを理解するには先づ、預言者——及び默示文學者——が此ユートピアを描く迄の心理的過程を知らなければなりません。いつたいバビロン虜囚以前の猶太預言者の中心は、「神の正義」といふ事でありました。然るに現實の世界を見ると、何處でも神の正義は無視せられ、蹂躙せられて居ります。貧しき者は正しき審判を奪はれ、平民は壓迫され、貴族富豪は不義の快樂に耽つて居ります。玆に於てか義憤を感じた彼等は、聖所ベテルに、首府エルサレムに、或はモレシテの田舍に立つて時代の罪惡と背信とを彈劾致しました。然し少しも其効果は見えません。遂に彼等は其愛する自國の滅亡をさへも、同胞の虜囚をさへも宣告致しましたが、人々は依然として彼等の言葉に耳を傾けませんでした。

斯うなると預言者達の問題は、現在の罪惡に充てる世と、神の正義との關係を如何にして調和するかといふ事であります。神の正義は永遠に葬らるべきものであらうか、或は何時か一度は勝利を得べきものであらうか。勝利を得るとすれば、現在か未來かであります。處が現在に於ては全く蔑視せられて居ります。當然の結論は未來に於て必らず終局の勝利が來ると考へる事でありました。

處がバビロン虜囚以後、預言者が徐々に默示文學者の色彩を帶びて來ると、彼等の思想に以上の問題の上に、當面の自國民の苦惱といふ問題がも一つ加つて參りました。即ち國を失ひバビロンの虜囚地で惱み、それ以來絕えざる窮乏と迫害との中に在る同胞を見ては「信仰篤き義人が何故苦しむか?」といふ問題所謂「苦痛の問題」が切實に感ぜられる樣になりました。此處でも以前の如く、今は苦しむが將來に於て必らず幸福が來る、といふ解決に行くより外には道はありませんでした。前には神の正義の勝利といふ理論的の問題でありましたが、今度は罪なき同胞の苦痛といふ實際的の問題となりました、双方共其解決が過去に非ず現在に非ず、將來に繫がるといふのでありました。斯くして「現在に對する呪詛と、よりよき社會に對する憧憬」といふ、ユートピアを産み出す可き二つの條件が豫言者の間にも具備せられたのであります。

將來に向けられた預言者達の眼に映じたユートピアは、神の正義が完全に勝利を得る社會でありました。而して其描寫は祭司達の過去的ユートピアのそれが、煩瑣なる律法であつたの

に引替へて、是は美はしい詩からなつて居りました。而して、來らんとする**此理想國の中心**がエルサレムとして考へられる樣になつたのは、現在惱みつゝあつた猶太人達に對する當然の報償と考へられた爲と思へば決して無理ではないと思ひます。

「末の日にエホバの家の山は諸々の山の頂に堅く立ち、山の嶺よりも高く擧り、凡ての國は流の如く之につかん」（イザヤ書二章二節）

とはイザヤ書中（二章二――四節）及びミカ書中に（四章一――五節）保存せられて居る預言者的ユートピアに關する斷片の語る處であります。而して此中心エルサレムより神の教は四方に及びます。

「多くの民行きて相語り言はん。いざ我等エホバの山に登り、ヤコブの神の家に行かん。神我等に其道を教へ給はん。我等其路を歩むべしと。そは律法はシオンより出で、エホバの言はエルサレムより出づべければなり」（イザヤ二章三節）

此結果は是迄無信仰或は無智と偶像禮拜との中に閉ぢ籠められた諸民族を解放して

「水の海をおほへる如くエホバを知るの智識地に充つ」（イザヤ十一章九節）

る樣になるのであります。

祭司の過去的ユートピアを觀て、其煩雜な組織づくめなのに嫌惡を覺えた預言者達は、彼等の理想國を支配するものを完成された**人格**と觀ました。如何に立派な組織が出來ても之を運轉する人格の無い時には、眞の理想國を建設する事は出來ないとは預言者達の强い信念でありました。即ち彼等は儀式の代りに人格を見たのであります。然し此人格は從來の樣な征服者であつてはなりません。頭を高くし、肩を聳かして、民衆を眼下に見下す如き人物と、彼等に由つて建設せられた軍國主義とは、先づ此ユートピア實現の準備として破壞されなければなりません。イザヤ書中に含まれた第二の斷片は（十章卅三節――十一章九節）此點を美はしく說明して居ります。

「萬軍のエホバは雄々しくたけびて其枝を斷ち給はん。丈高き者は伐り落され、聳えたるものは低くせらるべし。又鐵をもて茂りあふ林を伐り給はん。レバノンは能力ある者に倒さるべし」

此準備が終へて始めて新社會を指導すべき人格が產れて參ります。

「エッサイの株より一つの芽出で、其根より一つの枝生へて實を結ばん」

レバノンの大木が伐り倒されて、小株より出づる小さい芽が育つて實を結ぶといふ處に、預言者的詩人の氣持がよく表はれて居ります。而して此斷片の後半に此新人格の細かい敍述が記されて居ります。組織中心主義を離れて人格中心主義を高調した處に、預言者的ユートピアの特徵の一つがあります。

人格中心といふ言葉はやゝともすると、人々の個性を矯めて、凡ゆる人間を一つの型に嵌め込む様に思はれ易くありますが、是は人格中心主義の似て否なるものです。上に述べた斷片を観ると、此理想國の中には、啻に小羊や童兒や牛の子乳兒或は乳離れの兒等が居るのみならず、他の多くの猛獸の居る事が記されて居ります。

「狼は小羊と共に宿り、豹は小山羊と共に伏し、犢、をじゝ、肥えたる家畜共に居りて小さき童兒に導かれ、牝牛と熊とは食物を共にし、熊の子と牛の子と共に伏し……乳兒は毒蛇の腹にたはぶれ、乳離の兒は手をまむしの穴に入れん」（イザヤ書十一章六──八節）

即ち凡ての動物が小羊の如くなるといふ譯ではなく、其處には豹も熊も獅子も毒蛇もまむしも居るのであります。換言すれば凡ての人間は──凡ゆる動物は──各々其產み付けられた個性を此ユートピアで完成する事が出來るのであります。之を思ふ時に私共は此預言者達のビジョンに驚かざるを得ません。今日の人間の中、何れ丈け多くの人々が、其品性に一つの缺點がある爲に全然其特殊の價値を無視せられて、或一つの代表的人物の型に嵌まれと强ひられて居る事でせう。然し斯かる人々の眞の救ひは云ふ迄もなく、自己の個性を沒却して或一つの型に嵌まる事に於て見出されるのでなく、自己の其一つの缺點をなくして、其個性を完成するといふ事に於てであります。實に此猛獸の表象を藉りて個性の完成を示した處は面白いと思ひます。

然し此猛獸達の性質から取り去られて居る一つの點は何でありませうか。即ち此理想國で完成さるべき爲に、個性から取り去らる可き唯一の點は何でありましたらうか。其れは自己の生命を延ばす爲に、他の生命を犧牲とするといふ[illegible]の征服慾であります。豹は豹で居り、獅子は獅子で居り、まむしはまむしで居りますが、決して他を害して居りません。此處で肉食獸が肉を食はなければ肉食獸でなくなる、豹は豹でなくなり、獅子は獅子でなくなる、といふ様な議論をしてはなりません。詩に對して散文は議論をしかけてはなりません。

殊に此處で面白いのは「獅子は牛の如く藁を食ひ」（七節）といふ言葉であります。此言葉は「蛇は塵を糧とすべし」といふ、他の一つの斷片中の言葉と共に（イザヤ六十五章十七節──廿節）此理想國に於ては、啻に人間のみならず、凡ての生物が、其生命を保つ爲に他の生命を犧牲にしないといふ事を云ひ表はして居ります。言ふ迄もなく「藁」とは稍又は麥が實を殘して其生を終へた殘骸であります。

いつたい私共人間は、今様々の生物の肉を食し乍らも一種の自責の念を持つて居ります。それが迷信的の恐怖から來るの

か、兎に角、生物を屠つて食とする事には何れの民族の間を問はず一種の怖れが感ぜられて居ります。例へば吾々でも牛の肉を食べる時「ウシ」といはず「ギウ」を食べるといひ、「ブタ」といはず「トン」と云ひ、成可くウシ又はブタと云ふて四足のある動物の姿を聯想することを避けてゐます。或は英語でもCowとかoxとか云はずBeefといひ、Pigとも Swine とも云はず Pork と云ふて居ります。Beef も Pork も佛蘭西語の Boeuf 及び Porc から他の多くの語と共に藉りたもので、知らず知らず外國語を轉用する事に由つて此恐怖と自責の念を和らげ樣としたものではないでせうか？ 古くから云はれた「凡ゆる生物は人間の爲に存在してゐるのだから何を屠つて食べても差支ない。屠らるゝ方の生物は寧ろ人間の爲に犧牲になる事を喜んでゐる。」と云ふやうな議論は、人間からは都合の好い議論だが、屠らるゝ生物から見れば、頗る有難くない人間中心的の（Anthropocentric）宇宙觀から出發した議論であります。猶太預言者は理屈は言はない乍ら之を感じたものでありませう。彼等の祖先が夢見たエデンの園では、人は木の實を食べて生きて居つたので（創世記二章十六節、三章二節）、動物を食し始めたのは、人間の所謂墮落以後の事でありまして（同九章二節——四節）生物を食するといふ事は決して理想的社會の生活ではない樣に考へられました。

預言者のユートピアでは斯くの如く、如何なる條件の下にも、Aの生命を保つ爲にBの生命を犧牲とし、Aの快樂及び利益の爲にBを方法とする事は絶對に許されないのであります。豹は小羊を犧牲とする事は出來ず、男子は婦人を、資本家は勞働者を方法とする事は許されません。

「斯くて我聖き山の何處にても害ふ事なく傷ぶる事なからん」（イザヤ十一章九節）

といふ社會になるのであります。

此思想は從つて眞の世界的**恒久の平和**といふ思想に導きます。其處には最早や人と人とが咬み合ひ、喰み合ひ、殺し合ふ樣な生ける地獄の如き光景は永久に見えなくなります。イザヤ書中に含まれた他の一つの斷片は（九章二號——七節）

「すべて亂れたゝかふ兵士のよろひと、血にまみれたる衣とは、皆火の燃えくさとなりて焚かるべし」

といひ、ミカ書中の一斷片も（四章一節——五節）

「彼等は其劍を鋤にうちかへ其鎗を鎌にうちかへん。國と國とは劍を擧げて相攻めず、又重ねて戰爭を習はじ」

といふて居ります。斯くて一度は「汝等の鋤を劍にうちかへ、汝等の鎌を鎗にうちかへよ弱き者も我は强しと云へ」（ヨエル書三章十節）と云ふた軍國主義の時代を忘れて、其處には眞の平

和が現出せられます。

預言者達は此理想國の出現を商業的文明にも工業的文明にもおきませんでした。而して「競爭」の無い農業的文明の上に置いて居ります。

「各人其葡萄樹の下に坐し、其無花果の樹の下に居らん。之を懼れしむるものなかるべし」（ミカ書四章四節　イザヤ六十五章廿一節―廿二節）

彼等は周圍の强國の君主達が相競ひ相爭つて居る狀態を眺め、然も勝利者の光榮の時代は束の間に過ぎて――アツスリヤのシヤルマネーザルもサルゴンも、新バビロンのネブカドネザルも、ペルシヤのサイラスも、埃及のパロ・シシヤクもパロ・ネコも、實に其權力の時代は春の夜の夢の如く去つて、先の者の努力は後の者の努力に搔き消されて、唯一片の碑文に其名が謳はれて居る丈けである事を見ました。實に是等の周圍の世界を生命とした强國の興亡は、預言者に安價なる「競爭」の愚かさを教ふるに充分でありました。此大教訓を學んだ彼等の願は、眞率の努力の效果が消え失せない世界を彼等に夢見させました。イザヤ書中の他の一ケ所を見ると（六十五章十七節――廿五節）

「彼等が建つる處に他の人住まず、彼等が造る處の果は他の人食はず……我選みたる者は其手の工（わざ）をひさしく用ふることを得べし……彼等の勤勞は空しからず其産む處のものは禍にかゝらず……」

と歌はれて居ります。實に彼等のユートピアの文明此空しはき「競爭」を惹き起さない農業文明であるべきでありました。

此理想國實現の時代になると、世界の凡ての土地は、其沃度を增し、曠野は變つて綠の耕地となる事になります。自然其處には生產力の驚く可き增加の時代が現出される事になります。イザヤ書中の此時代の叙述をして居る一節に次の樣に述べられて居ります（卅五章全體）。

「荒野とうるほひなき地とはたのしみ、沙漠はよろこびて番紅（さふらん）の花のごとくに咲きかゞやかん。盛に咲きかゞやきてよろこび且うたひ、レバノンの榮をえ、カルメル及びシヤロンの美はしきを得ん。かれらはエホバのさかえを見、われ等の神の美はしきを見るべし……其時荒野に水わきいで沙漠に川ながるればなり。やけたる砂（すな）は池となりうるほひなき地はみづの源となり、野犬のふしたるすみかは蘆葦のしげりあふ所となるべし」（一、二、六、七節）

現代の私共から見れば、是は形容の言葉の如くに思はれますが是は決してさうでありません。預言者達は字義通り斯くなるものと信じて居たのであります。此事はユダヤ文學中の舊約書に含まれざる「僞典」（Pseudepigrapha）と稱するものゝ一つ「第一エノク書」（紀元前二世紀上半頃のもの）の一部を見ると解ります。此書に由ると此理想國の實現の時代になると、人々の時く凡ての種は各一千倍の實を結び、橄欖の一桝は十日の油を出

すであらう、と云はれて居ります（十章十九節）。此等から考へてみると、預言者達は商業的及び工業的文明に由らずとも、農業に由つてのみで、全世界の人間が豐かに生活資料を得て生を樂しむ事が出來ると、思つてゐた事が分ります。是が即ち預言者的ユートピアの經濟的基礎であります。是は今日から見ても必らずしも酷い迷信であり、酷い過算であると言ひ切る事は出來ないと思ひます。今日の一觀察者は、大地を耕すのにも、事業を成し遂げやうとする冷たい意志の力のみで耕すのと、其上に深い愛が加へられた上耕すのとの間には、收穫に於て驚くべき相違のある事を、「トラピスト僧と愛の力」といふ一文の中に——小作人をボーイとして使役するK男爵と、兄弟同志の愛の心を以て働くトラピスト僧とを比較して述べて居ります（露風氏著間のある幻影）。此愛が、預言者の理想境實現の時には、全世界に溢れるのであります。其時には字義通り上述の變化が大地の上に來て、其沃度は驚くべき上昇を示すものと考へられたものでありませう。

此豐かな經濟力のある理想國では、何んな無智なものも、無能力なものも、不具なものも、生存競爭に落伍して、人間世界から淘汰されるといふ樣な事はなくなります。而して凡ての人が共生存權を認められ、共生活慾を滿足させる事が出來ます。

前述の一斷には

「汝等衰えたる手を強くし、弱りたる膝をすこやかにせよ・・其時瞽者の目はひらけ、聾者の耳はあく事を得べし。其時跛者は鹿の如くに飛び走り・唖者の舌は歌うたはん、」（イザヤ卅五章三、五、六節）

と歌はれて居ります

斯かる社會狀態が現出する時は是迄人間界を惱まして居た病氣の大部分はなくなるでありませう。從つて人は其處で天賦の壽命を樂しむる事が出來る事になります。前の斷片の中には

「日數わづかにして死ぬる嬰兒と、生命の日を滿たさざる老人とは、其中にまたある事なかるべし。百歳にて死ぬる者も尙ほ若しとせられ、百歳にて死ぬる者を詛はれたる罪人とすべし」（イザヤ六十五章廿節）

と謳はれて居ります。玆に到つて經濟的社會的及肉體的の凡ゆる禍の取り除かれた預言者の理想境が實現されるのであります

將來に見られた此預言者のユートピアが、過去に見られた祭司的ユートピアと著しく異つた點は、其れに關する思想が絕えず精神化されていつた事であります。祭司達は其ユートピアを過去に面して律法的に見たので、之を未來に見且つ詩的に見た預言者のユートピアの樣に醇化してゆく事が出來ませんでした。預言者のユートピアは最初は著しくダビデ王家中心的、猶太的、民族的でありましたが、年代が經つと共に、徐々に精神的、

倫理的になつて參りました。勿論此發達を援ける歷史的條件もあつたのであります。彼等が理想國の中心として考へたパレスチナ及びエルサレムは、余り度々異邦人の鐵蹄の下に蹂躪され汚されましたので、彼等自身すらも、之を其ユートピアの中心となすのは應はしくない、と考へる樣になりました。其處で自然に產れ出たのが「新天新地」及び「新しきエルサレム」の思想であります。

「視よわれ新しき天と新しき地とを創造す。人先きのものを記念する事なく、之を其心に思ひ出づる事なし。されど汝等我が創造する者に由りて永遠に樂しみよろこべ。視よ我はエルサレムを造りてよろこびとし其民を快樂とす」(イザヤ六十五章十七、十八節)

此思想は原始的基督思想の神國觀に其儘傳へられ、默示錄に於て(廿一章)其頂點に達して居ります。

「われ新しき天と新しき地を見たり。先きの天と先の地は既に過ぎ去り、海もまた有ることなし。われ聖き城なる新しきエルサレム備へ整ひ神の所を出でゝ天より下るを視る」(一、二節)

ユートピアの中心が地上のエルサレムを去つて、天より下るエルサレムとなるにつれて、預言者のユートピアからは、徐々に猶太的、民族的、排外的及び肉觀的方面が減じて、精神的、世界的、抱擁的方面が增し加へられて來りました。遂に原始基督教文學中の馬太傳に於ける山上の垂訓(五章、七章)に記された如く、此理想國の民の道德律は預言者中の預言者ナザレのイエスに由つて其最高點に迄擧げられたのであります。

四

祭司達の觀た過去のユートピアと、預言者達の觀た將來のユートピアとは、それ〴〵の型の人々を滿足させる事は出來ましたが、他の一種の型の人々を滿足させる事は出來ませんでした。それは過去をも顧みず、未來にも望をかけず、ひたすらに現在に關して行かうとする賢人達及び其流を汲む人々でありました。

紀元前第四世紀の中葉から後半へかけて、西部アジヤには、アレキザンダーの征服の結果流れ込んだ希臘的思想に影響せられて、思想的波動が大きく打つて居りました。いつたい、ユダヤ人の間には今迄――ヨブ記の著者等を除いては――余り哲學的思索に耽るといふ樣な事はありませんでした。然るに希臘的思想の挑戰に由て、猶太人も徐々に宇宙問題等を哲學的に考へる樣になつて參りました。其結果は、祭司の如く過去を見るよりも、預言者の如く未來を視るよりも、寧ろ現在を熟視しやうとする強い傾向となりました。茲に到つて從來祭司及び預言者達の態度に慊らなかつた賢人達は、專ら此傾向の指導者となるといふ風になりました。彼等の中で特に悲觀主義(ペシミズム)を代表して居る「傳道書」の著者は(紀元前二百年?)第一に過去を尊ぶ祭司

達を嘲つて

「昔の今にまさるは何故ぞやと汝いふ勿れ。汝のかゝる問をなすは是智慧より出づるものに非ざるなり」(七章十節)

と云ふて居ります。而して進んで、未來をのみ望む預言者達を冷笑して

「幸福ある日には樂しめ。禍患ある日には考へよ。神は此二者を相交錯へて下し給ふ。是は人をして其後の事を數ふる事なからしめん爲なり」(同十四節)

といふて居ります。是は確かに當時の一般の賢人達の、祭司及び預言者達に對する氣持を――是程強くなかつたにしても――代表するものであつたでせう。

然し賢人達は祭司及び預言者達に反感をもつたとしても、彼等の感じた現世に對する不滿を迚も否定したのではありません。寧ろ自分達の方がそれをより多く感じて居たのであります。彼等が他の二者に慊らなく思つたのは此事にあるのではなく、寧ろ兩者が其解決を空想的の過去に求めた事と、不確實千萬な未來に求めたといふ點にあつたのであります。

賢人達が現在に不滿を感じたといふ事は、彼等の遺した「智(ホク)慧文學」に由て覗ふ事が出來ます。是等の不滿に滿ちても過去未來の何れにも行き得なかつた彼等は、止むを得ず、現在に其解決を求めなければなりませんでした。といつて外部の世界は矛盾と不正と無情とで滿ちて居りますから、勢ひ彼等の眼は、內部の世界即ち心の中に向けられました。處が驚く可き事には、最初は止むを得ず追ひ込まれた、そして狹隘だと思つた此心中の世界は、一度入つてみると其廣さに驚く程で、寧ろ外部の世界よりも廣く高く深い程でありました。其處に賢人達の觀た現在のユートピアが――字義に矛盾がありますが然し心中に立てられたので、外部の世界に於ける現實性がないから差支ないでせう――描かれたのであります。

現實の問題に苦しめられて其苦惱を言ひ表した賢人達の先驅者は、紀元前四百年頃の「ヨブ記」の著者であります。彼は敬虔にして正義の人であつたに拘らず、故なくして其財產を失ひ、其子供の全部を喪ひ、自己は象皮病(エレフワンチアシス)と名付くる一種の病氣を患ひ、妻の同情を失ひ、果ては最初の望みをかけて居た三人の朋友には「それは君の罪惡の結果だ。其罪惡を君が意識するとしないとには拘らない。君は現在惱んでゐるといふ事が君に罪のあるよい證據だ」といふ、苦痛即罪惡の結果也といふ議論で壓迫せられました。

「請ふ、思ひ視よ。誰か罪なくして亡びし者あらんや。義しき者の絶たれし事何處にありや。我の觀る所によれば不義を耕へし惡を播く者

は其獲る所も亦是くの如し」(二四章七、八節)

とは第一の友エリパズの言葉でありました。第二の友ビルダデの考も之と違ひませんでした。

「神豈審判を曲げ給はんや。全能者豈に公義をまげ給はんや。汝の兒童彼に罪を獲たるにや、之を其愆の手に附し給へり」(八章三、四節)

第三の友ゾパルの言葉も同様でありました。

「汝知れ神は汝の罪よりも輕く汝を處致し給ふなり……汝の手に罪のあらんには之を遠く去れ……然すれば汝面を擧げてきずなかるべく、堅く立ちて懼るる事なかるべし」(十一章、六、十三、十五節)

實にヨブが後世の苦痛の代表的人物となつたのも無理はなからうと思ひます。

舊約文學中唯一の悲觀的智慧文字なる「傳道書」の記者の如きは、人世の矛盾と社會組織の不完全とに愛想をつかして

「空の空なる哉、すべて空なり。日の下に人の勞して爲すところの諸の動作は其身に何の益あらん」(一章二、三節)

と人世を觀じた位であります。此外無名の詩人にして是等と同樣な惱みを歌つたものが多くありますが、其中の一つをあげてみれば

「エホバよ願くは、我が終りと我日の數の幾何なるとを知らしめ給へ。我等無常を知らしめ給へ。視よ汝我凡ての日をつかの間に過ぎ去らしめ給ふ。我命みまへにては無きに異らず。實に凡ての人は皆其盛りの時だにも空しからざるはなし」(詩篇卅九篇四、五節)

の如きであります。此詩の中には著しく希臘思想の影響が表はれて、現實或は外部世界の無常の感が滿ちて居ります。

又政治的の惱みも智慧文學的詩人を非常に苦しめた樣に見えます。國家の獨立を失つてから、猶太人中の多くの者は流浪の民となりて異郷に住つて居りましたが、絕えず其心は故國と其神とに憧れて居りました。「水無き燥き衰へたる地」の如き異郷にあつた一詩人は、政治的に不遇の爲に故國に歸る事が出來ないで其惱みを歌つてをりました(詩篇六十三篇)。

斯くの如く現實の苦惱を感じ、外部の世界から壓迫を感じた此人々は、内部の世界に救を發見し、其ユートピアを神との交通といふ神秘境に描きました。此ユートピアには祭司や預言者達のそれに無かつた神秘的の匂ひがありました。惱んだヨブは最後に未だ嘗て味つた事のない「内部の世界に於ける神との面接の經驗」を味ひました。其結果凡ゆる問題が解決され

「斯く我は自らさとらざる事を云ひ、自ら知らざる測り難き事を述べたり……我汝の事を耳にて聞きゐたりしが、今は目を以て汝を見たてまつる。是を以て我自ら恨み塵灰の中にて悔ゆ」(四十二章三、五、六節)

といふて居ります。實に彼は外部の世界で味ひがたき、目にて神を見るといふ經驗を內部の世界に於て味つたのであります。

又無常を感じた詩人も其眼を內部に轉じた時、其處に於て神

と接觸する事が出來ました。

「主よ、我今何をかまたん、わが望は汝にあり、」（詩篇卅九篇七節）

此内心のユートピアはパスカルの如く「心で知られた神」(God known of the heart) の世界で、外部の世界よりも大きいのでありますが、其プログラムは「神秘（ムステーリオン）」といふより外には云ふ事の出來ないものでありました。然し何より確實な事は、其處には祭司達が過去のユートピアを通して憧がれ、預言者達が未來のユートピアを通して憧れた「彼」の臨在が明かであるといふ事であります。其プログラムを明確に言ふ事は出來ないが、然し決して「深霧主義」(Mistiness) の世界ではありません。寧ろ本人には明瞭過ぎる程の「神秘主義」(Mysticism) の世界でありました。何んな世界と云へども此「神」より大きい世界がありませうか。賢人達は靜寂なる瞑想と冷靜なる思索の結果此大なるユートピアを描いたのでありました。其プログラムを祭司達の如く、預言者達の如く言ひ表はす事は出來ませんでしたが、然し

「我床にありて、汝を思ひ出で、夜の更くるまゝ汝を深くおもはんとき、我魂は髓と脂とにて饜さるゝ如く飽く事を得、我口はよろこびの口脣をもて汝を讃め讃へん」（詩篇六十三篇五、六節）

と神秘の歌をうたふ事が出來ました。而して其ユートピアを實現せんとする默示文學者の努力が安價な政治運動になつた時、彼等は「神を思念する事は一の活動なり」(Penser a Dieu est une action-Joubert) と云ひながら、瞑想の世界に深く深く入り込んだのであります。

賢人達のユートピアは其輪郭と組織が、祭司及び預言者のそれの如く明瞭でなかつたので、其非現實的な故をもつて、後者から輕んぜられ嘲けられた事でありませう。然し其影響と効果は他の二者が考へたよりも、遙かに深く、遙かに遠く及んだのであります。何時かはその神秘的の潤ひが他の二者のユートピアの中に滲潤して參りました。祭司達が自己のユートピアの過去なる事を考へて、淋しみを感ずる時、其煩雜なる律法を考へて倦怠を覺ゆる時、彼等を慰ため、彼等を新鮮にするものは此賢人のユートピアの神秘的の滴りでありました。預言者達が——默示文學者達が——時に其理想境實現の遼遠なりを思つて、焦燥の感に充たされ其魂の荒む時、之を和らげ、しつとりさせたものは、此神秘的ユートピアから落ちる滴りでありました。

歷史的に私共は此事實をみる事が出來ます。基督教發生前後の祭司的ユートピアは、益々乾燥びて參りましたが、是に生命を入れてナザレのイエスが其福音的ユートピアの一部になし得たのは、此神秘主義に由つてゞあります。又同じ頃にやゝとも

すれば、ユートピア實現の爲に發動を起さんとした人々を鎭めて居つたのも、此神秘的ユートピアの力でありました。然しそれが鎭め切れなくなりました時、是等は二つに分れて、一方乾いた預言的ユートピアを固守する者は、遂に猶太戰爭を惹き起し、其民族をしてエルサレムに入る事も出來ない樣にさせて仕舞ひましたし(紀元一三五年)、他方、それに神秘的ユートピアを加へたものは、遂に靜かなそして生命に充ちた基督教となつて、其處に更新された基督教的ユートピアを作り出す源となりました。

ユートピアといふ語の使用に幾らか無理はありましたが、以上がユダヤ古典に表はれた三種のユートピアの鳥瞰圖であります。

懊惱と革命のユダヤ文學

吉田絃二郎

紀元前二千年ころには、アブラムに率ゐられてバビロンを去つたユダヤ人の祖先たちは、或ひは南方カナアンの地に、或ひはさらに南して埃及の地に遠い旅をつゞけてゐた。同千七百年ころにはヤコブの子たちはヨセフを頼つて埃及に移住してゐる。同千六百年代にはかれ等の一族は埃及人の壓迫に耐へ切れないで地中海をわたつてモーゼに率ゐられてかれ等の約束の地イスラエルに還つて來てゐる。しかも埃及から歸つて來ても、かれ等に恵まれてゐたヨルダン河の岸に定住の地を占領するまでには、カナアンの周圍を四十年が間さ迷はなければならなかつた。

當時頻々として起つた飢饉といふものが、かれ等をして絶えず遊牧の民のやうな漂泊の生活を餘儀なくせしめたのでもあらうが、元來かれ等自身の性格のうちにすでに一種のコスモポリタン的な血が流れてゐたのではなかつたゞらうか。かれ等の間に殊に早くから發達した人類同朋的なる思想も、或ひはこのコスモポリタン的な性格の自然の所産として生まれて來たのでは

なかつたゞらうか。

ルナンはその著『キリストの生涯』の中に『ヤコブが石に枕しつゝ星を見て無量なる子孫についての神の約束を見出し、また神が天上から地上へ昇り降りした不可思議な梯子を見たのもかやうな夜であつた』（第十章）と言つてゐる。ルナンはガリラヤの美しい湖畔、紺青の空、手に取るやうに天の星を眺むることのできる熱帶地の屋上が、いかにキリストの天に對する思想に深い影響を與へたかといふことを說いてゐるのであるが、キリストばかりでなく、またユダヤの土地ばかりでなく、バビロンから埃及に至る間の到るところに於てユダヤ人は太古からいかに天上への交通を夢みてゐたことであらう。いかに永遠への精進を空想してゐたことであらう。かれ等の眼はいつも、彼方へ、そして明日へ、そして遙かなる世界へのみ向けられてゐたことであらう。

バビロン、カナアン、埃及の自然がかれ等を一種のコスモポリタンに作り上げたのであるか、或ひはかれ等自身が生れつきコスモポリタンであつたか、どちらにしてもかれ等は最初から天上へ通ふ梯子を夢みてゐた。バベルの塔は天上への反抗でもあつたが、一面に於ては天上への交通を意味したものであつた。ヤコブもバベルの塔を夢みたのであつた。キリストも私たちのために神への仲保者としてバベルの塔を築かうとしたのであつた。

かれ等は自らを「神に祝福せられたる民族」として信じてゐた。すべての他の民族もさうであるが、ユダヤ人の場合には特に"blessed people"といふ意味がぴつたりとかれ等にくつ附いてゐるやうに思はれる。かれ等は他の民族以上に空想的であり、神の國の憧憬者であつた。現實を擺脫して永遠に詣らんとする革命家であり、理想家、妄想家であつた。「我は神の子なり」と叫んだキリストはユダヤ民族のこの空想的性格の最も美しい表象であつた。また現實の凡衆、凝滯、醜惡から脫せんとする最も勇敢な革命家であつた。

×

さらにユダヤ民族の思想の一つの特長はすでに述べたやうに人類同朋といふ觀念である。human—brotherhood または hospitality の觀念はどこから生れて來たか。これも恐らく、かれ等がアブラム以來、旅から旅へと熱帶地を放浪してゐた間に自然に育てあげられた美德であらう。宿るべき家なく、定住すべき故郷を持たぬコスモポリタンにとつて、最もありがたいものは旅人をいたはる人の心である。旅人をいたはる hospitality である。幾百年の間旅から旅と、放浪者の苦惱を甞めつくした

かれ等が、隣人や旅人のために宿泊を與へ、パンを惠むことを第一の徳としたことはいかにも自然のことである。『汝が畑の收獲を集むる時には、汝は畑の隅々までも刈りつくしてはならぬ。汝は收獲の落穗を拾ひ集めてはならぬ。汝は葡萄畑の葡萄を採りつくしてはならぬ。汝は貧しき人や、旅人のために落穗や葡萄を殘して置け。』

貧しき隣人や旅人のために落穗や葡萄を殘して置くことがユダヤ人の hospitality の一つであつたが、かれ等の旅人をいたはる心はさらに無言なる動物の上にすら及ぼされてゐた。たとへば牛といへども勝手に口輪をはめてはいけない。强い動物と弱い動物を同一の軛にかけてはいけない。もし巢の中の雛を捕へたら親鳥は放たなければならぬといふやうなことが規定されてあつた。さらに啞を呪ふことや、盲人の前に躓くやうな物を置くことも禁じられてあつた。

ギリシヤ人の思想が、健康なる人間、幸福なる人間中心のものであつたのに對して、ユダヤ人の思想は不具者中心、貧しき者中心、不運なる者中心であつた。後の新約のキリストの愛はすでにかれ等の祖先の中に芽生へを見出してゐたのであつた。

×

このやうな社會思想の上に築き上げられた藝術が如何なる性質のものであつたかといふことは、自然に推測せらるゝことであると思ふ。

キリストの宗教が、貧しき者、弱き者、罪ある者、收稅吏、娼婦、聾啞、癩病患者、嬰兒の宗教であつたと同じく、ユダヤ人の文學も亦罪を悔ゆる者の懊惱であり、病める者の祈りであり、悲しめるものゝ哀訴であつた。この點に於いてユダヤ人の文學は近代ロシヤの文學、殊にトルストイやドストエフスキイの苦痛な文學を聯想せしめる。舊約にあらはれた約百（ヨブ）の苦惱は恐らくトルストイの惱みの更に深くいたましく本質的なものであらう。

ユダヤの思想を論ずる時には、殆んど必然的にその對蹠的關係にあるところのギリシヤ思想が引き合ひに出されるが、ギリシヤの藝術の清明なるが、いかにも秋の落ちつきとすが〳〵しさを聯想させるのに對して、ユダヤの文學は暗い冬の陰深い呻き聲を聯想させる。ギリシヤの藝術が大理石の露臺の詩を聯想せしむるに對して、ユダヤの文學は暗い牢獄の懊惱を聯想せしむる。

一は幸福を求め、光りを追ふ人間神（マンゴツト）の藝術である。一は苦惱の底に救ひを見出さうとする神人（ゴツトマン）の藝術である。

ギリシヤの文學から人間を取り除いたら、そこに文學がない

であらうと同様に、ユダヤの文學から神を除き、宗教を除いたらユダヤの文學は成り立たないであらう。

ただし神の文學、宗教の文學といふことは、神によつて作られた文學といふ意味ではない。神に詣らんとする罪人の文學といふ意味である。神の前に悔ゐ改めんとするところの殺人者の患みの記錄といふ意味である。

『世界はいつも神の完きに最も近きものとして聖徒を愛した。キリストは、かれの或る聖なる本能によりて、いつも人間の完きに最も近きものとして罪人を愛したやうに思はれる』(De Profundis)

オスカア・ワイルドが見たキリストは、罪の中からこそ最も深い神の世界が現はれて來ることを信じてゐたのであつた。罪人なればこそ救はるゝことを信じてゐたのであつた。

『神々すらも過去を改むることはできない。しかもキリストは最も平凡な罪人も過去を改むることを得たといふ事を示した。』

ワイルドはかう言つてゐる。

ワイルドのこの言葉を、私たちはまた舊約のたとへば詩篇、或ひは創世記、或ひは出埃及記、撒母耳前後書、列王紀略等にあてはめて考へることはできないであらうか。さらに新約四福音書に。

そこには兄弟を殺した男の悩みがある。兄弟を賣つた男の後悔がある。家畜と、すべての物を奪はれ、滅ぼされ、全身の腫物のなやみに神に哀訴する男の呻きがある。それはたとへば近代のロシヤ文學に見出されたトルストイの『暗の力』のニキタの苦惱ではないか。或ひはドストエフスキイの『罪と罰』のラスコルニコフの懺悔ではないか。後の時代の懺悔文學たとへば聖オウガスティンや、ルツソウや、トルストイの懺悔文學がすでに約百(ヨブ)記の中に、或ひは撒母耳書のなかに、詩篇の中に見出さるゝ。

罪人の記錄であるがゆゑに、その文は極めて直情的である。端的である。哲學的靜觀はかれ等の特長ではない。かれらは個人感情(パアソナル・フイーリング)を最も端的な言葉を持つて表はしてゐる。そこには理路を辿り、均齊を整ふる餘裕さへもない。

かれ等はまた極めて詩人的な想像力を持つてゐた。かれ等が青き草原に咲く紅い花を見出した刹那に、かれ等の豐かな想像力は、かれ等をして、直ちにその花を通して、燃ゆる神の炎を實感せしめたのであつた。かれ等は人生の苦痛に對しても、罪惡に對しても、死に對しても他の民族以上に慧敏なる觸覺を持つてゐたのである。かれらはその悲、惡、苦、罪に對する慧敏なる觸覺を以て人生を感じ、即座に苦に對し、悲しみに對する

實感を言葉の上に表はしたのであつた。かれ等は人生の苦、悲惡、罪の冷靜なる批判者でなくして、罪を悔ゐ惡に惱む多感なる詩人であつた。かれ等の文學はこの意味に於いて最も端的な言葉によりてつゞられたる即興詩である。抒情詩である。

×

その全體の材料、廣さ、變化、深さから言へば、『創世記』にしろ、『出埃及記』にしろ、或ひは『民數紀略』も『撒母耳書』もグランド・スケールの戯曲ともいふべきものである。そこにはあらゆる人間の醜さが赤裸々に、大膽に描かれてゐる。同時に神の救ひを求めんとする最も眞劍な罪人の歎きと、哀訴とがある。

たとへば私たちは『創世記』にヨセフとその父、その兄弟たちの話を見出すことができる。そこには兄弟の醜い嫉妬がある。暗闘がある。ヨセフは兄弟たちのために殺されんとし、終には埃及に奴隷として賣られる。しかもヨセフは埃及王に用ひられて、埃及の高官に拔擢せられる。ヨセフを賣つた兄弟たちが後年埃及に旅した時、ヨセフのかれ等に對する態度はどうであつたか。かれを賣つた兄弟たちの幸福のために、かれは全力を盡した。『而してヨセフその弟ベニヤミンの頸を抱へて哭くに、ベニヤミンもヨセフの頸を抱へて泣く』（創世記第四十五章第十四節）と書いてあるが、私たちはヨセフの物語りを通して、後のキリストの忍苦的、殉教者的生活を想はざるを得ない。ここにはまた後のキリストのあの有名な山上の說教に現はれた。無抵抗主義（馬太傳第五章參照）がすでにこの大戯曲の中に具體化せられてゐるではないか。そこには後のトルストイの『イヴンの馬鹿』の哲學が具象化せられてゐるではないか。

『出埃及記』を讀む時、私たちはそこにホーマーの敍事詩以上の深刻な人間解剖の手を盡した。大仕掛の敍事詩を發見する。そこには信仰に燃えた英傑モーゼがある。しかもかれの周圍に集まつてゐる利己的な目的な群集の一人々々の弱さ、醜さは、まさに今日の群集の心を如實に語つてゐる。『出埃及記』は超人モーゼの苦衷と、衆愚、衆醜を記錄するところの一大史劇ではないか。

『撒母耳前後書』を讀む時、私たちはこゝにたとへば沙翁の『リヤ王』或ひはメレジユコフスキイの『ピイタアとアレキシス』等に見出さるゝかの偉大なる力の悲劇的頽敗を見せつけられる。そこではソウル王を通して、或ひはダビデを通して、私たちはかのギリシヤの戯曲に見出すやうな盛なる者必ず滅ぶともいふべきいたましい人間の宿命を見せつけられる。人間と人間との憎み、妬みのいかに獸の如く殘忍であるかを見せつけられる。殊にダビデを通じて私たちは一人の性格の中に、いかに

神と悪魔の心が相剋しつゝあるかを知ることができる。

かれを殺さんとしたサウル王をゆるし、サウル王の訃を聴いては聲をあげて哭したダビデは神のやうな人間ではないか。ウリヤの妻を奪ひ、戰場にウリヤを殺させたダビデは悪魔そのものではないか。

かれが最も愛したる子アブサロムのために追はれ『わが子わが命をもとむ』と叫ばなければならなかつたかれは何といふ悲劇的な人間であつたらう。

戰況は一轉した。アブサロムは殺され、ダビデは勝つた。しかもダビデは父としてさらに深い新らしい悲しみを掬まなければならなかつた。

『王大に慼み閒の樓にのぼりて哭り。彼行きながらかくいへりわが子アブサロムよわが子わが子アブサロムよ。嗚呼われ汝に代りて死たらん者を。アブサロムわが子よわが子よ』（撒母耳後書第十八章第三十三節）これこそ悲劇中の悲劇ではないか。

私たちはこゝに神の如き彼、悪魔の如き彼、最も慈父らしき彼をダビデ一人のうちに見出す。

詩篇百五十篇のうち、その七十幾篇が斯様な人間らしい、悪魔的なダビデの作であることを考へると、一層の興味を感じずにはをれない。

詩といふ場合に、殊にそれが抒情詩である場合に於いては、—私たちはいつも戀愛を聯想する。然るにダビデのすべての抒情詩は戀愛そのものゝ詩でなくして、悪魔主義的戀愛の後の醒めたる懺悔の詩である。神の前に額ける罪人の詩である。人を呪へる者、人を怒れる者、人を憎める者の悔ゐの詩である。それは人間の耳に聴かせんとする詩でなくして、直ちに神の胸に訴ふるものである。私はこゝに斷片的に詩篇の中からダビデの詩を少しく集めて見よう。

『……われなげきにてつかれたり、われよなよな床をたゞよはせ涙をもてわが衾をひたせり。わが目うれへによりておとろへもろ〳〵の仇ゆえに老いぬ』（第六篇）

『……汝はわがすくひの神なり、われひねもすなんぢをまちのぞむ、なんぢのあはれみといつくしみとはいにしへよりたえずあり、エホバよこれを思ひ出したまへ、わがわかきときの罪とわが愆とはおもひいでたまふなかれ……ねがはくばかへり來りてわれをあはれみたまへ、われ獨りわびしくまた苦しみをるなり……』（第二十五篇）

『……わが目はうれへによりておとろふ、たましいも身もまた衰へぬわがいのちはかなしみによりて消えゆき、わが年華はなげきによりて消えゆけばなり。わが力は不義によりておとろ

へ、わが骨はかれはてたり、……』（第三十一編）
『……なんぢの怒によりてわが肉には全きところなく、わが罪によりてわが骨には健かなるところなし。わが不義は首をすぎてたかく、重荷のごとく負ひがたければなり。われ愚かなるによりてわが傷あしき臭をはなちて腐れたゞれたり。われ折れかゞみていたくなげきうなだれたり、われひねもすかなしみありく、わが腰はことごとく燒るがごとく肉に全きところなければなり。われおとろへはていたくきずつけられ、わがこゝろのやすからざるによりてうめきさけべり……』（第三十八編）

そこには罪の悔ゐに、罪の悲しみに打ちのめされた巨人の歔欷があり、懊惱がある。一句々々罪人の肺腑から吐き出された懺悔であり、哀訴である。私たちはこのやうなダビデの內心を詩篇の第三十二、三十五、三十九、四十、五十一、五十五、五十六、六十九、八十六、百九、百四十三等到るところに發見することができる。

『あゝエホバよわが祈りをきゝ、わが號呼に耳をかたぶけたまへ、わが涙をみて默したまふなかれ、われはなんぢに寄る旅人……』『汝の革嚢にわが涙をたくはへたまへ。』と、このやうな胸を裂くほどのダビデの祈りの言葉がかれの詩のすべてを貫いて流れてゐる。

家畜を殺され、すべての所有を滅ぼされたヨブが、さらにその子供たちがすべて倒れた家の下敷きになつて死んだことを聽いた時、ヨブは起あがり外衣を脫ぎ髮を斬り地に伏して神を拜し『われ裸にて母の胎を出でたり、又裸にて彼處に歸らん、エホバ與へ、エホバ取たまうなり。エホバの御名は讚むべきかな』（約百記第一章）と言つてゐる。またかれが全身の腫物になやみ、土瓦の破片で身を掻き灰の中に坐りながらも『われら神よりさいはひを受るなれば、わざはひをも亦受けざるを得んや』（同第二章）と言つてゐる。

ヨブの忍若とヨブの忍從はまたダビデのそれであつた。モーゼのそれであつた。エレミヤのそれであつた。さらに橄欖山でたゞ一人祈つたキリストのそれであつた。舊新約の物語りのほとんどすべてを通じて私たちは、人間の懊惱と、神への哀訴の切なる聲を聽く。

バイブルにあらはれたかれ等の聲が、どこまでも人間的であるといふことは面白いことである。キリストの十字架上に於ける絕望的言葉に對して、宗教家たちはいろいろとこぢつけた解釋を下さうとするが、私たちは文字通りに解いた方がいゝと思ふ。キリストも人間であつた。十字架の上で或る刹那には、主よ何ぞわれを捨てたまふやといふ人間らしい絕望の聲を出した

としても、それが何でキリストの尊さをけがすものとならうぞ。

あの忍從者ヨブの口から『わが生まれし日亡びうせよ、男子胎にやどれりと言ひし夜もまたしかあれ。その日は暗くなれ、神、上よりそれを顧みたまはざれ、光これを照す勿れ。黑暗および死の蔭これを取りもどせ……』(約百記第三章)といふやうな人間らしいヨブの駄々を聽くことは面白い。忍從が忍從だけである場合には、そこからは非人間的な、形式的な、死せる宗教や死せる文學のみが生まれる。忍從には同時に哀訴がなければならぬ。反抗がなければならぬ。祈りは神への哀訴であると共に神への反抗である。

かれらの文學は一面忍從者の文學である。忍苦者の文學である。同時に反抗者の文學である。革命家の文學である。かれ等は罪を犯した。かれ等は神に祈へた。終には神の無關心を呪つた。無理にも神をして、かれ等の涙を拭かしむるほどの駄々をすらこねた。それには原始人的な慾念の强さが燃えてゐる。

舊的に描かれたサウル、ダビデ、ヨブの中に私たちはギリシヤのバッカスの一面を聯想せずにはをられない。かれ等の上身は神であつた。しかしかれ等の下半身にはまだ獸の皮と毛がくづ付いてゐた。かれ等は子供のやうな神であつた。かれ等は子供のやうな獸であつた。半人神半獸の罪と苦惱と救ひへの憧憬そのものが、舊約の物語りを通じて流れてゐる一脈の主潮ではないか。

新約に於いて始めて私たちは人間の罪と、人間の苦惱と、人間の救ひへの憧憬を見出すことができる、殊に新約に見出さるゝところの最も力强い、太い輪廓は庶民的な感じ或ひは庶民的革命の感じといふものである。智識に對する無智、學者に對する無學者の反抗といふことである。大工の子キリストはエルサレムの學者たちを頭から罵倒した。かれは漁夫や、娼婦や、收稅吏を味方として、富める者と戰ひ、權力者と戰つた。かういふ點に於いて、かれの生涯そのものがすでに立派な悲痛な革命家の傳記である。ワイルドはキリストの生涯を詩的方面から、たとへば、ナルドの香油を塗られたるキリスト、月夜に獨り祈れるキリストを拉し來つて、キリストのライフそのものが無上の美しい詩であると言つてゐる。ワイルドと觀照の立場を變へて、たとへばガリレヤの湖畔の漁夫を引き連れて起つたキリスト、收稅吏と一緒に酒を飮んだキリスト、安息日に麥の穗を摘んだ弟子たちのために「人は安息日のために作られたるものに非ず」と喝破したキリスト、地上に劍を樹てんがために來たれりと叫んだキリストを考へて見ると、四福音書はあらゆる方面に於ける眞實の「革命家の手記」である。革命の文學である。

人間的苦悩、人間的罪悪、人間的懺悔、人間的哀訴、人間的反抗、人間的革命、……から言つた感じがいつも舊新約の物語りを通じて私たちの胸に迫つて來る。

——一九二三、四——

舊約宗教と社會主義

石橋智信

マルクスまたレーニンを煩はすまでもなく、近代に於ける社會主義の思想家また實行家が、主として、ユダヤ人であると云ふことは、周く知られた事實である。

そこで近時の社會主義は、ユダヤ人に本來な思想並びに生活に淵源するのであるとさへ、時に噂される。まことであらうか。

一體ユダヤ人に本來な思想並びに生活、それは、自ら表はれて、彼等の宗教書、即ち、舊約全書のうちに遺り藏せられて居るわけである。よつて、吾人は、こゝに、近代ユダヤ人の社會主義と、ユダヤ人本來の思想、生活とを對比すべく、舊約宗教と社會主義とを、試みに、對比して考へたいと思ふのである。

對比上、先づ考へ當るのは、舊約書中の「申命記法」である殊にその律法（申命記法）のうちに豐かに現はれた人道主義的傾向である。即ち、本問題を、先づ、

申命記法の人道主義的傾向

から發足して、考察したいと考へる。

「申命記法」とは、ユダヤの王、ヨシアが、その治世第十八年即ち西暦紀元前六二一年に制定、發布した國法であつて、現在、我々に傳はつて居る舊約全書のうちでは、申命記の第十二章から第二十六章に渉つての部分となつて遺つて居る（但しそれ等のうちにあつても一四ノ一—二一、一六ノ二一—一七ノ一、二三ノ一—八、二四ノ一六、は眞 echt ならざる後代からの追補）

この法律のうちには、人道主義的傾向が著しい。そして、それは、舊約書としての社會主義への近接を最も著しく現はして居るものの一と考へ得ようかと思ふ。

法の人道主義が、對象として居るものは先づレビ人である。無産なるレビ人である。『汝愼め汝が世に生存ふる日の間レビ人を棄つる勿れ』（一二ノ一九）『そはこれは汝等のうちに分なく産業無き者なればなり』（一二ノ一二）と云はれて居る無産なるレビ人である。それに次いでは、なほ、「貧者」「弱者」並びに「寡婦」「孤兒」「さすらひびと」である。それ等に對して、法は極度に人道主義を示して居る。

それは、一面に於ては、人道の義となり、他面に於ては、人道の愛となつて現はれて居る。

法に於ける愛の發露は、例へば、一五ノ一—一〇、の法規に於ても充分に認められる。それは、所謂「放釋の年」を定めた法規である。即ち、法は、憐むべき貧者のため、七年に一度放釋の年なるものを設け、其年至れば、貧者の債務は一切、解き放たれ、富者が有する債權は、（當時に、また、將來に）悉く虛無に棄却せられねばならぬと定めて居るのである。富者が貧者を脅かす督促も、其年には嚴禁されて居る。其年が近いたからとて富者が貧者に貸し澁る樣なことは處罰を以て禁斷されて居るのである。

「汝愼め心に惡しき念を起し、第七年、即ち放釋の年近けりと言ひて汝の貧しき兄弟に目をかけざる勿れ、汝もしこれに何をも與へずして、その人、これが爲めに汝をエホバに訴へなば汝罪を得ん」一五ノ七、一一、

放釋の年を目がけて借りるのに、何の禁斷も無い、無論、處罰は無い。ただ、放釋の年を念うて貸さざるに處罰があるのみである。貧者に對する極度の加護、富者に對する一種の壓迫は、法に鮮かである。

「隣りの葡萄園」に立ち入つて「飽くまで」これを食ふこと、また、「隣りの麥圃」に麥の穗を摘み食ふことは、法（二三ノ二四、二五、）が認むる各人の權利である（無論、わざわざ器を持ち、鎌を手にして夫々に立入ることは禁斷されて居るが）

これに反して富者が貧者の屋内に立入ることを嚴禁した法規は、法に備はつて居る。（二四ノ一〇、一一、）それは、金品の貸借に際して、富者（債權者たるべき者）が貧者（債務者たるべき者）の屋内に入り込んでみづから質物を拉し來るを嚴禁したものである。富者（債權者）は必ず屋外に立つて、貧者（債務者）自身が質物を持ち來るを待てと法定して居るのである。——言ふまでもなく、それは、僅かな債權に對して過大な擔保を拉し

去らんとする富者の強奪を防止せんと試みた法規であるかくまでに細密なる用意が、法の貧者加護の上に現はれて居るのである。

尙ほ、また、擔保物についても「生命をつなぐ」磨臼を質物にとるべからざる禁令（二四ノ六）も見えて居る。また、衣類寢具を質物にとつた場合、

「これが質物を留め置きてねむりに就く可からず、必ず日の入る頃その質物をこれに還すべし、然せば、その人、おのれの上衣を纏ふて、ねむりに就くことを得て、汝を祝せん、これ汝の神エホバの前に於て汝の義となるべし」二四ノ一二、一三、

との法文も備はつて居る。貧者、弱者に對する法の心、人道の愛は、かくまでに細密なる用意を以て法文の上に自ら現はれて居るのである。

法は、また、特に憐むべき孤兒、寡婦、さすらひびとの爲めに、穀物を刈り取る時にも、葡萄を摘み取る時にも、橄欖を打落す時にも、必ず、その一部を遺し與ふ樣、規定して居るのである。（二四ノ一九―二二）

僕、婢に關しても、法は、また、左の如く規定して居る。その一の場合、即ち、主人の下を脫出し、逃亡せる奴僕ある場合について、

「汝のもとに逃げ來れる僕を、その主人にわたす可からず、その者をして汝等のうちにともに居らしめ、汝の一の邑の中にて、これがよしと見て擇ぶ處に住はしむべし、これを虐遇ぐべからず」（二三ノ一五、一六）

と法定して居る。貧者に對して、七年に一度、債務からの放釋を定めたと同樣、僕婢に關して、法は、七年に一度、奴隸からの開放を規定して居る。而も、開放に際して、

「汝これを放ちて去しむる時は、空手にて去しむべからず、汝の群と禾場と搾場の中より贈物を取りてこれが肩に負はすべし…汝おぼゆべし、汝はエジプトの國に奴隸たりしが汝の神エホバ汝を贖ひ出したまへり、この故に我れ、今日この事を汝に命ず」（一五ノ一三―一五、）

と。なほ、日傭人の勞銀は即日、必ず支給さるべきことが、處罰を以て嚴命されて居る。

「當日、これが値をはらふべし、日の入るまで延すべからず、そは貧き者にてその心にこれを慕へばなり、恐らくは、彼れエホバに汝を訴ふるありて汝、罪を獲ん」（二四ノ一五）と

僕、婢と日傭人と、即ち、當時の勞働者問題に對する法の解決は右の如くである。そこに、人道の愛が自ら現はれ出でゝ居

るのを認めるのである。

人道の愛は、法にあつて、また、婦人問題解決の基調をなして居る。

ひと、妻を娶つて後ち、處女ならざりしとの無根の申立てをなし、僞つて其の妻を去らんとする場合、法は規定して、その夫の名譽毀損を處罰し、これに體刑を加へ、罰金を課し、一生その妻を去るを得ざらしめて居る（二二ノ一三―一九）反之、妻に「恥づるところあるを見出」した場合、無論、そこに離婚は成立する。然し、去るに臨んでは、これに對してさへ離婚狀即ち結婚生活證明書を、必ず、添へて（みだらな女と差別し得る樣取計つて）去らしむべきことが規定されて居る（二四ノ一―四）

捕虜の女を娶る場合、先づ、その女をして「髮を剃り、爪を截つて」生家の「父母のために一月の間、哀哭」せしめ、然る後、初めて、妻たり夫たるを得と規定して居る（二一ノ一〇―一四）敵の女にさへ、否、恥づべき所ある女にさへ、そこには只、愛心からの解決が示されて居るのである。

極度の愛は、出征免除の法規に、特に、著しい。

「人あらたに妻を娶りたる時はこれを軍に出すべからず、また何の職務をもこれに任すべからず、その人は一年、家に閒居して、その娶れる妻を慰むべし」（二四ノ五）

と云ひ、また、二〇ノ五―七、

「誰か女と契りて、これを娶らざる者あるか、その人は家に歸り行くべし、恐くは、おのれ戰ひに死て、他の人、これを娶らん、

「誰か新しき家を建てゝ、これに移らざる者あるか、その人は家に歸り行くべし、恐くは、おのれ、戰ひに死て、他の人、これに移らん、

「誰か果物園を作りてその果を食はざる者あるか、その人は家に歸り行くべし、恐くは、おのれ戰ひに死て他の人これを食はん」

婦人、また、一般人に對して、かくも極度の愛を示した法は、更に、動物また植物の愛護の法規となつても現はれて居る。それは、例へば、途に仆れた牛、驢馬を必ず助け起すべきを法定し（二二ノ四）母鳥を雛と共に取るを禁斷し（二二ノ六、七）牛に口籠をかくるを禁令して居る（二五ノ四）又、樹木に對して、猥りに斧鉞を加ふることは、たとへ、戰場に於てたりともこれを禁斷し「田野の樹、豈に、人の如く汝の前に立ちふさがらんや」と述べて居る（二〇ノ一九、二〇）

かくの如く、法は、貧者に對し、弱者に對し寡婦孤兒、レビ

人、さすらひびと、僕、婢、日傭人――一般勞働者、また婦人一般否、一般人、否、動植物一般に對して豐かなる愛を示して居る。法の人道主義的傾向は、また、然し、人道の義となつて表はれて居るのである。

「汝の支族に循ひて士師と官人を立つべし、彼等はまた義しき審判をもて民を審くべし、汝、さばきを枉ぐべからず、人を偏り視るべからず、また賄賂を取るべからず、賄賂は智者の目を暗まし、義者の言を枉ぐべければなり、汝たゞ公義をのみ求むべし、」（一六ノ一九、二〇）

「汝、孤兒またさすらひびとの審判を曲ぐべからず」（二四ノ一七）

と、法は　審判のあくまで公正たらざる可からざることを嚴命して居るのである。また

「汝の家は一は大く、一は小き二種の升斗をおくべからず、唯十分なる公正き升斗を有つべく、また十分なる公正き權衡を有つべし」（二五ノ一三―一五）

と規定して、度量衡の嚴正を期して居る。法が、弱きもの、貧きものに對して、如何な程度にまで、人道の義を起さんと心したかは容易に察知される。王を規定した一節にも

「王となれる者は馬を多く得んとすべからず……また妻を多くその身に有て心を迷はすべからず、また、金銀を己れのために多く蓄ふべからず」（一七ノ一六、一七）

と云ふ法文さへ見へる。

あくまで人道の義を起し、人道の愛をたたへたものが、この申命記法である。

そこには、義の精神、愛の精神、人道的精神が、當時の社會問題一切に徹して解決を試みて居るのである。そして、その解決に於て、吾人は、それが如何に近代的の色彩をさへ帶ぶるかをひたすら驚異せざるを得ないのである――殊に、今を去る二千五百年の律法として。

法の近代的色彩、それは色濃く表はれて、特に、近代社會主義的傾向との近接をさへ示す。

が、此に、兩者の對比に入る前、

法の人道的精神の由つて來つたところ卽ち豫言者の思想

に一瞥を試みたいと考へる。

イスラエルに於て豫言者の由來は、その歷史と共に古い。然し、その著しい現はれは、先づ、豫言者ナタンに於て見られよう。

原始平等の世が破れて、そこにイスラエルに於て、力ある者と力なき者、治者と被治者、國王と國民とが劃然、その差等を示した時、その時、豫言者なるものが、また、己が箇人格を、その社會にくつきり浮び出させたのである。それは、大王、ダビデの時の豫言者、ナタンである。內を治め、外を取り、功成つて得意の境涯に身をやすめた大王は、民を忘れ、神に背き、ひと日、軍の將、ウリヤの妻、バテシバの浴みせるを垣間見て此に道ならぬ思ひを起こし、遂に、その夫をなきものとし、その妻を己れに奪うた。橫暴なる權者を餘所に見る能はずして、豫言者、ナタンは起つた。巧みなる比喩を以て、彼れは、大王を詰つた。即ち、彼れは語つて

「一の邑にふたりの人あり、一は富て、一は貧し、その富める者は甚だ多くの羊と牛とを有てり、されど貧しき者は唯、己れの買て育てたる一の小さき牝羊の外は何をも有たざりき、その牝羊は彼れ及び彼れの子女とともにそだち、彼れの食物を食ひ、彼れの椀に飲み、また、彼れの懷に寢て、彼れにはむすめの如くなりき、時に、一人の旅人、その富める者の許に來りけるが、彼れ、己れの羊と牛をとりて旅人の爲めに烹るを惜みて、かの貧しき人の牝牛を取りて之をおのれに來れる人のために烹たり」(サムエル、後、一二ノ一、以下)

と云ふ。凡てを忘れて、物語に聞きとれて居つたダビデは、忿ひ迫つて叫ふ「エホバは生く、誠にこれをなしたる者は死べきなり」と。すかさず、豫言者は迫まる『汝は其人なり』——ウリヤを殺し、其妻を奪つたが故に劍何時までも汝の家を離るゝことなしと。此に於てか、大王も「我れエホバに罪を犯したり」と懺悔したと傳へられて居る。

當時の社會に在つて唯一權勢者たる王者の不行跡を批判してその當時の社會に劃然たる批判否批難を敢てしたものが、豫言者の先驅、ナタンであつた。

世は複雜に向つた。イスラエルに於て、唯だ一人の權者、即ち國王と、國民とに社會が、二分された時代は去つた。君民の分の外に、階級の別が生じた。而も、新たに興つた力ある階級は、時に、舊來の君民の分をも越えんとする勢ひであつた。「かれらは家に家をたてつらね、田圃に田圃をましくはへて餘地をあまさず、己れひとり國の內に住はん」(ヱザヤ、五ノ八)とし、遂に、鼎の輕重を問はんとさへするのであつた。

かく、階級の別が生じ、富者、强者が下、貧者、弱者を壓し、上王位國君、をも凌がん勢を示し始めたのは、王、ヤラベアム二世の頃(七五〇年前後)に在る。王、ヤラベアムは數々外征の軍を起こし、連戰連勝、ダビデ以來の成功を納めたのである。

此に於てか、戰に從へる强者は、掠奪物、戰利品によつて私腹を肥し、忽ちにして富者として世に臨み「自らの力を以て角を得しにあらずや」（アモス七ノ一三）と誇り傲る。而も、飽くを知らざる彼等、强者、富者は貧者、弱者を虐げて横暴を事とし「田圃を貪りてこれを奪ひ、家を貪りてこれを取り、人を虐げてこれを掠める」（ミカ、二ノ二）彼等は軍に從はざりし者よりその有を奪ひ、その婦女を逐ひ出だし、その子等を虐げる（同、二ノ八、九）而して掠奪せる田圃、所有を己が部下に分ち與ふるのであつた。（同、二ノ四、參照）戰爭閥即ち强者、富者の一階級、此に生じその横暴は、忽ちにして極に達して居つたのである。

彼等「自らは、象牙の牀に臥し、寢臺の上に身を伸ばし、群れの中より羔羊を取り、圏の中より犢牛を取りて食ひ、琴の音にあはせて唱ひ噪ぎ、樂器を作り出だし、大杯をもて酒を飲み最も尊き膏を身に抹り…强暴の坐を近づけ、災禍の日をもて尙ほ遠しと爲す」（アモス六ノ三、—六）のであつた、

彼等が、災禍、神罰の日をもて遠しとなす所以は、畢竟に一言でこれを表現すれば、要するに、彼等が自らの遠祖にアブラハムあり、イサクあり、ヤコブありと安んじ誇つて居つたのにあつたのである。—余は、それ等の遠祖を名づけて『過去のメシア』と呼ぶ。メシアとは Heil-Bringer H il とは消極的に云へば艱難、障害（物質的困苦、精神的の罪障）からの救濟、救極、積極的に云へば、それは福祉、隆興。Heil-Bringer. 即ちメシアとは、消極的に云へば、救世主、然し、積極的に云へば授福者。『過去のメシア』とは物語られたメシア。豫言され、將來に期待された「未來のメシア」ではなく、物語られた已に出現せる「過去のメシア」てふ意である——

創、一二ノ一—三、はアブラハムを「過去のメシア」として物語つて居る。一日、神アブラハムに現れて宣ふるよう。

「我、汝を大なる國民となし、汝を祝み、汝の名を大ならしめん、汝は福祉の基となるべし、我は汝を祝する者を祝し、汝を詛ふものを詛はん、天下の諸の宗族汝によりて福祉を得んと」

即ち、アブラハムは福祉の基、將來滿天下の人性に福祉を齎らす授福者であると、遠き古へ、已に誓はれたと物語つて居るのである。正に、これは、アブラハムを以て『過去のメシア』と物語つて居るのである。物語は紀元前八五〇年頃のヤウイストの筆に成る。

かゝる物語に涵養されて來たのが豫言者出現以前の民衆一般である。かゝる精神に培はれ來つたのが、豫言者當時の民衆

一般である。民衆の中より抜ん出て強者となり富者となつた者どもの精神一般である。過去にアブラハムあり『過去のメシア』福祉の誓ひ、存する以上、福祉は必然である、神寵は絶對である、唱へ、喚げ、災禍の日は遠い、來るべき「エホバの日」それは光明である、希望である、神寵である、福祉である……と有福の身に更に福祉を翹望し、飽くを知らざる心に、更に貧者を虐げ、弱者を壓し、神を蔑し、人を蔑し、「ナザレ人に酒を飲せ、預言者に命じて預言する勿れと云ひ」（アモス二ノ一二）「父子ともに一人の女子に行きて神の聖き名を汚がし、質にとれる衣服を一切の壇の傍に敷きてその上に偃し、罰金をもて得たる酒をその神の家に飲む」（アモス二ノ七、八）のであつた。

果然ベテルの神殿に、野の人、アモスは叫んだ。「禍なる哉、汝等。エホバの日を俟ち望む者。汝等何とて『エホバの日』を望むや。『エホバの日』は昏くして光なく、暗にして耀きなきに非ずや」と（五ノ一八、―二〇）

預言者の第一聲は、民衆の福利思想にまで加へられた一大鐵鎚だつたのである。それは、民衆が「過去のメシア」の誓ひに安んじ、福祉の神寵に醉ひ、みづから不義を行ひ、背神を敢てして、而も、無批判、絶對、無條件に降るべき福祉の日、「エホバの日」を空頼みせるを批判して、そは昏みの日、哀傷の日、神罰の日、亡滅の日なる由を獅子吼した叫びであつた。メシアの幻滅を説いて、亡滅の悲哀を宣した叫びであつた。

「その日には、假令、かれら陰府に掘くだるとも神、その手をもて、これをそこより曳き出し、假令、かれら天によぢ登るとも神、これをそこより曳き下し、……假令、かれらその敵に擄はれゆくとも、神は劍に命じてこれを殺さしめ給ふべし、神はかれらの上にその目を注ぎて災禍をこそ下せ、福祉はこれを下さじ」（九ノ一、―四、參照）と

亡滅、それは不義なるものが必然、うくべき神罰である。「公道を茵蔯に變じ、正義を地に擲つ者」（五ノ七）また、富者に毒せられて「義者を金のために賣り貧者を鞋一足のために賣る」者共（二ノ六）「義者を虐げ賄賂を取り審判の坐に貧者を推し枉ぐ」者共（五ノ一二）のさくべからざる數である。ことに、「虐げ取りし物と奪ひたる物とをその家々に積み蓄ふ」富者ども（三ノ一〇、尙、セバニヤ、一ノ九、參照）「我が（神の）民の肉を食ひ、その皮を剝ぎ、その骨を碎く」強者ども（ミカ三ノ二、三、）のうくべき必然の神罰である。

不義なるものは神罰を脫れ得ぬ。王者と云へども、不義なるに於ては、神罰を避け得ない。神は劍を持つて王、ヤラベアムの家に起ちむかふと宣べられて居る（七ノ九）

福祉は不義なるものの望み得るところでない。福祉は絕對でない。無批判に盲信さるべきものでない。福祉には、條件がある。條件は、正信に基いた正行である。神を求め、善を愛し、惡に遠かつた場合、そこに、初めて神寵が加はり、福祉が降るのである（五ノ四、一四、）然るに、民に正義がない。「弱者を虐げ、貧者を壓し」（四ノ一）惡を愛し善を惡み、神を求めず義を行はない。將來に福祉はあり得ない、咎禍のみである（九ノ四、）

「乙女、イスラエルは仆れたり、復た起ち得ず。かの女は大地に轉ばされたり、扶け起こす者なし」（五ノ二、）

と。不義なる民を批判して、これに將來の亡滅を宣し、亡國を叫んだのがアモスを初め、豫言者一般だつたのである。

が、豫言者は故里にあがめられなかつた。それは

豫言者の思想と民衆の思想

との間に、餘りへだたりがあつたからである。

豫言者は、ただ咎禍を說いた。が、民衆は、ただ福祉を信じた。民衆は「過去のメシア」の誓ひに賴つて將來の福祉を盲信し、現在に對して全然、無批判であつた。反之豫言者は、現在の不義を批判し、將來の福祉を非定し、「過去のメシア」の幻滅を說いたのであつた。豫言者は、かくして、亡國を宣し、民衆は、かくして、興國を信じた。

民衆は、福祉の世、興國の盛運、メシアの時代を翹望し、豫言者は咎禍の日、亡國の悲運、メシアの幻滅に絕望して居つたのである。

ただ愛國の豫言者と、ただ愛國の民衆と、餘りに距たる兩者は、何の觸れ會ふところも無く過ぎた。豫言者は唯だ、神をみつめて、民の心を汲まず、民衆は唯だ福ひを信じて、豫言者の言を解せぬ。

かくて、故里の民は、豫言者を崇めなかつた—別に迫害も爲なかつたが。暫しは沒交涉のまゝに過ぎた。其後、初めて

民衆思想と豫言者思想との調話融合

の途についたのは申命記法である。法は王、ヨシアの制定、發布にかゝるものである。

國君として當時の教養階級に屬した彼れは豫言者の誡めを理解し得た。理解して痛烈に自國の存亡を案じた——國王として彼れは、自國の隆興を民衆にもまして切望して居つたからである。國王、ヨシアこそは、豫言者の憂ひを憂ひとして亡國を恐れ、民衆の望みを望みとして興國を望んだのであつた。此に於

て、彼れは、豫言者が誡めた惡即ち亡國の因を除いて、惡行の果即ち亡國を未然に防がんと心し、此に、惡を除き、禍を濟らす國法を制定、發布したのであつた。國法、それは申命記法に外ならぬ。それは國王、ヨシアが國權を以て民衆と豫言者とを握手せしめた國法である。

申法の由來は右の如くである。

夫故、法に誡むるところは、やがて、豫言者の誡めしところ法の求むるところは、即ち、豫言者の求めしところに外ならぬ法の誡むる强者、富者の不義、横暴、法の求むる人道の義、人道の愛は即ち豫言者の求め、誡しむるところであつたことを知るのである。

さて、さきに、法の求め、誡むるところ、個々近代的の色を帶び、時に、近代社會主義的傾向をさて帶ぶる由を述べた。然らば法に含まれたる

豫言者の思想と近代社會主義的思想と

の對比は如何であらう。

兩者は、時に近接を示す。その一は、王者に對する態度である。然し、豫言者のは、神への不義を詰つて、王者にも及ぼして居るのである。社會の改善を計つて、王者に論じ至つたのとはちがふ。神の正義に照して、現實、實際 real な王に對して下した實際批判である。社會の改善に向つて理論的、抽象的、思想的 ideal に王を斥けるアナーキズムとは全然、異る。實際問題について云へば、却つて、それはモナーキズムを前提して居るのである。故に、申命記法にも、王を規定した一七ノ一四、以下の所謂「王法」Königsgesetz が存するわけなのである。

兩者の近接を示す第二はそれ等が階級に對する態度である。然しこれも、豫言者のは、神の愛を貧者、弱者に慮り、神の義を强者、富者に詰つたのである。階級の差等を排して、社會の改善を計つたのではない。

總じて、豫言者は、社會の改善を希望した社會改革家ではない。むしろ、その多くは、社會に絶望した「亡國」の宣告者であつた。

社會は彼れの目的ではなかつたのである。神が彼れの唯一の目標だつたのではない。

神をみつめた、自己の宗教的信仰が、神の社會批判なりと信ずるところを、やむにやまれぬ思ひに獅子吼したもの、それが即ち、豫言者である。

「獅子吼や、誰れか恐れざらん、
神もの云ひ給ふ、誰れか豫言せざらん」

と豫言者、自らも叫んで居る。

亡國の宣言、それは確かに humain ではない。神に熱して人に疎い。後の豫言者には、そこに、人としての悶えがあつた。にも係らず、神のことばを叫んでやまなかつた『神の口』それが、即ち、豫言者である。

「神、我れをとらへて我れに勝ち給へり、われ日々に人の笑ひとなり、嘲りとなるなり、…エホバのことば、日々に我が恥辱となり、嘲弄となるなり、こゝをもて、我れ重ねてエホバのことを宣べず又その名をもて語らじといへり、されどエホバのことば、我が心にありて、火のわが骨のうちにありて燃るが如くなれば忍ぶにつかれて堪へ難し」(エレミヤ二〇ノ七―九、)

「我れはエホバの御靈によりて能、身に滿ち、公義及び勇氣衷に滿つれば、ヤコブにその愆を示し、イスラエルにその罪を示すことを得」(ミカ、三ノ八、)と。

古への豫言者の心から、神を除き、信仰を除いたものそれが即ち現在のユダヤ人が社會に對する態度ではあるまいか。豫言者の思想から宗教を除いたあの、それは即ち社會主義の思想ではあるまいか。

近代資本主義と猶太人

新　居　格

一

猶太民族が特殊の地歩を現代の世界に於いて占めてゐることは注目に値する。僕の見る所にして誤りがないとすれば猶太民族ほど明瞭に各種のイズムをそれ〴〵の局面に向つて表現しつゝあるものはないであらう。國を失つた事から、國のない事から而して諸國流浪の運命から彼等の國境を無視するコスモポリタリズムになるのも當然であれば、失はれた故國を慕ふて猶太國再建を企てる民族主義運命(デオニズム)のあるのも偶然ではない。國家の境線を認めたくない思想傾向は自ら國家主義を否

定して國際主義若くは社會主義に傾倒せしめる。近世社會主義と猶太人の相關係はその意味に於いて研究の好題目であらう。革命と猶太人の關係に就いて密接なものがあるとするものがあつて猶太人は常に革命の先驅者であると見るもの（佛蘭西の批評家ムレーの如き）さへある。露西亞革命にはたしかに重要な役目を演じたのは事實だが佛蘭西革命には何等の關與がないことは歴史上明かである。だから一概に革命と猶太人を關聯して考へるのは間違つてゐると説くもの（ヤコブス氏「文明に對する猶太人の寄與」）もある。しかし佛蘭西革命は政治革命であつた。ブルジョアジーの王權と貴族にたいする革命であつた。而して經濟革命、第四階級の革命になつてからは猶太人は參與をしてゐるとは明かに云へるであらう。殊に前記したやうに近世社會主義との關係はたしかに密接である。それの例證としてマルクス以下多くの社會主義者を擧げることが出來る。詳細な記叙はしないで直ちに結論的にかう云へる。現存諸民族中猶太人ほど社會主義の着彩の強いものはないであらうと。然らば資本主義との關係は如何、それにたいする何等かの考察を加へやうとするのが本稿の目的である

二

猶太人の資本主義に就いてはゾムバルトに代表的な著書「猶太人と經濟生活」がある。

彼は猶太人の資本主義の一要素として富を擧げ世界中で四千人の百萬長者があるとすれば、そのうち百二十五人は猶太人の名前であると云つて居る。此のことは本當であるかも知れない。それは統計や年鑑に依つて證明も出來さうだ。カステロに依れば倫敦の株式取引所に參與してゐるものの五千百人中、猶太人が三百三十人もあり、コンソル市場は單なる猶太系の仲買人がある計りだとか、紐育のウオール街では多くの株式仲買人が居ると云つた風のことを記叙してある。カステロの前記の叙述は最近のものではないが無論、今日と雖、同樣のことむしろそれ以上のことが云へると思ふ。

國際的資本家としてロートシルド家（赤い楯の意）があつてその一家は英獨佛の諸國にその富の力を示現しつゝある事は今更詳記するにも値しない明白の事であらう。

その他「猶太人のフウズ・フウ」には此種の富者を列擧してあるのを見る。

ドストイエフスキーは千八百八十年に「猶太人と猶太人の銀行とは今日歐羅巴の凡べてのものゝ主人である」と云つて居る。その事は今尚ほ云ひうる事であらう。ゴーダン・ド・ヴイレーヌ

が千九百十九年五月十三日に元老院で云つたことがある。「ロシヤ革命と千九百十四年―十八年の大戰は猶太人以外の諸民族の完全なる支配にたいする世界主義的金融力の重要なる動員狀態であつた。さうした十字街頭に對する優越なる金の十字軍は世界的支配に對する猶太人の猛烈なる翹望に過ぎないのだ」その一例として我々は二人の猶太人を擧げてもいゝ。一人は英國のリーデング卿で他のものはヤコブ・シツフである。前者は英國のために而して後者は獨逸のために、詰り、その何れが各の最負する國のために合衆國に於ける公債戰にかちうるかが重大問題であつたのだ。が英國と聯合國側のために幸があつて五億の公債をかちえたのである。

ゾンバルトは第二に場所の擴張、を指摘する。苟くも住みうる地上である限り、到る處の場所に猶太人は撒在して住んでゐる。例へばロスチヤイルド家でも、ロビゾ家でも、各國や諸都市に生活しつゝある故に、基督教徒ならば辛苦を以てしなければならぬ事を完全に且つ安易になし遂げうるのである。かくて國際的取引、、信用の利用、卓越せる通信等に依つて國際的商業の基礎的條件を持つのである。そのことは植民地的商業をも推進させうる。約言すればこれらは近代經濟生活の發達に對して猶太人の持つ國際主義であつて世界的商業に取つては大建築のクギや鋲の如きものであるとするのだ。

第三は外國性であるとする。その意味は猶太人は云はゞ、到處で殖民人であつた。新しい殖民人である猶太人は常に新しい周圍の狀態のために神速に準備する所がなければならなかつた。即ち新しい關係を新しく來り住む土地につけなければならぬのである。それ故に先住者が暖かい寢床で眠むつてゐる間に、淸鮮な朝風のうちに立て先づ觀察し如何に巢を作くるべきかを考察すべき必要が作つた。

その新しい空氣それが猶太人の經濟的精力を强烈に刺衝すると見るのである。

最後に市民權を制限された事をゾンバルトは論じてある。その論旨を要約すると猶太人は諸國に於いて十分の市民權を附與されなかつた。その職業に、その他の法的權利に。所がこの制限が却つて金の價値を知らしめ資本主義的精神を推進せしめる動因を作つたと云ふのである。

此等の理由は正さに肯定が出來うるであらう。またヤコブスが前記の著書の第七章「猶太人と資本主義」を一讀するものは猶太人の資本主義的開展を十分に知りうるのであるが僕は今玆にさうした猶太人の經濟史を繰返さうとはしたくない。而してたゞ云ふであらう、ゾンバルトの猶太人とその經濟生活に關す

る研究（その他「猶太人の將來」）は精密を極めてゐるかも知れないにした所で彼自身が猶太人である限り、彼の見解がその民族に偏倚する所はないであらうか、ゾンバルト教授は猶太人は古い商慣習による價格の制度を打破して近代の自由競爭に依る價格を導き入れたのだと云ふ。また猶太人は近代國家の發展を支配し、その政策を決する所の近世殖民に相當寄與した。而して大規模に彼等の商業、商品の種類、新しき商品の紹介等によつて國際的取引を神速にしたとも云ふ。しかし他のものの指摘する所に從へば猶太人は産業革命に何の關係もなかつたと結論する。理由はかうだ。ロスチヤイルドがマンチエスターで一製造家としてその行動を始めた時（千七百九十八年）以前に英國で知られた猶太人の製造家はなかつたのである。十八世紀を通じて英國に於ける猶太人は英國全人口の千分の一に過ぎず、しかもその廿分の十九は倫敦に集中してゐたのであつた。所詮彼等は事務家であり、不動産の仲買人であり、行商人であり、質屋であるに過ぎないのではないかと云ふのである。のみならず大陸乃至アメリカに於いても産業主義乃至資本主義の擴張にたいして猶太人の行動した證據はないのであつてゾンバルトの記叙は猶太人の誇張があると非難した。

僕は再び繰返して云ふが猶太人の資本家主義にたいする過去の事實がどうであつたか乃至なかつたかは學者の研究に一任する。僕は現代の猶太人とそれの資本主義に關する交錯を考慮してみたいと思ふだけである。

三

現代に現存する猶太人の總計千三百四十四萬九千百六十二人（千九百二十年の猶太年鑑に據る）内譯、歐洲一千萬三千六百四十七人、亞細亞四十九萬九千六百七十九人、亞弗利加三十八萬八百六十五人、亞米利加二百五十四萬五千五百五十六人濠洲並に附近諸島一萬九千四百十五人更に猶太人の統計家デビス・トリツシユに據ればその總計は幾分の増加を示して千五百四十三萬となつてゐる。その何れに據るとしてもその概數は考え得られる。而して富者の多い事も一般に云はれてゐる如くその貧窮者の多い事も定評がある。その貧富を概括的に地方別すると西歐諸國、亞米利加に富者が多く東歐に貧者の多いと云ふのも周知の事實である。

貧者の多いことその程度の低い事は基督教國の貧者の比ではないのだと研究者は報告してゐる。特にロシヤに於ける猶太人の五分の一は慈善的救濟を必要としたとフイシユベルヒの著書は記載した。プロトウスキーは或る年（千八百九十九年）のオ

デッサに於ける猶太人の窮乏に就いて詳細なる統計を吾人に呈示してゐる。僕はそれらの記叙を全部端折る。たゞ、結論的に惨苦な貧窮が特に東歐の猶太人にあつた事を肯定すればいゝと思ふ。

それに反する西歐並に亞米利加こゝでは特に亞米利加に就いて一言する。ゾンバルト教授は百年位すると今の亞米利加はスラブ人と猶太人とネグロとか多數を占めるであらうと豫言するのであるが前掲の猶太人年鑑（千九百二十年）に依れば紐育は猶太人が百三十五萬人ゐて全人口（五百七十三萬七千）の二割三分、を占めてゐる。で全市に於ける彼等の活動狀態を少し古るい本（千九百十五年版）だがジョン・フオスター・フレーザアの「征服しつゝある猶太人」に依つて描寫すると大様が分かると思ふ。

紐育市では一萬以上の猶太人の裁縫店があつて、使用勞働者十萬、資本金一億弗以上、五百軒の襯衣ジヤケツ製造所があつてそれに使用する勞働婦人四萬、資本金五千弗而してこれらの裁縫の取引から得來たる金額一年六億弗、又同市に於ける猶太人の不動產は價六億弗その銀行家は少くとも四億弗の資本金を抱いてゐる。

株式、生糸貿易、不動產取引は大に彼等のする所で棉花市場は彼等の支配する所であると云ふ。これ以上いろんな職業に就いて又事業に就いての活動を呶々しくかく事は差し控える。同書の報ずる所によれば二百五十人以上の猶太人百萬長者が亞米利加にはゐるのだ相である。

歐羅巴に於ける猶太人の經濟生活は金貸に重要な記錄を止めてゐるがアメリカに於てはそれとは反對に商賣を擴張するために借手になつたことは注意すべき一事實であると云へる。僕は猶太人が過去の歷史に於いて產業革命――それが近世の資本主義組織を發程させたのだが――に關係がなかつたかも知れないにしても近代に於ける商業主義は云ふまでもなく資本主義の一形態となつて居る。その意味で猶太人の資本主義は明かに肯定が出來る。

まして、近代資本主義の所產だと云へる株式、銀行、トラスト合同、株式取引所、投機、等悉く猶太人の作成にかゝる所のものの上に、道を運ばさせゐる以上、歷史的開展が何であれ、資本主義でないとは云へない。

この上に附け加へたい事は猶太人は被雇人として留まられぬ職業をきらい、又肉體的勞働を愉快とせず、賃銀よりも利潤で生活する事を願ひとする性情を強く持つ民族だと學者は云ふ。それが事實だとすればまさしく資本主義者の心理を先天的に所

有するものではないか。」

四

以上は單なる記叙であつた。そして理論でも何でもなかつた僕は僕の抱ける猶太人と資本主義との考察に這入らねばならぬ

近代資本主義それは猶太人が創出したものでは明かにない。しかしながら近代資本主義が猶太人に利益を與えた事は明かであると云へる。近代資本主義にたいして猶太人は二つの立場から對向した。云ふまでもなく資本主義の利益を吸收すべく進んだのと、それの反對位としての社會主義に立脚した見解である後者の場合に代表的人物としてマルクスを擧げていゝ。マルクスを初め一團の猶太人が資本主義組織の増大して行く力に反逆してプロレタリヤを導き決定的反抗を組織し初めたのである。この意味に於ける反資本主義對猶太人の關係は冒頭に記した。それがロシヤの地上に實現したのがボルセヴイキーの革命とされてゐる。ボルセヴイキーの革命は露西亞人の革命か、それとも猶太人の革命かと云ふ疑問が一派の人々にはある。ボルセヴイズムはジユダイズムの一形態に過ぎないとはプロトコール序文に明記してある。ベロツクは其の近著「猶太人問題」のなかに猶太人の復讐的精神が古るいロシヤの社會を顚覆したのだ。「プロレタリヤの獨裁」そうした一黨派の純然たる專制政治も擧げた民族にたいする虐げられた復讐精神の發露である。しかしながらロシヤ革命を猶太人のそうした復讐的意圖でないかのやうにそしてロシヤ人それ自身の革命であるやうに猶太人は裝ふべくつとめはしたがその事は遂にかくし切れなかつたと云つた風の意味の事をかいてある。

マルクスが或時革命とは憎悪の内部的轉向と云つた。憎悪の肯定復讐の是認それはいゝ

又社會主義的生産並に分配のマルクスの原理それも無論吾人の信條することが出來る。しかし吾人のインタアナショナリズムは民族の民族に對する復讐的感情例へばロシヤに於ける一部猶太人の感情のやうなものを包含しないで資本主義の不合理にたいする全世界無産階級の聯結でありたいものである。僕は萬國の勞働者は團結せよと云ふ言葉は極めて結構なモツトーと思ふ。しかしそれが Poale-Jioism の叫ぶやうに萬國の猶太人のプロレタリアは團結せよと云ふ猶太人の無産者のみのインタアナショナリズムであるならばどうであらう。そのインタナショナリズムは純粋なものではありえないと思ふ。

社會主義が資本主義と對敵しナショナリズムとインタアナショナリズムが反位してゐるべきとのみ思ふのは幼穉である。日

本の純粹なるプロレタリヤがロシヤに於ける革命をロシヤのプロレタリアの快然たる勝利としそこに等しきプロレタリアの爲に開かれた清新にして望ましい曙の色である事を信じてゐる。が、それが若しもそのうちに猶太人の不純な（資本主義對社會主義以外の）民族的復讐精神がいくらでも織り込まれてゐるとすれば我々は何と考えるべきであらうか。

インタアナショナリズムが本當のものであれば民族が民族にたいする憎惡が含まれてゐては不愉快でなければならぬ。僕はベロック其他の見解に直ちに同じやうとは斷じて思はぬ。しかし、どれだけ猶太人の民族的復讐精神がロシヤ革命に參加した猶太人の心のなかに又ロシヤ革命そのもの丶要素のなかに含まれてゐるかゐないかを見なければならないのではないか。Po-ale-Zinism の主張を敢てする猶太人の社會主義者に就いて。

僕は猶太人が特殊な民族主義を抱くやうになつた歴史的必然の徑路を知る事が出來る。特殊な民族主義それはパレスタンに集まつてそこに民族的鄉土を持たうとする集中的民族主義ではない。諸國の各地に散在してゐる猶太民族の上で連結された民族主義、それは地理的局面から見れば國際主義の形態を形式に於いて取るのである。かくの如くにして猶太人は相當妙な風に國際主義と民族主義とを交錯さしてゐる

それと同様に猶太人は資本主義と社會主義とを敵對位にのみ見る以上にそこにも妙な交錯を示しつ丶あるのではないか

前にも述べた東歐に於いて虐げられ貧しく苦んだ猶太人がその生活狀態から財産破壞の社會思想に志向を差しむけるのは必然だ。

その運動は云ふまでもなく資本主義を敵として相容れないのであるべきだが同國の資本主義者（西歐並に亞米利加の）の援助は排斥はしなかつたらしい。ニリスのプロトコールス（英譯第四頁）に「ロシヤに於ける猶太人のボルシエビーキの首領達は合衆國及び獨逸に於ける猶太人の銀行によつて支持されてる」と記してあつた。

一方に於ける猶太人の資本家而して片方に於けるロシヤ革命の猶太人の統御しかもこの二つが各それ自身の目的を進めて行く機能はまさに注目に値する現象とは云へないだらうか。

ゾンバルトは戰爭が猶太人の收穫であると云ふ。戰爭、それは何も國際的でなくてもい丶のであらう。階級戰爭でども。猶太人は現在の無政府的混亂が彼等に富を得させる最好の機會を彼等に與へる爲に革命家だと云はれてゐると書いた人もある

その點はドストイエフスキーが曾ても云ふのである。「諸國民の間に社會主義を宣傳しながら、猶太人は彼等の間に位して連結

を持ち、歐羅巴の凡べての富が消散する時でも猶太人の銀行だけは依然として存在しつゝある」

猶太人の革命運動が猶太人の西歐其他の資本家の援助によつてその活動を十分にし、資本家は革命主義者をしてその志を行はしめつゝしかもそれによつて更に富む機會を持ち、その何れも國際主義的活動の如く見えてしかも民族主義的結合點を持つものだと斷言出來ないだらうか。

そうだとすれば猶太人のインタアナショナルは純粹なるプロレタリアの仰望するインタアナショナリズムとは遙かに異るが故に彈劾すべきである。不純なインタアナショナルと淨化されたそれとを考察する必要は日本のプロレタリアにも來るのであらう。その時が近づくにつれて猶太人の問題が緣もゆかりもない日本人にも直接間接の標題となる事と僕は考へるのである。

（完）

何故の侮蔑ぞや

——放浪の個人主義者の群——

廚川白村

一

以前わたしが外國に居た時の話である。おほかた皆點數取りだけでの秀才なのだらう、大學を優等で卒業したとか云ひながら何も識らない數人の『秀才』どもが、集まつての雜談を聞くと、猶太人のことが話頭にのぼつて居た。いやに目をぎよろつかせたフイリピン土人のやうな一人が、黑びかりにてか〳〵させた頭をあげて云ふには、

『あいつは猶太人だよ。鼻の恰好を見てもわかる。』

きいた風な口をきく此フイリピンの好男子の說を、前週日本から着いたばかりの一人が感に入つたやうな顏をして傾聽してゐた。それでまた圖に乘つたのか、今度は、

『あの女もクイチなのだ。』

とフイリピンが云ふ。

いつたい『クイチ』なぞと云ふ言葉は、鈍感で悟りの惡い私には全く解らなかつた。英語にもそんな言葉は無いなと、獨りで考へてゐると、ふと氣が附いた。九と一とで十（Jew）になると云ふろくでもない洒落だ。西人の尻馬に乘つて猶太人の惡口をたゝく日本人が、普通に外國ではよく使ふ言葉なのである。クイチ。なるほど才子とか云ふ日本の俗物が如何にも好んで口にしさうな言葉だと思つた。

二

先づ第一に訊かう、人間として何故に猶太人を非議すべきであるか。更にまた問題をずつとけち臭く小さくして、日本人として、猶太人を侮蔑し嫌惡すべき如何なる理由が存在するのか。

西洋には、宗教上に猶太人を GENTILES と峻別して、之を厭惡すべき昔からの極めて長い歴史的由來があつた。（それさへ吾々から見れば、故なき差別だとしか思はれないが）。日本の歴史は西洋とは全く異ると云ふ事を、ふた言めには口にして誇り顔なる輩までが、猶太人の事を聞きかぢつては、之を侮蔑してゐるのは甚しき滑稽である。いつたい開闢以來日本の歴史のいづくの如何なる部分に、西洋史に見ると同じ放浪のイスラエルの民との接觸交渉の歴史があつたか。あつたと答へ得るならば、云つて見るが可い。

「クイチ」なぞと云ふ言葉を口にして、得意顔なる者どもよ。爾らは西洋史に於ける猶太人の特殊の事情と歴史とを知らないのか。過去現在の事情をも究めずして、唯だ多數西人が言ふところを聞いてその尻馬に乘らうとするのか。爾らには獨立の批判といふ者が無いのであるか。いつも西人の説を聞けば外來思想なぞと非議しつゝある爾らは、何が故に西人の尻馬に乘つて猶太人を侮蔑せんとするのか。

武力を以て露西亞に勝つたと云つて無闇に喜んだ日本人が、あの日露戰爭の財源を如何にして得たかを考へて見るがいい。そのころ紐育の財界に發威を揮へるモオガン財閥を向ふに廻はして戰つて居た銀行家シッフが、日本政府の爲に公債募集を成就したからではなかつたか。わが先帝陛下は、一度ならず二度までも、此猶太人シッフの偉功を賞して勳章を賜はつた。是は恐らくは日本の歴史上、猶太人との唯一の交渉であつたかも知れない。吾等の記憶には猶ほ新なる可き此事實をさへも、日本の秀才とやらは知らないで居るのか。それを知らない程にまで無知なのならば、「クイチ」なぞと云ふ卑俗な言葉を口にしないが可い。

三

遠い昔の話はしばらく問題外におく。先づ近世の哲學史上に最大の巨光を放てる天才スピノザは、猶太人ではなかつたか。米國そのものを發見したコランバスの血管の中には、いま米人が嫌惡しつゝある猶太人の血が混つてゐた事は、史家が明かに證する所ではないか。英國最大の政治家ベカンズフイイルド伯デイスレリは、立派な猶太人ではないか。十九世紀最大の抒情詩人にして、その作は今もなほ若き人の血を湧かしてゐるハインリツヒ・ハイネは、猶太人ではなかつたか。

また更に、過去は問はず、現在二十世紀今日の有様を見よと私は言はう。「文化生活」とか云ふ妙な事をお題目のやうに唱へてゐる者どもが、何よりも難有がる電氣機械の、最大の發明者エデイスン、正眞正銘の猶太人である事を彼らは氣附かずに居るのか。今日世界最大の哲學者のやうに日本人が褒めちぎれるベルグソンが猶太人である事をば知らないのか。猶太の民がほろびたる其祖國をパレステイナに再建すべく、最近三四十年間盛に活動しはじめたかの ZIONIST の運動の爲に、ベルグソンも亦た力を致したと云ふことは、遠き吾等の耳にも傳へられた事實だ。それよりも、この間日本へ來て、邦人が狂喜して歡迎して居たアインスタイン教授もまた、其國籍を瑞西に置ける猶太種である事を知らないのか。

元來猶太人のあたまは、こつ〳〵と丹念に系統的に物を考へ出すやうな鈍重なものではなく、その特色は寧ろ奔放なる直觀的な天才肌である。從つて科學に於ける發明や發見に於ても、或は文學宗教哲學などに於ける活動に於ても、みな驚くべき天才の創造的偉力を發揮し得るのである。

試みに思へ、今日の「やまと民族」といふもの、一人のベルグソンのごとき哲人を、一人のエデイスンのごとき發明家を、一人のアインスタインの如き科學者を出して、世界人類の進步發達に貢獻し得たりと廣言し得るか

むかし封建の世に、暴力の支配によつて強者の特權階級に乘りだしたるサムライとか云ふ者の子孫に生れた私なぞが、おのれの愚鈍に腹立つて自ら責むるとき、かりに夫れを血統の問題に歸するならば、これで猶太人の血の一滴でもが私の血管を流れてゐるならば、今少しは立派な學問も出來、立派な文章も書ける事だらうとまで思ふ。徒にえたいの知れない系圖とか云ふ物を難有がるよりも、西洋人が PARIAH（賤民とでも譯しておかう）のごとくに蔑すめる猶太人であつた方が、事實上人類の進步に貢獻すること遙に大いなる功業を樹て得るのかも知れな

い。

四

人種の差別を置くが爲に、みづから血迷ひ、みづから苦める亞米利加人は、カリフォニアの日本人排斥ばかりではない。第一あの黒人の問題で最も多く惱まされ、次いでは、紐育の大都の人口の殆ど半數を占むる猶太人を、嫌惡し侮蔑する事によつて、また憫笑に値ひすべきディレンマにかゝつて苦しむでゐる。實際、最近では、各方面に於て、猶太人問題が米國社會の難問題となれること日一日と甚しきを見ては、まことに笑止に堪へない。

私には縁の遠い經濟界の話は別として、唯だ學界の有樣だけを見ても、米國の大學から猶太人を全然排斥し去る事が出來るならば、さぞかし滑稽な事になるだらうと思ふ。米國の大學總長や教授のなかには日耳曼猶太種(ジヤマン・ジウス)が澤山に居る。露西亞猶太種(ラシアン・ジウス)も尠くはないだらう。そして是等の學者が、殊に新しい大學に於ては、要路を占めて立派な研究事業を大成しつゝある事實を何人も無視するわけには行くまい。獨逸は嘗てカイゼルの治下に於て頑冥の國であつた。プラシアニズムの御用大學ベルリンでは、猶太人の學者は、如何なる高材逸足の士と雖も、正教授には任命しなかつたと云ふ程の馬鹿らしさであつた。さう云ふ風だから獨逸の各大學でプリフアト・ドツエントなどをしてゐる少壯有爲の士は、米國大學の優遇に惹かれて、どしどし米國に出かけて行く。そこで立派な研究をつゞけて大成してゐる例は決して珍しくはないのである。

ボートを漕ぎボールを投げる遊戯に耽りつゝ、女給の尻を追ひかけながら試驗點數だけを多く取る妙技を心得たる日本の『秀才』どもよ。爾等によつて、「クイチ」と罵られ侮蔑されつゝある猶太人は、爾らよりも遙にすぐれた立派な學問をなしつゝある事を見て、先づみづから恥づるがいゝ。

五

國ほろびて山河ありと云ふ。山河なぞは、どうだつて可い。國ほろびて、人がある。個人が存在する。天才は更にその光輝を增すのだ。云ふまでもなく天才は國よりも大きいからである。エディスンもベルグソンもアインスタインも、今日の世界に於て、僅に國といふやうな者を背景にする事によつて立つてゐる樣なひよろ〱の人間ではないのである。

國ほろびて山河があらうが無からうが、個人は秀で、天才は輝く。猶太の國ほろびて玆に二千載。流竄漂浪の猶太の民がさ

ながら歴史の流れのなかに、水と混じれる油のごとく、あらゆる迫害と侮蔑と虐遇との間にあつて、而かも人類の爲に貢獻したる其偉業を追想せよ。

六

わたくしは個人と云ひ天才と云つた。天才は動もすれば孤立に傾く。猶太の民族は、その素質に於て、恐らくは國家といふが如き有機的な集團生活には適しないのであらう。また國家を組織しない事によつて、侮蔑虐待を受けながらも、却つてあの偉大なる特性を發揮し得たのではないかとさへ思はれる。

かれらには宗廟の神がある。基督降誕に先きだつこと一千年の遠き昔、ダビテ王が建てたる都に建立せられた ZIONの神廟が夫れだ。そこに新たなる國を建つべき最近のZIONI'ZIの運動をも、わたくしは此民族の强い個人主義の素質から考へて、之を猶太人のために取らざるのみならず、世界人類のためにも無くもがなと思ふ。否、將來に於て斯くのごときザイオニズムの國家の成立と發達とをさへも、私は疑はんと欲する者である。

猶太の國家再建は今までも幾たびか企圖せられたが、すべてが皆失敗であつた。また宗教に於ても、かれらは基督教徒や佛教徒のやうな大教團を有しては居ない。今日世界の各地に分布する猶太人の數は千五百萬だと云はれてゐるが、彼等はたとひ『タルムッド』をよみ、會堂や法師を有するとも、かの法主とか法王とか云ふ時代錯誤の者によつて統一せられた教團組織なぞを毫も維持しては居ない。そこが面白いところだ。頭に徹し尾に徹して彼等は個人主義者である。そこに彼等の偉大があり壯美がある。

猶太人を以て私が個人主義者なりと云ふとき、或者は難じて云ふであらう。紐育に於ても倫敦に於ても、すべての大都に於て、猶太人は特種の集團をなし、かの所謂 GHETTOと稱する部落を形づくり、Jewish quartersをなして群居してゐるではないか。そして金錢にきたなく、貪欲飽くを知らざる金貸しを業とし、汚穢の生活職業を營みつつあるに非ずや。他の歐洲人とは婚姻をも通ぜざるの事實を如何に觀るべきかと。

此問ひに對して私は言はう。常に迫害せられ排斥せられたる者が、苦しみの餘り互に相倚り相抱いて、自ら扶け自ら衞るべく團結するのは當然の成行きではないか。また猶太人が金錢にいやしく、やゝもすれば黄金を武器として基督教徒を惱ますシャイロックの多きを難ずる者もあるが、是とても迫害虐待の結果が、おのづからここに至らしめた者に他ならぬ事を思はねばならぬ。迫害と侮蔑とを受くる人々に取つて、その人が若し偉

大なる天才や强き個性を有せざる限りは、はかなき一種の自衛**の道具として先づ金錢を求め、黄金力によつて辛うじて己れを**維持しやうとするのは、弱者として避けがたき自然の事である。猶太人のうちでも、上に述べたやうな偉大な天才の人々は激烈なる迫害あるにも拘はらず、學界にも思想界にもまた政治界に於てさへ、自由に派手やかに雄飛し得たのであつたが、そのほかの多數者は、勢ひ金錢を以ておのが身の安全を謀る唯一の金城鐵壁とたのむ他はなかつたのだ。之によらなければ、自己の生存權をさへも危くされるに至るからである。現に歐洲中世の或る時期に於ては、猶太人の土地所有は嚴禁せられ、上品な職業は其門戸をさへ彼等の前には鎖された。その結果として、彼等は唯だ金錢を貯へ利息を貪ぼる事によつて、辛うじて己の生存權を主張するのほか道は無かつた。やがて習ひは性となつて、多くの貪慾卑吝の徒を生ずるに至つたのは寧ろ同情に値ひすべき現象だ。彼等をしてここに到らしめた迫害者である基督教徒をこそ、寧ろ大いに惡むべく咎むべき者ではないかと思ふ。

私は世に多き卑吝の徒を見、後生大事と小金なぞ貯ふる者を見るごとに思ふ、かれ等は實は憫れむべき弱者なのだ。天禀に乏しく個性の力弱き者が、果敢なき自衛の手段として蓄財はまさに唯一の自衛策であらうと。よそ事ではない、日本の德川時代の町人根性といふ者を回顧せよ。武士階級の爲にながく壓迫せられたる者の**僻み根性と貪慾卑吝の習俗、これは果して誰の**罪であつたか。今日なほ京阪地方なぞの商人に最も多き俗惡低劣なる根性は、士農工商の階級制時代に於て、幾百年間の長きにわたつて育成せられたる習性ではないか。猶太人根性ではないか。鑵詰に石をつめて暴富をつみ、商品の取引に詐欺手段を用ゆる事を平氣でやる連中は、みづから何の資格あつて他の民族を「クイチ」などと侮辱するのであるか。日本人中にこそ此惡性の「クイチ」が極めて多い事を、なぜ自ら反省しないのであるか。

七

資本主義の社會を改造しようとする思想、また露西亞のボルシエギズムなどの中心人物に、猶太人が多いからと云つて、近頃は猶太人の世界破壞の陰謀などと、飛んでもない妙な事を西洋でも云ひ出した。猶太人の憎惡する基督教徒の Anti-Semit一派が、今や保守的なる反動思想と野合するに至つて、かくの如き流言蜚語をまで、まことしやかに傳ふる者あるに至つては寧ろ滑稽の感がある。世界大戰以來の歐洲人は、悲慘なる大事

伴におびえたる後の人心にありがちな多くの疑心暗鬼に煩はされて、色々な bogy を夢みた。猶太人の陰謀などと云ふのも、恐らくは薄を幽靈だと見る者の言ひ草に過ぎないであらう。殊に日本などでは、西洋の昔の本もろくに讀まず何も知らない者が、かの中世以來の freemason の結社をさへ奇怪至極なる意味に解釋して、さきに吉野作造博士の一喝を喰つて一言も無かつた者なぞがあつた。世界破壞の猶太人の陰謀なぞと云ふ流言は、ちかごろ米國に益々盛な The Ku Klux Klan の秘密結社ほどにも、吾等の注目に價ひしない馬鹿げ切つた話であらう。

あくまでも個人主義的傾向の猶太人に、そんな大きな團體的な破壞運動なぞが出來る筈は無いと云ふ明白なる理由のほかにこの資本主義破壞の運動と猶太人との關係に就ては、近代の歐洲史上に極めて興味ある現象が見られると思ふ

露西亞赤化の巨頭に猶太人が多いばかりではない。資本主義破壞の思想の第一人者マルクスも猶太人なれば、ラツサアルも猶太人だ。それと同時に、――また之と對照して、十九世紀以來、所謂資本主義の根本となり中心となつて此資本主義を發達せしめたる者も、また同じく猶太人であつたと云ふ事實を見るのは、極めて面白い現象ではないか。

歐洲の封建時代が去つて近世の産業時代に遷るとき、機械工業のために要する巨額の資本は先づ誰の手から出て居たか。この大資本を猶太人の金穴に仰ぐの他なかつた事は、ちようど日本に於て武士階級が廢れると共に、町人階級が今日のブルジョアジイの中心となつたのと少しも異る所はなかつた。なかにも前世紀の初めから、其巨富の威力によつて歐洲列國の政府をして叩頭せしめた「赤き楯の一家（ロートシイルド）」（英語で云ふロスチャイルド）ごとき、獨逸のフランクフルト・アム・マインや墺都維納を本家として、別家はおの／＼英佛伊諸國の金權を左右し、はては海を越えて米國にまでも其偉力を伸ばさうとした。ナポレオン戰爭以來、すべて今日の資本主義的國家の基礎をつくれる戰爭ごとに、その軍資は多く猶太人の財嚢から出たものであつた。各國は爭つてこれらの猶太人を貴族に列した。

おもへば資本主義破壞の思想家も猶太人ではあるが、資本主義確立の功勞者もまた猶太人であつた。そこに何等かの人種的民族的意味があらうなどとは、獨立の批判力なき痴愚無識の徒にあらざる限り、考へ得べからざる事ではないか。

かの「悪魔の宗教」の徒である基督教の一部の僧侶たちが、一方、新思想に反抗して、自己に都合よき反動思想を煽らんが爲に、また他の一方、宗教上の反感から生ずる Anti-Semitism を之に利用して、世界破壞の陰謀だなぞといふ途轍もない流言

を製造し、いまや神經衰弱に陷りつつある世界の人心に、子供だましの old bogey を見せようとする者ではなからうか。笑ふべきかな。

猶太人は飽くまでも個人主義的傾向が強いために、すべてが組織的に集團的に行はれる今日の經濟界では、資本家としても既にその勢力を失墜しつつあるのだ。故シッフの財閥のごときさへも、今では既に日露戰爭ごろの勢力はないと聞く。世界顚覆などといふ馬鹿々々しい大陰謀が、かくの如き個人主義者によつて行はれ得るものではないと、私が主張する所以である。

八

いつたい猶太人々々と、西洋人ばかりか、何の緣故もない日本人までが、侮蔑を以て此語を口にしてゐるが、さて「猶太人とは何ぞや」と訊かれると、人種學の上からは、嚴密な返答は出來ないのである。昔のヒブルウ人の子孫だと云ふが、さて今日の實際に就て、科學者が調べて見ると、骨格や或は眼や髪の色なども全く判別し難い者になつてゐるさうだ。その分布の系統から云ふと、歐洲の猶太人には二種類ある。即ち一は ASHKENAZIM といふので、獨逸種露西亞種の猶太人は之に屬する。他の一は、之よりもずつと數が少く、SEPHARDIM と稱して西班牙葡萄牙地方に移住したものである。英吉利、ことに倫敦に居るのは此一派で、――ディスレリの如き大政治家は、この最も優秀な西班牙系統から出たものだらうが、――バルカンから和蘭エルサレムなどに居るのが即ち此一派だ。この二つは、頭蓋の形などにも相異があり、また俗に猶太人の特徴なりとして指摘せられる Jewish nose とか Semitic nose とか云ふ鼻の形も、歐洲（即ち歐洲から移住した米國の方も）の猶太人には寧ろ稀に見られるものだ。鼻の形の特徴がないからとて猶太人ではないと言へないと同じく、また古代の中央亞細亞の高原に居た非セミティク人種たとへばヒッタイト族などに、あの通りの形の鼻が多いのである。さう云ふた所から色々と研究して此道の學者は結論していふ。猶太人とは決して一人種 a race を云ふのではない、むしろ今日の英人とか米人とか獨逸人とか云ふと同じく、a people を指すものだと見る方が正しいと。

このあひだ私は右の如き論旨を或外國雜誌（米國の、ネイシャン本年二月二十一日發行、一一六卷、三〇〇七號參照）の紙上、デイクソン氏の所說で讀んだのであるが、要するに猶太人の人種的特徵と云はれる者は、今日科學的には俄に斷定できない者であり、また氣質特性と云ふやうな者に同一傾向ありとするならば、そは到る所で漂浪の亡國民として虐待排斥を受けるが爲に、罪に

同一の境遇が同一の特徴を育成した者だと見る可きではなからうか。

人種的特徴の話の序に思ひ出すのは、猶太人の女には美人が多いと云ふ說である。スコット一代の名作『アイヴァンホ』を讀んで、猶太人アイザックの娘レベッカの氣高さと美しさとに深大なる感激を得ないやうな者は、人間ではないと私は言はう。『これは猶太の女ではない、天使である』と云ふあの作中の言葉も、また忘れがたき者であらう。とにかく女には美人が多く男には天才が多いとすれば、「クイチ」だらうが何だらうが、生意氣な口をきく日本の大學の秀才とやらは引込んで居て然るべきではないか。

九、

スコットがあの美しい小說を書いたのは、固より虐げられた猶太人に對する燃ゆるが如き同情からであつたらうが、小說界の事を云ふとき、このごろしきりに『獸人』や『酒場』なぞの飜譯を歡迎する日本の讀書界は、猶太人に對する故なき迫害に憤激し、創作の筆をすてて敢然として正義の爲に起つた文豪ゾラを忘れてはならない。それはあの有名なドレフユス事件に於てゞあつた。猶太人であるドレフユス大尉に賣國奴の罪名を負はせて獄に投じた佛蘭西政府に向つて、ゾラは手きびしく抗議したのみか、激越の辭を以て大統領に宛てた公開狀をさへ發表した。のちにクレマンソオが活躍したのも此事件に於てゞあつた。當時佛蘭西の國を擧げて反猶太熱の盛んなとき、憤然として身を賭してまで猶太人のために正義を叫んだ小說家ゾラの氣慨は、かれの偉大なる文藝作品のほかに、猶太人問題には永久忘るべからさる感銘を世界の人心に與へたのであつた。

さてまた轉じて古來文藝の名作に現はれた猶太人の話を考へて見ると、英文學には、古くチョオサアの『カンタベリ物語』のなかの「尼の話」に出てゐる幼兒虐殺の慘話のほか、貪慾非道の守錢奴バラバスを主人公にしてマアロオが作つた悲劇『モルタの猶太人』"Jew of Malta"があり、沙翁の『ヱニスの商人』と並稱せられる程までに名高い。また小說では、ディケンズの『オリヴア・トキスト』の憐れな物語にフエイギンといふ猶太人の泥棒の描寫など、之等の作を讀んで見ると、基督教徒によつて此民族が、全く惡魔の化身のやうに取り扱はれてゐる事がつくづく感じられると思ふ。

英文學には、身みづから猶太人にして猶太人を描いて成功した二大作家がある。一はディスレリ。大政治家にして、また政治小說に於て不朽の名をなした稀世の天才だ。その作『カニン

ズビ』」Coningsby」は當時の英國政界を諷して、シドオニアといふ財政家に猶太人を描いて自己辯護をした。此小説は今から四十年も前に、既に立派な日本譯が出來てゐる。他の一人はいま現存の大作家、英國文壇の大元老として今日なほ筆を休めない猶太人イズレイル・ザングヰル Israel Zangwill その人である「ゲトオ」部落の描寫に於て、彼は獨逸のフランツオスや佛蘭西のベルンシュタインの如き作家をも凌駕してゐる。

才人ゆくところとして可ならざるなきザングヰル、身は猶太人として生れ、宗教運動にも婦人參政問題にも萬丈の氣を吐いたが、彼がはじめて英吉利の文壇を驚動したのは、今から二十年前に出した『ゲトオ部落の兒』Children of the Ghetto (1892)の大作によつてゞあつた。倫敦の猶太人部落を描き、その貧民生活の慘状を寫すと共に、猶太の富豪の内状をも、精細微妙を極めて描寫し得たその寫實の筆のあとには、作者がおのれの同族に對する精透の觀察と燃ゆるが如き熱情とを嘆稱しない者はないのであつた。この作の成功に力を得てのち、彼は更に筆を短篇に試みて、今は『闇を行く人々』They that Walk in Darkness(1889)の一卷に收められた幾多の短篇小説に、此部落を色々な側面から活寫した。今から十四五年前、かれはまたその才筆を劇の方面に用ひて『るつぼ』The Melting Pot (1908) の作を書き、英米の劇場に上演せられて絶大の好評を博した。これはあの有名な露西亞のキシネフの猶太人虐殺から逃れて米國の紐育に亡命して來た猶太の音樂家デイギツトと云ふ男が、基督教徒の女との美しい戀物語を主題としたもの。米國は人種混淆の「るつぼ」（メルチング・ポット）と云はれる國だ。差別待遇のためにかなはじと見えた戀も、この米國と云ふ所で神の「るつぼ」に熔かされ、人種的反感を超越して、戀愛は遂にその至上の榮光に輝く。猶太人と基督教徒の女との戀を題材にした近代劇では、和蘭のヘルマン・ハイエルマンスの作『部落』（ゲトウ）も有名なやうだが、讀んで美しく壯快な感じのする點では、ザングヰルの此作の方が遙にすぐれてゐる。曾てメンデルスゾオンを生んだ猶太人は、この二つの近代劇に於ても、兩方ともに音樂家として描かれてゐるから面白いと思ふ。

十

最近に英吉利の文壇で、猶太人を題目として世の注目を惹いた作物が二つある。一はゴルズワアジイ新作の劇『ロイアルテイーズ』で、これは倫敦に次いで紐育でも上場せられ、共に非常な喝采を博した。或る一部の人が評して言ふやうな反猶太思想（アンチ・セミズム）の作品とは思はれない。この作者の事だからその態度は飽く

までも冷靜にして不偏なものだ。デ・レギスと云ふ金持ちの若い猶太人が千磅の金を盜まれ、遂にそれを盜んだダンシイ大尉がピストルで自殺をする迄の徑路は、之を舞臺で見たならば探偵小說のやうな觀があるだらうが、作者の描かうとした所が、英國の社會に於ける猶太人の生活の極めて皮肉な一面にある事は云ふ迄もない。但し是は劇としての創作であるが、他の一つの作は直接猶太人問題に關する議論として紹介せらるべきベロツクの近業である。

ヒレイア・ベロツクはもと佛蘭西の生れ。英國に歸化して嘗て政界に活動し、その流麗暢達の散文によつて、今エツセイストとして英國文壇の巨星の一人である。昨年彼が公にした新著『猶太人』の一卷は、このごろ英米で喧しくなつた所謂「猶太《ヂユホツシユ》危禍《ペリル》」（かつて日本人問題で黃《イエロ》禍の語が行はれたと同じく）に對する彼の警告だと見るべきだ。基督教國民の間に在つて、いつまでも水に泥つた油のやうに、永久に同化し難い猶太人は、結局世界の禍であると云つて、詳しく其特性を論述して、さて結論に云ふ。この禍を除くには二つの道あるのみだ。第一の法は排除《エリミネーシヨン》であるが、是は德義上おもしろくないのみか、實行も困難だ。第二は隔離集合《セグレゲイシヨン》で、ベロツクは強く此方を主張してゐる。即ち隔離と云つても、さきに大戰中に英國の外交家が肩を持つてやつた樣なザイオニズムの王國再建などをするのではなく、唯だ西歐諸國に居る猶太人を各々一團とみとめて、基督教徒との間に、相互の權利平等を確認する約定を結び、之によつて軋轢を少くしようと言ふのである。つまり獨立の別の集團として了つて、之と對等の約定をきめて隔離の法を取らうと云ふのだ。此案に就ては倫敦の言論界にも贊否區々の論は喧しかつたが、「スペクテイタ」の如きは是が爲に非公式の調査委員を設けようとまで論じた。とにかくベロツクの此近業は、米國に於て最近に自動車王フオオドが巨萬の財を擲つて騷ぎ立ててゐる猶太人排斥運動と共に、大西洋の兩岸に於て、最も注目すべき物であつた。

序ながら、ベロツクの此論に對して、さきに私が本誌の二月號で云つたイング僧正が、直に一矢を酬いたのは面白い。「スタンダアド」新聞に出たイングの文が、他の雜誌に轉載されたのを私は讀んだのである。先日わが日本で加特力教の使節問題で出た議論を想ひ出すと興味があるから、その一節を茲に引用する。イングは云ふ。

ベロツク氏は佛人で加特力教徒だから、猶太人問題に關しても、大陸風な見かたをしてゐる。各國はみな其國相應な猶太人を得てゐるので、英國には猶太人中の最良な者が來てゐる。そして仲間の市民

として正しく遇せられてゐるのだから、問題はない。善良なる英國人として我國に居住してゐる者を、わざ〳〵其人種的起源を忘れまいとして、差別待遇するなぞといふ、ベロック氏の所説は、英國の傳統に反する者である。――――殊にまた氏は此問題の宗教的方面に就ては言つてゐないやうであるが、わざと之を省略した動機なぞも推察せられる。猶太人はその忠誠の精神を二つにすると云つて氏は反對するが、如何にもさう云ふ事はあり得るし、實際またある事だ。即ちおのれの居住せる國に忠誠を盡すよりも、おのが民族に對する義務に重きを置く事は、往々にして事實だ。しかし是と同樣な事が英國では或る他の一派の人々に就ては否定すべからざる實際ではないか。――――即ちベロック氏その人と同一宗門の人たちが夫れだ。羅馬加特力教の人たちは英國史上に於て猶太人よりも遙に多く厄介な市民であつたのだ。

日本で羅馬教の法王至上主義だと云つてゐた同じ點を捉へて、この僧正は猛烈にベロックを皮肉つたものである。

十一

人間到るところ青山ありと、口には立派な事を言ひながら、祖先の墳墓の番人をしてかぢり附いてゐるやうな人種と、全く趣を異にした者が猶太人である。世界に國土なき放浪の民族、その優秀なる者は優秀なる國に行き、劣等なる者は劣小の國に移る。右に引用したイング僧正の文中にもある如く、英國には猶太人中の比較的優秀なる者が集まると云ふので、"Every country gets the Jews that it deserves" とは、西洋での通語になつてゐるのだから面白い。ガリシアやウクライナあたりに居る猶太人と、英佛獨諸國の夫れとを較べれば、殆ど月鼈の差があるのを見ても知られるだらう。

差別待遇も極端なのを見ると、失笑を禁ぜざらしむる程に滑稽なものだ。米國の南部では黑人を擯斥して、停車場の待合室から電車の箱に至るまで『黑人入るべからず』と書いて、白人用のとは區別がしてある。以前は輕井澤の避暑地で、米國の宣教師どもが自分たちの運動場に立札をして『日本人入るべからず』とやつたのは馬鹿々々しかつた。しかし西洋で、此猶太人に對する差別待遇に就て、夏のさかり場などに出る掲示として洒落に傳へられてゐる文句がある。曰く、『肺病人と犬と猶太人と、入る可からず。』

思へば思ふほど猶太人は、不思議な民族である。國土は持たないが、國語は持つてゐる。それだけでも確に歴史上の奇蹟だ。かれらの存在そのものが、――また國語の獨立それ自らが、基督教國民に對する痛快なる抗議ではないか。もとのヒブルウ語が、民族漂浪の間に更に他の諸國の語と相交つて變化し、今日では Yiddish と呼ばれる彼等の國語が儼存する。もと〳〵かれらは學藝を重んじ文才にも長けてゐる。從つて最近五六十年間

にこのイツデイシュの語によつて書かれた立派な文學をさへも有するに至つた。東歐諸國や倫敦や亞米利加に居住せる猶太人間に廣く讀まれるイツデイシュの作品は、殊に戯曲に於て秀拔の作が多い。その戯曲集が一冊英譯も出來てゐるが、更にそれを日本語に誰かが重譯した本の廣告を、こないだも新聞紙上で私は見たかのやうに記憶してゐる。

考へて見ると、今まで全然沒交渉であつた猶太人の問題を遂に日本までが氣にするやうになつた事は、たしかに日本が世界的になつたが爲であらう。喜ぶべきだ。心配するにも及ばないだらう。佛蘭西のルール占領が忽ちにして日本の錢や染料の相場に影響する今の時節に於て、それは寧ろ當然の事かも知れない。日本にも之からは、極めて怪しげなるアンテイ、セミテイズムの聲を、そこいらに聞く事であらう。何と云つても何と騷いでも　世界はその動く所に向つて動いて行く。

（了）



支倉六右衞門

渡邊庫輔

その一

二月四日の朝ポプラ倶樂部を曲つて魚眠洞に室生氏を訪れた。室生氏とは既に面識がある。が、其家を訪ふは未だなかつた。室生氏とわたしは火鉢を中にして對坐した。公務を持たぬものの常として交うるものは雜談である。雜談であるが必ずしも無用の言辭のみを弄するものでない。

既にわたしは吉利支丹文明に關して文を作り是を諸雜誌上に發表した。わたしが吉利支丹文明を調べたのは夫を以て實用の學に供する爲めでなく單に趣味であつた。いや、讀書を好むわたしが、涉獵の內に得た期せざる所産であつた。然るに今日賣文を以て渡世するに至り嘗て趣味と心得しものを糊口の計に代ふることとなつた。

室生氏の故郷金澤に桂井未央なる老好事家が居られる。桂井氏は室生氏に勸めて、支倉六衞門の行動を小說に作つたら如何かといはれたさうである。支倉はわたしたちの話題に上つた。支倉の名はわたしも知つて居る。が、心を係らせて支倉を知らうと考へたことはなかつた。いづれは支倉に關して文を作らうと思つたが、夫は後廻しにして未だ遠いとして居た。

支倉の名が世に知られたのは明治九年後である。是より先維新前に大槻玄澤作るところの金城祕韞があるが、公表したといふべきでなく考證も未だ至らない。明治六年特命全權大使岩倉具視の一行はヴェニスに滯在してフラリ古文書館を觀覽した。一行の中に福地櫻痴も居た。天正年間に於ける九州三侯使節並に伊達侯使節の文書數葉は此時發見されたのである。歸國の後福地は此二事に就て人に質した。人はいづれも知るところがなかつたといふ。ここに於てか福地はかういつた。嘗て西歐に遁走せるものが名を伊達氏の家臣にとつたのではあるまいか。又他

の人はかういつた。豐臣氏の遺黨の動作ではあるまいか。このことは太政官刊行するところの歐米回覽實記に見えて居る。此の如き蒙が啓かれたのは先記の如く明治九年である。此年六月先帝陛下は東北地方へ巡幸あそばされた。六月二十九日に聖駕は時の仙臺博覽會場に向はせられた。伊達侯使節の關係古文書は此時叡覽遊ばされたのである。是らの古文書は聖駕の帝都へ還御遊ばされた後東京に郵送された。時の右府岩倉は後の辨理公使平井希昌に命じて、是の一書を編纂せしめた。すなはち平井の撰するものは伊達政宗歐南遣使考である。

室生氏は小説を作らないと云ふ。そこで椎井氏が室生氏に示した書冊三四を借りて歸つた。是がわたしをして本稿を作らするに至つた所以である。

支倉六右衛門、名は常長父は長經である。はじめ與市を稱し改めて五郎左衛門を稱し更に改めて六右衛門を稱した。天正十九年に九戸修理亮政實並に稗貫備中守重綱の亂があつた。此の時與市として從軍した。同じく天正十九年に政宗が加美郡宮崎の城を攻めた。此時五郎左衛門として從軍した。同じく天正十九年に桃生郡深合莊糠塚に禁錮されて居た葛西一揆の殘黨を誅した。時の關白豐臣秀次の命を受けたのである。此時既に六右衛門を稱して居た。父は山口飛彈守常成である。入つて叔父支倉紀伊守時正の嗣となつた。支倉氏はもと平姓である。伊達氏鼻祖のころから其世臣となり信夫郡山口村並に柴田郡支倉村を所領した。其氏を支倉と稱した所以である。家祿千二百石である。

支倉が羅馬に行つたのは主君政宗の使命である。又政宗をして此動機を作らしたものは、伴天連ソテロの獻言である。わたしは支倉の羅馬行を叙するに先だつて、政宗並にソテロに就て次に筆墨を費す積りである。

その二

政宗の父は左京太夫輝宗であり母は最上義光の姉である。永祿十年八月三日に生れ幼名を梵天丸と稱した。長するに及んで父輝宗は爲めに首服を加へ名を政宗と命じた。政宗は伊達氏九世の名であつて、今遠祖の名を襲うたのである。輝宗は伊達氏十六世である。天正十二年に至り輝宗は封を政宗に傳へ居領米澤を治せしめた。米澤は當時長井の庄といふ。現在の米澤附近にある所謂霞城が其舊城趾である。伊達氏はもと藤原姓である。鼻祖朝宗の時源爲義の外孫となり伊達郡に居住した。よつて其氏となした。伊達は現訓ダテであるが古訓イダテである。

政宗が左京太夫に任ぜられたのは天正十四年である。豐臣秀

吉が遂に北條氏政を小田原に征したのは是より後天正十八年である。政宗が封を受けたころは未だ亂世であつた。

會津に蘆名氏、山形に最上氏、相馬に相馬氏、三春に田村氏須加川に二階堂氏、磐城に磐城氏、白川に白川氏、石川に石川氏、二本松に畠山氏、中新田に大崎氏、登米に葛西氏、水戸に佐竹氏、是らは夫夫日本北部の地に割據して居たのである。年少の政宗は是等の諸氏と相鬪はなければならなかつた。文を作るは現世受樂の道であるまい。纔かに自らの心を慰するばかりである。あたかも流竄の業士の如きものである。が、糊口の爲めには夫を賣らねばならぬ。わたしの如き賤業の徒が一國の城主を忖度し、且つ文を以て武に比するは世の譏を受けるであらうけれども、政宗の相鬪ふに至つたは今日渡邊庫輔が賣文する如きものではあるまいか。一笑。

さて秀吉の小田原滯陣に於て政宗は德川家康から屢使書を受けた。家康は秀吉の軍を勞ふべきを勸めたのである。政宗は是を諸臣に下して議せしめた。既に日本北部に覇でありながら何ぞ秀吉如きに辭をひくうせんや。是は伊達成實の言である。秀吉が天下の兵を率ゐて來るは蒼蠅の拂へども盡きさるが如きものであらう。孤城を以て天下を敵とするは坐して天亡を待つものではあるまいか。是は片倉景綱の言である。戰は必ず地の理と人の和を要する。政宗が片倉の言を容れたのは、よく己を知るものであらう。政宗は百騎を從へて間行し箱根に至つて謁を求めた。越後、信濃、甲斐、これらの地を經て箱根に至つたのである。政宗は出發に際して、主戰論者たる成實に城を守らしめ平和論者たる景綱を行に從はしめた。途にして從士の逃亡するもの相踵ぎ、箱根に達するの日は僅僅三十餘騎であつた。時に天正十八年六月二日である。

秀吉と政宗の會合は、當時の一時局に轉機を與へたものであらう。その斡旋者が家康であつたことも亦考へねばならぬ。秀吉は是より先屢書を寄せて政宗を招いた。秀吉の書を寄せたのは國內平定を急いだからである。政宗の從はなかつたのは自ら持すること高く尚ほ亂の鎭まらなかつたからである。當時秀吉は關白と雖も祿高二百萬石であつた。政宗は祖父晴宗父輝宗が足利將軍から偏諱を受け且つ奧州探題に封ぜられた名望を負ふて居る。伊達氏の奧州探題たるは既に年久しく。豐臣氏の關白たるは未だ淺い。秀吉の任官は天正十三年である。家康が仲介に立つたのは又自らの位置を知るからであらう。政宗は其箱根に至るに際して言を拜官御禮に托した。自ら高く持するからであるまいか。途に於ては兵を率ゐなかつた。秀吉に遠慮して遲參の責を免るるためではあるまいか。

政宗の謁するに及んで秀吉は輙く是を見ない。人をして言はしめた。擅に會津を取りしは如何なる譯ぞ。會津は葦名氏の所領である。天正十七年五月に政宗は葦名義廣と戰ひ同じく天正十七年六月五日に義廣を討つた。義廣は奔つて常陸に至り佐竹氏に依つた。義廣はもと佐竹氏である。入つて葦名氏の嗣となつた。葦名氏は先に伊達氏を入れて嗣となすべきを約した。佐竹氏は是を妨げ義廣を勸めて嗣となさしめた。此の如きは當時の勢力伸張法の一斷層面を暴露したのである。現世に於ける一部の華族と富豪の關係を想見せしむるではないか。政宗は葦名氏の違約を責めやうと欲した。たまたま小濱の城主大內定綱は政宗に反した。大內氏伊達氏累世の臣である。葦名、畠山、佐竹、相馬、これらの諸氏は大內氏を助けた。政宗夫人の生家たる田村氏は伊達氏を助けた。畠山義繼は奸計を以て輝宗を刺した。葦名、佐竹、上杉、これらの諸氏は夙に石田三成と通じて政宗を秀吉に讒した。秀吉は常に平かでない。すなはち人をして問はしめたのである。さらば、父の仇を援くるゆゑに伐つたのでござる。政宗はさう答へた。政宗は歸國の際神原式部太夫を介して家康から金を借りた。僅少の兵を率ゐて小田原に赴き金に不足したからである、

秀吉が政宗に關する讒をきいたのは一二でない。大崎氏並に葛西氏の舊地を治した木村彌一右衛門は民望を得なかつた。天正十九年正月に至つて民は皆叛いた。秀吉は政宗並に蒲生氏郷をして是を討たしめた。氏郷は亂の源を政宗に歸した。政宗の舊臣須田某なるもの背いて氏郷に讒したのである。氏郷は西上して政宗に異圖あることを秀吉に訴へた。秀吉は怒つて政宗を召し寄せ其辯を聽いた。亂平ぎて後秀吉は、米澤、二本松、鹽松、伊達、信夫、刈田、是らの地を氏郷に治せしめ、黑川、加美、宮城、名取、柴田、伊具、宇多、志田、桃生、登米、中新田、是らの地を政宗に治せしめた。是は政宗のもとより喜ぶ處置であるまい。

文祿二年七月に至り秀吉に讒して、政宗は秀次に黨したと告ぐるものがあつた。既に秀吉と秀次は不和である。政宗が秀次に儀禮を盡したのは二人の中に粟野某が介在したからである。粟野は秀次に仕へるもので政宗の舊家臣である。政宗は驚いて西上し秀吉に寃を訴へた。秀吉は政宗を伊豫に徙さうとした。此に於て政宗を救援したのは家康である。政宗は僅に釋されて居る城へ歸つた。

政宗の讒にあふこと此の如きである。時に貳心讒あるを秀吉は知つて居たであらう。伊達氏が奥州探題たるの資望は秀吉にとつて問題である。統御するの駈引から威嚇は甚た必要であり

議をきくは其機會を作つたのではあるまいか。が、政宗にとつて常に夫は不愉快だつたに違ひない。然も如何とも爲し難きところに政宗の苦悶があつたと思はれる。徳川氏樹立三百年の計をなした家康として玆に乘ずべき隙がある。家康が二人の間に活動せるは先記の如くである。按ずるに政宗の伊豫に從るを中止せしめたのも將來の策を劃斷せしむるからではあるまいか。

慶長五年に至つて三成は上杉景勝と與に東西相挾んで家康を伐たうとした。同じく慶長五年七月政宗は兵を擧げて景勝を制した。所謂大阪夏の陣に於ける諸氏の行動夙に讀者の知るところであらう。政宗と家康と相結ぶも亦先記するところによつて讀者は自ら點頭するであらう。

わたしの一家を錄せしむるならば、秀吉歿後に於て天下を支配し得るもの三人と云ふ。曰く、家康、黒田如水、政宗、是である。が、統御の法を知るものは家康と如水のみではなかつたらうか。政宗は用兵の術を知ると雖も統御するの器ではあるまい。況や東北の僻地に住するに於てをやである。如水に就ては他にいふ場合があらう。

政宗は千代に城を築き仙臺と改めた。慶長五年十二月二十四日に繩張を始め慶長七年五月十八日に成就した。其入城したのは慶長八年八月である。匠はわざわざ紀州から招いたといふ。所謂青葉城である。

慶長十三年正月に至つて秀忠は政宗に松平氏を稱せしめ陸奥守に任じた。

その三

政宗の詩文集を閲するものは下の七絶を知るであらう。「邪法迷邦唱不終、欲征蠻國未成功。圖南鵬翼何時奮、久待扶搖萬里風」末に書してかういふ「嘗欲征南蠻作此詩」邪法、征南蠻、是らの字は政宗の意を知らしむるものである。其作成年は未だ徴せずと雖も、吉利支丹の情況から猜定して慶長十三年後のものではなからうか。わたしは此七絶の敎ふるところを次に記さう。

薩摩の島津氏が琉球を攻めて是を略したのは慶長十四年である。同號の名作を讀んで案を拍つ者は賢文の徒である。同業の金儲けを知つて微笑するものは實業家である。が、同時に已れも亦其位置にあらしめたいと希はないものはあるまい。此二つの情が繩のよれたるが如くして起るは人情の然らしむるところであらう。史家は島津氏を九州の雄といひ伊達氏を奥州の覇といふ。島津氏の此事あるや伊達氏も默然たるを得ないであらう。

當時作天連ソテロなるものがあつた。是より先慶長十年に

宋から渡來し江戸に住して居たのである。ソテロは淺草に教會堂を建て弘教に從つて居た。たまたま政宗の側室は病に臥し衆醫は手を束ねて如何とも爲し得なかつた。告ぐる者あつて長老ソテロは側室に見えた。ソテロは異留滿フライ・ペドロ・デ・ソルギリヨをして是を治療せしめた。病はすなはち癒えたのである政宗は厚くソテロに酬いやうとした。ソテロは教義を說いて是を受けない。此事は政宗とソテロをして相親しましたのである

關が原の役に於て家康は百萬石を與へやうと政宗に約しながら未だはたさない。島津氏は琉球を占領した。政宗の志は南蠻にある。又秀吉をはじめ家康並に秀忠の吉利支丹に對する方針を政宗は無視するものであるまい。政宗は已れの意圖を實現する爲めに病を癒した事に口實を藉りソテロを接近したのではあるまいか。ソテロはフランシスコ派の長老である。ゼスウヰツト派は九州に勢力を有し天正年間には九州の三侯に勸めて羅馬遣使さへなして居る。夫の對峙上からも威名ある奧州の大名と交流を要する。ソテロが政宗に親炙するは玆にもとづいては居るまいか。政宗はソテロの言を入れて奧州布教を快諾し是を仙臺に赴かしめた。政宗は又其居城にソテロを招いた。政宗は猶條令を以て國內に布教の自由を傳達した。其條令は今座右の書籍によつて知るを得ないゆゑに寫し出さない。教徒の增加と共に政宗は會堂僧院の建築を希望した。ソテロはから答へた。牧師も教役も居らぬに夫等の事は無用である。蓋し此の如きは二人の機略であらう。もし此間の心理的事實に詳密な文獻を得るならばわたしたちは外交問題の一模範を得るに相違ない。近日の新聞紙が示すものに羅馬法王廳との使節交換を阻止する佛僧侶の運動がある。佛僧侶にして政宗だけの度量を持つならば、何ぞ阻止するの必要があらうか。

政宗の海外に對する智識はソテロから吸引したものが大部分であらう。が、ソテロの物語には事實と虛構が混合して居たと考へられる。今日から推して一膜を隔つるの憾があらうと思ふ會堂僧侶院のなきを遺憾とせる政宗に對して、ソテロはから告げた。夫は羅馬法王に上申して其指揮を受けなければならぬ。此言は正しきものであらう。が、此言の如く一一羅馬法王に上申するとすれば、教說の普及は不便を生じて來る。時間を無視するからである。然るに普及上時間は看過すべきでない。ソテロは此言の目的は遣使勸誘ではあるまいか。政宗には先記七律の如く南蠻征略の意圖はあつたであらう、が、其考慮の內に奧南蠻まであつたであらうか。當時南蠻とは呂宋地方であり奧南蠻とは遠西地方である。ソテロの言は思はぬ方へ政宗の意圖を赴かしめたと推される。政宗はソテロに羅馬への使者を煩はさう

と求めた。

政宗とソテロとの間に醸された此氣運を叙する爲めに、わたしはしばらく他の事を挿みたい。夫は此氣運と相發明するものがあるかである。

その四

家康がヤン・ヨースに海外の事情を諮問したのは此頃である。家康はノバイスパニヤなる國の所在を知つた。南蠻船の常に夫に渡航して互に貿易あることも知つた。ノバイスパニヤは新西班牙の義にして現在の墨西哥である。家康は新に呂宋に據つて是と直接の航路を開かうとした。呂宋を懐柔して其本國と我國との間を媒介せしめ、以て貿易の利を得むとしたのである。

家康と呂宋の關係を叙するは本稿の欲するところでない。夫に關しては外蕃通書及び慶長錄其他に詳かであれば、讀者は就いて見るがよからう。もし家康の理想の如く、日本と墨西哥の間に直接貿易が一たび開始さるるとすれば、呂宋は其商權を忽ちにして奪はれねばならぬ。

慶長十四年のことである。フヰリッピン太守ロドリゴ・デ・ヴヰヹローは日本に漂着した。墨西哥に向ふ航行の途上に於て風波の難に遭つたのである。ヴヰヹローは家康と下の如き條約を締結した。日本に於ける信仰の自由を得ること。蘭人を日本から放逐すること。この二つは其要求である。家康は蘭人放逐の件をはづして外を承諾した。なほ西班牙王の墨西哥から坑夫五十名を送るべきを求めた。墨西哥の坑夫は採鑛の術に長ずるを以て聞えて居るからである。ヴヰヹローは家康を辭して南方に向ひて後なほ條約の各款に就いて議することをソテロに求めた。ソテロは其代理人として家康に謁したのである。ソテロは更に家康に勸めてヴヰヹローの提議に同意せしめやうとした。蘭人放逐の一條は家康のなほ拒むところである。竟に慶長十五年五月廿三日に至つて條約は締結された。政宗は動かすともソテロの糊口は家康を如何ともなし得なかつたのである。

家康は西班牙に使を送つて誠意を表さうとした。又年來の志望たる墨西哥直航貿易の端を此時啓かうと欲した。家康は其使者の適當なるものを洋人に求め、其人選をヴヰヹローに依囑した。薦擧されたのはソテロである。時にソテロは病に臥して居た。是を以て他のフランシスコ派の僧アロンソ・ムノスが代つて派遣された。

家康がヴヰヹローを重んじ書翰並に方物を是に托し、英人アダムスが洋式によつて造れる新大船を以て一行を墨西哥に送つた。時に慶長十五年である。

翌慶長十六年四月廿八日である。西班牙の使節セバスチアン・ヰズカイノーは日本沿海の測量と日本漂着民送還を目的として渡來した。同行は墨西哥總督の使節ヌノー・デ・ソトマヨールである。秀忠並に家康に謁した後此一行は北の方仙臺に向つた。時に慶長十六年九月十七日である。一行は途中其沿岸を測量し到る處に諸侯の優遇を受けた。殊に仙臺に入るに及んで政宗の歡待は尋常でなかつた。極めて莊重なる謁見式も行はれ贈物も獻酬された。西班牙使節の名譽の爲めには特に祭典も行はれた。此の一行が政宗の邸に止つたのは八日間である。政宗は此使節に下の如き事を約した。もし領内に適當の港を見出すならば西班牙からの來船に對して夫を提供しやう。政宗はさう約したのである。使節一行は慶長十六年十一月廿七日に至つて再び江戶に入つた。

然るに幕府の對外方針は一變した。葡人と日本信徒とが共謀して本國に送らうとした密書なるものは、蘭船主によつて幕府に送られて居た。書に記すところは、信徒と葡人と協力して家康を殺し政府を顚覆し是を奪はうといふにある。因てかねて約するところの軍艦や兵卒を送られたいといふにある。

蘭人と葡人は常に宗教上並に商業上に於て相排擠して居る。又崇傳等あつて家康の尊信を負ひ外教を沮害して居る。幕府が對外方針を一變したに關しては他に一文を草すべきであつて、本稿には夫を省略して置かう。

家康の通商談判は、すなはち失敗だつたのである。ヴヰヱローに據つてムノスを遣使した事は、單にヴヰスカイノー並にソトマヨール等の來朝に終つた。貿易上の條約締結は竟に其運でなかつたのである。

その五

家康の意志は政宗によつて繼承された。西班牙使節セバチアン・ヴヰスカイノー並に長老ソテロとの交渉は、政宗の通商的精神に投じ夫を實行させたと言ひ得る。且つ其宗教的野心を滿足せしめたと考へられる。

幕府初期に於て、將軍と諸侯との關係は未だ君臣的でなく友僚的であつたことは、史に通ずる者のよく知るところであらう。然も家康並に秀忠に於ける政宗は、他の群小諸侯と立場を異にする。幕府の對外方針が一變したとはいへ夫は秩序的に確定されたのではあるまい。從つて政宗に對外親交の念あるとしても斷定的態度を示して阻止するは不可能だつたと推される。是は政宗の遣使を云々する者の些の思惟を費すべき事ではなからうか。

（ソテロの關した支倉關係以外のことを本稿では省略する）

政宗はソテロ並に支倉をして千六百十三年十月二十八日に出發せしめた。政宗の書翰其他の書類は支倉に交附されて居たのである。是に先だつて政宗は向井將監忠勝をして幕府に上申せしめた。本件に關し幕府が向井に挨拶したのは慶長十八年三月十日である。向井は御船手であつた。

一行の乘るべき船は當時漂着した居た黑船を換したと傳へて居る。謀つたのは政宗と向井でありソテロが其顧問だつたのである。其材木杉板は氣仙東山より伐り出し曲木は片濱通り磐井江刺から採つたと云ふ。大工は向井が、公儀御大工與十郎及び水手頭鹿之助並に城之助を差下し秋保刑部賴重と河東田縫殿親顯が御船奉行だつたのである。船は、横五間半、長十八間、高さ十四間一尺五寸　帆柱十六間三尺松の木である　又彌帆柱も松の木で造り九間一尺五寸である。當時漂着した黑船と云ふは何國のものか未詳である。慶長十八年の初めには英吉利の船が一艘難破して陸奥に着して居れば、或ひは是かと推される。發船の順序を是に質したのは明かである。

政宗の使節に授くる任務は下の二つにあつた。曰く、西班牙及び羅馬に至り法王と宗教の爲めに便宜の處置を議すること。西班牙王と修交貿易を議定すること、

千六百十三年十月二十八日は慶長十八年九月十五日に當る。此日ソテロと支倉は牡鹿郡月の浦（荻の濱の西）の砂地に立つた。今泉令史、松本忠作、西九助、田中太郎右衛門、内藤半十郎、其外九右衛門、内藏丞、主殿、吉內、久次、金次、それらの人々も歩を同じくして立つた。新造の船は眼前に見える。親族知友も等しく夫に見入つた。おそろしい緊張は迫つて來た。乘船した人々は間もなく其の夜の月を見た。居殘つた人々も眠られぬ儘に其夜の月を見た。月は動いて居ると思へない。九月十五日の夜の月は澄み滿えて居る。どこかで指折り數へて居るのは何をするのであらう

なほ一行には、向井の家人十八計り、南蠻人四十人計り、其外商人が同船して居たことを附記して置きたい。向井の家人といふ　皆御船手である。商人は商賈荷物數百個を積むで居るのである。

此時將軍家は御具足並に御屛風を羅馬に遣つた。家康並に秀忠が吉利支丹を禁じたにしろかういふ一事もあつたのである。

わたしは次に其途中の事蹟を記すだけで羅馬並に西班牙に於ける一行に就て記さうと思ふ。

その六

慶長十九年十二月十四日である。支倉の一行はソテロに伴はれて西班牙王フイリツプ三世に謁見した。王は王座に起立し貴族等は其周圍に列した。使節は日本固有の禮式を以て三跪三拜を行ひ、步を進めて王の手に接吻しやうとした。王は其手を引き帽を脱して頭を下げた。更に王は大使支倉に起立して其使命を述ぶるやうに告げた。

支倉が此時述べたところは今日に傳つて居て、餘りに識見なきを思はしめる。按ずるに通譯が改變しものではなからうか。わたしは其一節を下に抄錄しやう。「凡そ光を求むるもの之を認むるときは多くの艱苦を忘れて喜ぶべし。予も亦光を求めん爲め天の光なき地方より此基督教國に來り、世界を照す太陽の如き陛下の面前に出でゝ光榮と愉快とを覺え頓に海陸跋涉の勞苦を忘却し、我國民中最名譽を得たるものなりと思惟す。抑予が來れる地は當地より最遠隔なる地にして國號を日本と稱す。我君伊達政宗は日本國中奥州の强大なる王なり。主君神の道を聽き日本の宗教は僞にして基督教は眞の救の道なることを認め」云云。嘗てわたしたちの祖先は支那に使を遣す際に、彼を日沒の國と呼び我を日出の國と名づけたではないか。「强大なる王」も「天の光なき地方」の夫とすれば、何ぞ其權威なきことの甚だしきや。

王は支倉の辭に答へて「奥州の王の求むる所に應じ之と親交を結ぶことを深く喜び、今後決して盟約に背くことあらざるべし。之に關する條件に就ては更に時を撰びて協議せんとす」と云つた。王の答辭を聞いて後支倉は再び跪坐し、政宗からの書翰及び協約案に接吻して是を王に呈した。政宗の書翰案文は宮城縣栗原郡有壁田氏に藏されて居ると云ふ。わたしは是も亦長くなることを遠慮して抄錄して置かう。「さんふらんしすこの御門派之内おせれはんしやの伴天連衆御渡可被下候」おせれはんしやといふはサン・フランシスコ派の肅清を圖る爲めに起つた團體である。すなはち跣足派である。正しくば Observantia である。なほ書翰の抄錄はつゞく。「隨分御馳走可申候。左樣に御座候を向後の爲可申候。此度我等船を造り、のひすはんやまで相渡申候。此船に伴天連御渡可願候。每年渡海させ可申候。然者、濃毘數般において、某船之儀御馳走賴存候」云々。

次に、餘り紙幅を費し過ぎるやうであるが、政宗の協約案をわたしは引用して置かうと思ふ。夫はかうである。

申合條々

一貴き天有主之御宗門に、於吾等國下下繼成候義少もさまたけ申間數候間、さんふらんしすこの御門派之伴天連衆御渡可被下候。御馳走可申付事。

一每年、伴天連衆爲渡海、此度我等船を作り、濃毘數般まで申渡

日本之道具相渡申候。其國の道具をも無相違御渡可有之候。掛者道用のためにて候事。

一船渡海のため、役者こくしや（水手力）入次第に、御やといかし可被成候。若船損候者、作直し候時分、御馳走賴存候事。

一ろそんより、のひすはんやへ參候舟、若我等國へ參候者、馳走可申、損し候者、道具以下無相違申付候。但作直し候とも馳走可申上候事。

一於吾等國、舟御作被成候者、材木鐵已下大工等入程之事、其時之隨樣子、下知可仕事。

一御分國より、船參候者、如何樣にも自由にあきない已下可申付候。其上馳走可申上事。

一於吾等國、南蠻人在付候者、屋敷已下無相違可申付候。尤南蠻人之事に、川入曲事候子細、公　等於有、是を其頭人に相渡、其隨次第に可仕事、

一いんきりす、おらんてす、何も帝王之敵國より參候者、我等國に置申間敷候。

委細者、伴天連布羅以、類子、曹天呂口上に可被申上事。

一ゑすはんやの帝王三代目のとんひりへ樣、於日本奧州之屋形、伊達政宗一味申談上者、至於何事も、不可有違事。

以上。

慶長十八年

九月四日

ゑすはんやの國帝王樣

政宗の協約案は一讀甚だ愉快である。次にソテロは將軍の大使たる資格を以て王に述ぶるところがあつた。わたしは夫も上に抄録して置かう。「西班牙王と和親を結ばゞ和蘭人の約せるよりも更に大なる利益を得べきことを皇帝（將軍である）に說きしに、皇帝は臣の言を理ありとして再び使命を寵し當地に來り多年希望せる同盟を成立せしむべきことを命じたり」云々。王は是に「日本の提議には喜びて應ずべし」と答へた。終つてソテロは日本の國書を王に呈した、すなはち其謁見は畢つたのである。

十二月十七日に至つて一行は王族レルマ公を訪問した。公は好意を以て協約に關し助言すべきを約した、公にも政宗の書翰は呈されたのである。

元和元年元旦である。支倉は跣足派尼院に於て西班牙王の侍從長ドン・チエゴ・デ・グスマンによつて洗禮を受けた　教父はレルマ公であり教母は王妃の親友バラシャ伯爵夫人である。佛蘭西王ルヰ十三世に許嫁せる王女アンヌ・ドートリシユ並に王子二人を率ゐて王は此式に臨んだ。支倉は、フイリツポ・フランシスコなる名を授けられたのである。支倉はサン・フランシスコ寺院にしばらく滯在して更に羅馬に向つた。

その七

支倉一行は羅馬に着するやモンテ・カバルコ宮殿に於て法王

に內謁した。アラチエリ僧院に泊したのである。法王は一行の滯在中の費用を給した，九月七日に至つて使節の入府式は擧げられた。法王の命によつたのである。

此日支倉一行は馬車に乘じてアンゼロ門外設備の場所へ至り玆に於て整列をなし步を進めた。先驅は將校の指揮する輕騎兵五十騎である。カルヂナル諸員の家人、各國大使館員、羅馬並に佛蘭西と西班牙の貴族が夫につゞいた，以上騎馬である。鼓手十四人、騎馬の喇叭手五人、騎馬の高位高官、騎馬の先導羅馬貴族一名、夫が更につゞいた。政宗の家來たる御側小姓は其次に居た。小姓の七人は皆 馬にまたがつて居た。使節の從屬四人は騎馬で靜かに小姓の後に列んだ，使者役たる羅馬人グレゴリヨ・マチアス、長刀をもつた若黨二人、立傘をもつた若黨二人、法王の侍衞兵、王の姪たる羅馬貴族マルコ・アントニヨ・ヴヰト コ、さういふ順で進んで行く時に、ヴヰトリコの右に支倉の姿が見えた。二人は騎馬であつた。とりわけ支倉の馬並に馬具は共に法王のものであつた。口取の若黨、草履取の若黨、法王の侍衞兵、西班牙語並に羅甸語の譯官ドクトル・シピオネ・アマチ、日本語の譯官フランシスコ・マルチネズ・ホンタニヨ、夫らは後につゞいて居た。譯官二人は騎馬である。最後に馬車の中にはソテロの顏がある。ソテロの從僧の顏がある。

沿道の到る處には裝飾が施してあつた。貴婦人たちは所々に歡迎の準備をして居た。觀る者は往昔の凱旋式のやうだと思つた。やがて一行は府廳の廣場に到つて止まつた。行列は此で解かれたのである。支倉は市會の貴紳に謝意を表した。

此日最も異形であつたのは、支倉の服裝である。支倉は、烏帽子直衣であつた。いや、夫は支倉ばかりでない。從屬もさうである。從屬は鎧下に小袴をはき陣笠を冠つて居た。

九月十三日に至つて支倉は、改て法王に對し儼然たる謁見式を行はうと欲しアラチエ 僧院から馬車で參內した。支倉は黑衣を穿つて居る。が サニ・ピエトロ宮殿に至つた時黑衣を脫した。そして共携へしめた箱から更に青白文繡の衣を出して是を纏うた。王侯に謁見する時用ふる禮服だからである。服裝は烏帽子直衣に上衣緞子袴繻子である。

謁見室に至れば法王は天蓋の下に坐して居る。カルジナル官、書記官、諸僧侶、諸貴族、夫らは其四邊に整列して居る。

支倉は例の如く三跪三拜した。更に法王の足に接吻した。政宗の書翰並に絹包の進獻物は法王に呈された。支倉はカルチナル官の座下にて再び跪座した。政宗の書翰は二通にして、一は日本文一は羅甸文である。此書翰は羅馬のバチカン法王宮附屬圖書館に現存するのである。書翰の書出しは「於世界廣大成、

貴御親九番目之はつははうろ様之御足を、於日本奥州之屋形伊達政宗謹而奉啜申上候」と云つてある。更に「きりしたんに成**度存、今ぜうち雖差さしあわせ申子細御座候而未無其儀候」**と云つてある。文面は西班牙王に呈したものと大同小異であるから略して置かう。羅甸文はソテロの作るところで、是も亦錄するを略さう。

書翰の朗讀中法王は支倉に起立を命じた。朗讀終つてアラチエリ僧院の學事主任パードレ・マエトロ・フライ・グレゴリヨ・ペトロツカは演述をなした、法王の書記官モンシニョル・ストロツチは、法王の代理として答辭を述べた。終つて後支倉並にソテロは、再び進んで法王の足に接吻した。法王は支倉を扶け起して其手を握り其祝福を祈念した。隨員も亦許可を得て法王の足に接吻した。此日の謁見は是で畢つたのである。

十月二十二日に至つて羅馬府廳は公書を支倉に授けた。公書は羅馬府民に編入し貴族に列するを許可したのである。此公書は伊達伯爵家に所藏すると云ふ。羅馬公民に編入された者は一行の内にもあつた。尾張の住民沼野半平、奥州の住民外記姓不詳。京の住民瀧野嘉兵衞、攝津の住民伊丹宗見、すなはち此四人である。

十一月十五日に至つて支倉は、告別の為に法王に謁見した。法王は支倉に、銀の十字架、聖筆、肖像、紀念牌、國王宛書翰其他の物品を授けた。旅費其他旅行に必要なる物品も給した。此時ソテロには奥州の第二等僧正に任ぜられたのである。

十一月十八日に支倉一行は羅馬を出發した。

その八

羅馬に於ける支倉は、未だ其主要の目的に關して著しき成効をなしたとは言へない。旅行中の支倉は出發前の支倉と思想的に大なる變化があつたであらう。此事が夫を成さしめなかつたのかも知れぬ。竟に要領を得ずして去つた事は、當時羅馬駐劄西班牙公使ヱネチヤの書簡に明である。

（支倉並にソテロは羅馬を去つて西班牙に向つた。ソテロが第二等僧正に任ぜられた事は同門の僧侶の惡むところとなり、此に問題が起つた。そんな事で支倉一行の歸國はおくれた。わたしは是に關しては此に筆墨を費すまい）

ソテロは歐洲から遥に英人に托して書を政宗に寄せた。元和二年中に歸國するゆゑ墨西哥まで迎へ船を出して欲しいと云ふのである。此に於て政宗は幕府に乞ひ家臣横澤將監をして泉州堺浦から便船にて出發せしめた。政宗は此時協約の成立を確信して居たのである。元和四年にソテロは再び書を政宗に寄せた

ソテロの此書狀は現存しない。他に其消息を知り得るものであらうが、わたしは未だ知らない。

支倉は元和五年三月に至つて墨西哥に渡り、同じく七月卅日に至つて呂宋に來つた　支倉は呂宋に於て仙臺なる其子勘三郎に書を贈つた。是は帝國博物館に現存の筈であるが未だ一見しない　わたしは其寫を閲したが、其中に「來年の六月にはかならずきちよ可申候」と見えて居る。支倉の心情察すべきものがあるではないか。

元和六年八月二十六日に至つて支倉は日本に歸つた。日本は吉利支丹禁令の甚だ嚴重な時である　此故を以てソテロは呂宋に止つた。

支倉並にソテロの歐南渡航に先だつた家康が、ムニヨスを派遣した事は既に記す如くである。西班牙はフライ・ヂエゴ・サンタ・カタリナを使節としてムニヨスの派遣に應じた　カタリナは墨西哥に出て支倉一行の乘來れる船により元和元年六月二十一日に浦賀に着したのである。然るに日本は恰も極端なる吉利支丹排斥の氣運高き時である。故に非常なる冷遇と侮辱はカタリナに與へられた。そして横澤が堺を出帆する時カタリナも亦是に便乘しなければならなかつた。ソテロはかうした事情を知つたのである。序に云ふが横澤は墨西哥に於て吉利支丹信徒になつた。

支倉は其獻ずるところの法王並に自己の油繪及び贈物を政宗に獻じた。

九月二十三日に至つて政宗は土井大炊助に支倉歸國の事を報じた。夫に「御前不苦候はば來ろそんより歸國仕度由被申越候如何可有御座候哉」とソテロに關して云つてある。が、是に對する幕府の指圖は傳ふるところがないやうである。

わたしは既に支倉六衛門の歐南行に關して記し畢つた。が、歸國後の支倉並に其後の支倉家に關しても少しく記すところがなければならぬ。讀者は今しばらく辛抱して欲しい。

その九

支倉の墓も亦事蹟と同じく明でなかつた。支倉は吉利支丹信徒ゆゑ刑戮されると或者は云ふ。屍は鹽にて埋められたと云ふ。墓は七北田の刑場にあると或者は云ふ。まことは山林に逃れて終つたと或者は云ふ。磔架上から羽化して去つたと或者は云ふが、是らは皆妄である。其妄たるを明にしたのは大槻文彦さんである。

支倉は天命を以て終つた。刑死したのは其子六右衛門常頼である。支倉は元和八年とし五十二で歿した。歸國後二年目に

留る。常頼は寛永十七年とし四十二で歿した。父子は正しく仙臺北山なる光明寺に葬られた。常頼の子は又兵衛常信である。

初め時正は嗣なきを以て姪を養ひて嗣となした。常長である。然るに時正は後に二子を設けた。長は助次郎某、次は新右衛門常次である。政宗は支倉の家祿千二百石を二分して一を助次郎に一を常長に與へ、常長には又別に祿した。支倉は三家になつたのである。

常長には二子あつた。長は勘三郎常頼、次は權四郎常道である。常道は吉利支丹信徒であつて後國を去つた。此事は幕府のとがむるところとなり常頼は切腹を命ぜられた。死刑と傳ふるもかうした所以である。

説く者は常長は信徒でなかつたと云ふ。當信徒の假面によつて主命をはたしたのだと云ふ。夫は如何であらうか。假令支倉氏系圖に信徒でないと記すにしても、系圖は幕府が吉利支丹 禁壓した頃の書入であると考へられる。さう考ふれば吉利支丹でないと記すが當然ではなからうか。寛永十六年に常頼の信徒を幕府に讒訴した者あり其爲めに切腹を命ぜられたと云ふも、何ら根據なくしてではあるまい。其根據を常道の出奔に因さする如きは餘りに薄弱である。

常長は日本を去つて文明の歐洲に永年を暮し再び日本に歸つたのである。去つた時の日本と歸つて見た日本との間に變遷がある。歐洲を巡回して日本を見る時甚だ懸隔がある。この變遷と懸隔とは歸朝者常長をして手の施すところなからしめたであらう。其時慰安となつたのは歐洲の憶ひ出であり且つ吉利支丹ではなかつたらうか。然る時其二人が是を信奉せるも亦察せられるであらう。

わたしは桂井翁並に室生氏に感謝しつつ此稿の筆を擱く。



潮來の春

北原白秋

朝靄の中

靄のふかい朝、子供が
小舟を動かしてゐる。ああ、二人だ。

ここは潮來の出はづれ、
沼から沼へとかよふ水路だ。

ほう、むぐつちよが鳴いてる。

水面が明つて來る。

子供は聽いてゐる、一人は舳で、
一人は掻いてる、小さな櫂で。

うすら寒うてよい濕りだ、
どこかに日の光もある。

柳のなびきも青うなつた。
低い田圃も犁かれて來た。

ほうつと、どこかで火を燃してる、
誰だか燒いてるのだ芝の根を。

風が來た、いや、土のかをりが通つた。
おお、もう、春が動いてゐるのだ。

彼等はいつしよにのめりかかつた、とても
大きなたんぽゝが咲いてる。

霧のふかい朝、むぐつちよが鳴き、

子供は小舟で取つ組んでゐる。

牛

うつくしさ、さびさびしさ、
ああ、このしづけさ、
小舟はゆく、沼のおもてを。——
夕凪の安らかな乳金色。

小舟にはおつとりと赤の雌牛だ、
（なんといふよい非面。）
おとなしく乘つけられてる、
うつぶいた明るい姿。

むつまじさ、かざりなさ、
ああ、このしづけさ、
娘は棹をさし、また、かろくあげ、
親たちはかがんでゐる。耕作のよい疲れで。

めづらしいよい日和だ、あるかなしに、
葦の穂さきに微塵が光つて、
沼のながめが廣うなれば
むぐつちよが啼く。何かの芽立(めだち)に噎せるやうに。

ものがなしさ、溫(ぬく)とさ、

ああ、このしづけさ、
春あさい大きな落日よ、
遥かな低い藁屋根よ、立枯れ楊よ。

すべてはよい照らしにある蝸牛の
安らかな深い眼つきに宿る。
ああ、この親しさ、かたじけなさ。
すべては明るい祈りにある。

沼べり

わたしは眺めてゆく、沼べりの葦のさびれを、
刈り殘しの乏しい穗さきを。

わたしの小舟は帆を張つたが、ま
櫓に代へ、櫓に代へたりした。
雨は雨でもこぬかのしめりで、
風は風でも冬とはちがふ。
放(つ)け棄ての火も水ぎはを傳へば、
ざんざら眞菰も青みそめてる。
ああ、旅だ。
時には心もひきしまるが、また、
笑(わらひ)に代へ、親しみに代へたりして。——

沼の日森

潮來出島のざんざら眞菰
誰が刈るやら薄くなる

沼の日暮(ひぐれ)はものういものよ。
青い眞菰は芽に出(で)てもよ、
ああ、ざんざら、
葦の枯葉が鳴ります。
むぐつちよが啼く、浮いてます。
櫓から棹へとさし代へても、
ああ、さんざら、
舟でゆくのはさびしいものよ。
春の潮來(いたこ)はまだ寒いよ。

近代の女性觀

須磨子時代から白蓮まで

岡本一平

○

藤原氏時代の美人の顔は圓形が理想であつた。德川氏時代のは所謂瓜實顔である、それに比較して現代の女の基調は依然瓜實顔を脱し得ないが加へて洋風美人の異端的愛くるしいところ、及び文明的の叡智あるを望んで居るようである。伊東深水氏などの挿畫が持てはやされるところを見るとその上に顔に一種の疲れ――それは眼の下や頬に隈となつて現れる――が無くては現代の美人として物足りないらしい。現代婦人の疲れは思索上の疲れとまで進んで居ない、人間性の疲れとまでも覺束ないかも知れぬ。骨が折れて來た爲めの疲れらしい。

○

『職業婦人』といふ名が呼ばれる時、それに對する侮蔑の念が薄らいで來ていくらか賴母しい感じを與へて來るようになつた。然し『勞働者』といふ名ほどにはゆかぬ。

○

髮を別けて結び、髮を耳かくしに垂らす流行は無意識の間に婦人階級の差別撤廢を行つて居るのだ。女が一列にそうなると少くとも頭の上だけでは彼女が女中さんであるか奥さんであるか、乃至山の手の官吏の夫人か下町の商家の女房か判明つかぬ。無意識といひ條、彼女等は矢張り現代に動かされて來て居

る。たゞ無意識で、頭の上だけのところに彼女等の果敢なさと不明がある。

○

今の女に日本髮がうつらなくなつたといふ。顔がそれ程複雜に和洋混淆して生き出して來たのだ。

○

現代の女が必死にあこがれ乍ら然も捕捉に苦しんで居るのは『愛』といふ言葉だ。

今、唱へらるゝ『愛』は昔ながら夫婦の愛、親子の愛、骨肉の愛のそれとは違ふ。西洋流の男女の愛でもない。基督教の愛は沒我的で自我意識を虐げる。親鸞の愛はあきらめの少いものには容易に信に入り兼ねる。甘い肉に居てさながらに神の懷にある如きミスチックな慈と恍惚に安心を得んともがく。我儘な自己を立てた儘で無我の大環境に支配されようとする。これが愛の名に於て求むる願ひだ。このむづかしい彼女等の爲めに今、宗教と藝術が藥を調合中だ。谷崎潤一郎氏の『愛すればこそ』は可成り利くところまで行つてゐる。

○

現代の婦人の代表として左に二三掲げて見る。愛國婦人會型といふのがある。昔の女大學の良妻賢母を骨とし西洋のスマイルスの自助論あたりを働きの上に融通して居る。高貴名流に近づく事が自分を價値づける由縁と思つてる。この點、軍人に似てゐる。機會だにあれば白襟黑紋附で徽章をぶら下げて出る。概念的の產業立國策を自己の家庭に小さく行はうとする。功利的保守黨だ。

婦人矯風會型といふのがある。西洋の傳統的善を日本に於ても新しき善の標準としようとしてる。それに違ふものは飽までも鬼畜魔黨の類ひとする　身を挺して所謂彼等の改善運動をするのには宗教的昂奮の力を藉りる。愛國婦人會型の人々が高貴名流に近づき榮譽とするように彼女等は西洋の名士偉人を偶像とする。日本人としての人間といふ事に就て考へた事があるかどうか疑問だ。もつとも大將の矢島楫子女史だけは根本に武士道的な意地がモートルとなつてる事は認める、

女子大學型。學問萬能主義者である。たとへ感情上　人性上

の理解を求むる念はあつてもその理解を智識の方へ持つて行く。智識で割り切れぬ微妙な人間本然の働きについては或は護如し或は疎い。西洋の新しき學問や擧動はしても感情は在來日本で使ひ古したセンチメンタルのものだ。この學校の運動會に行くと生徒が自分で下足番をしてる。それが自然でなく主義の見本にして見せてるよう思はるゝのは元來右の缺陷がある爲めであらう。

學習院女學部型。『そうでありますか』とか『そうですか』といふ言葉を妙にノーブルに特質附けて『そうでやんすか』とか『そうさんすか』とか發音する。こゝに彼女等の誇りがあるのだらう。一事を以て萬事を推すべしだ。そしてこの言葉は都下の女學生間、若い夫人等の間に眞似られて居る。又一つの現代の婦人の現れと見ねばなるまい。

參政權婦人型。彼女等の洋服が彼女等の身體に不釣合ひのように彼女等の運動は今の處彼女等の本然に不釣合ひなのは遺憾だ。但、筆者は一日も早くその何れもが釣合ふ事を期待するものである。

白蓮女史型　擅な情熱の趣くまゝに動かんとしてそれに抵抗する程度の分別、理智にさまたげられ歪んだ曲線を生活の上に止むなく描いて居る婦人が現代に多い事であらう。女史はそれが世間に現れたものだ。これに比べると松井須磨子はしつかりした打算的の女のようであつたが根本は一本調子だ。須磨子の時代から觀ると白蓮女史の時代はその間の經過は僅かなやうであるが社會は婦人を濁らさずには置かなかつた。

十五から四十まで

武林無想庵

近代の女性觀！　なるほど！……え？　なに？　それに對する僕の考を書け？……冗談云つちや困る。近代にも、舊代にも、女性觀なんて、そんなむづかしい、文學博士でも論じさうな、さういふ大したものは、我輩元來持ち合はした事がないんだからね……何だつて？　僕がそれを書くやうに、もうチヤンとプログラムが立つてゐるんだつて？……亂暴だね。そんなプログラムは誰が立てたんだい？　我輩は一向知らんがね……だから資本主義は厭だと云ふんだ。毎月々々、大切な生命をきりさまさいて、無用な肝膽を碎き、金と虚名のほしい文士を酷使して、さうしてさういふプログラムとかいふものを實現して、結局は例の搾取を企でるのサ……書くよ。書くよ。金さへくれりやア、何だつて書くよ……近代だらうが、女性觀だらうが、恐るゝところなく書くよ。

さて、と……さうサ。我輩は女が好きサ。病的にすきサ。が、十五六以下は困る。又四十に達したのは辟易する。つまり、その間だ。十五から四十まで、その間の女なら　××××××××××××と思つてゐる。

一體、この世の中で、男と生まれ、四十年も生活して見た經驗の上から云ふと、女と二人きりで、ブラ〳〵遊び歩く位、それ位面白い事は外にはない。さう、ブラ〳〵遊ぶのサ。餘念もなく遊ぶのサ。あとは野となれ山となれといふ氣で遊ぶのサ。

まづ、十二分に女の身のまはりを飾り立てさせる。それから……何だか『女性改造』へも、これと同じやうな事を書いたからよさう……要するに、お金さへあつたら、女がかうしたいと思ふ事を、憚るところなくやらして見るんだね……××××はせるサ。××も大目で見るサ。湯水の如く金錢を浪費もさせるのサ……さういふ氣で遊ぶのサ。

だから、金がほしくなる。金ばかりが無性にほしくなる。金だ。金だ……資本主義の世の中に於いて、女は何の爲に生きてゐるのかといふと、たゞそれ出來るだけ金錢を浪費する爲に生きてゐたわけだ。但し、一寸縹緻のいゝ女でなくちや　さうはゆかない。尤も、縹緻位少々惡くても、××××××××だと、心掛一つで、きつと男は左右される。それにしても金だ。結局、女から金々と責め立てられる。一寸女につッつかれる

と、現在自分の先妻の子のものでも何でも、遠慮なく卷き上げて了ふ氣になる親さへこの世の中には相當にあるんだからネ。

女は恐ろしいものだ。男と男とを憎み合はせるのは女の力だ。男の間へ女が一人這入ると、親だらうが兄弟だらうが親友だらうが、きつと憎惡に充たされる。それ、支那では、昔から傾城傾國と云ふ位だ。トロイ戰爭のヘレンも、同じわけだ。詮じつめれば、この間の世界大戰でも、それを企てた資本主義者帝國主義者の背後には、勿論、彼等を動かす美しい女どもが澤山ゐたに相違ない。

それにも拘らず、先代の住友吉右衛門といふガリ〳〵亡者は馬鹿野郎だ。なぜかといふと、臨終の遺言に、かうホザいたさうだ。『女にはいくらダマされてもいゝ。高が知れてる。思ふまゝに使はして見たところで、二十萬か三十萬にすぎない。男には決してダマされるな。』勿論、悴へ對する遺言だ。

女に氣をゆるすといふ事が、同時に男には氣をゆるさない、といふ結果になる。ダマされまいとするのは、心底深く敵意を藏する事だ。資本主義の男同志を憎惡でつなぐ一例は、これだけでもよく分る。その遺言をケンケンフクヨーしてゐると見えて、住友家は今日でも萬々歳だ。つまり、男には決して油斷はしないものと見えてナ……

我輩が二十代のまだ不良青年時代、人い××××××、上方へ逐電する時、何となく養父に暇乞すると、病床にゐた養父はたゞ一言、「油斷するなよ。」と云つた。が、それは果して何に對して油斷するなと云つたものか、今もつてわからない。併し今にして思へば、男女に限らず、自己以外の者には必ず警戒して暮らせ、といふ意味だつたのかも知れぬ。さうして絶對に無警戒で暮らして來た結果が御覽のとほりだ。かうした文章まで書かされて、ホソ〳〵と命をつながなくちやならぬ始末だ。

とう〳〵また愚痴になつたが、愚痴の外に、我輩には書く事はない。女ばかりでなく、男にも、犬にも、猫にも、赤子にも、毎日々々鼻毛をよまれつゝ暮らす我輩の如き人間は、物を書く機會さへあれば、待つてましたとばかり愚痴が書きたくなる。書かさるを得なくなる。近代の女性觀もクソもなくなつて了ふ。つまり、そんな事よりや、飯を食ふ方が肝腎だから、早く註文

だけの紙數が充つるやうにと、依つて件の如しだ。八、八。

婦人生活の三種類

堺利彦

（一）男子の妻、職業婦人、賣淫婦

男子の妻、職業婦人、賣淫婦、これが現代に於ける婦人生活の三種類である。

此の三種類は、一見した所、相互の間に大なる差異を持つてゐるやうだが、實は皆、大なり小なり財力のある男子に買はるといふ點に於いて、同一の性質を帶びてゐる。

賣淫婦と職業婦との差異は、前者は其の性を賣り、後者は其の勞働力を賣るといふ點に在る。妻は、普通には男に買はれるのでないと考へられてゐるが、實は矢張り買はれてゐる。或種の妻は、其の性と勞働力とを併せて賣り、或種の妻は專ら其の性のみを賣つてゐる。只だ妻は性を賣るにも、勞働力を賣るにも、其の賣り方が短時間もしくば、短日月の切り賣りでなく、大なり小なりの長期もしくは一生涯の賣り切りである。故に或種の妻は、一種の高尙な××××××、或種の妻は、一面から見れば×××××××××××、一面から見れば家庭用の職業婦である。

以上は極く大體の見方である。以下三種類を別々にして、少し細かく考へて見る。

（二）男子の妻

妻を一種の職業と見れば、之を呼んで女房業といふ事が出來る。令夫人業、奧樣業、細君業、嬶業と云ふ事が出來る。大體これを上中下の三段に分けて考へて見る。

上の部の賣り物は主として其の×××る。容色、姿態、及びそれに伴ふ禮儀作法のたしなみが、令夫人の主なる資格である。つまり令夫人は財力豐かなる男子の×××であり、×××である。從つて其の玩弄裝飾に必要なだけの、多少の學問智識も必要になる。若し多少とも實用の方面があるとすれば、それは家政の監督、子女の教育等に關する多少の才能であるが、それは無くても大した差支はない。稀には大いに其才能を發揮して、謂ゆる『內助』の功を立てる婦人もあるが、其の才能の爲に却つて夫を迷惑がらせてる場合も多い。

例外としては、容色姿態の甚だ不十分な令夫人がある。それらは家柄、持參金、仕送り等に依つて、其の償ひをつけてゐる。

又、成上り紳士の配偶としては、謂ゆる『糟糠の妻』がある。糟糠の妻は、夫の立身する途中に、何等かの事情で棄てられるのも甚だ多いが、稀には令夫人として存續するのもある。それらは昔のヌカミソ臭さが拔けきらないで、甚だ令夫人らしくない場合が多い。けれども、そこには大抵、家政の才能とか、屈從の美德とかいふ實用價値がある。

中の部の奧様業には、××××と共に重要な事務方面がある。家政の處理、子女の教育、實用的の交際など、職業婦人の業務に似た所がある。だから、それらの奧様連は、一面には××××の報酬として、一面には家政的勤務の報酬として、可なりに豐かな生活を與へられてゐる。

中の下になると、共稼ぎといふ奴もある。これは、夫たる男子が相當の報酬を拂ひ得ないので、妻が家政的勤務の一部分もしくは大部分を廢して、其の勞力を他の男に賣るのである。此の場合、夫に對する妻の地位は稍や高くなる事情もあるが、骨折は普通の細君業より遙かに多い。

中の下として、夫に幾許の稼ぎも出來ず、又共稼ぎも出來ない場合は、妻の地位は極めて悲慘になる。彼女は殆んど全く家庭奴隸、若しくば臺所奴隸になる。炊事、裁縫、洗濯、掃除、育兒、それらの事に寸暇もない身の上になる。それでゐて、矢張り幾分かは、××××の副業として、夫の機嫌も取らねばならぬ、夫の小間使ひの役も務めねばならぬ事になる。

下の部に行くと、妻は全くの家庭奴隸、育兒奴隸、勞働奴隸

になる。但し此の種の妻は、其の勞働能力の爲、夫に對して稍や平等の地位に立ち得る場合もある。然しそれは夫と平等な勞働奴隷になるといふ意味に過ぎない。そして實際は、夫と同じ勞働の外、育兒の事務や家庭の事務を餘計に負擔してゐる事になる。

之を要するに、男子の妻たる婦人は、玩弄品、裝飾品、事務員、家庭奴隷、育兒奴隷、勞働奴隷のいづれかであり、或は其の數者の兼任者である。

(三) 職業婦人

これも上中下に分ける事が出來る。

先づ上の部としては、近來少しづゝ現はれる專門學者、專門技術者、醫師、高等教員などである。此の種の婦人は相當の收入もあり、相當の社會的地位もあり、何と云つても結構な身の上である。

然し、男子と並び立つて遜色のないだけの才能を示すのだから、エライには相違ないが、其の苦勞骨折は男子に比べて遙かに多いだらうと察せられる。そして男子に比べると、收入も少なく、地位も低い。それに又、既に一つの職業を持つ以上、奥樣業を兼任する事が甚だ不便になる。從つて結婚の機會を逸する事になる。獨身婦は其の性を破壞されるか、[illegible]職業婦は其の性を封鎖される。職業婦には獨身者が多い。少なくとも晩婚者が多い。そこに一種の悲慘がある。

中の部には産婆、看護婦、事務員、教員、交換手、タイピスト、記者、文士などがある。此の中には上の部に屬すべき者もあるだらう。然し大體から見て、皆な勞力を賣つて多くない報酬を得る婦人達である。そして男子に比べて、辛い勞働と安い報酬とを強いられてゐる事は、上の部よりも一層甚だしい。

又、これらの人達にも結婚の困難が多い。元來、一般に結婚の機會が少なくなり、或はそれが晩くなるので、職業婦人が次第にふえて來るのである。男子の多くが相當の年齢になつても、妻を養ふだけの收入が得られないので、細君業者の候補が非常な過剩になる。それで多くの若い婦人は、便々と細君業に就職する機會を待つては居られないので、少なくとも當分、他の職業に就く事になる。そういふわけで獨立の職業に就いた婦人が、

細君業候補者專門にしてジツト待つて居る他の婦人と競爭して、結婚の機會を得る事は甚だ困難な筈である。

又、親やその資力の不足の爲、極く若い中から職業に就く(或は其の道に向ふ)者も多いのだが、そういふのが多くなればなるほど、男子の失業者は多くなり、其の給金は少なくなるのだから、婦人達の結婚の機會はいよ〱以て少なくなる。殊に職業婦人が其の競爭に勝ちにくい事は前に云ふ通りである。

そこで職業婦人の中には獨身者が多く、幸ひに結婚しても相手は碌な男でなく、共稼ぎで內外二重の苦勞をする場合が多い。又、永いあいだ結婚が出來ないので、ツイ何かのはずみに無理な不自然な情交を作りだし、それが爲に苦しむ者も隨分多い。

之を要するに、今の社會は、若い婦人が次第に多く職業を求めねばならぬ事情に迫られて居り、そして一方には、資本家でも政府でも、成るべく便利な、成るべく使ひやすい、そして成るべく安い勤務者を要求してゐるので、職業婦人は今後ますます多くなるより外はない。從つて其の境遇はます〱惡くなるより外はない。

扨、下の部に行くと、これは普通に職業婦人といふ部類ではなくなる。即ち女工、女中、女給などいふ人達である。

女中や女給の中には隨分いゝ金を取る者もあるだらうが、それらは寧ろ半賣淫婦と目すべきだらう。普通の女中(飲食店や商店や一般家庭の女中)が其の勞働の烈しい事、其の勞働時間の永い事は、云ふまでもあるまい。彼等は全く勞働奴隷である。

女工の境遇に至つては、此の世の地獄として世上に知れわたつてゐる通りである。そして此の婦人勞働奴隷が今後ます〱ふえて行く事は、前に中の部の所で云つたのと同じ理由である。産業が發達すればするほど、機械が進歩すればするほど、多くの仕事は女の手で間に合ふようになる。そこで資本家は成るべく男手を減らして女手を使ふ事になる。女なら賃金は安いし、反抗力は弱いし、資本家に取つて之ほど都合のいゝ事はない。

別に職業婦人として女優といふ者を思ひだしたが、之は上の部にも屬し、中の部にも屬すべきものだらう。然し又、半賣淫婦とも目すべきものだらう。

（四）賣淫婦

女優や高等女中が半賣淫婦と目さるべき事は前に云つた。然し半賣淫婦はまだ外にもある。事務員、タイピスト、記者、看護婦などの中にも、そうした性質を帶びた者が少くないように見える。元來が玩弄的職業である女優や女中が、半賣淫的になるのは寧ろ當然だが、事務員などがそういふ傾向を持つのは誠に悲慘である。然し、勞力だけを賣るよりは、それと共に性を賣る事が大いに生活上の助となる場合、それを止め得る力は殆んどない。當り前の給金は甚だ安い、そして自分も性に餓ゑてゐる、そして誘惑が來る、どこにそれを防ぎ得る力があるか。

扨、純粹の賣淫婦は、公娼、私娼、藝妓、酌婦などである。妾、構ひ者なども或は此の部類に入れていゝだらう。これは別に説明するまでもない。一方に貧乏と美貌とがあり、一方に富裕と好色とがある。賣淫婦は必然に生ぜざるを得ない。

然し賣淫婦は必ずしも美貌者ばかりではない。甚だしく醜悪でない限り、大抵の女は賣淫婦になり得る。それにはそれの相手がある。多くの男子に妻を持ち家を持つだけの財力のない時、彼らは猶ほ何とかして其の性慾を充たそうとする。そこで彼等は下級の賣淫婦に行く。だから此の場合は、賣るのも買ふのも同じく貧乏の者である。

藝妓などの中には、他の多くの職業婦人や細君業者に比べて、寧ろ遙かに氣樂な生活を送つてゐる者もあるだらう。時としては立派な奧樣や令夫人になりすます者もある。然し大多數について云へば、何種の賣淫婦にせよ、いづれも淺ましい生活に相違ない。

（五）反抗者と改革者

以上、三種類の婦人を考へて見たが、要するに婦人は男子の玩弄であり奴隷である。

そこで之に反抗する者が現はれる。貴族の夫人が運轉手と駈落した。富豪に買はれた妻が若い情人の許に走つた。娼妓は無數に心中してゐる。心中も消極的の反抗だ。

然しそんな種類の消極的な盲目的な反抗と違つて、主義主張としての反抗運動が起つて來た。それを大別すると、第一が女權論者。これは參政權を要求したり、職業の自由を要求したり、

男子の姦通の處罰を要求したり、公娼の廢止を要求したりしてゐる。つまり形式上に於いて、婦人を男子と平等の地位に置かうとするのである。第二は婦人經濟的獨立論者。これは形式だけでは駄目だと悟つて、婦人に經濟的獨立の實質を持たせようとするのである。然し此の論者は、婦人の經濟的獨立と稱しながら、實は只だ婦人に職業を持たせる事を主張してゐる つまり職業婦人論者に過ぎない。そこで第三の母權論者が現はれた。これは職業婦人の悲慘と害惡とを認めて、其の傾向の增大に反對し、婦人には母としての重大な任務があるから、國家は宜しく其の母權を保護すべしと云ふのである。

然し今の國家が總ての母を保護し得るかどうか。總ての母の生活を保證する事が、今の國家に出來るかどうか。母の生活を保證するには、其の子の生活を保證せねばならぬ。其の夫の生活も保證せねばならぬ。つまり全國民の生活を保證せねばならぬ。

それが出來るなら社會問題はない。所が今の國家は、失業者の始末も出來ない。餓死に瀕してゐる多數の國民を見て知らん顏をしてゐる。そういふ國家に對して母權の保證を求めるばかりで、何の役に立つか。

そこで今度は、婦人だけ救濟する事は出來ない、總ての苦しんでゐる者を救濟して、それで初めて婦人も救濟されるのだと氣のついた者が現はれた。それは即ち今の××××××××××しようとする、社會運動者もしくば勞働運動者である。勞働者としては資本の××××××、婦人としては男子の×××××。『現代の女性觀』はそこまで行かなくては駄目だ。

肉の解放とエロス

室伏高信

この頃の女の變りかたは一つの驚異だ。私は短い外遊から日本へ歸つてきた時に一番に驚かされたのは若い女の變化であつた。特に若い女學生なぞを見てこの感が深い。はじけそうな肉、戀の目ざめをそのまゝなる目、若い女學生はたしかに復活してきた。獨り女學生だけでなく、職業女や、特に女給や、若しくは一般の家庭女なぞにも生命のとりもどしが急速に進みつゝあることはたしかである。信州へ講演に行くと何時も女が三分の一若しくは半分もきてゐるがそれ等の女がみな一樣に新らしい生命に生きかへつてゐることは彼女等の肉とその色と、特にその肉を隱くすことなき態度によつて充分に知ることができよう。私たちにはそれが一つの大きな驚きと恐れである。彼女等とわれ〱との間には天國と地獄とほどの隔りがあるかのようにも思はれる。われ〱が握りしめてゐたと思つた世界を彼女等によつて奪ひとられてしまつてゐるのではないかとさへも思はれて時には憎しみさへも感ずる。抗しがたき何ものかの存在を意識するからである。それは彼女等がたゞ若いからだと云ふのではない。惡魔によつて長く奪はれてゐた世界を彼女等の手が回復しつゝあると思はれるからだ。彼女等をしてその行くべきところに行かしめねばならぬ。そこにはしかし無論困難の幾つかゞある。彼女等には先づ訓練が缺けてゐる。たとへば彼女等の肉ははじけそうにまで發達してきてはゐるが、その肉の發達が學校の體操できたへられてゐる。學校教師と云ふ半死半生の機械によつて訓練されて彼女等の體格は如何に畸的に發達してゐるにしてもそこに一番大切なものが缺けてゐる。律動的

訓練のないことである。ダンスをやらないからである。律動は生命である。ほんとうに生命をとりかへすためには體操をやめてダンスをやらなくてはならない。體操は軍人になる人間にだけ必要だ。軍國主義の一つなのだ。ダンスは人間の歴史とともにある。文明になつてダンスが盛んになつたのではない。衰へたのである。人間が生命をとりかへすためには先づダンスを取りかへすことが必要だ。學校では體操を全廢してダンスをこれに代うべきだ。それから彼女等にとつて第二の危機は彼女等の環境の死滅してゐることだ。彼女等にはたしかに生命の芽がわき出てはゐるが彼女等の周圍は石のように冷めたい。世間はあまり多く常識化してゐる。彼女等には何んにも機會がない。彼女等の求めてゐる機會の何萬分の一も與へられることはできない。私は××××と云ふことを意味してゐる。××××がなくて女の解放がありうるか。父母兄弟、結婚、經濟制度、こうした×××××××××××××。更に彼女等がこの難關を突破して見たところで彼女等を迎へてくれる社交的なものが何ほ缺けてゐる。ダンス場の充分にないことが何よりの缺陷だ。ダンス場こそ×××××ために神の惠める機會なのだ。ダンス場はどこの村でも町でも起すべきだ。それもしかし日本のように官僚政治のこせ〳〵しさが重箱の隅までも支配してゐるようなことでは兎てもだめだ。日本のカフエは平民の出入することのできるたゞ一つの享樂の場所である。そのうへ西洋に比べると割合に美しい女給がこうしたところに集まつてゐる。われ〳〵が女房以外の女と話のできるのはカフエより外にはない。そのカフエの女さへ官僚政治の犧牲になつて矢張り生命と自由とを喪失してしまつてゐる。どこへ行つてもお嬢さんらしいような女ばかりだ。常識的で、淺薄で、人生の神秘に觸れることを知らずまた觸れようとすることもない。カフエの女も矢張り解放された女ではなくて押しこめられた女だ。小間使が旦那様に使へるようにカフエの女はお客に使へてゐる。これも奴隷なのだ。女を解放せよと云ふ聲には、伊藤傳右衞門でない限り誰れも反對はすまい。しかし女の解放とは何か。×××ではないか。そして肉の解放とは何か。彼女等の生きかへらんとする芽をつみとるべきか。肉の衝動を殺して人間を殺すべき

か。セキヂュアル・トリイブはエロスと兩立するか否か。

少しばかげた女性を尊敬する

室生犀星

私のいつも尊敬してゐるのは、怜悧や聰明な女性ではない――どこかばかげてゐるやうな、よく〱考へてみるとどうも少し足りないやうなところのある、それでゐて左う大して馬鹿げてゐない女性である。ぼんやりしてゐるやうな古風な性質で――そのため讀んだ書物や世の中の影響を少しも受けない側の――もつとつゞめて言へばどんなに苦勞したつて、その苦勞の中で苦勞そのものをけろりと忘れてしまつてゐるやうなところのある、そして苦勞のために苦勞らしい影響を少しも受けてゐないところのそんな女性を私は尊敬してゐる。

――もつと抉つて考へると、他の男と通じてもそれを本人がすこしも惡いと考へてないやうな、馬鹿げたところのある女性をも私は尊敬してゐる。――自分がもう人妻であるといふ身構えをもつて、男に接するといふことの、あんなにまでまざ〱と見える現代の女性は卑しい。――人妻であるからます〱美しくなつて、他人と安心をして交際つて、他人が愉快であるやうだつたらそれだけでなほ一さう美しくなれるではないか？

電車の中などに澄してゐる婦人をみると、なに糞とおもふ、――さうでなく柔しさうにおつとりしてゐるのを見ると、いゝなとおもふ、――そんな人は誰から見られつたつていゝ氣もちだらう、――その人だつて樂々と乘つてゐられるだらう。そんな隙のある女性といふものはその隙のあるところが、得も言はれず美しいものだ。

美人といふものはばかなところがあるものだ。そしてどこか古風なところがあるものだ。いくら現代のやうな敎養それ自身が容貌にあらはれるといふ時でも、れいの、おつとりした女性にはそれが少しも顏に出てゐないではないか？　却つて眼や口つきを美しくする助けとなるくらゐだ、――あんなとげ／＼した、すこしのことにもぴり／＼してゐる現代の女性なんて、私には不向きである。

離婚――それも折合ひがついたら勝手にはじめたらいゝだらう。人間同志が厭になるといふことは、人間同志が毎日考へてゐると同樣に當り前のことだから――いやなのを無理におさへてゐるのは不道德だ、――厭になつて別れたつて又好きになつて一緖になつたつて、誰に遠慮があるものだらう。自體人間はそんなふうにできてゐるのだから――婦人の方からだつて同樣に左う言はれるだらう――緣でなしの男にかじりつかれてゐるより、この世にどんないゝことが待ちかまへてゐるか分らないからだ。おたがひ人間同志がもつとあつさりと何も彼も得心のゆくやうになりたいものだ。そしてゆくうちに人間は好きな同士がめぐり合つて、そんな好きな同士ばかりの世界になるかも知れない――だが、どうだかよく分らない。

現代の女性？　その文字からしていやだ。そんな女性は勝手に雜誌社がつけて、勝手にそんな悶苦しいものにしたゝめだらうが、何といふきらひな文字だらう。一たい、雜誌といふものは、すくなくともこのごろの雜誌といふものは女を俎の上に乘せてまるで料理るやうに下らないことを書き立てる――その下らないことを私まで書き立てさせられるが、それにしても女といふものはどうも末の末までかうも問題になりやすいものらしい――といふことゝ偶然ではないやうな氣がする。――何處か清淨な土にゐる人があつて、こんな下界のありさまを眺めたら噴き出さずにゐられないだらう――何百といふ雜誌にいつも同じいやうに女のことが繰り返されて書かれてゐるのだから――そしてどれもこれも的が外れてゐたら――

……郊外田端の聖地？にもポプラ倶楽部といふところがあつて、三五人の白衣の少女らが打球に春日の永きを知らないでゐる生——たま〳〵通りがゝりにこれを見ると、少女のあられもない有さまに世は末なるかなの嘆きを發させるが、しかし今はもう馴れてしまつて、今日のこと昨日に非ず、とまで私は微笑をもつて彼女らの健康を禰讃するやうになつたが、世のうつりかはりを遅れながら氣のつくものは、あながち私ばかりではなからう——そしてあんな運動でも水泳でも勝手にやつて、勝手に健康になつたらいゝだらう。それが生涯できやうができまいが、そんな事が少女時代のゆめであらうがなからうが、一向かまはない——つゞまり、れいの、現代の女性とやらになつてしまふならなつてしまふし、れいの、おつとりした女性になるならなるだらうし……そして結局、離婚とか、不幸とか、災難とかに會つてみるのもいゝし、……さうして終りに私はかう言つてこの問題を片づけてしまひたいのだ。「面倒くさい人の事なんぞうでもいゝぢやないか？ ことに女性のことなんか今どきになつてかれこれ言ふのは、いや全く季節遅れの問題ぢやないか——』と。

女性の深刻さ

佐藤春夫

「女性は淺薄とさへも言ふことは出來ない。そも〳〵彼女たちは根つから深さなどは持つてゐないのだから」——そんなことをニイチエは言つてゐる。小生はこの言葉の解説をして答案に代へようと思ふ。

すべての男はよく女をスフィンクスだと言ふ。僕も女を謎だと思ふ。さうして女といふものを底の知れない深いものだと思つてゐる。

事實、女といふものは底無しなのかも知れない

すべての男子は、たとひどんなに淺薄でも、ともかくも底を持つてゐる。淺いなりにも深さはある。

すべての觀察者は恒に自分自身を尺度にしてあらゆる對象を度つてゐる。

ところで、女性を問題として考へ悩むものはいつでも男性である。そこで男性は女性のことを自分同様に何か底があるものとうつかり思ひ込んで女性を考察しつゞけて行く。

その觀察の根本に於て間違つてゐるのだ。——もと／＼底のないものを容積のある立體だと思ひ込んでしまつてゐる。いつまで立つても男性にとつては女性が謎で終る。

底のない圓筒へ水を一ぱい入れやうと試みてあせつてゐるのだ。精一ぱいそゝぎ込んでも、水はどん／＼下の方から流れ出してしまふ。一向、一滴も溜つたやうな形跡はない——一たいが底無しなのだから。そこで正直な、さうして根本の思ひ違ひに氣づかない男性どもは、「これやまあ何といふ深い圓筒だらう?」とひどくびつくりして目をまるくする。なかにはあんまりびつくりして死んでしまふのなどもある。「女性は淺薄とさへも言ふことは出來ない。そも／＼彼女たちは根つから深さなどは持つてゐないのだらう」さうかも知れない。しかし女性は男性にとつていつも底無しに深い謎である——男性自身が底無しの代物にならない限りは。

女性を考へてはいけない。あれは見たとほりのものだ。だからたゞ見ればいゝ。さうして何といふ愛らしいものであらう！淺薄で氣まぐれで無思慮で雑駁であればあるほど。さうして問題はそれだけ。「マノン・レスコオ」の作者はその書物のなかに書いてゐる「彼の女は輕はづみで考へ無しなのだ。けれども眞劍で正直ではあるのだ」——と、女性のチヤアムは實にそれである。

花屋の花と庭の色

生方敏郎

一口に女といつてもいろ〳〵有る。オンナもあればカンナもある。カンナ屑もある。

慾の皮ばかり突つぱつて色氣も水氣もなくなつてる婆あなぞは、オンナの部類には入れられない。カンナ屑である。

昔は外面如菩薩内心如夜叉といふ女があつた相であるが、今はその反對に外面如夜叉の内心如菩薩なるものに餘りにしば〳〵出會ふ。この外面如夜叉内心如菩薩も矢張オンナの部類には入らない。

女が假に男裝してゐるのを、私が若し知らずに見てゐれば、その時その女はオンナではない。又それが男でないことを豫め知つてゐても私に女としての感情を起さぬならば、矢張それはオンナではない。

この頃、ことに中性が多く成つた。中性は女からも出た、又男からも多く出た。

○

純粹の女――オンナは私にとつていつも好ましいものである。たゞその中で妻ばかりは好ましくない。だが、それもよく〳〵考へてみると、それは妻がいやなのではなくして、妻の夫たることがいやなのだ。妻から夫として所有され相になること稍もすれば夫として束縛され相になることがいやなのだ。結婚生活がいやなのだ。そしてオンナとしての妻がいやなのではない。

妻がいよ〳〵結婚關係を絶ち切つて本來の面目に立ち歸り、たゞのオンナとならうとする時、即ち「長々御厄介に成りましたが、これから里へ歸して下さい」といつて簞笥の環へ手をかける時、「勝手にしなさい」とは云ふものゝ、そしてそれはたゞお

芝居に過ぎぬであらうと見極めはついてゐながらも、その時何人か多少の未練なからんやである。これすなはち妻がいやなのであつてオンナは好ましいものである事の證據である。

○

妻にして何は且然り、況んや妻ならざる女、何の面倒もわだかまりもないオンナの如何に好ましいかは論を待たない。併し乍ら、失禮ながら現代のオンナは皆ことごとく賣物である。たゞその中には多くの賣約濟みがある。如何にオンナが好ましいからといつてこの賣約濟に手を出してはならぬ。これを犯せば罰がある。その賣約濟の赤札を無理にヘガして我物にしようとしたのが、近頃では神戸に於けるノールウヱー代理領事ニフウス閣下であるが、彼はその罰金として三年の懲役を裁判官から言ひ渡され、更に一萬圓の慰藉料を被害者から訴へられてゐる。この懲役三年の刑の宣告に對し、外字新聞神戸ヘラルドは曰く「南はシンガポールにより北はカムチヤツカの果に至るまで極めて安價に節操を賣る日本婦人の名譽？のための報償としては、それは餘りに高價に失する」と。之れ正に賣品と賣約濟との差別を辨別せぬ妄語である。

○

人の妻を以て賣約濟みの赤札附きとは、心得ぬ言葉である。無禮なる妄語である。と腹を立てる人々も有らう。然り妻は買つた品物であるが、妻はその前所有者たる父又は兄又は伯父から根分けして貰つた花である。妻は初めからの賣物であるけれども、妻は曾て非賣品であつた。妻は花屋の庭にある花であつたが、妻は人の庭園に咲く花であつた。

○

庭園の花は非賣品である。永久に賣らぬつもりでもなからうが、兎に角非賣品である。たゞし非賣品といふ言葉の眞意は、「賣らぬ花」といふことではなくして「普通の賣品より遙かに高値」といふことなのだ。だが幸福なことには、社會の人々は非賣品と聞いて手を引くほど無智ではなく、却つてそれには金を惜しまぬ買手が付く。

千圓の花は千圓の金持へ行き、萬圓の花は萬圓の金持へ嫁ぐ。百圓の花が萬圓の金持に買はれた時、人々は「氏なくして

玉の輿に乘る」と云ひ、百圓しか持たぬ貧乏人にして十萬圓の花を得たる時、人は「槍先の功名」と羨む。かゝる商取引を稱して「提灯に吊り鐘」と呼ぶのである

三十にして嫁がさる花を、昔から賣れ殘りと云つた。まだ十二三の蕾の中から許婚するのを、豫約申込みとは何故云はなかつたらう。

○

一目見て一夜の妻を買ふことを見立と云ひ、一目見て一生の妻を貰ふことを見合と云ふ。

○

資産を持たぬ男は手を働かすか口を働かすか或は頭を働かして、他人のために稼ぎ、それで漸く糊口の資を得る。しからば資産を持たぬ女は何うして糊口の糧を得るか？　男子には資産を持つた人々、ブルジョアがあるが、女子にブルジョアは一人も無い。誰も皆女は無資産だ。そこで彼等は何うして生活の糧を得るか？　それは他人に口を任かせるのが一番早道である。

他人に口を任せる時、居候として口を任せるか、妻として口を任せるか、といふ段に成れば、それはその場合次第だが、何れにせよ大切に取扱はれる方面を選ぶのが人情の常である。女が妻と成るのは、必ずしも性的生活に入るだけの目的ではなく、同時に食的生活に入るためだ。

○

最も少い勞力を以て最も多くの報酬を得ようと思ふ時――そして然う思ふのは人情の自然的だ――女は如何なる道を選ぶか？　男はさういふ場合、有力な人の紹介狀を得ることも有り、官立の大學を卒業することもあり、株式相場に手を出すことも有り、或は道德の境を越えて金持なら高利を貸すところを貧乏人は泥棒をするのである。又は賄賂を取るのである。

さて女は如何なる方法を以て、少く働いて多く得ようとするかといへば、それは身を任せて口を任せることだ。一人の人に賣り切りにする場合、妻と呼び又妾と呼ばれ、多くの人々に切り賣りする時、彼女は賣春婦と呼ばれてゐる。

女は牛や豚と同じ様に、潰しが利くといふ幸福を持つところから、却つてしば〳〵潰しにされるの不幸を招く。

男は殆んど潰しが利かない。男のつぶしはコマ切り以下である。女はつぶしにされてもロースかヒレかバラ肉ぐらゐだ。之れに舌鼓を打つ者はいくらも有る。

○

矯風會あたりの婦人たちが賣春婦の撲滅を計る時、若しそれを經濟的に救ふのでなければ、それは嫉妬といはれても、或は又商賣敵の根性からといはれても、返す言葉はない筈だ。魂が墮落してゐるところから賣笑婦をしてゐる者があるとすれば、それはむしろ賣笑に非ずして買笑である。彼女は他の方面、他の事柄に享樂することを知らないか又は知つてゐてもそれが滿足をせられない爲めに、性の享樂をしてゐるのである。さういふ女も有るにちがひない。さういふ男も有るのであるから。

賣笑を取り締るとは、賣笑を禁止することではなくして、賣笑の切賣を取り締ることである。丁度劇藥や毒藥を壜入りのまゝでばかり賣らせて、口を切つて小出しに賣ることは禁止されてゐるのと同様だ。小賣りや量り賣りをしてはいけない、といふことだ。壜に詰めレッテルを貼つて賣れ、といふことだ。

○

つい、こないだローサンヌの國際聯盟會議で、人身賣買の禁止を問題にしたことが報ぜられた、たしかに人身賣買ほど憎む可き商取引はないが、併し、彼等は何故その前に婦人に財産を與へることを決議しなかつたか？　婦人にして無産なれば、賣る可きところを賣るにきまつてゐる、賣るのが惡いか賣る可く餘儀なくするのが惡いかといへば、それは後者が惡いにきまつてゐる。賣るべく餘儀なくされてゐる時、之を賣るのは尤も捷徑だ。婦人に財産權と財産とを與へるか、又は今の社會狀態を何とか考へなほしてみるか、がそこに殘された問題である。

○

人々は、何より可愛がつてゐるオンナに何時まで苦勞させるつもりだ。

男の子に財産を讓ると同様に可愛い娘にも頒けてやる風習を作ることが肝腎だ。

○

最後に妻といふものに就いて一言しよう。妻は良人に口を任

せてゐるといへば奴隷の様だが、彼等は男の奴隷とちがひ仲々元氣旺盛だ。現代、一番氣の强い者はプロレタリアと女房とである、といつても過言ではあるまい、と思はれる位だから、この上權威が付いた日には何んな勢力に成るだらう、と杞憂する人々も有らう。だが、それは又その時のことであるし、或は却つて今のやうなデスペレートな勇猛心が失くなつて、小羊の如くに成るかも知れぬ。プロレタリアが豊かになれば大人しく成る様に。

近代の男の抱く女性觀とヤドカリ

山本宣治

女は一般に自己分析が出來ない、いや出來ぬのでなくてする事を欲しない。だから女性自身の女性觀なるものは、嚴密なる意味に於て、此近代に於ても存在しない。併し借物の女性觀ならば、いかに獨創性に乏しい女性にしても何か持合はせて居る。但し之は勝手氣まゝな人間の考へることだから、どうせ手前共に都合のいゝ又慾のいゝ注文にきまつて居る。此邊のコツをわきまへて活殺自在の手腕を振廻さなければ、婦人雜誌に原稿を賣込む事は出來ない。又コツをわきまへても其れ丈ではダメ、矢張融通をうまく利かさぬと、私の様な外交のまづい奴は婦人文化の講座から忌避されることにもなる。

* * * *

男の抱く女性觀には色々ある、無論之も我まゝ勝手な男の發明だから、手前勝手なのが常態であり、公平無私不偏不當なぞと申すのは政黨屋の看板同様に眞赤な嘘である。併し同じ慾のいゝ考の中でも、女性に受けのいゝのと、テンで御婦人に受けつけられぬ不人氣なのがある。換言すれば、男性が手製した女

性觀にしても、女が借りて暫くでも我物の様に飾り物に利用が出來るものと、とても借用の出來かねる不埒千萬のもの（例へばニーチエやショペンハウエルのそれの如き）との別がある。

中世紀歐羅巴の騎士の渴仰した美人や、ゲーテのあこがれた「久遠の女性」やは、近代の御婦人としても敢て御斷りになる心配はない。近く我日本の文壇に例をとつても、花袋氏の初期の作品によく現れる「美しい昨の峠の茶屋の娘」も宜し。「出家と其弟子」に出る遊女なにがしでも御婦人側に何の異議もない筈。つまり婦人雜誌の表紙畫にある様た艶麗な姿を具へて居り、純潔無垢の乙女心をもつ者としておきさへすれば、他の生活作用を無視しても成立する假想的女性が其等人々の偶像である。

＊　＊　＊　＊

私の少年時代に、當時の論客竹越三叉氏が其頃の外交を批評して『丹治郎外交』といふたのを、今でも覺えてゐる。其語の意味は、「梅暦春告鳥」の艶物語の中に活躍する米八や仇吉等の美妓が、何を著、何を味はひ何を飲んで其生命を維持し、何所から金を得て其色香を保ち得たかを記して居ない。恰も其梅暦の其物語の如く、時の外交は徒らに美辭麗句を以て人のすき心を唆る丈で、其國際的耽溺遊蕩費をどこの親父の脛をかぢつて支辨すべきか、一向無頓着であつたのを諷したのであつたと記憶して居る。

近代のフエミニストは、往時の遊蕩文學者爲永春水の描いた遊冶郎丹治郎ではなからうか、畫にかいた聖母はいさ知らず、現世のグレートヘンやエヴアンゼリンは矢張霞を吸ひ露を食つてばかり居られない事を、よく知つて居られて、母性保護などといふ近代的に世帶じみたお添物迄加へられる様にはなつたけれ共、それにしても矢張昔のまゝの「梅暦」式の考へ方は殘つて居ないかしら。

＊　＊　＊　＊

生物學の方で有名なヘッケルの文句に「個體發生は系統發生を繰返す」といふ語がある。我々男共が青春時代の抱いて居た女性觀の變遷の跡を回顧して見ると、丁度近代に於ける色々の女性觀の消長と同樣な變化があつて、前のヘッケルの句と同樣の現象が一般に現れて居る。始めは目を天の一方に馳せて足は

地に附かぬ聖女崇拝の態度、次は其美しい姿も俄に覺めて苦々しい現實に引戻された時の失望落膽と自暴自棄、其暴風激動もやがて過ぎて自分達と同じ人間たる異性と發見と共に湧き出る人間味、斯様な變化は文明諸國に於ける諸種の女性觀の運命にも見えて居る。

個人の心的成長に斯様な進化を辿りたければ、近く武者小路實篤氏の作品を始めから近頃まで讀んで見よ。詠嘆的な女性禮讃から始まつて「蒲團」の現實暴露を經て今に及んだ田山花袋氏の女性觀を見よ。人各々傾向の異るに從ひ、思想の卵から這出て幼蟲となり暫く蛹と化しやがては翅を具へる成蟲に到る迄、多少の遲速もあり、又充分な發育も遂げず、途中で發育を阻げられたまゝ小さかたまりで固定するのもあるが、大體は斯様な發育變化を遂げるものと見ていゝ。

* * * *

生物の個體發生でも途中で何か故障が起ると、邪魔されたまゝ一生其未熟の狀態を持續して終るものがある。人の胎兒の男は母の胎内にある時始め陰嚢を具へて居ないが、姙娠の晩期に及んで腹壁が下つてきて袋となり其所へ精巣を收める様になる。其が邪魔された儘世に出た胎兒は睾丸を腹腔内に潜めてをり、青春期になつても眞の男になり得ない。此の狀態を「性的兒性持續症」sex ual Intanfism といふ。

又母の胎内に居る時、周圍の液體が不足して窮屈であつた爲め、左右から癒着すべき上唇の發育が妨げられた時、例の兎唇になる。之は生後外科手術で縫ひ合はせられるが、矢張個體發生の間の發育阻害である。

* * * *

私の見る所によれば、個人の心的發生史に於ても、民族の思潮發達の中にも、斯様な發育阻害が屡々起るのではないか。人によつては青年時代に抱いたまゝの感傷的女性觀を維持したまま滿足して居られるのは、睾丸潜伏と同様な性的兒性持續症であるまいか。兎唇と同じ様な心的發育停止の現象でなからうか。

無論一方から見れば、外界に對する適應といふ事もある。まきがひを追出して貝殻の中に這込んだヤドカリは、其自身エビ

やカニと同類で鋏も持ち乍ら、貝の中に落付けた尻尾の端が安全な防禦設備の爲に軟くなつて螺旋狀の殼の中に根を下した爲今更殼から出る事もできず、終生殼を擔ぎ廻つて居る。近世フエミニストの中でも或男達は、此ヤドカリの樣に、若い時ふとした思ひ附きで、宿を借りたフエミニズムといふ殼を、其場の行き掛りで終に一生擔ぎ廻る樣な有難い幸福と且又安全な生活の保障を得た者も、あるやうだ。御婦人向きに人氣のある通俗小說を書く連中は大抵此種のヤドカリと見て差支へないだらう。基督教會とか矯風會とかいふものも、斯樣なヤドカリ共の殼と見做す事が出來る。

斯く云へばとて、世の多くのヤドカリ共を非難したのではない。廣い自然界の種々に異つた環境の中に生きて行く生物は多種多樣である。萬づの物住むに時あり、所あり。女性觀といふ小宇宙の中に於ても、ヤドカリをして永久にヤドカリたらしめよ。又一方カニをして永久に橫這ひせしめよ、エビをして終生自由なる活躍を續けしめよ。

一九二三、四、六。京都市外宇治町にて

赤阪見附と金龍館

宇野浩二

私は、七歲で小學校に通ふ頃から十九歲で中學校を出る時まで、大阪の宗右工門町といふ色町の一劃にあつた伯父の家に寄食してゐたので、自然人生のその大切な間に私が最も多く見多く接して來た女性といふものは、所謂藝者とか娼妓とかいふ甚だ憐憫な境遇の人たちであつた。無論、彼女等を私は彼女等の所謂お客として接したのではなく、單に遊び友達として、或ひ

は隣人として交際したのであるから、さういふ私の彼女等に對する感想は、一般の人々が彼女等に對して抱いてゐる感想とは隨分違つたものでなければならぬ。即ち私が見た彼女等は、その風變りな職業の持つてゐる特種な癖とか、習慣とか、考へ方とか、氣質とかは無論あるにはあるが、然しそれはほんの一分で、他の九分は矢張り普通の娘、普通の母親、普通の女たちの持つてゐる優しいところや、弱いところや、度し難いところやしをらしいところやの持主の外の何ものでもない。それどころか、多少誇大にして言ふと、ドストイエフスキイの飜譯小説の廣告文めいた文句で厭だが、その後私が見たところの色々違つた種類の世間一般の婦人たちと比べて、中には却つて寶玉のやうな、有難い、人間的な感情を持つてゐたと私が懷しく回想するやうな數人の女性をも數へることが出來る。

だが、一概に言つて、彼女等はその考へ方から、習慣から、あらゆる點で時代後れの存在に違ひないのである。一般に彼女等は敎育の程度も至つて低く、それで誰から敎はるともなしに、女大學流の道德を無條件に最上のものゝやうに信仰してゐて、（信仰といふと、私の見た彼女等の大部分は金光教の無智な信者で、）つまり女は男に負けるもので、從つて男の氣に入るやうにしなければならぬもので、優しくなければならぬもので、俯向いて物言ひ、内輪に歩き、その他何々、何々と、恐く「ねばならぬ、」といふ目標で生きてゐるやうに見えた。そして、自然、私も女は蔭のもので、用もないのに表を散歩するとか、難しい本を讀むとか、況して男をやり込めるやうな理屈を言ふとか、そんな事はしないものだ、とまあ謂はゞそんな風にいつとなく思つて來た。

すると、二十歳の年に私は東京に出て來たのであるが、間もなく或日赤阪見附を、下から電車に乘らずに歩いて、これまで二十年近くの間見馴れて來た大阪なぞには似たものもない、あの大きな阪、廣い道、並木、堀などの景色を心で感歎しながら、麹町の方へ上つて行くと、丁度學校の退ける時刻で、その頃あの阪の上にあつた華族女學校の生徒たちが、或ひは二人、或ひは三人、或ひは五人と連れ立つて、三々五々と私が下から上つて行くあの廣い阪道を、彼女等が上から下りて來る光景に

接した時の、私の感想を私は今だに忘れることが出來ない。私はその時、實は今言つた私の目に如何にも物珍しく映つたその邊の景色よりも何よりも、咄嗟の間にそんなものは悉く忘れてしまつて、その廣い阪道の上に撒き散らされたやうに見える女學生たちの恰好に、暫くの間ぼんやりと目を見張つたまゝ突つ立つてゐたものである。

それには、言ふ迄もなくあの邊の見すぼらしい小家など一軒もない、青い並木と、白い路と、赤い西洋館の屋根と、殊にあのゆつたりとした傾斜の、廣々とした道の背景があづかつて力あるのであらうが、兎に角その阪道を下りて來る女學生たちは、悉く私には今迄見て來た女たちとは違つた國の女たちのやうに見えた。彼女等は私が見て來た女たちよりは背も一二寸高く見えた、私が見て來た女たちがこそ〳〵と下向いて小刻みに歩いてゐた反對に、彼女等は騎兵のやうに胸を反り氣味にして、ゆつたりと大跨に歩いてゐた。彼女等の穿いてゐる袴も靴も、少しも不調和には見えず、その外輪に歩いてゐる足附も決して粗雜には見えなかつた。實の所、私はこれ迄女がそんな服裝をして似合ふものとは夢にも考へることが出來なかつた。私は袴を穿いても、靴を穿いても、否その方が別の美しさに似合つて見える女性といふものゝ存在に、私が昨日まで大阪で見て來た女たちと比べて、實際どんなに大袈裟に言つても言ひ盡せない程、驚き且つ感嘆したものである。私には全くその時の華族女學校の生徒たちは、華族女學校の生徒とは見えなくて、正に新時代の女性が私に向つて阪の上から歩いて來るやうな氣がした。

その次に、私が又同じやうな驚きを經驗したのに、初めて歌劇を見た時であつた。歌劇と言つても、それは淺草の金龍館の一座のものであるから、あれが本當の歌劇といふものかどうかは知らないが、兎に角、今は何といふ外題のものだつたか忘れたが、(多分それは出鱈目のダンスでゞもあつたのだらう)、幕が開くと、忽ち洋樂が起つて、舞臺は軍艦の甲板の上のこしらへで、そこに數人の女が水兵の洋服を着て、何か不思議な唄をうたひながら、各々靴の踵で床の上をかち〳〵と蹴ることに依つて、飛魚のやうな恰好で一勢に飛上るのである。その光景は、

その時私をそこへ連れて行つてくれた友達が半分吹き出すやうな笑ひを浮かべてゐたが、私には、笑ひ以上か、笑ひ以下か、何とも言はれぬ印象のものであつた。今こゝで私はその時の感想を小説のやうに述べてゐる暇を持たないが、兎に角、私は不思議な時代が來たものだと思つたことは確である。（その後、屢々私はその不思議な時代の片鱗を覗きに行くやうなつもりで、金龍館に行くことを今も好んでゐる）それにしても、十年前も五年前も、いつも同じ恰好をして、いつも大して變らない考を持つてゐる自分たちはどうなるのだらう。と自分自身が省みられて、些か心配な氣さへ起つて來たことを覺えてゐる。

閑話休題。さういふ迂濶者の私のことであるから、今更まつて「現代の女性觀」などと聞かれても、元より何の答の持ちやうもない、況して若年の頃ふとした機會からオットオ・ワイニンゲルの書物に親んで、遺憾なくその書物の弟子になつてしまつた私は、それに私自身の境遇や私自身の考へ方やが加はつて、今だに（今は女が參政權の運動をしたり、勞働問題の議論をしたり、或ひは女に大學者もあれば、女に大藝術家も輩出しようとしてゐる秋であるにも拘らず、私に矢張り女は閨に引込んでゐるべきもの、女の仕事はそんな男のすることとはもつと違つた方面にあるべきもの。云々、といふやうな古い考をそのまゝ持越してゐるものである。多分、出來るだけの好意と深切を以てそれ〴〵現代の高名な婦人達の仕事を觀察して見たら、彼女等が決して男の後に落ちべきものでない事を發見して、私のやうな不逞な考をいだいてゐるものでも頭を下げなければならぬ例が一二にして止まない程あるのだらうが、私に今はそんな暇もなく、又私は先に言つた通り「食はず嫌ひ」と言ふのでもあらうか、一向注意して見る氣にならないのである。その點、私の頭は自分ながら愚かな程頑固で、古い聖書の中にある通り、たとへ百人千人の善い男を見出すことが出來ても、一人の善い女を發見することは、先づこの地上では覚束ないことだと思ひ込んでゐるものである。又昔の聖人に雷同して、女子と小人は養い難いもの、浪花節語りに同感して、叩けば泣くし、殺したら化けて出るところの、度し難い生き物だと思ひ込んでゐるものである。だから、古來優れた學者や文人たちで屢々女性を神様の

次の人間程に崇拝したことを書いた本があるが、そしてそれ等を私と同感して讀んだこともないではないが、私の考へでは、それは女性そのものに價値があるといふのではなくして、男性がその理想や空想やをたま〳〵女性を鏡の代用にしてそこに寫し出して見たものに過ぎないとしか考へられないのである。所詮、今の新しい女性たちから見たら、私たちのやうな男こそ扱つて度し難いと言ふであらうか。

斯うは言ふものゝ、私も中々人に劣らない好奇心家で、言ふ迄もなく世の中が退くよりも進む方を希望するものである。だから、私が知らぬうちに、赤阪見附の坂の上から、靴を穿いてポプラのやうに反り身になつて大跨に歩いて來たり、或ひは舞臺の上を水兵の洋服を着て、斜めに飛魚のやうに跳ね上つたりる者である。

現代のそして將來の女性よ、進んではやがて國會議事堂で獅子のやうに吠え給へ、或ひは××××を持つて、馬に跨がつて進み給へ。(私は今だに午後三時の赤阪見附と金龍館とに出かけて行くことを樂しみにしてゐるものである。)だから、何のからかふ氣持など毛頭なしに、私は生あるうちにこういふ××××××××××××にしてゐるのである、そしてそれが××だけでなく、××××××××××である、とさう祈

限界速度

玉城嘉十郎

長らく廢れたまゝにされて居た、舊東海道線の逢坂山隧道が航空學の研究の爲めに使用せられると云ふことは慶すべきことであると思ひます。どう云ふ風に使用せられるのか、委しいことは知りませぬが、新聞紙の傳へたところに依りますと、風洞として使用せられるものらしう思はれます。

飛行機が空中に運動する時、其が受ける浮揚力や、前進に對する抵抗力を知らんが爲めには、其實物を實際に運動せしめて、之を測定するに越したことはありませぬ。併しそれがためには、廣い場所と、莫大な經費を要します。ですから普通航空研究所では、實物の何分の一かの大さの模型を造つて、其を風洞内に吊して、人爲的に風を送つて、其が受ける風壓等を測定するのであります。

一般に一物體が一定の速度で進んで居る空氣中に置かれた時、其物體が受ける全抵抗力は次式に依て與へられます。

$$R = \rho l^2 V^2 f\left(\frac{\nu}{Vl}\right) \cdots\cdots\cdots\cdots (1)$$

此式中ρは空氣の密度、Vは空氣の運動の速さ、νは空氣の粘性係數と密度との比で所謂運動粘性係數(Coefficient of Kinematic Viscosity)と稱するもの、lは物體の大さを表はすもの、例へば物體が方形板ならば其の邊の長さ、球ならば其半徑と云ふ樣なものであります。fは未知の函數を表はします。實物が靜止せる空氣中をVの速さで動いて居る時に受ける全抵抗も亦明かに(1)式のRで表はされます。

實物の模型を風洞内に入れ、其れにVの速さの風を當てたならば、其れが受ける風壓は(1)式と同樣に

$$R' = \rho V'^2 l'^2 f\left(\frac{\nu}{V'l'}\right) \cdots\cdots\cdots\cdots (3)$$

で表はされます。但l'は模型の大さを表はすものであります。

今

$$Vl = V'l' \quad \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots \quad (3)$$

としますと、(1)式のRと(2)式のR'とは全く同じものになります。故に實物の飛行機が空中をVの速さで飛んで居る時に受ける全抵抗力は、實物の$1/n$の大さの模型が風洞内でV'の速さの風を送つた時に受ける風壓に等しくなるのであります。隨て此のR'を實測して、飛行機が實際受ける全抵抗力Rを知ることが出來るのであります。

併し模型と實物との間に(3)式の示す關係を滿足せしめようとすると風洞内の風速を非常に大きなものにせなければなりませぬ。例へば實物の二十分の一の大さの模型を使つて、一時間百哩の速さで飛んで居る實物飛行機の受ける抵抗力を知らうとすれば、風洞内の風速は一時間二千哩にせなければなりませぬ。實際現存せる風洞で人爲的に此の樣な風速を出し得るものは一つもありませぬ。故になるべく(3)式の條件を滿足せしめるには、模型を大にし、隨て共の容れるべき風洞を大にせなければならぬのであります。こう云ふ意味に於て、逢坂山の隧道が風洞として使はれるのは結構なことの樣に思はれます。併し風洞内の實測では(3)式の條件が完全に滿されないことは明かであります。ですから、實際上にはどうすればよいかと云ふことも考へねばならないことであります。併し私はこゝにそれらのことに就て書こうとするのではありませぬ。外に面白いと思はれる現象のあることを紹介したいのです。

あの美しい巴里の町に高く聳えて居る有名なエッフェル塔の建設者であるEiffelは航空學の方でも立派な仕事をして居る人であります。あの塔上から、種々の物體を落下せしめて、其が受ける空氣の抵抗に就て測定を行ひました。後に風洞を造つて研究しました結果が大きな書物になつて發表されて居ります。

一つの球を風洞内に吊して、之にVの速さの風を當てた時に、球が受ける風壓は、(1)式からでも分る樣に

$$R = kSV^2 \quad \cdots\cdots\cdots\cdots\cdots\cdots \quad (4)$$

で表はすことが出來ます。Sは球の直徑を含んだ切口面積であります。kは精確には空氣の密度や粘性、物體の大さ及形狀などに關係するものですけれども、今の場合には略ぼ常數と見てもよいものであります。之を風壓係數(Pissure Coefficient)と呼んで置きましょう。

Eiffelの測定によりますと、風壓をグラムで表はし、面積Sを平方メートルで、速さVを秒メートルで表はすならば

$$k = 0.011$$

となるのでありました。ところが獨逸のゲッチンゲンの風洞で測定したのによりますと

$k=0.0275$

となるのでありました。之は墺國の Lössl の得た結果と略一致して居るのであります。それで獨逸側では佛蘭西側の測定に誤のあるのだと思つたのでありました。

Eiffel の得た風壓係數は、前に塔から落下せしめて測つた時のものと略一致するのみならず、Renard の得た $k=0.0135$ とも略一致して居ます。風壓係數が一方で得たものと他方で得たものとが二倍半も違つて居ると云ふことは、觀測や計算などの誤差と云ふ樣なものでなく、もつと根本的の原因があるのであらうと云ふことに着眼して、Eiffel は球の大さを變へ、風速も毎秒二メートルから三十メートルの間に變へて測定を行ふを見ました。其結果を拔いて擧げて見ますと次の樣であります。

I　直徑 16.2 cm. の球

風速	9.45	10.60	11.35	15.50	16.60	17.50
風壓	46.4	58.5	61.8	42.5	50.8	54.5
風壓體數	0.0251	0.0253	0.0232	0.0092	0.0090	0.0086

II　直徑 24.4 cm. の球

風速	5.65	7.15	80.3	10.80	14.15	15.70
風壓	35.5	53.5	61.5	64.	92.5	112.50
風壓係數	0.0249	0.0234	0.0215	0.0123	0.0106	0.0104

III　直徑 33 cm. の球

風速	5.4	6.0	7.1	8.8	9.5	10.6
風壓	49.5	54.0	60.2	73.2	84.0	99.0
風壓係數	0.0202	0.0176	0.0140	0.0109	0.0102	0.0102

右の表を注意して見ますと、Iでは約毎秒十二メートルの風速の時に、風壓も風壓係數もが突然減少することが解ります。IIでは約毎秒七メートル、IIIでは不明瞭にはなつては居ますが約毎秒五メートルの時に此の激變が生じ初めます。之等に依て見ますと、或る特別な風速の時に突然な變化のあることは確かです。此の風速を限界速度 (Critical Veloctiy) と名けて置きましよう。

IからIIIまでの表では限界速度と云はれる風速の極めて附近の値を僅かに擧げたに止まりますが、尙ほ風速を大にしますと、風壓係數が〇、〇一一になつて來るのですし、風速を小にしますと〇、〇二七五に略ほなつて來るのであります。ゲッチンゲンでは其當時毎秒十メートルしか風速を出し得なかつたものですから、此の大きな風壓係數をのみ測つて居たのだつたことが知れたのであります。

Eiffel が此の限界速度の存在の發見を發表したのは一九一二年の暮れのことでありました。併しそれよりも三十年も以前に

英國のマンチエスター大學の Osborne Reynolds が水の流れの場合に之によく似た現象を呈する限界速度のあることを發見して居ます。

細い圓管を通じて、靜かに水を流れしめますと、そこからT時間に流出するQ量は

$$Q=\frac{\pi a^4 P}{8\mu l}t \quad \cdots\cdots(5)$$

で與へられます。aは圓管の半徑、lは圓管の長さ、Pは其兩端に於ける壓力差、μは水の粘性係數、πは圓周率であります。此の式の表はす關係は理論的に容易に出すことが出來ますが Poiseuille が初めて實驗上得たものですから、Poiseuille の法則と名けて居ります。此の法則は多くの學者によつて嚴密に檢査されたもので、精確に成立するものだと云ふことが知られて居ります。

圓管の切口を流れる水の平均速度の大さをVとしますと

$$Q=\pi a^2 Vt \quad \cdots\cdots(6)$$

としてよろしいから、(5)式は

$$P=\frac{8\mu l}{a^2}V \quad \cdots\cdots(7)$$

となります。

$$A_p=\frac{8\mu l}{a^2} \quad \cdots\cdots(8)$$

としますと(7)式は

$$P=A_p V \quad \cdots\cdots(9)$$

となります。即壓力差Pは速度の大さVに比例して居ます。

Reynolds は圓管を流れて居る水の一部を着色し得る樣な裝置をしました。流れの速さが小な間は、着色された部分は細い糸の樣に一直線を畫いて流れて居るのでありますが、流速を漸次大にしますと、或る一定の速さに達したときに、突然管内全部が着色して終ふのであります。之を電氣火花の樣な瞬間的の方法で照して見ますと着色された糸狀の部分が、縺れもつれた極めて複雜な狀況を呈して居るのが見られます。即 Reynolds は、一の限界速度があつて、其速度以下では水は各部分とも一樣に流れて居ますが、それを越えると複雜な運動をし、前の場合には Poiseuille の法則があてまはるが後の場合にはあてはまらないことを發見したのであります。限界速度以上の速さで流れて居る時の水の運動狀態を Lord Kelvin は Turbulent Motion と名けました。之を亂動と稱しましょう。

亂動の際には(9)式の代りに

$$P=A_t V^2 \quad \cdots\cdots(10)$$

とせなければなりませぬ。AはA_pに類した常數であります。nはReynolds, Couette, Boseなどの測定によりますと一、六と一、九五の間にある數であります

一般に此の管壁の單位面積が受ける表面抵抗力は

$$R=\rho V^2 F\left(\frac{\nu}{Va}\right) \qquad \cdots\cdots(11)$$

で表はすことが出來ます。Fは未知の函數でありますが簡單に(11)式を

$$R \propto \rho V^2 \left(\frac{\nu}{Va}\right)^n \qquad \cdots\cdots(12)$$

と書いて見ることが出來ます。そうすると、nが1の時は恰度限界速度以下の速さで流れて居る時の法則を與へます。nを零とした時はRはV^2に比例します。之は半徑の可なり大きな鐵管内などを水が流れて居る場合に用ゐられて居る公式

$$R=k\rho V^2 \qquad \cdots\cdots(13)$$

に相當して居ます。細管内に於ける亂動の場合はReynoldsの研究によりますと$n=0.277$とせなければなりませぬ。

細管の場合に於ける限界速度は

$$\frac{Va}{\nu}=\text{const.} \qquad \cdots\cdots(14)$$

を滿足するものであるとがReynoldsに依て示されました此式から限界速度は半徑のaが大なる程小となることが知れます。

前の球が風洞内で受ける風壓に就ても、此の細管壁が受ける表面抵抗力に就ても、一の限界速度があつて、其を越えると急に其値が變ることや、其の限界速度と球の管の半徑との間の關係は誠によく類似して居るものと云はなければなりませぬ。併し注意して見ますと、球の場合には限界速度を越えると風壓が急減しますが管壁の場合には其反對に抵抗力が急に增加しますこれを見ましても此の二つの場合が全く同じだとは申せませぬ

球の場合には、限界速度以下の速さの風が當つて居る時には球の後方に殆ど球の直徑に等しい長さの圓錐狀の部分に盛に空氣の亂動があるのを、小さい糸片の樣なものを其部分に持つて來ても認めることが出來るのであります。限界速度を越えますと、此の部分に於ける亂動が殆ど無くなります。そして此の場合に球の表面に於ける風壓分布の狀態に急變を及ぼします。其結果として急激に風壓係數の減少を來すのであります。併し風速が尙ほ增すと共に球の受ける全風壓は漸次に增加して來るのでありまして、其時の風速との關係は依然(4)式で與へられるのであります。

亂動に就ては實驗的にも理論的にもまだ充分のことが知られて居りませぬ。こゝでは單に此の樣な現象のあることを紹介するに止めて置きます。

時評

商工黨の提唱

山川均

一

最近の政治界に――といふよりも寧ろ政治界の注意の上に――多少の波紋を立てたものは、武藤山治氏の商工黨組織の計畫である。

武藤氏は資本家のうちでは――少くとも武藤氏が折に發表せられる意見が吾々に與へた印象では――最も率直にして正直な人である。之は恐らく、武藤氏の代表せられる資本が、最も率直にして明らさまな搾取方法を其礎としてる、事實を反映したものである。紡績業は近代工業の先頭に發達する產業である。そして今日に至るまで、其の生產技術の上には、殆んど何等の根本的の改善が行はれて居らぬ。それは唯だ近代的工業の初めて發達する地方へ地方へと所を替へることによつて、最大の利潤を維持して居る工業である。之は言葉を換へて云へば、紡績資本が勞働を搾取する方法が、極めて原始的なことを意味して居る即ち紡績業の資本は、勞働階級の生活標準の最も低い所を選び、更にそのうちから、勞働階級のうちで最も賃銀の安い、そして搾取に對する防衛力の最も弱い部分――特に婦人と子供――を選んで搾取する。それも殊更らに生活程度の低い地方に人買ひを出し、誘拐同樣に少女を拉し來つた寄宿舍に監禁する。紡績資本の搾取の方法は、奴隷の搾取と大差がない。

武藤氏は資本家のうちでも　特に斯ような率直、單純、明白正直に勞働を搾取することを毫しも怪まぬ種類の資本を代表する人である。その上に紡績業は、近代資本主義の平和時代自り

主義時代に照應する工業であつて、國家の帝國主義的政策と織り込まれて居ることも最も少なく、資本の獨占的性質を帶べることも割合に少ない工業である。即ち紡績資本の搾取方法と利潤増殖の手段とは、簡單明白である。そして特に此種の資本の利潤を代表する武藤氏の言動が、常に嚴正に此種の資本の立場に立つて、其の利害の主張に率直正直であるのは、必ずしも不思議でない。

商工黨組織の提唱も、同じく武藤氏の率直と正直との表はれとも見ることが出來る。

二

今日までも商工業の代表を標榜して、選擧を爭ふた者がないではない。けれども武藤氏の商工黨組織の提唱は、少くとも直接には戰後の不景氣が基調となつて居る。そして武藤氏の提唱が政治界に多少の反響を起したのもそれが爲めである。所謂戰後の不景氣は戰爭中の不自然な好景氣の反動として起つた一時の現象ではなくて、全世界の資本主義が全體として、よくこの危機を乘切るか否かゞ疑問とせられて居る。從つて其の影響は多かれ少かれ全ての資本に打撃を與へて居る。殊に世界的に見れば、日本の工業は全體として、安い勞働――即ち、より原始的な搾取――を基礎として成立つて居るゝのである。從つて日本の工業は全體としても、此の難關を切抜けることは至難である。

けれども此の打撃を最も痛切に感じたものは、恰かも武藤氏によつて代表せられてゐる種類の資本であつた。即ち政治的權力と結合することが最も少なく、大體に於て、自由競爭の戰場に獨立獨歩して來た資本であつて、紡績資本はその代表的のものであり、その中心的の勢力であつた。此種の資本は、前にも指摘したように、寧ろ資本主義の發達段階に於ける平和時代、自由時代の特徴的の資本であつて、今日まで、多く政治的權力と結托する必要がなく、直接に帝國主義的政策と抱合する必要とも見なかつた。彼等は自由な市場に於て、自由に勞働を搾取する自由の保障せらる限りは、寧ろ爲すが儘に放任せられることを希望した。そこで彼等は政治に冷淡であつて、寧ろ政治的闘爭の渦中に卷き込まれることを恐れて、勉めて之に遠ざからうとした。

ところが戰爭の終了と共に、世界的な經濟上の危機が襲來すると、最も無力無援を痛感したものは、疑ひもなく此種の資本であつた。武藤氏の商工黨組織の提唱は、此種の資本の絶望的の悲鳴であり、躁焦であつて、武藤氏の率直と正直とは、この悲鳴と躁焦とを、率直に正直に發言したものに外ならぬ。

この事實は、武藤氏の商工黨の成立と否とは別として、日本の資本主義發展の歴史の上に、深長な意味がある。即ち日本の資本家階級は――大資本と財政資本の階級ばかりでなく、資本家階級全體として――資本主義前期の特徴であつた自由主義と放任主義との最後の傳統から拔け出でゝ、直接に政治的權力――即ち國家の權力――によつて支持せられることを必要とする時代が來たことを意味して居る。言葉を換へて云へば、日本の資本は、國家機關と名づける自動車のハンドルを、自分自身で操縱する必要に迫られて來たのである。たゞ此の自動車を、何處に突き當てるかゞ見ものである。

三

斯ように武藤氏によつて代表せられる――乃至は武藤氏が代表しようとする――資本は、最早や是までのように、自動車が結局は自分の所有物であるといふ事實に滿足して、運轉手の勝手な操縱に任せておけなくなつて來た。それほどに、彼等の進路は危險にして不安なものとなつた。

この不安と躁焦とを反譯すると、武藤氏の謂ゆる、商工階級は商工階級の利害を代表する商工階級の代表者を持たなければならぬいふことゝになる。然しながら之は武藤氏によると、商工資本家の階級的利益を計る爲めではなくて、『國家全體の利益のためなのである。こゝにも武藤氏の愛すべき率直と正直とが現はれて居る國家の利害とは即ち資本家階級の利害であることを信じて、少しも怪むところなくして公言するところにも、資本家階級の一部分の當面の必要を以つて、直ちに國家の利害――資本家階級全體としての利害――として押しつけやうとするところにも、慥かに武藤氏の率直と正直がある。

武藤氏の提唱は、謂ゆる實業家――武藤氏と同じ立場にある資本――の間には、可なり熱心に歡迎せられて居ると云ふことであるが、一般の世論と既成政黨の間では少數の例外を除いては、概して此の計畫に同情がない。商工黨の組織に贊成するには在來の政黨が階級的に分解し精密に各階級を代表した政黨の成立することを以つて、政治上の進歩と見做して居る。ところが之に反對する多數の見解は、同じ理由を取つて反對の論據として居るようである。即ち政黨は國民と國家を本位とし、政治上の主義と意見によつて集るものであつて、或る階級の利害を代表すべきものではなく、階級と階級との利害を調和すべきものだと云ふのである。

ところが面白いことは、是等の反對者は、斯う云つた直ぐ跡から、商工階級の利害は、從來の政黨によつて、既に充分に代

表せられて居る、從つて今更ら、階級的色彩をむき出した商工黨を組織して、無産階級黨や勞働階級黨を挑發するのは不利益であると主張する。

商工資本家階級の利害は、既成政黨によつて、既に充分に日本の政治的權力のうちに代表せられて居るとしたならば、この商工階級の政治的勢力が、商工黨の形を取つて現はれると現はれざるとは、少くとも無産階級の立場からは少しの相異はない。自動車そのものが資本家階級全體としての持物であり、そして商工資本家階級の意志は、運轉手によつて充分に呑込まれて居るとしたならば、この運轉臺に腰をかけて居るものが職業的の運轉手であると、無免許の素人であるとは、少くとも此の自動者の所有に關係のない無産階級の立場からは、何等の違ひはない。否な此の自動車の所有關係が明白になる爲めには、無産階級は寧ろ自動車の所有者によつて、直接に自動車の操縦せられることを歡迎する。そこで若し武藤氏の商工黨が成立するものとすれば、それは僅かに階級關係を一層明白にし、階級間の勢力分布の狀態を一層明白にするものとして、吾々は寧ろ之を歡迎しなければならぬ。

四

然しながら武藤氏の商工黨の成立は、それが望ましい程にそれほど成り立ち易いものでないことも忘れてはならぬ。

自動車は固より、資本家階級の自動車である。彼等は其の欲するが儘に操縦する權利がある。けれども此の國家機關の自動車は、同時に、乘合自動車であることをも忘れてはならぬ。

資本の階級は、之を無産階級と對立させた時には『一つの階級である。けれども無産階級そのものの純一な内容を持つて居らぬように、資本家階級の内容も亦た決して純一でない。それは一般的には、資本主義の發達段階に從つて内容の構成を異にする。次には其の國其の國の資本主義發達の特徴に從つて、特殊な構成を持つて居る。そして資本家階級の内容の構成の異るにつれて、その間の階級的勢力の分布も勢ひ異つて來る。國家機關の自動車は資本家階級の持物であるにしても、決して内容の純一な資本家階級を乘せて走るものではない。この自動車が無産階級の利害といふ軌道を走つて居らぬことは無論としても、さりとて必ずしも資本家階級の利害といふ軌道を走つて居るものでもなくて、是等を超越した或る第三の軌道——國民と國家——の上を走つて居るかの如く見えるのは、その爲めである。

曾てマルクスは、資本主義的××の政府は、ブルジョアジー

の執行委員であると云つたがとある。若し或る政府がブルジョアジーの執行委員會であるとしたならば、この執行委員會はブルジョアジーを構成する全ての要素——ブルジョアジー全體としての階級的利害を代表しなければならぬ。商工黨の組織に反對する人々が、政黨は階級的利害も主張すべきものではなくて階級と階級との利害を調和せしめるものだと云つたのは、僅かに此の執行委員會の職分を理解したものであつて、謂ゆる政治の『要諦』を摑んだものである。

然しながら此の場合にも、自動車のハンドルは何人かが握らねばならぬ。少くとも何人かゞ運轉手を決定する有力な發言者とならねばならぬ。そして之は必ず資本家階級を構成する種々なる層のうちの、中心の層、種々なる勢力のうちの、中心的の勢力でなければならぬ。そして此の資本家階級の中心層、資本家階級の中心勢力は、現在の日本では、武藤氏の代表し、若くば代表しようとする謂ゆる商工階級ではなくて、政治的權力と抱合して發達して來た大資本、乃至は財政資本の階級にあるのである。

五

資本主義の特徴的の政治形態は云ふまでもなく政治上のデモクラシーであるが、日本の資本主義は議會制度を持つといふただけで、嘗て議會が眞實に政治の中心となつたこともなく、民主政治を發達せしめたこともなく、民主政治の本來の政治形態を發達せしめても居らぬ。日本の資本主義は、大體に於て、その特徴的の政治形態を發達せしめなかつたと云つてよい。之は言葉を換へて云へば、日本の資本主義は、多かれ少かれ中世紀的の政治主義と抱合して發達したことを意味するものであつて、資本主義はその特徴的の政治形態以外の、如何なる政治形態にも順應して、その下に發達し得るものだと云ふ、一つの例證を加へたものである。

現に或る國では、純粹な中世紀的の專制政治の下に、近代的の資本主義が發達して居つた。日本の形勢は精密に同じではないが、寧ろ之に近いものがある。

殊に資本主義的出發のおくれた日本では、資本主義は誕生の當時から、國家の保護といふ硝子張りの保溫器のうちでなければ、發育することが出來なかつた。そこで日本の資本主義の歷史には、資本主義前期の特徴たる平和主義自由主義の時代は、僅かに經濟學說の上に通過の痕跡をとゞめたゞけであつて、資本主義は初めから國家の政治的權力と結合し、官僚政治と共の軍國主義と抱合して發達した。資本主義が標本的の發達をした

國では、平和主義自由主義の資本主義が其の最後の發達段階に近づくにつれて、帝國主義的性質を帶び、從つて之に相應はしい官僚政治と軍國主義とを發達せしめたものである。ところが日本では、資本主義はそれ以前から讓られた官僚政治と軍國主義に順應した。明治の初年には、自由民權運動を起したが、此の新興階級は早くも革命的性質を失ふて、全く官僚軍閥と抱合するようになつた。斯ように官僚政治と軍國主義の懐の中で育つた日本のブルジョアジーは、階級的に成熟するにつれて、漸次に政權を官僚軍閥の手から引繼いだが、この政權の移動は極めて圓滑に、極めて漸進的であつて、この特徴を最もよく代表したのが、原敬氏であつた。

然るに日本のブルジョアジーが政治上の權力を確立した時には、資本主義は更に新しい理由の爲めに、官僚政治と軍國主義とを必要とする段階に達してゐた斯ように官僚政治の養子として大きくなつた日本の資本主義は、大きくなると、この傳統的の官僚政治と軍國主義とを、そのまゝ養子にしたのである。

斯ように日本の資本主義は、その發足の第一歩からして、政治的權力と離るべからざる關係を保つて居る。政治的權力と資本の結托は、日本の資本主義の特徴であつて、日本の資本主義は全體としても、政治的權力を離れて獨り立ちをしたことは無いと云つてよい。從つて日本の資本家階級の中心勢力は、勢ひ政權に最も接近した部分である。そして大資本乃至は財政資本こそ、政權に最も接近し抱合した種類の資本である。

六

勿論この種の資本と、一般の商工資本との間には、大體の階級的利害の一致があるにしても、其の利害は恐く精密には一致して居らぬ。そして之がやがて武藤氏の商工黨の提唱となつて現はれる。そこで或る新聞が武藤氏の計畫を評して、『政商に對する素町人の運動』であると言つたのは、慥かに當つて居る。たゞ問題は、日本の特殊な資本主義的發達を背景とし、更に資本主義が最後の發達段階たる財政資本の時代に入り、帝國主義の時代に入り、獨占主義の時代に入つて居る現實を舞臺として資本主義前期の特徴を代表したこの『素町人』が資本主義の行掛に段つてゐる政商を向ふに廻して果してどれほどのことを爲し得るかと云ふ一點にある。

大資本の階級と、小資本の階級、殊にカルジョア階級との間に利害の睽離があることは事實であつて、現に米國の如きは、この利害の睽離が最も著しい形で、二大政黨の分解作用を促して居る。卽ち共和黨と民主黨との政綱の相異が著しく減じてゐ

く一方には、兩黨の内部に於ける大資本を代表する右翼と、小資本と農業者とを代表する左翼との間の相異は著しくなつて居る。そこで米國に於ける政黨の分化は、兩黨の右翼が合して保守的な大資本家黨となり、左翼が合して小資本と農業者とを代表する比較的急進的な小ブルジョア黨となるべき傾向を指して居る。ボラーヤラ・フォーレット運動は、慥かに此の形勢に應じ此の形勢を促して居るものである。

そこで日本に於ても、之と同樣な政黨の分化が起るものとすれば、武藤氏の商工黨の提唱は、此の分化作用の第一歩とならぬまでも、この形勢の一表現であるかも知らぬ　けれどもそれにしては武藤氏の運動が既成の二大資本家黨の内部から起らないで、外部から起つたことは、第一の不幸である。米國の政黨横斷運動の強みが、小資本家階級と共に、經濟的に壓迫せられた農業者の階級を味方として居るに反して、武藤氏の商工黨には地主を引着ける力のないことは第二の不幸である。更に米國の小資本黨には、中間階級の多數を吸收する可能性があるに反して、日本では是等の小ブルジョア急進分子と中間階級とは、武藤氏の商工黨によつて率ゐられるよりも、大資本への政權推移の新形勢に順應し損ねた官僚分子によつて率ゐられる可能性をより多く持つて居る。

武藤氏の商工黨の前途は尚ほ未知數である。或は政黨分化の導火線となるかも知れぬ。それと同時に、議院の控室にもう一つの無所屬團を加へるに過ぎないかも知らぬ。そして何時とはなしに、却つて既成政黨のうちに、同化し分解しされるかも知らぬ。それでも又は、資本家階級の一家族間の、ほんの夫婦喧嘩に均しいいざこざ（例へば工業俱樂部系に對する嫉妬の喧嘩）とに過ぎ去るかも知れぬ。

けれども唯だ、之れだけのことは明かである武。氏藤の商工黨組織の提唱を以て、日本に於けるブルジョアジーの政治が愈々ほんとの軌道の上に引戻され、之からブルジョア・デモクラシーが日本に發達するか如く觀測するのは、慥かに誤つて居る事である。武藤氏の商工黨の提唱は、日本の資本主義に於ける謂ゆる政商的資本の階級と素町人的資本の階級との間の、勢力の分布に變動を來した結果でない。商工黨の成立は、政商的資本に對して素町人的資本の勢力が增大した結果であるとしたならば、商工黨は寧ろ戰爭中に起るべき筈であつた。武藤氏の商工黨の基調は、謂ゆる素町人的資本の勢力の增大ではなくて、却つて、戰後に受けた打擊と苦境を代表して居るものである。從つて商工黨の出現は、決して日本にブルジョア・デモクラシーの急進的運動の起ることを意味するものではない。

唯だ日本の無產階級は、自動車の持主が勝手に自動車を操縱して、勝手なところに突き當ることに對すべく少しの理由を反も有しない。（四月十日）

片山潜著

自傳

第七版

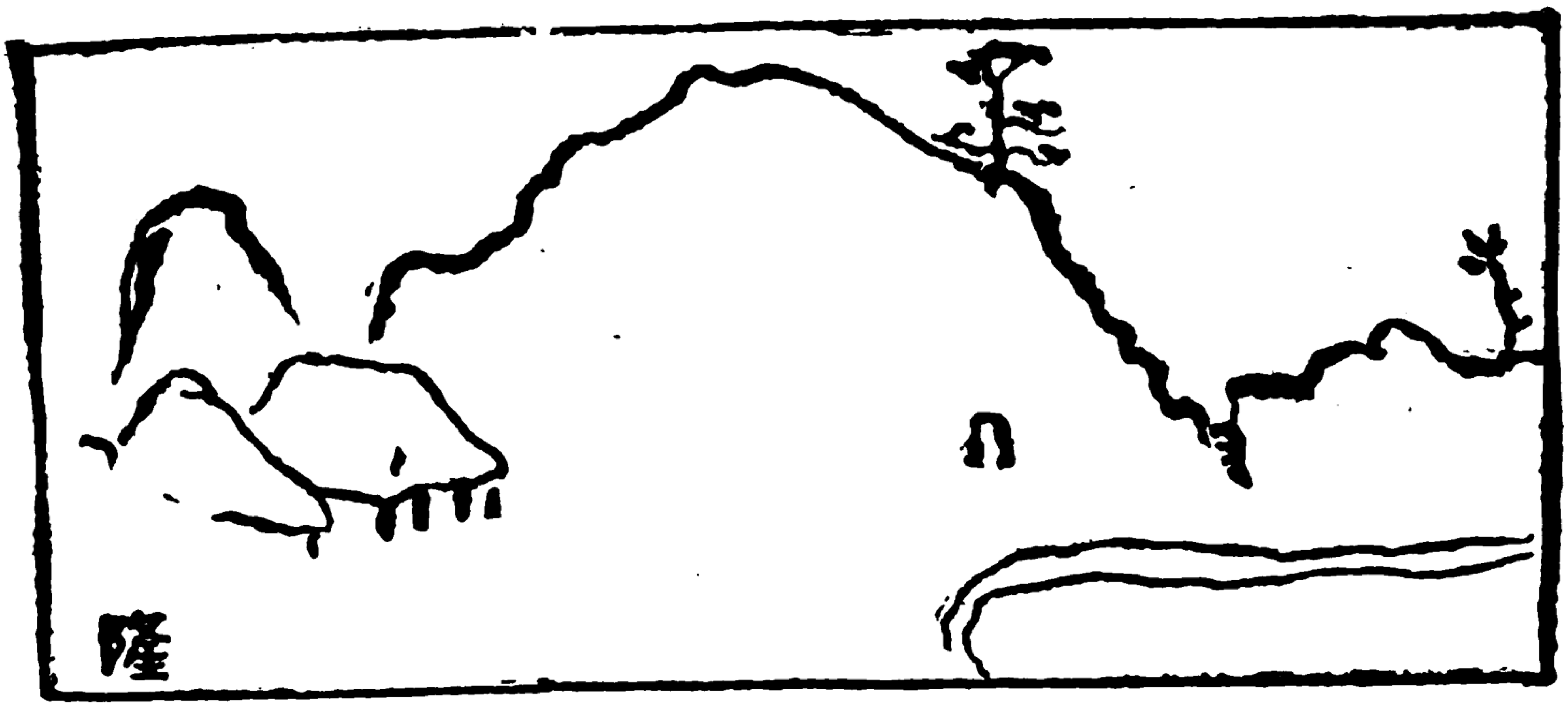
世界人として堅剛鐵の如き意志と、熱火の如き情熱を以つて知らる丶彼は、露國では大臣を以つて待遇され、極東共産黨及革命黨大會に於ては議長に舉げられ今回亦たウレーナー、スコツト等老雄の上に立つて、南北全米の第三インターナショナル總指揮官に推擧された、此の世界人がレニンと並んで嵐の如く雄飛する颯爽たる英風下にも此の如き涙ににじむ思出がある。

定價壹圓八十錢

送料十七錢

四六判上製

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四二



象牙の塔

正宗白鳥

今年は寒さが嚴しかつたゝめか、二月の半ばを過ぎても、隣家の梅の蕾がまだ堅かつた。私は頭髮の煩くのびたのを氣にしながら、寒さに萎けて床屋へ行くのを躊躇してゐたが、月末のある日、空の色日の光が俄かに春めいて來たのに誘はれて、久振りに東京へ行つて一日遊んで來ることにした。まづ銀座の裏通りの××で散髮して、本郷のC社へ原稿を屆けて、次手にC社雜誌の主筆T君の病氣見舞に行かうかと順序を決めた。かつてC社の社長からT君の病狀を聞いた時から、私はその病氣の經過を氣遣つてゐたのであつた。私は同君との私交は極めて淡泊なので、面識以來は十六七年にもなるのに、まだ一度も同君の家を訪づれたことさへないのであるが、作家としての私とT君との關係は極めて深いと云つてゐゝ私は新聞の續物は滅多に書かなかつたし、賣行のいゝ作家のやうに新作を單行本として出版したこともないし、十數年の間、稍々長い作品は大抵C雜誌によつて發表したのであつた。そして、T君が熱心に勸めたり煽てたりしなかつたなら

ば、根氣が弱くて、藝術的感興も乏しかつた私は、あれだけの作品を續けて書上げることは六ケ敷かつたのにちがひない。作家に對しては苛辣な鞭撻も必要であらうが、甘言も必要なのである。

私はＣ社へ寄つて社の人々と話をしてゐるうちに、さういふことを云つた。社を出ると大學前を通つて、二十代の後半五六年間も住んでゐた森川町の下宿屋の側を通つて、西片町へ行つて、Ｔ君の家を捜しながら、その閑靜な屋敷町を、家々の構えや表札など見て歩いた。有名な椎の木の側に古風な碑の立つてゐるのを、私は今度はじめて見たやうな氣がした。以前からあつたのであらうか。

東京のうちでも、横寺町矢來の界隈と、森川町から東西の片町をくるんだ本郷の一區劃とは、私に取つて最も思出の多い所である。私は横寺町の有名な居酒屋の後の方にあつた小さな下宿屋で、上京後の最初の一夜を過して、暫く其處から早稻田へ通つてゐたので、机だの夜具だのは、寺町の勸工場で買つたのであつた。「尾崎德太郎」といふ表札を同じ町内で見つけて感慨に耽つたのも、着京後間のないころであつた。森川町に居を定めたころには、旣に新聞記者になつてゐたので、ある問題について意見を訊くために、あるひは學界の消息を索るために、西片町あたりの學者を屢々訪問した。私は今この町を歩いてゐると、その時分の事が思出されたので、通りすがりに、その時住んでゐた二三の學者の舊宅の前に立つて見た。

上田敏博士の家へは、學生時代に一度長田秋濤氏の紹介で、西洋の新刊書を借りに行つたことがあつたが、その時の博士の家は粗末な家であつた。表紙の赤い假綴の「クオバヂス」を、あまり心の進まない樣子をして貸して呉れたが、しかし表紙の裏に、R. Takayama と書かれてあつたのによると、この安本も文學史價値をもつてゐたのである。高山氏はこの書物によつてシエーンキヰッチを知つて、頻りにそれを吹聽したのであらう。私は新聞記者になつてからは

歡迎されざる訪問者として屢々博士の宅へ出掛けた。婉曲な皮肉を云はれたり揶揄はれたりするのをも忍んで、博士から斷片的にでも、外國文學の話を聞かされるのを喜んでゐた。眞夏のある夜、その頃は小川町に住んでゐた佐々木信綱氏に招かれて晩餐を饗せられたことがあつたが、その時の相客は依田學海翁と上田博士とであつた。目の玉が萎びてゐて、あれで人の顔が見えるのだらうかと疑はれるほどに老いてゐた翁も、口は達者で「ねえ、先生」と云つては、佐々木氏や上田氏の方へ目を向け、あるひは珍らしさうに私の顔を見詰めては、芝居や政治や漢學などについて、ノベツ氣焔を吐いた。トルストイをトルストイと訛つては、その非戰論をさん〲に罵倒して、

「トルストイは先生よりも歳が若いんですよ」と、上田博士が云ふと、

「若輩の癖に生意氣だ。學海先生の所へ意見を聽きに來いと云つて下さい。議論がいやなら腕で來い。昔取つた杵柄はトルストイなんぞに負けやしない」と、翁は力み返つて云つてゐるうちに、猪口を持つたまゝ横にころんだ。が、翁は平氣で坐直して、鈍い目を見張つては戰爭讚美の議論を續けた。口で勝負がつかなければ腕力で行くといふ常套的の意見を、翁は全心的に堅く持してゐたやうであつた。

「先日××といふ男が漢學振興會を計劃してゐるから顧問になつて吳れと云つて來て、漢學の衰微を慨いてゐたから、私はかう云つてやりましたよ。漢籍のやうな面白い者を、世間の奴が讀まなくなりや、おれ一人で讀んで一人で樂むつもりだ。振興會なんていふヤクザな者をこしらえる必要はない、そんな會の顧問は眞平御免だと云つて斷はりましたよ私の家の女中に不思議に學問の好きな奴があるので、この頃十八史略を教へてゐますが、人に書物を教へるのは厄介だ一人で讀んで一人で樂むのがいゝんだ」と云つて、翁はこの頃紅樓夢の異本を手に入れて讀んでゐることや、紅樓夢の着想が源氏物語に似てゐることなど話した。

「先生は、演劇ばかりぢやない、怪しからんことを女中に教へるんださうですよ」と、上田氏は私にさゝやいて笑つた。「××さん」と、翁はふと私に呼掛けて、「あなたは女形になるといゝ」と、眞顔で云つたので、上田氏はふきだした。私はちよつと極りの悪い思ひをして、

「先生は芝居の方では新しい事がお好きで新派が御贔負ださうですが、新派でろくな藝の出來る奴はないぢやありませんか」と云ふと、

「いや新派でも舊派でも、今の役者に藝のうまい奴はありませんよ。左團次を下手だと云ふ者もあるが、あのくらゐな役者だつて外にはありませんな」と、翁は當時の俳優を罵つて昔自慢をしたが、さういふ口の下から、「私は若い時分に師匠の使に出た次手に、市村座をちよつと覗いたことがあつたが、小團次が書卸しの鼠小僧をやつてゐました。さういふ古い泥棒の芝居をこの頃もやつてゐる」と、さも劇道の沈滯を憤つてゐるやうに云つた。

話好きの翁の元氣のいゝ話にも聞疲れたので、私が暇を告げると、上田博士もそれをいゝ機會として、「私も御一しよに」と云つて座を立つた。

涼しい夜風に睡氣を醒まされながら、一しよに小川町から本郷の方へ歸つた夜の事が、博士を思出すたびに、最も明かに私の心の中に浮びだすのであつた。博士は、

「私は歳を取つても依田さんのやうな氣持でゐたいと思ひますね。云ふことは古いことを云つても氣が若くつて老けたところがないから、會つてゐても氣持がいゝぢやありませんか」と云つた。

「さうですね……しかし、あの人の書いた小說なんぞは、古くさい忠孝話で面白くありませんね」と、私は云つた。

博士は私を誘つて、本郷通りの淀見軒といふ小さな洋食屋へ入つて、ビールを命じたが、私がビールを飲まないので

「ぢや、サイダをお飮みなさい」と勸めた。私はサイダといふ言葉をこの時はじめて聞いて、サイダをこの時はじめて味つたのであつた。

「變な味のするものですね。かういふ者は日本人には適しないでせう」と、私は二三口飮んで止めた。……が、まだ世間の人がよく知らない時に、こんなハイカラな飮料を上田博士に喜ばれたことは、私には興味のある思出となつてゐるのである。あの頃博士の筆や口によつて珍らしさうに傳へられた歐洲文學者の名前や著書も、今はサイダと同じやうに世上に流布して珍らしくはなくなつてゐる。

私は上田博士の舊宅の前を通つたあとで、T君の堂々たる邸宅を訪づれた。入口の土間に大きな欅木鉢に萬兩の紅い實が累々としてゐた。通された客間は、當代の文士畫家の書畫で飾られてゐた。滿面肥大なT君も病後の窶れを見せて蓬々としてゐたが、元氣は不斷と變らなかつた。いつものやうに口早で、ひとりで喋舌りつゞけた。病中にも頻繁な原稿の押賣りに苦められた話などして、「一人は毎日訪ねて來るか、來ない日は手紙を寄越すので困りましたよ。病氣だからつて斷つても聞かないので、毎日その男のことが氣になつて、私の病氣にもそれがよつぽど毒になつてゐますよ」と云つたりした。

「K社でも、毎日二つや三つ、無名作家の原稿が持込まれないことはないと云つてゐたが、さういふ煩い思ひをさせられるのも、大雜誌社の義務として忍ぶんだね」

私は間もなくT君の宅を出て、次手に森川町のS君の家へ寄つた。日暮れ頃まで其家で話して、一緒に家を出たが、S君は詩人Y君の五十年祝賀會に出席するために帝國ホテルへ行つたので、私は日比谷で別れて、一人銀座の方へ向つた。私も祝賀會へ出ようかとも思つたが、歸りの遲くなるのが氣遣はれたのと、大勢の中へ顏を曝らすのが煩はしく思

はれたので、ホテルの方へは背を向けて、銀座の裏の洋食屋へ入つて、一人で靜かに美食を味はつた。

Y君夫妻が若い時分には、百花の咲亂れた花園へ胡蝶や蜜蜂が集まつて來る如くに、その周圍に青春の夢に醉つてゐるやうな若い男女が集まつてゐた。Y君の雜誌には戀やなさけを唄つた甘い詩がつねに載せられて、多くの人々の胸を躍かせてゐた。……實際はそれほどでなかつたか知れないが、青春の血汐の色の早くも褪せてゐたその頃の私は、遠くから傍觀して、多少の羨ましさをもつてさう思つてゐた。

私は彼等夫妻もすでに老いたことを思つた。彼等の唄に和して甘い唄を唄つてゐた人々も、既に老境に入つてゐることを思つた。それから、私がはじめて、生活のために覺束ない飜譯の筆を執りだしたころの譯文の誤りを指摘して苛酷な鞭を揮ひ、やうやく世間へ出かゝつた頃の私を毆り倒した者はY君の雜誌であつたことをも、久振りで思出した。その時、私は「飜譯はわが生涯の事業に非ず。われ尚歳若し。前途量るべからず。刮目して見ろ」といふやうな、へらず口を叩いて、自己の辯護の一文を、新聞に書いたが、その實文壇に於いて大望を抱いてゐた譯ではなかつた。

以前C雜誌に寄せた私の作物が批評家の惡罵を買つた時には、私自身よりも、T君の方が憤慨したこともあつた。私は今、自己の幾百篇の作物について、何等の誇りをも持つてゐない。それ等のすべてが霧の如く煙の如く消へてなくなつても遺憾には思はない。……たゞ廻らぬ筆でよくも、こんなに書いて來たものだと、自分の過去を、自分で不思議に思ひながら顧みるだけである。

私は美食に飽いたあとで、夜の銀座の街上をブラついた。そして、時々立留つて、目まぐるしい人の往來を凝視した。

一

頬骨の高い、目の窪んだ、頭髮に白毛を交へた野島は、和漢洋のさま〴〵な書冊を收めた書棚を置いた狹い書齋で、

朝から讀書をしてゐたが、吸ひつゞけた煙草の煙は濛々と漂つて部屋の中を曇らせてゐた。頭は疲れて呼吸も苦しいくらいになつたので、彼れは障子を開けて外の新鮮な空氣を入れようと思ひながら、座を立つのが大儀だつたので、そのまゝにしてゐた。

「今日春らしくなつた。冬もこのぐらゐでおしまいで、これから日増しに時候がよくなるのであらう。毎年のことで、梅が咲いて柳が芽を吹く頃になると、今年こそ心行くばかり春を樂まうと思ふのであるが、さて、思ふばかりで望みのかなつたためしはない。光陰はいつも仇におれの前を過ぎてしまつた。……さう云へば、××雜誌から往復の端書で、春の感想を訊きに來てゐる。田舍の春、都會の春、人生の春、どういふ種類の春でもいゝから、あなたの感じたところを承りたいと云ふのだ。……おれも人並に花は見て來た。上野の花も隅田の花も、吉野初瀨の花も、嵐山の花、祇園の夜櫻も。……櫻梅桃李の一時に咲揃ふ東北の春の盛りをも見た。……だけど、それが何であらう?。子供の自分から春といふ言葉によつてあこがれてゐた春は何處か、おれの目の屆かない所に隱れてゐるのではないか。おれは年中搜してゐたのだ。搜し當てられないのは、おれの熱心が足らないためなのか」

彼れは、障子のガラス越しに、冴えた春の光を見たが、疲れてゐる彼れの目には、外の光はまぶしかつた。「おれはまだこの牢屋に蟄してゐるのか、ここは咀はれた、欝陶しい石壁の穴だ」と、飜譯のフアウストで覺えた言葉を、自分の心底の痛切な感じのやうに思つて、息ぐるしい部屋の中を見廻した。

ここで玄關で呼鈴が鳴つて、おれに敬意を拂つてゐるといふ文學青年の千代田でも訪ねて來たなら、睡氣醒ましの氣焰を吐いて、若い仲間の噂をも聞いて、衰えた頭に多少の勢ひをつけるのだがと、彼は待設けてゐたが。煩いと思ふ時にはよくやつて來る千代田も、心待ちにしてゐる時には、訪ねて來なかつた。

天井裏の鼠が天下の秘密を籠めた一卷をくはへておれの机の側へ來て、羽帽長劍の剽悍者のメフイストフエレスの正體を現はして、おれを縛つた面白い世界へ連れて行つて呉れるならば、おれは煙突からでも床板の隙間からでも、其奴の導くまゝに隨いていから、酒場の穴倉へでも、魔女の巣へでもと、彼れは思つたが、「否定の靈」と知りながら、甘んじてノコ〳〵と共奴に隨つて行くだけの度胸がおれにあるだらうかと、彼れはおのが心を佇みた。

窓の外には、此間まで舌足らずの拙い音を鳴いてゐた鶯が、柔しい奇麗な聲をころがせてゐる。近所で地ならしをしてゐる人夫の唄も、今日は風の加減かよく聞えて來た。

「沖の船頭さん、エンヤラヤー。………梶を枕にエンヤラヤ。………薦を敷寢の。………星月眺めて。………」

エンヤラヤ、ヤアトコセ。

「のどかないゝ聲だ。健かな肉體を具へた勞働者の喉から衒ひ氣なく出て來る快い聲だ。腹が減つて飯がうまく喰へて夜はスヤ〳〵と安からに眠られさうな聲だ。耶蘇の復活の唄よりも、あゝいふ勞働唄の方が現代向きでいゝかも知れない。………當世の剽輕者のメフイストフエレスがおれの前へ現はれて來たなら、酒や女を勸めるよりも、まづ汝の財產を拋棄して勞働をしろ、額に汗を出してエンヤラヤをやれと勸めるかも知れない。………が、惡魔よ退け。僅かに殘されてゐる壽命を勞働のために苦めてなるものか」

野島はまた人夫の唄に耳を傾けた。

「娘十七、エンヤラヤ。臙脂鐵漿つけて」「咲いた櫻になぜ駒繫く、エンヤラヤ」

彼等の唄はいつまでも泰平で、世界をも社會をも引くり返さうとするやうな激越な調子は少しもそこに含まれてゐなかつた。新聞記事や千代田の話によると、日本にもあちらでもこちらでも、血まみれ騷ぎが持ち上りさうなので、それ

も面白からうと、野島は向う河岸の火事くらゐに思つて、大きくなるのを筆の上や口の先では望んだりしてゐたが、それも實際にそぐはない午睡(ひるね)の夢の譫言(たはごと)に過ぎなかつた。

彼れの書齋は自分で象牙の塔になぞらへて、妻もあり子もありながら、家庭の俗事に大切な頭腦を惱まされないやうにと心掛けて、妻の居室の聲も洩れて來ないやうに、厚い壁で遮つてゐた。……で、幾年も象牙の塔の主人になり澄ました氣でゐたのだが、戸外の聲隣室の幽かな聲も、稍もすると彼れの心に觸れてゐたのであつた。子供の泣聲をも妻のさゝやきをも、煩がることもあつたが、自分から進んで聞かうとすることも多かつた。

今日(けふ)も、いつの間に來客があつたのか、妻の居室でヒソ／＼話がはじまつてゐるのに氣がつくと、彼れは耳を澄まして聞かうと努めた。……此間うちから妻のかね子の所へ、誰れかゞ屢々遊びに來てゐるらしいと疑つてゐる彼れは、その訪問者の正體を見屆けようと、かねて思つてゐたのであつたが、話聲のしてゐるところへ不意に顏を出して、神經の過敏な妻を驚かし、自分も驚かされるのを恐れて躊躇してゐた。

「かね子はまだ若いからな。ひで子のやうに食事拵へと裁縫と拭掃除とで日を暮らすのに甘んじて、貯金帳に零砕な金額でも書込まれるのを悦ぶやうな氣持になればいゝのだ。それに、田舍へ越して來てからは 社交かはりのつもりか、いろ／＼な雜誌をよく讀んでゐる。新刊書をよく讀んでゐる。世に進んだつもりの外國崇拜から飜譯物だと云へば、ことに有難がつてゐる。おれだちが飜譯文學や飜譯政論にかぶれて、ファウストを讀めば自分も日本のファウストになつた氣でゐるやうに、かね子も讀んだものにかぶれてゐやあがる。浮世の流行や筆の拍子で何方へ外れるか分らない著述業者の文章をてんから眞に受けてゐるらしい。おれがこの煙だらけの部屋で、幸福の夢を求める一念からまだ脱けきらないでゐるやうに、かね子もおれには秘密の何かの夢を見てゐるのだらう。……男の幸福の夢と云つたら何だい。そこ

らの書物の主が氣取つた文句や難解な字面を並べたり、口あたりのいゝやうに砂糖でタツプリ味をつけたり、山葵でピリツとさせたりして、めい〳〵に意味ありげに說いてはゐるが、異つたことはなさゝうだ。女の幸福の夢に變つたことがあるものか。………だけど、ひで子は雜誌や新刊書を讀まなかつたゝめに、自分の幸福は殺しても、女は男に從ふものと、日本の古くからの習はしに盲從して、病氣になつて倒れるまで、貧乏世帶をきり廻した。かね子とはちがつて若いうちから、身體が瘦せてゐて皮膚がガサ〳〵してゐて、おれの理想の女らしくはなかつたので、あゝいふ身體に於ても情緒に於いても惠まれてゐない女と、おれは青春な頃に同棲してゐたゝめに、一生の悔恨を殘さゞるやうになつたのかも知れないが、しかし不憫な女だ。女として子供の愛も知らないで淋しく暮してゐたのだし、今時の若い女の好みや文化生活の樂みなんぞ少しも味はないで、貸長屋の狹い薄汚い部屋の中で硬い夜具にくるまつて息を引取つたのだ。……近いうちに、かね子には秘密でお墓詣りをしてやらうかな」

理路の通らない、芝居の獨白に類似した彼れの思ひが、取留めなく暫く續いてゐたところへ、かね子が紅茶を皿へのせて持つて來た。いつの間にか衣服を着替えて薄化粧をしてゐた。

「大變な煙ね。毒ぢやありませんか」と云つて、かね子は眉を顰めた。そして、障子を開けつ放して、「こんないゝお天氣に、煙だけのなかで考へ事をするのは不健全ですよ。いやな臭ひ。安つぽい煙草の臭ひは隨分いやなものね」

野島は、煙草で乾き切つた喉を温い紅茶で快く潤ほしながら、「先つきは誰れか來てゐたのかい」と、何氣なく訊ねた。

「いゝえ、誰れも來ませんよ。どうして？」

「だつて、男の聲がしてゐたぢやないか」

「あなたはこの頃變よ。私の云ひもしないことを、こんなことを云つたなんて、言掛りをつけたり、お客なんか影法師

も來てゐなかつたのに、男の聲がしてゐたなんて、あなたの頭もこの頃はどうかしてゐるんですよ。………少し散歩でもしていらつしやい。外のいゝ空氣を吸つて梅でも見ていらつしやるといゝわ」

「本當に誰れも來てやしなかつたのか」

「あなたは疑ぐり深くなつたのね。おまきは久夫を連れて外へ出てゐて、家には私一人しかゐなかつたのぢやありませんか。私が狂人のやうに獨言を云つてゐやしないし、男の聲も女の聲もしてゐた筈はないんですよ。……あなたはまた何時か見たいに、午睡をして變な夢でも見てゐたのぢやないの?」

「なあに。おれは今朝から此處に坐つたきり、目を開けて本を讀んでゐたのだよ。エンヤラヤもハツキリ聞いてゐたよ」

「何時まで地形をしてゐるんでせう。隨分の大建築らしいのね」

かね子がさう云つて緣側へ出ようとするのを、野島は引留めて、「まあ、そこへ坐つてゐなさい」

「何か面白いお話があつて?。私今日はお午御飯を早く濟まして、江川さんのお家へ長唄のおさらひを聽きに行かうと思つてゐるんです。あなたも入らつしやらない?。どうせそんなに面白かないでせうけれど」

「この土地に住んでると、下手な三味線でもたまには聽きたくなるね」野島は若い女などの集つてゐるおさらひへでも行きたい氣がしたが、それよりもさつきのヒソ〳〵話が心の蟠りとなつてゐたので、

「おれも聲のしないものを聞いたり、有りもしないものを見たりするやうになつたのは、おれの頭がえらくなつたのか、おれの頭が馬鹿になつたのか、どちらだか、とに角當り前ではなくなつたのだね」

「千代田さんがさう云つてゐましたよ。先生のこの頃お書きになる者は魔性を帶びて來たんですつて。私にはよく分らないけれど、平凡でないからいゝんですつてね。てんで聲のしないのに聞えたりするのは、地獄耳以上で、これこそ魔

性のせいなのかも知れませんね。文學にはそれでいゝんでせうけど、不斷がそれではお互ひに困ることになるでせう」

「千代田がそんなことを云つてゐたか」野島はふとおのれを誇るやうないゝ氣になつて、「おれも此處へ來てこの塔の中へ籠つてから、魔性といふのも少し可笑いが、今まで氣がつかなかつたものがおれのまはりに存在してゐるやうに思はれだしたよ。それがいゝか惡いかは分らないが、本當の文學者つてものは、魔性か佛性かに取付かれる時が、一生のうちにはあるらしい。おれなぞは常識家の平凡人で歲を取つて來たのだが、この頃になつてやうやく、自分でも多少調子がちがつて來たと內々感じてゐたのだ。おれのどういふ作品が魔性を帶びたと、千代田は云つてゐたのだらう」

「そんなことは詳く聞かなかつたのです。……だけど、魔性だか何だか知らないけど、あなたは考込んでばかりゐて、この頃はあんまり仕事をなさらないぢやないの。」

「いや、おれも頭の中ではいろ／＼な仕事をしてゐるよ。……おれも長い間同じ仲間に入つてゐたから、さう深く感じもしなかつたが、文學者といふ者は不思議な者だと、さつきも一人で考へてゐたのだ。Aのやうな世間的の仕事は何をやらせても出來さうもない人間が、文學ではえらい腕があると立てられてるぢやないか。Bのやうな頭の暗い人間の書いた者が深刻だの何のと云はれてゐるぢやないか。猥褻なことを臆面もなく書立てたり、夫婦喧嘩を得意になつて吹聽したりする糞度胸があればこの社會では出世が出來るんだからね。大正の日本ばかりではない、西洋だつてさうらしいよ」

野島はその例として、外國の有名な文學者の名前を擧げて批評しようとしたが、そこへ下女のおまきが歸つて來たので、かね子は書齋を出て行つた。

二

二十年あまり文學に縋つて衣食の料を得て來た彼れは、その時々の風潮に調子を合せて名聲をつないで來たやうなものであつた。時代に先驅けもしなければ遲れもしないで、辛うじて地位を保つてゐたので、非凡な特色をもつて世に認められたことはなかつたのだが、老來却つて作品の上に魔性を帶びたと、若い者にでも云はれると、歳甲斐もなく昂奮を覺えた。常識に捉はれてゐると屢々云はれてゐたおれにも、この頃は魔が差して來たのは、自分でも薄々勘付いてゐたと、そこに、今まで氣づかなかつた天才のきらめきを發見したやうに喜んだ。……さう思ふとゝもに、これからは若い文學者などの集まりへ顏を出しても、氣おくれして小さく萎けてなんかゐなくつてもいゝと思はれだした。近日何かの會合の案内があつたら久振りに出席しようかと、仲間内の集會からは遠ざからうとしてゐた日頃の決心をも飜へしかけた。

　昂奮するにつれて彼れの神經は鋭敏になつた。人間の心の底、宇宙の奧の奧をも見破るやうな意氣込みで萬年筆を握つて原稿紙に向つた。魔王よ、われを助けよと、天笠德兵衞や兒雷也が呪文を唱へるやうな顏付をして題材を呼出した。……さつきふと心に浮んだ亡妻が、ムク〳〵と、机の側に有りし昔の面影を現はした。

鮫肌で、顏には飼面だらけの女だが、小鼻から唇のあたりに愛嬌があつた。癩を病んだ乞食でも、傑れた畫家が描けば美しい繪にもなるであらう。垢だらけ虱だらけで臭い匂ひをさせてゐたにちがひない寒山拾得でも、かつて曾我蕭白の描いたのを見た時には、瀟洒な座敷の床の間を飾るに相應しい洒脫な品のあるものと思はれた。ひで子だつて、文字の使ひ方一つで、飜譯のナヽの影法師くらゐに美しくされないことはないし、おれと彼女との間が、竹の柱に茅の屋根の貧しいながらも、手鍋提げての睦まじい共同生活をしてゐたやうに、惚氣をもこつそり入れて置いてもいゝが、貧しい生活に竹の柱を思出すのが、すでにおれの頭の古くなつた證據であるやうに、ひで子といふ女も無自覺な古い女であつ

たのだから、そのまゝにおれの過去の記憶を書並べたなら、おれの從來の作物と違はない常識的な平凡無味なものになつてしまふ。

「魔王よ、われを助けよ」

彼女はおれのためにはよく盡くしてくれた。おれが重いトラホームに罹つて二た月も筆の執れなかつた時には、ろくに文字は知らないのに、おれの口授することを苦勞して筆記してくれた。あの時はおれも苦しかつたが、彼女はもつと苦しかつたらしい。それでも、おれと共稼ぎで一枚々々お金になることをしてゐるといふので、苦勞を慰めてゐた。

さういふ彼女も、女だから嫉妬も强かつたし、見榮も構つた。親類のある女と一しよに、ある用事で知人を訪問した時に、雪のちらつく寒い日だつたのに、折角おれが拵へてやつたセルのコートを、連れの女のお召のコートに比べて野暮つたいと思つたのか、不斷の口うらで察すると、薄着の方が彼女の體格に似つかはしく姿がよくなると思つたのか、折角おれが拵へてやつたコートをも着ないで出掛けた。それで、おれの氣遣つた通りに、その日に風邪を引いて、風邪から肺を犯されて死んだのだ。詰らない見榮えのために死んだやうなものだ。………今なら、お召でもビロードでも、彼女の見榮えを滿足さゝれるコートの一枚くらゐは拵へてやれるのだが。墓にコートは着せられず、彼女の望みをかなへて生前の勞に酬ゐることも出來ない。

彼女が自分の病氣の治療費までも惜んで後へ殘した些細な貯金は、おれのためには役に立つた。金額はとに角、銀行の預金帳が亡き妻の形見としておれの目につくと、それを基礎として貯金をつゞける氣になつた。おれよりも一時代前の文學者のやうに、月越しの金は費はないといふ心意氣は、金の威力のます〳〵加はつて來た當世にはそぐはないと信じてゐたおれは、せめて二三年の間でも、細々と煙を立てられる費用は蓄積して置かうと決心したが、金に重きを置い

て見ると、一管の筆は手頼りにならないものだ。おれのやうにちゝむさい事しか書けない人間は、「不如歸」や「出家とその弟子」の作者のやうに、青年少女のお賽錢を掻集めることは出來なかつたので、こんなことなら、柄にない文學稼業は早いうちに諦めて、どこかの大きな會社へ勤めてゐればよかつたと、何度思つたか知れなかつた。十年二十年一つ會社へコツ／＼と勤めてゐたなら、大した腕はなくつても五萬や十萬の金は、知らぬ間に溜つてゐたのだ。歐洲戰爭時代の經濟界空前の大景氣もあつたのだから、運がよければおれも成金の破片くらゐになつてゐたかも知れない。重役などに首を下げて奴隷のやうに働くのも苦しからうが、机の前で一枚々々稼ぎ溜めるのも容易な所業ぢやない。おれが一朝志を立てて筆を執りはじめてから、文學社會の流行も幾度變つた?。

　おれは色の黑い丸々と肥つた遲鈍で無器用な山泉といふ角力取りをひそかに贔負にしてゐた。其奴は運がよかつたのか、底力をもつてゐたのか、一時は敵方の横綱をも大關をも倒して、見物の注意を惹いたのであつたが、おれが二三年角力場から遠ざかつてゐた間にガタ落ちに落ちて、ある年久振りに見ると、幕下の見じめな所に甘んじて、まだ角力を取つてゐた。おれが見た日には勝つことは勝つたが、無名の相手にやうやく勝つたくらゐで、さも悅しさうに、鈍顏鈍眼に笑ひを浮べて引上るのを見てゐると、おれは涙が出た。彼れはこの頃でも田舍の何處かでまだ角力を取つてゐるかも知れない。

「××さんが、清貧に安んじてゐると書いてゐらつしやつたが、あなたも生活は御質素なやうですし、さういふお心掛けを持つてゐらつしやるんでせう」と、ある時ある雜誌の社長が云つたので、おれは苦笑した。××さんだつて清貧に安んじてゐるのだかどうだか、浮かと信ずる譯には行かないが、少くもおれはさうではない。清貧といふ人間きのいゝ言葉で奉られて原稿料の値上げを喰留められてはたまらない。西行や芭蕉の生きてゐた時とは世の中が違つてゐるのだ。

――芭蕉と云へば、大悟徹底の人のやうに云はれてゐるが、あの人もおれだちと同じやうな凡夫だ。――凡夫だから人間味があつてえらいのだなんて、あゝいへばかうと理窟はどうにでもこねられるが。閑寂に徹してゐるのなら、獨居に安んじてゐられさうであるのに、二日も知人に會はないと、たまらないやうに淋しがつてゐる。浮世の崇拜者どもに會つて、何とかかとか喋舌を弄しなければ安んじて日が送れなかつたらしいことは、嵯峨日記その他の文章を讀めばよく察せられる。本當に娑婆つ氣のない人間なら、和歌俳諧などに拘泥しなかつたであらう。

人間はかういふ身體を具へてゐるうちは、色氣と食氣をどうしたつて離れることは出來ない。五慾煩惱のかたまりだ少々は濁つてもいゝからおれは富みたい。

幸ひに、おれは濁つた金を蓄へた伯父から、肉親のよしみで僅かでも惠まれたので、そのお蔭で風光明媚な湘南の海岸に、小さいながらも自分の家を建てゝ、かねて空想でのみ描いてゐた象牙の塔をしつらへて、雜誌の社長や出版屋の主人の目顏を氣にしないでも、今日を生きて行けるだけには、辛うじてなつてゐる。お大名のやうに金の苦勞を知らないで育つた人は、財産なぞ邪魔つけなものがなくつて、自分の腕一つで生きてゐたなら、さぞ氣持がいゝだらうと、人間離れのしたこともつい考へたくなるのであらうが、親から學資も滿足に貰はないで、學生時代から、先輩の情けに縋つて、飜譯の下譯などさせて貰つて、原稿料の三分の二は名前料として先輩に取上られても不平は洩らさないで、學資の不足が補へるのを喜んでゐたおれのやうな者は、金のことでは、痛い思ひ悲しい思ひの數々を嘗めて渡つて來たのだから、握つた金を何でムザ／＼離されようか。文人と清貧とは、梅に鶯竹に雀といつたやうに調和がいゝと、傳統的に云はれてゐる迷信からまだ脫けないのか、所有慾を嘲つて自分だけ恬憺な風を裝つてゐる文學者もあるが、彼等が果してさうなのであらうか。おれの家の久夫のやうな嬰兒でも、玩具一つ持つたが最後、自分の物として他人にやらうとは

しない。文人が、たかゞ十や二十の詩をつくつたり、幾つかの小説をつくつたがために、先祖代々の所有慾の汚汁から脱け切つたやうに涼しい顔をするのは不思議だ。

野島は片手に萬年筆を持ち片手に煙草を持つて時を過してゐたが、描かんとすることが頭の中に形づくられないで、取留めのない思ひのみ繁く馳せた。これではならないと、雜念を拂つて、先つきから机の側に侍してゐる亡妻の影を見つめて、彼女の胸の底に心の奥に潜んでゐた女の眞相を、人間の眞實を睨み透さうと努めた。

「お前は貞女の道を守つてゐて、生前に夫の信用を裏切るやうなことはしなかつたと、おれは信じてゐるが、お前のやうな貞淑な女でも、人並の嫉妬心は持つてゐて、おれがお前の從妹に柔しくし過ぎるのを不快に思つて、時々はいやみを云つてゐた。お前が今此處へ來て、おれがかね子のやうなお前よりは若くつてお前よりはいくらか美しい女を大切にして、我儘を許して多少の贅澤もさせてゐるのを見たならば、何と思ふ!。お前は古い小切を洗張りして綴くり合はせて役に立てゝ、食物でもおれの喰餘しを有難がつて喰べてゐたが、かね子はさうぢやないよ。今も粉飾をして、子供を下女の手にまかせといて、自分ひとりで長唄のおさらひを聽きに行つた。お前は子供を欲しがつてゐたのに子供がなかつたが、今から思ふと、無かつた方がお互ひのためによかつた。幼な兒を後へ殘して死ぬるとなると、お前の臨終の苦みがもつと激しかつたに違ひないし、おれだつて、泣く兒を抱へて貰ひ乳して歩くやうな境涯に思つてもゾッとする」

心でさう云つた野島の言葉に、亡妻の影は肯づいたやうであつた。結婚最初の夜の彼女の含羞んだ顔付、臨終の淒い顔付、月末の遣繰りに屈托してゐる時の顔、うまい物を食べる時の顔、彼れの前に彼女の顔がいろ／＼に變つて現はれた。髮の匂ひも彼れの鼻を襲つた。野島が亡妻の幻に心を捉はれてゐるところへ、けたゝましく戸口の呼鈴が鳴つた。

下女もゐないらしいので、野島は自分で玄關へ出て行つたが、格子戸の外には、見馴れない青年が立つてゐた。職工服見たいな詰襟の埃に汚れた安つぽい洋服を着て、色の褪せた鳥打帽子を被つてゐたが、目の涼しい頰に艶のある口元の締つた男であつた。鼻の先の尖つた所や皮膚の色が不思議に西洋人じみてゐた。思ひがけない來客の顏を野島がジロジロ見てゐると、

「私は岡部です」と、青年は云つた。

「どういふ御用です！」と、野島は聞いたことのない名前に不審を抱きながら訊返した。

「ちよつと聞いて頂きたいことがあつて、お伺ひしました」

「ぢや、お上んなさい」

野島は、たまに訪問される文學青年の一人であらうかと察しながら、「今は少し忙しいんですが」と、豫じめ注意を與へて、客を書齋へ導いた。

岡部は氣おくれのした風もなく、簡單に挨拶して、與へられた座蒲團の上に坐つて、

「あなたはお忘れになつたか知れませんが、私は七八年前にあなたにお目に掛つたことが御座います」と云つて、この顏を見ろといふやうな表情をした。

「さうですか。僕は覺えてゐませんが、何かの會でゞもお目に掛つたんでせうか」

「いゝえ、あなたが雜司ケ谷にお住ひになつてゐた時分に、私はお隣りの竹井さんのお宅へ時々友人を訪問してゐましたそれで、みんなと一しよに奥樣に汁粉の御馳走になつたことがありました」

「あゝ、さうでしたか」

野島は、雑司ヶ谷にゐた頃、かね子の發意で、隣家に寄寓してゐた二三人の學生を、庭の方から招いて、縁側で汁粉の御馳走をしたことを思出した。それで、「春爛漫」の唄を屢々聲を合はせて唄つてゐた隣の學生の顔は薄々記憶に殘つてゐたが、岡部の顔には見覺えが更になかつた。

「彼處（かしこ）にゐた方には、あの後どなたにも會ひませんが、學校は疾つくに卒業して、それぞれに職を持つて活動してゐられるんでせうね」

「えゝ、皆んな相當にやつてるやうです」

「君は今何をしてゐます？」野島は相手の服裝から推して、金の無心にでも來たのぢやないのかと疑ひながら訊ねた。

「私は學校を中途で止したゝめに氣の利いた職には有りつけませんでした。でも、別段失望もいたしません。今日突然おうかゞひしましたのは、直接私の身に關係したことぢや御座いませんが、ある事件についてお話をして、若しも小説の材料になりさうでしたら、あなたに書いて頂きたいと思つてゐますのです。私は小説といふものは滅多に讀んだことがありませんので、様子はよく分りませんが、若しもお役に立ちさうでしたら、いくらでも詳しく調べて申上げることにいたします」

「ぢや、その材料を知らせにわざ／＼來て下すつたのですか」野島は二三度かういふ材料供給者に會つて、紋切型の詰らない話を聞かされたことを思出して馬鹿／＼しく感じた。折角筆を執りかけてゐた緊張した氣分を亂されるのを恐れて、一通りの話を聞くことさへも避けようとした。

「この頃私は、須賀といふ馬入川の川尻の漁夫村へ來て漁場の監督見たいなことをやつてゐますので、あなたが此方にゐらつしやることを、新聞で知つて、一度お伺ひしたいと思つてゐましたのです。雑司ヶ谷でお目に掛つたり、竹井さ

んからお噂を聞いたりした時分のことを思出して、お懐かしくもなつたのですが、私の知合ひのある女が、あなたのお書きになる物を非常に愛讀してゐましたので、私があなたのお隣りの家へよく行つてゐたといふことを話すと、その女は文學者の生活に非常に興味を感じたやうでした」

「ぢや、小說の材料になりさうだと、君が云はれるのは、その御婦人のことなのですか」

「さうです」と、関部は悪びれないで云つて、「その女は非常に幸福な境遇にゐたのでしたが、先月の末に平塚の病院で亡くなりました」

「あの松林の中の病院でゞすか」

野島の目の前には、未知の女のことよりも、先つきまで思詰めてゐた亡妻の影が迫つて來た。そして、あの見てもスガ〴〵しい松林の中の立派な病院で、いゝ醫師の手當を充分に受けて死ぬるのなら、不幸ではないやうにさへ思はれた

「えゝ、さうです。生れた家は相當に資産があるのですが、兩親に早く死なれて、その女と兄と二人だけが後に殘つてゐたのでした」

関部が所謂不幸な女の身の上話をはじめたので、野島はたまらなくなつてそれを遮つた。

「近日改めてゆつくり聞くことにしませう。君は近所にゐるんだから、そのうち日を極めて會はふぢやありませんか」

「それは、何時でもあなたの御都合のよろしい時にお伺ひいたしますが、實は成べく早くあなたに書いて頂いて、あの女の寃罪を晴らしてやりたいと思つてゐるんです。當然分配される筈の財産も親類の者に横領された上に、女子としての名譽を傷づけられて、そのために病氣も惡くなつたのですから」

「それで、君はその御婦人とどういふ關係があるんです？」

「四五年前偶然知合になつたのですが、私の外には一人も同情者のないやうな不幸な境遇にゐましたのです」

園部がまた身の上話をはじめさうなので、野島は座を立つて、障子を開けて、外を眺めながら、「秋らしくなりましたね」と呟いた。園部も脊伸びをして庭の方を見てゐたが、ふと、

「奥様は相變らずお丈夫なんでせうね」と、何氣なく云つた。

「えゝ」と、野島は空々しく應へたが、氣になつたので、「家内は雜司ヶ谷から牛込へ引越すと間もなく、肺炎に罹つて亡くなりましたよ」

「それはちつとも存じませんでした」

園部は驚いたやうに云つて、哀悼の言葉を述べて、ひで子の病氣や最後の様子についていろ〳〵に訊ね出したが、

「どんなに純潔な魂（たましい）を持つた人間でも、死んだらそれつきりで、生きてゐる者と關係がなくなるんでせうか。人間同士の愛情はこの世に肉體を見へてゐる間だけのことで、死んだら消えつちまうものなのでせうか」と、心を籠めて云つた

「それはさうでせう。君はどう思ひます？」

「さう思はなければならんとすると、私は生きてゐるのが淋しくなつてたまりません」

「だつて爲方がないぢやありませんか。君は宗教家の云ふやうなことを信じる氣になれますか」

「私は宗教といふ者は一切知らないんですが、生きてゐるうち不幸な目に會つてばかりゐた純潔な人間が、死んだら蛆蟲（うじむし）の餌（えさ）になるばかりだと思ふと、思ふだけでもたまらなくなります。あなたは奥様がお亡くなりになつたあとで、さういふことはお考へにならなかつたのですか」

園部の熱心の調子が野島にはむしろ氣味が惡かつた。この男、戀人に死なれて頭が變になつてゐるのかも知れないが

それにしては、生々した顏してゐると不思議に思ひながら、「一時さういふことを考へたこともあつたが、人間の力で死んだ者を呼戻すことは出來ないし、諦めるんだね」と穩かに云ふと、

「さう簡單に諦められますでせうか。私は高潔な精神や清い愛情は生死にかゝはらないもので、灰や煙のやうに消えてしまうものぢやないと思はれますが、さう信ずるのは間違ひないんでせうか」

「さう信じられゝば結構ですね。僕は長い間文學をやつてゐるので、人間同士の關係や人間の心とか魂とかいふやうな者について何時も注意して相當に考へて來た譯なのだが、生れ付が平凡に出來てゐるためだか、あたりまへの事しか考へられないんですよ。死んだ家內が火葬場で灰になつた時にや、灰になつたとしか思はれなかつた。……しかし、さういふことは、僕に訊くよりも、宗教家にでも哲學者にでも、或は外の文學者にでも訊ねたまへ。多分君の疑ひを晴らして與れる人もあるでせう。僕はこの頃今の文學者の書いた物はあまり讀まないからよくは知らないが、愛は不朽だとか、死んだ者が死なゝんだとかいふやうなことを頻りに書いてゐる人もあるらしいから、君はさういふ人に會つて聞いて御覽なさい。君の得心するやうなことも云つてくれるでせう」

野島は一氣にさう云つて、このくらゐで變な青年を追拂らはうと思つてゐたが、そこへかね子が長唄のおさらひから歸つて來たらしい氣色がした。亡妻を知つてゐる園部に、若い新たな妻を會はせるのは氣が差したので、近日の再會を約して座を立たせたが、かね子は早くも書齋へ顏を出して、「お客樣でしたの。お茶も差上げないで」と、お世辭を云つた。すると、一たん立上つた園部は、再び坐直して挨拶をして、「まあ御ゆつくりなさいませ」と云はれるのを幸ひに落着いてしまつた。野島は、かね子に園部を紹介して、鬱陶しい顏をしてゐたが、かね子が紅茶を入れに行つた間に、園部は、「さつきお話しかけた女の寫眞を持つて來てゐますのですが、見て頂けないでせうか」と云つて、ポケットから、白紙

で包んだ寫眞を取出した。

「さういふ者を持つて歩いてるんですか」と、野島は冷やかすやうに云つて、寫眞を手に取つたが、それは美しさうな女であつた。

「かういふ綺麗な人が若くつて死ぬるのは可愛さうですね」と云ふと、

「私がはじめて會つた時は、丈夫だつたのですが、親類の者に迫害されたゝめに神經を苦しめて病氣を引起したのですよ。死ぬる時には精神上の苦しみが顔に現はれてゐるやうで、私は見るに見かねました。今でもその時の顔付が目の前にちらついてなりません。若しも私が繪が書けるか文章が書けるかしたら、あの女の臨終の苦痛を充分に書いて、死んだ者の靈を慰めて、世間の人にもよく知らせたいと思つてゐるんですが、私はさういふ藝にはまるで素養がないんですから、殘念に思はれます。あなたの前ですが、私は文學といふものは、懦弱な人間の遊び事のやうに今まで思つてゐました。しかし、それは私の考へちがひだつたので、文章が自由に書けるつてことは尊いことだとこの頃になつてやうやく氣がつきました」

「文章なぞ誰れにだつて書けるでせう。何も六ケ敷文句を並べるには及ばないんだから、君の思つてることをそのまゝ書いたらいゝぢやありませんか」

「私はさう思つて、一晩徹夜をして、二三枚書いて見ましたが駄目です。實に此處へ持つて來たんですが、とても見て頂けるやうなものぢや御座いません」

園部はさう云ひながら、例のポツケトから罫紙を取出した。野島は、さてはこの男も、他の文學青年の例にたがはず文章をおれに見せようとするのかと、擽つたく思つて、罫紙の方へ手を出さうともしなかつた。

そこへ、かね子は不斷着に着替えて紅茶を運んで來たが寫眞に目を觸れると「奇麗な方ですこと。何方？」と云つてしげ〳〵見入つた。關部はまたかね子の顏に目を留めた。野島は雜司ケ谷の家の縁側で隣家の學生に汁粉の饗應をした時の亡妻の面影を思浮べながら、關部の眼差しに注意してゐた。そして、亡妻と知合ひであつたことを關部がかね子に對して話しはしないかとビク〳〵してゐた。

が、かね子は寫眞を見たゞけで書齋を出て行つたし、關部も紅茶を飲むと、間もなく再度の訪問を約して歸つて行つた。

野島はやうやく我れに返つたやうであつた。聞きたくもなかつた青年の女話は、幸ひに拒むことが出來たが、亡妻の追憶に浸つてゐたところへ、亡妻の知人が、しかも異樣な顏した男が變な用事をもつて、ぬつと塔の扉を開けて入つて來たことは、氣味が惡かつた。

「病院で死んだ女の臨終の苦痛を書きたいと、彼女が云つてゐたが、それはおれの胸の中でも思ひつひてゐたことなのだ。彼奴ひで子の使となつておれにひで子の臨終を書かせようと唆かしに來たやうなものだ。だけどおれは、亡妻の靈を慰めたりあの世とこの世との愛情の遣取りをしたりするために、一篇の文章を書かうとするのぢやない」

彼れは、疲れた頭が考へ事といふ重荷に堪へられなくなつたので、フラ〳〵と立上つて、庭下駄を穿いて、庭木戸から濱の方へ出て行つた。暮れかゝつた外の風はやゝ寒かつた。

三

彼れは砂丘へ身體を凭らせて夕日に向つてゐた。日は春めいた艶やかな光を波の上や砂の上へ注いでゐるやうであるし、國府津から小田原あたりの松林が朦朧として、春の心がそこへ浮出てゐるやうであつたが、彼れは身に染みてそこ

らの眺めを眺めてゐるのではなかつた。近くには、幼兒を連れた若夫婦が遊んでゐた。妻君は幼兒の前の兩手を突いてお辭儀をしては笑つてゐた。男の方は小さな寫眞機械で妻子を寫してゐた。

野島は何氣なくその親子を見てゐたが、見てゐるうちに、それが自分たち親子のやうになつてしまつた。…………かね子が久夫の前にお辭儀をしてゐる。よく生れて來て與れたといふやうにお辭儀をしてゐる。「久夫が一人前の男になつて自活が出來るまで、路頭に迷はないだけの財産はつくつて置いて與れ」とかね子はよく云つてゐるが、あの妻君も子供にはお辭儀をしながら、亭主にはそんなことを云つてゐるのであらう。伯父のお蔭でやうやく樂隱居をしかけて、長い年月、使ひこくつた貧しい頭を休めて、かねて尊い者と噂に聞いてゐる象牙の塔の氣持を、文學者冥利に經驗しておれに儚かしか殘つてゐないらしい生涯を過さうとしてゐるのに、かね子の奴、まだおれを出版屋や雜誌社や月評家や讀者の前に屈辱の鞭を受けさせようとしてゐる。

そこにゐる三人の親子の樣子を見てゐるうちに思はれだすと、もに、春めいた艶めかしい光も、朦朧とした松林も、彼れを慰めるものとはならないで、頭の重荷となつてしまつた。

家へ歸つて茶の間へ入ると、かね子は久夫を抱いて綾してゐた。久夫の無邪氣な笑ひは野島にも快く感ぜられて、頭がやゝ輕くなるやうであつた。

「おさらいはどうだつた」と訊くと、

「田舍は駄目ですよ。江川さんの奥さんなんぞ大變な御自慢なんださうですけれど、それほど上手ぢやなささうなの。私久振りで東京の名人のを聞きたいと思ひましたよ」と云つて、かね子は、近日近所の懇意な娘を連れて、買物かたぐ〱東京の芝居から音樂會かへ行つて來たいと云つた。

「お前にはさういふ樂みがあるから仕合はせだね」

「ぢや、あなたもいらつしやらない？」

「おれは當分人ごみの中へ行きたくはないよ。そのうち一人でそつと行つて來ようよ」

「そつと何處へいらつしやるの？」かね子は氣輕に笑つて、「さう云へば、先つき來た人は服裝は汚いけれど、立派ないゝ顏をしてゐましたわね」

「さうだ、いゝ顏だね。しかも變な人間ぢやないか。お前にはさう見えなかつたか」

「見たところは變でもないぢやありませんか。あの人どんな話をして行きましたの？」

「あの男は死んだ女のことを思つて、頭がどうかなつてるんだよ」

「いやですね。あの寫眞がその女の人なの？」かね子は閑部のことを深くは訊ねないで話を外らした。

野島は妻子の側に寢そべつて、二人が遊び戲れてゐるのを見てゐたが、久夫はヨチ／＼歩いて、野島の脊に馬乘りになつてその頭の髮を掻きむしつた。

「お父さんの頭よりもお母さんの髮の毛をむしつて御覽。髮の毛が多いから面白いよ」野島はむしられたまゝに頭を動かしながら云つた。

「餘計な知慧をつけちやいけませんよ」かね子は早くも頭を氣にしながら云つた。

「おれの髮は大分薄くなつたよ。お前は髮の毛が多くつて仕合せだね」

野島は今はじめて氣がついたやうに、かね子の髮が漆の如く黑くつて、フツクラと結はれてゐるのを見た。頰ぺたも首筋も若い女の艶をもつてゐるのを見た。ひで子は死ぬる前には髮の毛も薄く頰ぺたも窪んで、本當の髑髏になつてゐ

たのだと思ふと、世帯苦勞をした彼女に引かへて、かね子がしやあ／＼として粉飾(おめかし)などして世を樂んでゐるらしいのが小憎らしくなつた。

「さあ、御飯にしませうね」と、かね子が下女の知らせを聞いて臺所の方へ行くと、野島は、脊に乘つてゐる久夫をそつとおろして傍へやつて自分も久振りに臺所を覗いて、下女やかね子の働き振りを見た。

「おれが鰹節でも削つてやらうか、」と昔ひで子に向つて云つたやうなことを云つたが

「見つともない。男が臺所なんぞへ入るものぢやありませんよ」と、かね子は叱るやうに云つた。

「今夜の献立は何だい」

「大變な御馳走よ。樂みにして待つてゐらつしやい。まだなか／＼なのよ」

「ぢや、あちらへ行つて一仕事やつて來るんだね」

野島は氣輕に云つて、煮物の臭ひなどの通つて來ない書齋へ入つて、いつも坐るところへ坐つたが、亡妻の影はさつきよりも一層鮮かに、生前の姿をもつて机の側に坐つてゐた

淸盛の目に見えた多くの髑髏のやうに、いろ／＼な髑髏がこの書齋にも出沒したのであつたが、亡妻の髑髏は今までのどれよりも際立つて鮮かで、從つて無氣味さもはげしかつた。その髑髏には若い時分の野島自身の唇のあとが、あちらにもこちらにも印せられてゐるのがまざ／＼と見られた。

「おれも魔王の助けを借りたゝめか、惡い者を呼出した。外の文學者どもは、こんな髑髏に愛の涙を注いで、舐めまはすのであらうが、おれにはさういふ涙の泉は涸れてゐる。ほかの髑髏には空涙(そらなみだ)を濺いで手向(たむけ)の水ともしてやつたが、こいつは手剛(てごは)い。あの窪んだ目でおれの涙が嘘かまことかをちやんと見てゐる。淨海入道が一つ睨まへたら、千萬の眼を

そなへた大伽藍も露霜の如くに消えてなくなつたのであつたが、おれにはさういふ威力がない」彼れは自分の象牙の塔の中が、いつの間にか髑髏の巣になつてゐるのに身ぶるひした。かね子の影は彼れの無力を嘲るやうな笑ひを浮べた。

私は汽車に乘つて大磯へ歸るまでに、上田博士などがよく筆にし口にしてゐた象牙の塔について考へた。あの時分それを尊いもの〻やうに迷信してゐたことを考へた。自分がT君や批評家などに煽てられて躍起として働いて來たことを考へた。

二十年來見て來たいろ〳〵な文學者氣質といふものを考へた。私もこの狹い社會の一人として時に隨つて推移したゞけで、筆だこの出來るまで筆を持ちつゞけて來たゝめに、悟りの道が開けて來たのではないのである。私ばかりではない他の人だつてさうだ。「夢は枯野をも駈け廻つた」芭蕉には迷ひこそあれ、悟りなぞあるものか。「吾等死より醒むる時」に、私は淋しいイプセンの愚痴を見る。……今日の糧に不足しないで今夜の睡りが安らかであれば、我々はそれでい〻としなければならない。

野島某や甲乙丙丁のいろ〳〵な老若の文學者を浮べて、文學の流れは流れてゐる。

懸賞募集

俳人「一茶」の研究

本懸賞は必ずしも一茶の全人的の研究ではない、彼が俳人としての藝術的研究であれば足りる、しかし一茶の人物を主として描くも、藝術を主とした研究でも、それは投稿者の隨意である。

締切 五月卅日

賞金 壹等壹百五十圓（一名）貳等五十圓（一名）

原稿 は四百字詰一枚として五十枚以下、應募原稿は全部返戻せず、應募者は「改造」編輯部係に送られたし

發表 七月號「改造」誌上にて

改造社編輯部

「女性改造」懸賞募集

「光明皇后」の研究

光明皇后は、美しく、徳高く、信心深く、聖武天皇を輔けて天輪聖王たらしめた、人格者です皇后が浴室に癩病患者の體を洗ひ、路傍の乞丐の手を取つて恵まれた情愛は女神そのものゝ仁愛です。皇后を、東西古今を通じて眞に婦人中の典型的人格者としてその事蹟を研究することは意義あることゝ信じます。原稿は可成、皇后の人情美を基調とした物語式に綴られたし

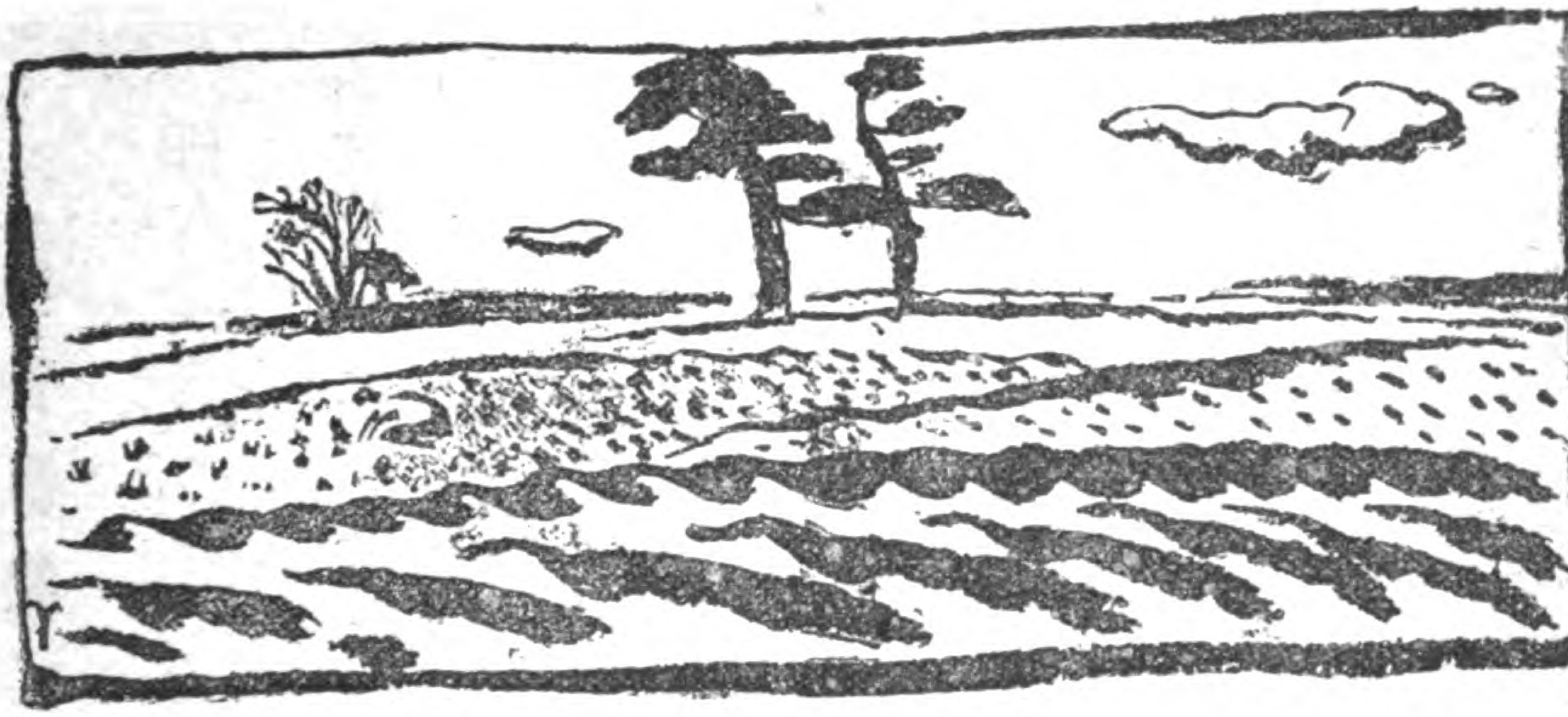
締切 六月廿五日

賞金 壹等　壹百圓（一名）　貳等　五十圓（一名）

原稿 は四百字詰一枚として五十枚以下、應募原稿は一切返戻せず。「女性改造」編輯部宛「光明皇后事蹟」と朱書されたし

發表 八月號「女性改造」誌上にて

女性改造編輯部



保吉の手帳

芥川龍之介

堀川保吉は東京の人である。二十五才から二十七歳迄、或地方の海軍の學校に二年ばかり奉職した。以下數篇の小品はこの間の見聞を錄したものである。保吉の手帳と題したのは實際小さいノオト・ブツクに、その時時の見聞を書きとめて置いたからに外ならない。

「わん」

或冬の日の暮、保吉は薄汚いレストランの二階に脂臭い燒パンを嚙ぢつてゐた。彼のテエブルの前にあるのは龜裂の入つた白壁だつた。其處には又斜かひに、「ホツト（あたたかい）サンドウイツチもあります」と書いた、細長い紙が貼りつけてあつた。（これを彼の同僚の一人は「ほつと暖いサンドウイツチ」と讀み、眞面目に不思議がつたものである。）それから左は下へ降りる階段、右は直に硝子窓だつた。彼は燒パンを嚙ぢりながら、時時ぼんやり窓の外を眺めた。窓の外には往來の

向うに亞鉛屋根の古著屋が一軒、職工用の靑服だのカアキイ色のマントだのをぶら下げてゐた。

その夜學校には六時半から、英語會が開かれる筈になつてゐた。それへ出席する義務のあつた彼はこの町に住んでゐない關係上、厭でも放課後六時半迄はこんなところにゐるより仕かたはなかつた。確か土岐哀果氏の歌に、――――間違つたらば御免なさい。――――「遠く來てこの糞のよなビフテキを嚙ぢらねばならず妻よ妻よ戀し」と云ふのがある。彼は此處へ來る度に、必ずこの歌を思ひ出した。尤も戀しがる筈の妻はまだ貰つてはゐなかつた。しかし古着屋の店を眺め、脂臭い燒パンを嚙ぢり、「ホット（あたたかい）サンドウイッチ」を見ると、「妻よ妻よ戀し」と云ふ言葉はおのづから脣に上つて來るのだつた。

保吉はこの間も彼の後ろに、若い海軍の武官が二人、麥酒を飲んでゐるのに氣がついてゐた。その中の一人は見覺えのある同じ學校の主計官だつた。武官に馴染みの薄い彼はこの人の名前を知らなかつた。いや、名前ばかりではない。少尉級か中尉級かも知らなかつた。唯彼の知つてゐるのは月月の給金を貰ふ時に、この人の手を經ると云ふことだけだつた。もう一人は全然知らなかつた。二人は麥酒の代りをする度に、「こら」とか「おい」とか云ふ言葉を使つた。女中はそれでも厭な顏をせずに、兩手にコップを持ちながら、まめに階段を上り下りした。その癖保吉のテエブルへは紅茶を一杯賴んでも容易に持つて來てはくれなかつた。これは此處に限つたことではない。この町のカフエやレストランは何處へ行つても同じことだつた。

二人は麥酒を飲みながら、何か大聲に話してゐた。保吉は勿論その話に耳を借してゐた譯ではなかつた。が、ふと彼を驚かしたのは「わんと云へ」と云ふ言葉だつた。彼は犬を好まなかつた。犬を好まない文學者にゲエテとストリントベルグとを數へることを愉快に思つてゐる一人だつた。だからこの言葉を耳にした時、彼はこんなところに飼つてゐ勝

ちな、大きい西洋犬を想像した。同時にそれが彼の後ろにうろついてゐさうな無氣味さを感じた。

彼はそつと後ろを見た。が、其處には仕合せと犬らしいものは見えなかつた。唯あの主計官が窓の外を見ながら、にやにや笑つてゐるばかりだつた。保吉は多分犬のゐるのは窓の下だらうと推察した。しかし何だか變な氣がした。すると主計官はもう一度、「わんと云へ。おい、わんと云へ」と云つた。保吉は少し體を捩ち曲げ、向うの窓の下を覗いて見た。まづ彼の目にはひつたのは何とか正宗の廣告を兼ねた、まだ火のともらない軒燈だつた。それから卷いてある日除けだつた。それから麥酒樽の天水桶の上に干し忘れた儘の爪革だつた。それから往來の水たまりだつた。それから、——あとは何だつたにせよ、何處にも犬の影は見なかつた。その代りに十二三の乞食が一人、二階の窓を見上げながら、寒さうに立つてゐる姿が見えた。

「わんと云へ。わんと云はんか？」

主計官は又かう呼びかけた。その言葉には何か乞食の心を支配する力があるらしかつた。乞食は殆ど夢遊病者のやうに、目はやはり上を見た儘、一二歩窓の下へ寄つた。保吉はやつと人の惡い主計官の惡戲を發見した。惡戲？——或は惡戲ではなかつたかも知れない。なかつたとすれば實驗である。人間は何處迄口腹の爲に、自己の尊嚴を犧牲にするか？——と云ふことに關する實驗である。保吉自身の考へによると、これは何も今更のやうに實驗などすべき問題ではない。エサウは燒肉の爲に長子權を拋ち、保吉はパンの爲に教師になつた。かう云ふ事實を見れば足りることである。が、あの實驗心理學者は中々こんなこと位では研究心の滿足を感ぜぬのであらう。それならば今日生徒に教へた、De gustibus non est disputandum である。蓼食ふ蟲も好き好きである。實驗したければして見るが好い。——保吉はさう思ひながら、窓の下の乞食を眺めてゐた。

主計官は少時默つてゐた。すると乞食は落着かなさうに、往來の前後を見まはし始めた。犬の眞似をすることには格別異存はないにしても、さすがにあたりの人目だけは憚つてゐるのに違ひなかつた。が、その目の定まらない内に、主計官は窓の外へ赤い顔を出しながら、今度は何か振つて見せた

「わんと云へ。わんと云へばこれをやるぞ。

乞食の顔は一瞬間、物欲しさに燃え立つたやうだつた。保吉は時時乞食と云ふものにロマンティックな興味を感じたが、憐憫とか同情とかは一度も感じたことはなかつた。もし感じたと云ふものがあれば、莫迦か嘘つきかだとも信じてゐた。しかし今その子供の乞食が頸を少し反らせた儘、目を輝かせてゐるのを見ると、ちよいといぢらしい心もちがした。但しこの「ちよいと」と云ふのは掛け値のないちよいとである。保吉はいぢらしいと思ふよりも、寧ろさう云ふ乞食の姿にレムブラント風の効果を愛してゐた。

「云はんか？　おい、わんと云ふんだ。」

乞食は顔をしかめるやうにした。

「わん。」

聲は如何にもかすかだつた。

「もつと大きく。」

「わん。わん。」

乞食はとうとう二聲鳴いた。と思ふと窓の外へ、ネエベル・オレンヂが一つ落ちた。――その先はもう書かずとも好い。乞食は勿論オレンヂに飛びつき、主計官は勿論笑つたのである

それから一週間ばかりたつた後、保吉は又月給日に主計部へ月給を貰ひに行つた。あの主計官は忙しさうにあちらの帳簿を開いたり、こちらの書類を擴げたりしてゐた。それが彼の顏を見ると、「俸給ですね」と一言云つた。彼も「さうです」と一言答へた。が、主計官は用が多いのか、容易に月給を渡さなかつた。のみならずしまひには彼の前へ軍服の尻を向けた儘、何時までも算盤を彈いてゐた。

「主計官。」

保吉は少時待たされた後、懇願するやうにかう云つた。主計官は肩越しにこちらを向いた。その唇には明らかに「直です」と云ふ言葉が出かかつてゐた。しかし彼はそれよりも先に、ちやんと仕上げをした言葉を次いだ。

「主計官。わんと云ひませうか？　え、主計官。」

保吉の信ずるところによれば、さう云つた時の彼の聲は天使よりも優しい位だつた。

西洋人

この學校へは西洋人が二人、會話や英作文を教へに來てゐた。一人はタウンゼンドと云ふ英吉利人、もう一人はスタアレットと云ふ亞米利加人だつた。

タウンゼンド氏は頭の禿げた、日本語の旨い好々爺だつた。由來西洋人の教師と云ふものは如何なる俗物にも關らずシエクスピイアとかゲエテとかを喋々してやまないものである。しかし幸ひにタウンゼンド氏は文藝の文の字もわかつたとは云はない。何時かウワアズワアスの話が出たら、「詩と云ふものは全然わからぬ。ウワアズワアスなども何處が好いのだらう」と云つた

保吉はこのタウンゼンド氏と同じ避暑地に住んでゐたから、學校の往復にも同じ汽車に乘つた。汽車は彼是三十分ばかりかかる。二人はその汽車の中にグラスオのパイプを啣へながら、煙草の話だの學校の話だの幽靈の話だのを交換した。セオソフイストたるタウンゼンド氏はハムレツトに興味は持たないにしても、ハムレツトの親父の幽靈には興味を持つてゐたからである。しかし魔術とか錬金術とか、occult sciences の話になると、氏は必ずもの悲しさうに頭とパイプとを一しよに振りながら、「神秘の扉は俗人の思ふ程、開き難いものではない。寧ろその恐しい所以は容易に閉ぢ難いところにある。ああ云ふものには手を觸れぬが好い、」と云つた。

もう一人のスタアレツト氏はずつと若い洒落者だつた。冬は暗緑色のオオヴアア・コオトに赤い襟卷などを卷きつけて來た。この人はタウンゼンド氏に比べると、時々は新刊書も覗いて見るらしい。現に學校の英語會に「最近の亞米利加の小說家」と云ふ大講演をやつたこともある。尤もその講演によれば、最近の亞米利加の大小說家はロバアト・ルイズ・ステイヴンソンかオオ・ヘンリイだと云ふことだつた。

スタアレツト氏も同じ避暑地ではないが、やはり沿線の或町にゐたから、汽車を共にすることは度たびあつた。保吉は氏とどんな話をしたか、殆ど記憶に殘つてゐない。唯一つ覺えてゐるのは待合室の暖爐の前に汽車を待つてゐた時のことである。保吉はその時欠伸まじりに、教師と云ふ職業の退屈さを話した。すると縁無しの眼鏡をかけた、男ぶりの好いスタアレツト氏はちよいと妙な顏をしながら、「教師になるのは職業ではない。寧ろ天職と呼ぶべきだと思ふ。You know ,Socrate Sand Plato ……… ETC.」と云つた。

ロバアト・ルイズ・スティブンソンはヤンキイでも何でも差支へない。が、ソクラテス・アンド・プレトオなどと云ふのは、――保吉は爾來スタアレツト氏に慇懃なる友情を盡すことにした。

午休み

保吉は二階の食堂を出た。文官教官は午飯の後は大抵隣の喫煙室へはひる。彼は今日は其庭へ行かずに、庭へ出る階段を降ることにした。すると下から下士が一人、一飛びに階段を三段づつ蝗のやうに登つて來た。それが彼の顔を見ると、突然嚴格に擧手の禮をした。するが早いか一躍りに保吉の頭を躍り越えた。彼は誰もゐない空間へちよいと會釋を返しながら、悠々と階段を降り續けた。

庭には槇や榧の間に、木蘭が花を開いてゐる。木蘭はなぜか日の當る南へ、折角の花を向けないらしい。が、辛夷は似てゐる癖に、きつと南へ花を向けてゐる。保吉は卷煙草に火をつけながら、木蘭の個性を祝福した。其處へ石を落したやうに、鶺鴒が一羽舞ひ下つて來た。鶺鴒も彼には疎遠ではない。あの小さい尻尾を振るのは彼を案内する信號である。

「こつち！　こつち！　そつちぢやありませんよ。こつち！　こつち！」

彼は鶺鴒の云ふなり次第に、砂利を敷いた小徑を歩いて行つた。が、鶺鴒はどう思つたか、突然又空へ躍り上つた。その代り背の高い機關兵が一人、小徑をこちらへ歩いて來た。保吉はこの機關兵の顏に何處か見覺えのある心もちがした。機關兵はやはり敬禮した後、さつさと彼の側を通り拔けた。彼は煙草の煙を吹きながら、誰だつたかしらと考へ續けた。二歩、三歩、五歩、――十歩目に保吉は發見した。あれはポオル・ゴオギヤンである。或はゴオギヤンの轉生である。今にきつとシヤヴルの代りに畫筆を握るのに相違ない。その又揚句は氣違ひの友だちに後ろからピストルを射かけられるのである。可哀さうだが、どうも仕方がない。

保吉はとう〳〵小徑傳ひに玄關の前の廣場へ出た。其處には戰利品の大砲が二門、松や笹の中に並んでゐる。ちよいと砲身に耳を當てゝ見たら、何だか息の通る音がした。大砲も欠伸をするかも知れない。彼は大砲の下に腰を下した。それから二本目の卷煙草へ火をつけた。もう車廻しの砂利の上に蜥蜴が一匹光つてゐる。人間は足を切られたが最後、再び足は製造出來ない。しかし蜥蜴は尻つ尾を切られると、直に又尻つ尾を製造する。保吉は煙草を啣へた儘、蜥蜴はきつとラマルクよりもラマルキアンに違ひないと思つた。が、少時眺めてゐると、蜥蜴は何時か砂利に垂れた一すぢの重油に變つてしまつた。

保吉はやつと立ち上つた。ペンキ塗りの校舍に沿ひながら、もう一度庭を向うへ拔けると、海に面する運動場へ出た。土の赤いテニス・コオトには武官教官が何人か、熱心に勝負を爭つてゐる。コオトの上の空間は絕えず何かを破裂させる。同時に又ネットの右や左へ薄白い直線を迸らせる。あれは球の飛ぶのではない。目に見えぬ三鞭酒を拔いてゐるのである。その三鞭酒をワイシャツの神神が旨さうに飲んでゐるのである。保吉は神神を讚美しながら、今度は校舍の裏庭へまはつた。

裏庭には薔薇が澤山ある。尤も花はまだ一輪もない。彼は其處を步きながら、徑へさし出た薔薇の枝に毛蟲を一匹發見した。と思ふと又一匹、隣の葉の上にも這つてゐるのであつた。毛蟲は互に頷き頷き、彼のことか何か話してゐるらしい。保吉はそつと立ち聞きすることにした。

第一の毛蟲　この教官は何時蝶になるのだらう？　我々の曾曾曾祖父の代から、地面の上ばかり這ひまはつてゐる。

第二の毛蟲　人間は蝶にならないのかも知れない。

第一の毛蟲　いや、なることはなるらしい。あすこにも現在飛んでゐるから。

第二の毛蟲　成程、飛んでゐるのがある。しかし何と云ふ醜さだらう！美意識さへ人間にはないと見える。

保吉は額に手をかざしながら、頭の上へ來た飛行機を仰いだ。

其處へ同僚に化けた惡魔が一人、何か愉快さうに歩いて來た。昔錬金術を教へた惡魔も今は生徒に應用化學を教へてゐる。それがにやにや笑ひながら、かう保吉に話しかけた。

「おい、今夜つき合はんか？」

保吉は惡魔の微笑の中にありありとファウストの二行を感じた。——「一切の理論は灰色だが、綠なのは黃金なす生活の樹だ！」

彼は惡魔に別れた後、校舍の中へ靴を移した。教室は皆がらんとしてゐる。通りすがりに覗いて見たら、唯或教室の黑板の上に幾何の圖が一つ描き忘れてあつた。幾何の圖は彼が覗いたのを知ると、消されると思つたのに違ひない。忽ち伸びたり縮んだりしながら、「次の時間に入用なのです」と云つた。その廊下の突當りは賄ひの部屋になつてゐる。其處には今日も戶の向ふに音樂會が開かれたらしい。水道の水のヴァイオリンや皿小鉢のカスタネットの中には炊事番のうたふ獨唱さへ聞える。「おつとオ——だハイ——イ——じやうぶウ——よしイ——きたア——ア——どつこハイ——しよウ——ウ」——譜は少し寫し惡い。

保吉はもと降りた階段を登り、語學と數學との教官室へはひつた。教官室には頭の禿げたタウンゼンド氏の外に誰もゐない。しかもこの老教師は退屈まぎれに口笛を吹き吹き、一人ダンスを試みてゐる。保吉はちよいと苦笑した儘、洗面臺の前へ手を洗ひに行つた。その時ふと鏡を見ると、驚いたことにタウンゼンド氏は何時の間にか美少年に變り、保吉自身は腰の曲つた白頭の老人に變つてゐた。

恥

保吉は教室へ出る前に、必ず教科書の下檢べをした。それは月給を貰つてゐるから、出たらめなことは出來ないと云ふ義務心によつたばかりではない。教科書には學校の性質上、海上用語が澤山出て來る。それをちやんと檢べて置かないと、とんでもない誤譯をやりかねない。たとへば Cat's paw と云ふから、猫の足かと思つてゐれば、そよ風だつたりするたぐひである。

或時彼は二年級の生徒に、やはり航海のことを書いた、何とか云ふ小品を教へてゐた。それは恐るべき悪文だつた。マストに風が唸つたり、ハツチへ浪が打ちこんだりしても、その浪なり風なりは少しも文字の上へ浮ばなかつた。彼は生徒に譯讀をさせながら、彼自身先へ退屈し出した。かう云う時程生徒を相手に、思想問題とか時事問題とかを辯じたい興味に驅られることはない。元來教師と云ふものは學科以外の何ものかを教へたがるものである。道徳、趣味、人生觀、――何と名づけても差支へない。兎に角教科書や黒板よりも教師自身の心臟に近い何ものかを教へたがるものである。しかし生憎生徒と云ふものは學科以外の何ものをも教はりたがらないものである。いや、教はりたがらないのではない。絶對に教はることを嫌惡するものである。保吉はさう信じてゐたから、この場合も退屈し切つた儘、譯讀を進めるより仕かたがなかつた。

しかし生徒の譯讀に一應耳を傾けた上、綿密に誤を直したりするのは退屈しない時でさへ、可成保吉には面倒だつた彼は一時間の授業時間を三十分ばかり過した後、とうとう譯讀を中止させた。その代りに今度は彼自身一節づつ讀んでは譯し出した。教科書の中の航海は相不變退屈を極めてゐた。同時に又彼の教へぶりも負けずに退屈を極めてゐた。彼

は無風帶を横ぎる帆船のやうに動詞のテンスを見落したり關係代名詞を間違へたり、行き惱み行き惱み進んで行つた。

その内にふと氣がついて見ると、彼の下檢べをして來たところはもうたつた四行しかなかつた。其處を一つ通り越せば、海上用語の暗礁に滿ちた、油斷のならない荒海だつた。彼は横目で時計を見た。時間は休みの喇叭迄にたつぷり二十分は殘つてゐた。彼は出來るだけ叮嚀に、下檢べの出來てゐる四行を譯した。が譯してしまつて見ると、時計の針はその間にまだ三分しか動いてゐなかつた。

保吉は絶體絶命になつた。この場合唯一の血路になるものは生徒の質問に應ずることだつた。それでもまだ時間が余れば、早じまひを宣してしまふことだつた。彼は教科書を置きながら、『質問は――』と口を切らうとした。と、突然まつ赤になつた。なぜそんなにまつ赤になつたか？――それは彼自身にも説明出來ない。兎に角生徒を胡麻化す位は何とも思はぬ筈の彼がその時だけはまつ赤になつたのである。生徒は勿論何も知らずにまじまじ彼の顏を眺めてゐた。彼はもう一度時計を見た。それから、――教科書を取り上げるが早いか、無茶苦茶に先を讀み始めた。

教科書の中の航海はその後も退屈なものだつたかも知れない。しかし彼の教へぶりは、――保吉は未だに確信してゐる、タイフウンと鬪ふ帆船よりも、もつと壯烈を極めたものだつた。

勇ましい守衞

秋の末か冬の始か、その邊の記憶ははつきりしない。兎に角學校へ通ふのにオオヴァ・コオトをひつかける時分だつた。午飯のテエブルに就いた時、或若い武官教官が隣に坐つてゐる保吉にかう云ふ最近の椿事を話した。――つい二三日前の深更、鐵盜人が二三人、學校の裏手へ舟を着けた。それを發見した夜警中の守衞は單身彼等を逮捕しようとした。

ところが烈しい格鬪の末、あべこべに海へ抛りこまれた。守衛は濡れ鼠になりながら、やつと岸へ這ひ上つた。が勿論盗人の舟はその間にもう沖の闇へ姿を隱してゐたのである。

「大浦と云ふ守衛ですがね、莫迦莫迦しい目に遇つたですよ。」

武官はパンを頬張つたなり、苦しさうに笑つてゐた。

大浦は保吉も知つてゐた。守衛は何人か交替に門側の詰め所に控へてゐる。さうして武官と文官とを問はず、敎官の出入を見る度に、擧手の禮をすることになつてゐる。保吉は敬禮されるのも敬禮に答へるのも好まなかつたから、敬禮する暇を與へぬやうに、詰め所の前を通る時は特に足を早めることにしてゐた。が、この大浦と云ふ守衛だけは容易に目つぶしを食はされない。第一詰め所に坐つた儘、門の內外五六間の距離へ絶えず目を注いでゐる。だから保吉の影が見えると、まだその前へ來ない內に、ちやんともう敬禮の姿勢をしてゐる。かうなれば宿命と思ふ外はない。保吉はとうとう觀念した。いや、觀念したばかりではない。この頃は大浦を見つけるが早いか、響尾蛇に狙はれた兎のやうに、こちらから帽さへとつてゐたのである。

それが今聞けば盗人の爲に、海へ投げこまれたと云ふのである。保吉はちよいと同情しながら、やはり笑はずにはゐられなかつた。

すると五六日たつてから、保吉は停車場の待合室に偶然大浦を發見した。大浦は彼の顏を見ると、さう云ふ場所にも關らず、ぴたりと姿勢を正した上、相不變嚴格に擧手の禮をした。保吉ははつきり彼の後ろに詰め所の入口が見えるやうな氣がした。

「君はこの間――」

少時沈默が續いた後、保吉はかう話しかけた。

「えゝ、泥棒を掴まへ損じまして、――」

「ひどい目に遇つたですね。」

「幸ひ怪我はせずにすみましたが、――」

大浦は苦笑を浮べた儘、自ら嘲るやうに話し續けた。

「何、無理にも摑まへようと思へば、一人位は摑まへられたのです。しかし摑まへて見たところが、それつきりの話ですし、――」

「それつきりと云ふのは？」

「賞與も何も貰へないのです。さう云ふ場合、どうなると云ふ明文は守衞規則にありませんから、――」

「職に殉じても？」

「職に殉じてもです。」

保吉はちよいと大浦を見た。大浦自身の言葉によれば、彼は必しも勇士のやうに、一死を賭してかゝつたのではない賞與を打算に加へた上、捉ふべき盜人を逸したのである。しかし――保吉は卷煙草をとり出しながら、出來るだけ快活に頷いて見せた。

「成程それぢや莫迦莫迦しい。危險を冒すだけ損の譯ですね。」

大浦は「はあ」とか何とか云つた。その癖變に浮かなささうだつた。

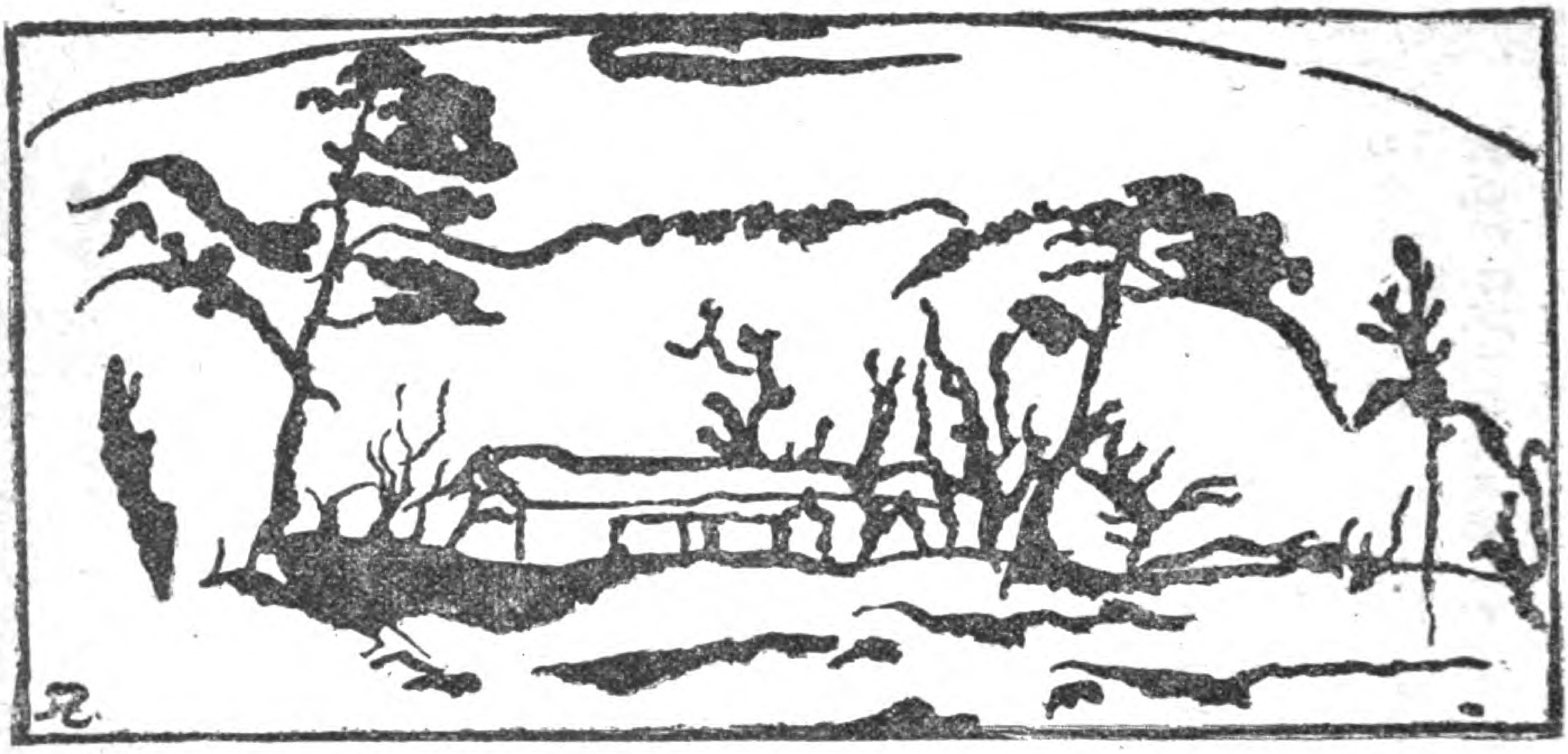
「だが賞與さへ出るとなれば、――」

保吉はやゝ憂鬱に云つた。

「だが、賞與さへ出るとなれば、誰でも危險を冒すかどうか？――そいつも亦少し疑問ですね。」

大浦は今夜は默つてゐた。が、保吉が煙草を啣へると、急に彼自身のマチを擦り、その火を保吉の前へ出した。保吉はちよいと禮を云ひながら、黄色い焔を煙草に移した。

しかし保吉は承知してゐる。あの一點のマチの焔は彼の爲に擦られたのではない。大浦の士道を照覽し給ふ神神の爲に擦られたのである。



或る男

武者小路實篤

一五五

福井では彼は蟹の御馳走責めでしまいにはすつかりあきた。彼は房子と本屋に行つたり、公園に出かけたり、川ぷしを歩いたりした。

彼は又房子の父と二人だけで一緒に新田義貞（？）の古跡を見に出かけたりしたし父を三つの時失なつた彼は、房子の父が彼にたいする務めに娘にたいする父の愛を感じて心地よく思つた。

房子の父は地方の政治家として一時は勢力をふるつてゐ、又古狸のやうに云はれてゐたのださうだが、無口で碁に許り熱心になつてゐる。他人にたいしては中々惡らつなのかも知れないが、娘にたいする、殊に房子にたいする沈默せる愛には彼は厚意をもつた。房子の父はあきらかに房子の未來を心配してゐた。そしてその娘を彼が愛し、そしてその娘と結婚してくれる彼にある沈默した感謝を感じてゐるやうに見えた。房子の父は喜怒哀樂をあらはさず、又お世辭のつかへない、碌に挨拶の

出來ない男である。そして彼も默つてゐる質なので、お互に何にもお話さないが、しかし心と心はお互にわかつてゐた。彼はあなたの娘の一生をよろこんで引きうけたことを心で示してゐた。そして房子の父はそれをよろこんでゐることを言外で示してゐた。房子の母は彼に親しめなかつた。しかし彼を信じてはゐた。そして娘が彼と結婚するのをよろこび、そしてどうかして彼をよろこばしたいとつめてゐることが彼によく感じられた。

一家のこらずが彼を歡迎した。その歡迎が口によつてされたのではなく、心によつて、沈默によつてされたことを彼はよろこんだ。

彼は平和に呑氣にくらしてゐた。或日白樺の新年號が來た。彼は其處に出てゐるNの小說をよんだ。彼はなるべく平靜を失なはずによむやうに努力がいつた。彼はNが自分に厚意をもつてゐてくれたことを知つた。しかし彼の妻にたいして友人の妻にたいする尊敬の範圍をふみ出してゐるのを感じないわけにはゆかなかつた。彼は自分の妻だからハイタイしてゐる方面を誇張してかいた。そして彼の妻を見た人が妻をほめるのを期待してゐた。よく親が自分の子を馬鹿だと云ふ、それは他の人から「いゝえお利口です」と云つてもらいたい時がある。自分は妻のことをかく時にはそんな氣が何處かにしてゐた。しかし今Nが彼の妻にたいして、同じやうなことを平氣で云はれてはあまりいゝ氣はしなかつた。しかし彼はNがなぜさう云ふ風にかゝないではゐられなかつたかと云ふ氣持には同感出來た。少くもNにたいする彼の厚意は出來るだけそれを善意にとつて、惡意を感ぜずにすむ程度にとめておけた。

なぜNが彼の妻に反感を持つたかといふと、彼がNの七八十枚の小說を惡評して雜誌に出さない方がいゝだらうと云つたことに元因してゐた。Nはそれまで彼達には非常に厚意を持つてゐた。そして彼がほめなかつた小說には隨分房子にあたる人をほめてあつた。しかしその惡評がNにとゞいた時、Nはすぐ彼達がその時ゐた赤坂の宿屋に來た。その時

彼の所には大勢の人が來てゐた。そして皆、元氣に話して笑つてゐた。それが當時まだ若くつて自信が强くもてなかつた自分のことにひどく神經質だつたNには何か自分の小說の話なぞも出て、皆で笑つてゐるやうにも思はれたらしくまるで顏色がかはつてゐて、皆を睨むやうにして一寸ゐて歸つていつた。

その前後の氣持が小說にかゝれてゐた。怒つてかいたので力强くかけてゐた。今迄發表する前には一度彼に見てもらつてゐたNはこの怒りで獨立し、自由にとびまはる力を得た。彼はそれを祝したく一方思つた。

しかし其處で彼の妻の感じについてかいたことは彼には平氣でゐるわけにはゆかなかつた。そして其處にNがまだ機嫌のいゝ時に房子から針箱のいゝのをNが知つてゐるので、買ふことをたのまれて買つたのを、從妹に怒つてやつたやうにかいてあつたが、彼はNはまだ針箱は買はなかつたのだらうと云ふ氣がして、其處に少し不快を感じかけた。實際Nが房子に送るために針箱を買つてゐたのを、從妹にやつたのかどうかは彼は今だにたしかなことは知らないが、彼はまだ買はなかつたやうにきめて、そして其處がへんに生きてゐるのにある不快をうけた。しかし彼は一方Nのためにその小說のかけたことをよろこぶ餘裕があつた。

しかし房子はそれをよんで泣いた。そして彼が「世間知らず」のやうなものをかくので、こんなことをかゝれるのだと恨んだ。その後も彼は「世間知らず」の故で時々妻から恨まれた。

しかし房子の性質として長くはそんなことにこだわつてはゐなかつた。すぐ平氣になり、又元氣になつた。

彼はある本で、ロコヽ時代のある婦人が、戀人を失なつて大へん悲しんでゐると云ふ噂を聞いて、それをなぐさめに或る人がいつたら、元氣に樂器をならして唄をうたつてゐるのでおどろいて、その人が、「あなたは悲しんでゐらしやると思つて慰めに來たのです」と云つたら、その女は笑つて「それは殘念でした昨日來て戴けば私は本當に悲しんでをり

ました」と云つた話をよんだことがあるが、房子に何處か似てゐるやうな氣がした。そして兩方が本當なのだと思つた。

一五六

正月に志賀が京都に來たので、彼も福井から志賀に逢ひがてらに京都へ出かけることにした。彼が京都に出かける日は雪だつた。雪が盛んに降つてゐる中を房子や房子の母なぞにおくられて俥で停車場に向つた。お城の石垣や松には東京では一寸見られない位雪がつもつてゐて、くらい空を背景にしてくつきりうかんで見えた。彼は妻に送られるやうな氣がして、本當に結婚した人のやうな華かな氣が少しゝた

房子は彼を送りがてら親類をたづねて鯖江まで一緒に汽車にのることにした。汽車が鯖江をたつ時、彼は雪のひどく降つてゐるなかを、淋しい停車場でいつまでも彼を見送つてゐる房子の姿を見た。この時の房子の姿はいつまでも彼は忘れることが出來なかつた。そしてその時の姿を思ひうかべると十年後の今でも房子が可憐に思へるのだつた。

彼は雪のふる中を汽車の窓から首を出していつまでも見てゐた。そして見えなくなつて首をひつこめて窓をしめて屈づまひをなほした時、彼の目は涙ぐんだ

彼は自分をたより切つてゐる一人の女性を持つたことをはつ切り感じたのだ。

京都は面白かつた。しかしどんなことがあつたか大概忘れた。たゞ志賀や山脇信徳と東三本木の信樂にとまつて夜おそくまで話しあかして、眠る時、志賀が電燈に袋をかぶせて眠りにつきかけたら、いきなり電燈が破裂してその下に寢てゐた山脇の蒲團の上に燃えたまゝ袋がおちて來たのをおぼえてゐる。その時三人で子供のやうに飛び起き、そしてびつくりし、又よろこんだことだけ覺えてゐる。

京都には一日か二日ゐて又彼は福井に歸つた。雪がひどくつて汽車が少しづゝおくれるのが氣になつた。何度も時計

出しては少しでも早く汽車の停車場につくのを望んだ。

一五七

彼はいつ東京へ歸つたか覺えてゐない。ともかくまもなく歸つたことは事實だ。そして一月に房子は又東京に出て來た。その時、彼は病氣でねてゐた。房子は彼の家に彼の病氣を見舞に來、又看護しに來た。そして彼の病氣がなほると同時に房子は彼の家の人になつた。彼と房子の結婚は改めては何處にも通知しなかつた。そして結婚披露もしなかつた。彼の母はそんなことに興味はもつてゐなかつた。

彼は理想家であるかも知れない。彼は常に未來に目的をもつて進んでゆく男であるだらう。だが彼は又實利家でもある。外見はかまはず、世間態はかまはず、實質だけが自分の思ふ通りになれば彼はそれで滿足する。かくて彼は獨身生活、殊に十九から二十八まで一人の女の友も持たなかつた淋しい生活の森はとざされた。しかしその八年の淋しさ、失戀の淋しさ。それは彼を淋しさにたいする親友にさせ、そして自己の内に神をうますために役に立つた。彼は孤獨でも立つことの出來る修業をその間に得た。しかし今や冬はすぎた。彼の内にしつつこく住んでゐた淋しさは房子のために段々追ひはらはれた。そして新しい生活が始まつた。

一五八

彼はもう二十二三ではなかつた。結婚について甘い空想はしてゐなかつた。寧ろ彼はトルストイ、ストリンドベルヒなぞによつて家庭生活の恐ろしさを一方誇張して感じさせられてゐた。勿論彼は結婚しても以前と同じ生活をつゞけてゆくより外なかつた。彼は一文も金をとるとはしなかつた。毎月もらう三十圓ではさう華かな生活を送るわけにはゆかなかつた。妻は彼の處へ來て着物がなくなる許りだと四五年あとで云つた。一つも彼につくつてもらつたことはないと云つた。

彼は細君に着物をつくつてやるぞと云ふことに少しも興味を感じない男である。彼の心は性慾の方面を別に上げるとすると、あとは自分の仕事のことを主に考へてゐる。書くものゝこと、自分の生活のこと、未來の社會のこと、そんなことが彼の生活内要の大半をしめてゐる。彼は本と畫を愛してゐる。そしてすきな本、殊に畫の複製や、畫の本を買ふことが唯一の道樂である。それ等は彼の精神の糧である。彼はそれによつて古今東西の人間の心とつきあひ、そして新しき勇氣を得るもの、見方をおそはる。心を豐富にし、そして人間にたいする愛と信頼を新にする。

彼にとつて着物は零にひとしい、美しい着物を着たものを見ると彼も美しく思ふが、それは彼の内面生活にはあまり交渉がない。

彼は自分の着物の柄についても好き嫌ひはあつた。しかしそんなことは彼には大したことではなかつた。妻が出來るまでは彼の母が彼の着物を一さい世話してゐた。彼の母はさう云ふことには無頓着の方であつた。そして金もなかつたので彼は大概兄のふるですませてゐた。

彼の兄はさう云ふ方が少しはわかる方だつた。だから兄が嫌ひなのは弟の彼の着物になつた。彼は十二三の時から惡衣惡食を嫌ずるのを不名譽に心得てゐたから、それがいつのまにか第二の天性になつてゐた。

彼の妻はさう云ふわけにはゆかなかつた。彼女は子供の時の贅澤に育てられた。そして着物は彼女の第二の生命であり、そして氣に入つた着物を着る時のみ、自分の身體のやうな氣のする質だつた。彼はそれを別世界の人間として興味をもつた。彼はいぢけることは何んでも嫌ひである。彼は大木にならないではゐられない人間であるから、自分のいぢける性質を何より嫌つた。他人にどう思はれると云ふことを恐れることを一番耻ぢた。それが又彼には必要だつた。處が彼の妻ときたら、他の人にどう思はれると云ふことには一向平氣で、他人は自分の勝手をすることを許してくれ、又

反つてそれで自分を尊敬してもらへるやうに思つてゐる。皆におだてられて育つて來た彼女は又皆に愛されて來た彼女は自分の好きなことをしてよろこんでゐれば皆もよろこぶものゝやうに心得てゐる。其處が彼には面白かつた。

彼は其處に自分の内に殺されてゐる人間のある本能を見た。そしてそれは彼の内にもまるでない本能ではなかつた。彼はたゞその本能を惡として、その本能を自分が持つてゐることを自分で知るのを恐れ、他人に知られるのをなほ恐れてゐた。

處が彼の妻はさう云ふことに一向平氣である。その本能的な、或は生理的な處が彼には面白く思へた。しかしいかに面白くとも彼は着物を買つてやるわけにはゆかない。

そして彼は買つてやりたいと云ふ氣もたまには持つが、それはすぐ消えて、又忘れてしまつた。それでも一緒に妻の日傘を買ひに行つたり、半襟を買ひに行つたりした。

さう云ふ時妻は二つか三つ自分に氣に入つたのをさがし出す。そして最後に二つ殘る。その二つを撰び出す迄の時間が彼をいら〳〵させるのに十分だつた。彼は始めは厚意をもつて見てゐる。いかにも妻と一緒だと云ふ感じをもつて見てゐる、しかし五分十分、十五分となるともうそろ〳〵あきてくる。立つて見てゐる自分の時間が無意味に消えてゆくやうな空虚を感じる。二十分、三十分、まだやつと撰んだ二つの品をあつち見たり、こつち見たりしてゐる。そして彼にどつちにしやうかと云ふ。

彼には定見がない。そんなにまよう位いならどつちだつて同じなのにちがいなからう、どつちか片方にきめろと云ふ。妻は彼にきめてもらいたひのだと思ふが、彼はどつちでもいゝと云ふ主義だから、相談にはのれない。そしてどつちでもいゝから早くきめろと云ふ。

一體に彼は父からの遺傳したのか、性急で、そして母からの遺傳か、さつぱりしてゐない。妻は彼のお父さん似の方を愛してゐる。彼のなくなつたお父さんはきつと非常にいゝ方だつたにちがいないと云ふ。しかし彼の父から遺傳した性急には閉口したらう。それは家庭の幸福をゆつくり味はうには、調子が早すぎる。彼自身もよくそれに惱まされる。

妻と彼と二人で散歩する。いつのまにか彼は妻のわきにゐることを忘れて早足になる。ふと妻のことが氣がつく、ふり向くと十間あまりおくれて一生懸命でついてくる。時々怒つて反つてゆつくりする。それを見ると彼も待つてはやらないぞと思ふ。

「二人で散歩するのはこりごりですわ」と妻はよくこぼす。しかし又二人で出あるく、其處に又樂しみがあるのであらう。

二人はよく金がないので閉口する。すると彼は七八年前からの口ぐせをくり返す。

「今に金が入つて困るやうになる。雨戸をしめておかないと金が入つて來て困るだらう。」

彼は忘れたが、彼の妻は覺えてゐる。

「お前の小遣に月に二千圓はやらう」

妻はその時分云つた。「せめてあなたが年に百圓とれるやうになるといゝのですが」

之はお互の冗談ではある。

一五九

彼はその時分から段々一部の人から認められて來た。勿論それはごく小數で、無名の若い人達である。岸田や、千家の仲間である。又時々彼を鼓舞する手紙が來、又友達を通して他の人のほめてゐるのを聞いた。しかし

世間の批評は相變らずよくなかつた。何かかけば惡口を云はれるにきまつてゐた。彼は今二十九だが、今でも惡口を云はれるが、それは彼が笑つて見下してゐられる一寸法師にきまつてゐるが、その一寸法師は彼が華族のお坊ちやんだと云ふ事實一點張りで今でも彼を輕蔑して、そして輕蔑されたら彼がよはるだらうと呑氣なことを考へてゐるものが時々あるが、彼は十何年つゞけさまに惡口を云はれて育つて來てゐるのだから惡口を云はれて驚く程、お人よしではない。惡口云はれてくたばる位なら、とつくにくたばつてゐる。

しかし惡評は齡とつた大家からさへ力を奪ふ。グリルパルチエルの話なぞは今聞いても腹が立つて、はがゆい。なぜ平氣でどん〳〵仕事をしてゆかなかつたのだらう。だが神經質は天才のつきものだからやむを得ないかも知れない。だが悠々と自分の仕事をしてゆくものは更に偉大である。

彼は二十九の時、東京へ歸つてまもなくかいたものに次のやうな事をかいてゐる。

『この頃自分をほめてくれる人がある
恐ろしい程ほめてくれる人がある、
自分の目は涙ぐんでゐる。
自分はそれ等の人の前に跪いて
かう云ひたい。
―私は小さい人間です。
おほめ言葉に値ひしません。
しかし〳〵出來るだけ、

貴君達の豫期を狂はさないやうにしたいと思つてゐます。
氣ながに見てゐて下さい。
さうして貴君達の豫期して下さるやうに進歩しないでも
どうか私をせめないで下さい。
私は靜かに成長したいと思つてゐます。」（二月五日）

彼はその翌々日に又かうかいた。

「自分はほめられることによつて自由は失なはない心算だ。
又惡口を云はれることで自由を失なはない心算だ。
又沈默されることによつて自由を失なはない心算だ。
見やうによつては賞讃も罵詈も沈默も有難い」

恐らく之は彼が世評にたいする一生を貫いて保持される態度であらう。

彼はその翌日又かう云ふのをかいた。

『人類の玉座の前にロシヤと、スカンジナピヤと、ベルギーと日本がよび出された。
さうして人類は嚴かな聲で先づロシヤに向つて云つた。
「お前は俺の爲にどんな人間を生んだ」
「ドストエウスキー、トルストイ及び其他」
人類の顏はかゞやくやうに見えた。

「よし」と云つた。さうして今度はスカンジナビヤに向つて
「お前の國は？」と聞いた。
「イブセン、ストリンドベルヒ及び其他」
　人類の顏は益々かゞやいた。
「よし」
　ついてベルギーがきかれた。
「ベルハーレン、メーテルリンク及び其他」
「よし」人類の御機嫌は益々麗はしい。
　さうして
「さて日本、お前はどんなものを生んでくれた」と云はれた
　日本は意氣揚々と答へた。
「伊藤博文、乃木希典、及び其他」
　人類の顏は少し曇つた。人類は自己の耳を信じないやうに
「もう一度云つて見よ」と云つた。
　日本は益々得意になつて
「伊藤博文、乃木希典」とくりかへした。
　人類は

「默れ！」とおつしやつた。さうしてロシヤやスカンジナビヤやベルギーに手づから杯をたまはつた。

日本はなぜ人類が怒つたのかわからなかつた。

それで小さな聲で

「まだをります」と云つた。

人類は「誰だ」と聞きかへされた

「大隈重信、桂太郎」

「馬鹿ツ」人類は席を立つた。

さうしてロシヤ、スカンジナビヤ、ベルギーをつれて、イタリー、フランス、イギリス、ドイツ、アメリカのゐる所にゆかれた。一人のこされた日本はいくら考へても人類におこられた理由がわからなかつたが仕方がないので、うらめしさうに席を立つてすごすごと家に歸つた。』」

彼は私かに自分をもつて人類が日本に期待してゐる天才の一人でありはしないかを、ほのめかしてゐる。

彼の鼻息は自覺をもつて少しづゝ荒くなり出して來た。

彼は四月の白樺には「或る日の一休和尙」を、

七月の白樺には「嬰兒殺戮中の一小出來事を、

八月の白樺には「養父」を出した。

彼はそれについて世間から何にを云はれたか少しも思ひ出せない。ほめられなかつたことはたしかである。悪口は云はれたにしろ彼は馴れすぎて忘れてしまつた。恐らく沈默されてゐたのだらう。たゞ志賀、木下、園池、柳、長與、小

泉、岸田、千家、なぞがゐてくれたので、彼はどの位い張り合があつたかは云ふ迄もないことである。

彼は何處からも、まだたのまれはしなかつた、だから氣樂に自分のかきたいものがかけた。彼は「或日の一休和尚」なぞが芝居にやられる時がくるなぞとはてんで思つてもゐなかつた。又それを不服にさへ思はなかつた。たゞあゝ云ふ考をとることが、一番書きたいものにとつて自然だつたにすぎない。

彼は自分のかくものが小品にすぎないのを心細く思つた。だが、批評家はどんな要求でも出來るが、作者は自分の生めるもの切り生めない。

彼はこんなことをかいてゐる。

「西洋の二流以下の作家は恐ろしくない。

しかし一流の一流の作家は恐ろしいものをもつてゐる。しかし七八年前に今の自分が輕蔑してゐるT、S（島崎藤村）に對して自分が抱いた程強く叶はないと云ふ氣はしない。

彼等の領土に於ては靴のひもをとくことすら出來ない。しかし彼等の領土に比敵する自分の領土に比敵する領土をもつことは出來ないことではないと思つてゐる。さうしてその領土は自分にとつて他の誰もの領土よりも更に親しき領土でなければならない。

しかしあと三十年。少くも十年」

彼は其後少なくも十年たつた。

彼はその時の自分の意氣組みがたゞ大言壯言に過ぎないとは思つてゐない

たゞ彼はまだ全力を出し切れるだけの材料にぶつからず、また時間も持たない。

あと二十年、あと二十五年は生きたいものと思ふ。そしたら自分は自分の一生の仕事をもつて平氣で山のごとくに立つことが出來ると、希望を生む天才の彼は今でもさう思つてゐる。

一六〇

彼は結婚後、心の淋しさが消えてゆくのをよろこぶと同時に恐れた。それは彼にあまりながくくついてゐたものだつたから、丁度お貞さんと別れてから十年になる。その間、彼は時々耐えられない淋しさに壓倒されかけた。しかも其處から彼は立ち上るために創作をするのがくせだつた。今彼は、その淋しさと戰ふ必要があまりなくなつた。しかしその心配はいゝ材料にぶつかれない時に限つた。いゝ材料にぶつかれば、彼の全心はその仕事に奪はれた。

彼は仕事をするより他に用のない男だつた。散歩と、本屋へゆくのと、友達とゆき來、その他は彼は頭さへよかつたら机に向つてゐた。

彼は脚本のかけない時は、感想をかいた。兩方の出來ない時は、本をよんだり、畫を見たりしてゐた。

彼は仕事にかゝると、よく興奮した。頭が充實し切つて、どうすることも出來ないやうな氣持の時があつた。すると彼は立ち上つて、妻の處へ行つたり、室を行きまはつたり、外へ出たりする。そして息をついて又机に向つた。「養父」をかいてゐた時かと思ふ。彼は喰ひ込める限り喰ひ込まうとして、道がひらけなくなると、あわて出し、書き損いを重ねる。そして筆をすてるが、又暫くすると不安で又机に向ふ。そしてとう〳〵疲れ切つて其處に倒れて、夜半まで寢んでしまう。そして細君にぶつ〳〵云はれた。

疲れ切つて机の前で倒れて、そのまゝ寢込んだのは一度だけだつたが、彼は頭が疲れ切つてどうすることも出來なくなるまでよく机にすがりついて、精も根もつきることはよくあつた。

勿論それは締切りに催促されてゞはなかつた。頭がその方に向く時その方へ入り込むだけ入り込まないと、彼のかくものはものにならなかつた。彼は小説をかく方はあまり得意でなかつた。彼には叙景や、地の文をかくのがどうもぴつたりしなかつた。彼が眞劍になつてかけるのは、人間が運命とすれ〴〵になつて生る時であつた。

　さう云ふ所をかく時、彼の目は自づと涙ぐみ、彼の頭は白熱して來、他のものは何にも入らず、頭が自づと考へることを手がそのまゝうつせばよかつた。それは蠶が自づと糸を出すやうに自分でどう云ふ糸を出さうかと考へるものではなく、自づから次ぎ次ぎとわいてくる言葉をそのまゝ、出來るだけ早くうつせばよかつた。彼は脚本をかく時なぞ、よく、一行とばして、次の人の言葉をかくことがあつた。頭の中の二人の會話が自づとつぎつぎに出てくるのをそのまゝうつせばよかつた。しかし頭がつかれてくると同時に、その働きは鈍くなり、ついに新な道をつくり出す力がなく、何處へ流れていゝかわからなくなる。その時、筆をおいて、又新らしく力がわく時までまてばいゝのだが、若い彼にはそれが出來なかつた。疲れても、疲れても、なほはひ上り机にかぢりついた。そして倒れてのちやんで、翌日また、氣に入らない所はすてゝ、その前からかきつゞける。

頭さへよくなつてゐれば、昨日開かなかつた戸が自づと開いて、彼の入るのを待つてゐる。だが一難さつて、一難來たり、又力つきて、倒れる。そしてどうしても開けないと思つた道が、明日になれば又開ける。

開らけた時のよろこび、だが又すぐ道がとざされる時の心細さ。又其處が開けるよろこび。それは彼の力ではなく、彼の頭の力だ。そして彼の頭をつくつたものは彼ではない。彼はつくられたまゝに生るより仕方がない。

　だから彼は創作する時は自分を謹しむ。

彼の妻は彼を信用しすぎてゐる。安心してゐる。彼は道樂ものではない。さきに寢ても逃げ出しはしない。彼女は安

心して先きにねる。そして彼が朝早く目がさめ、おちつけずに机に向ふと、妻は目をさまして聞く。

「あなた昨日おねにならなかつたの」

彼はそれを可愛いく思ふ。

しかし二人の間に嫉妬喧嘩がまるで起らないとは云へない。

お貞さんから或る日林檎を送つて來、手紙が來たので可なりひどい喧嘩が起つた。それから彼はお貞さんと一切文通しなくなつた。その後消息はまるで聞かない。彼は又房子に男の人から手紙がくると、滅多にそんなことはなかつたが怒つた。そしてお互に、それを禁じあつた。

一六一

彼はその秋、(だつたと思ふ)自由劇場でやつたゴルキーの「夜の宿」を見てすつかりおどろいた。彼は自分の自信をすつかり打ちこはされたやうな氣がした。こんないゝ脚本が他にあるかと思つた。ともかくその全體の感じが、一つの地の底からもえ上る生命の炎のシンホニーのやうな氣がした。

讀んだ時にはそれほどには思はなかつたが、皆が生きやうとしてゐる苦しみが、へんにもつれあつて生きてゐるのにおどろいた。その世界は彼にはとても書けない世界なのでなほおどろいた。自分のものゝ單調さと、貧弱さと、呑氣さを面のあたり知らされたやうな氣がした。うちくだかれた自信をとり戻すのに二三日かゝつた。

その後、彼はストリンドベルヒの「死の舞踏」をよんだ。そして「夜の宿」にまさるとも劣らない恐ろしさを感じた。この作のそばにゆくと、どんな作も甘いやうな氣がするだらうと思つた。之は彼にとつてまるでちがう世界ではなかつた。其處がなほ恐ろしかつた。

彼はもう自分にすつかり失望した。早く、自分の衣をぬぎすてたくなつた。それで彼は急に今までかいたものを本にして出してしまはう。そして新しく生きやうと思つた。今迄の作品を蛇のぬけ殻のやうにすてゝしまはうと思つた。

かくて彼は感想集「生長」と、脚本集「心と心」を出すことにした。

洛陽堂の主人に話したら心地よく承諾してくれた。それで彼は、つゞけて二つの本を出すことにした。

出たのは少しあとだが、彼は二つの本の賣れただけの印税をもらう約束で、兩方で二十三圓か、三十二圓かもらつた。その後何年か後かに再版が出るまで一文ももらはなかつたが、彼はそれがあたりまへに思つてゐた。ともかく千部は賣れなかつたことはたしかである。しかし勿論、彼は失望しなかつた。

一六二

その時分、兄や嫁が西洋から歸つて來た。

彼は勿論よろこんで兄の嫁からいろ／＼話を聞いた。兄は面白く、誇張していろ／＼話すと、正直ものゝ嫁は一々それを訂正した。

何處の都の往來の話だか忘れたが、兄はその道が奇麗で鏡のやうに人の姿がうつると話してゐると、嫁は「そんなにはつきりうつりはしませんわ」と云つた。

其處で兄と嫁とが笑ひながら云ひあふ。彼達は笑ひながらそれを聞いてゐる。

一六三

その時分彼は「清盛と佛御前」をかいた。彼はその内のある場面は今でもすきだが、好きでない場面もあるので、あまり好きな作品ではないが。ある處は强い力が出てゐると思つてゐる。その時分、文壇の新人發見者のオ、ソリテーと

認められてゐた瀧田哲太郎氏が彼の所へたづねて來た。そして「清盛と佛御前」を感心したと云つて、何か中央公論にかいてくれと云つた。

志賀はそれより半年か、一年前に瀧田にたのまれて小說をかいて生れて始めて百圓の原稿料をとつて祖母さんに孝行したが、彼もかく氣になつた。彼は元よりそれをうれしく思ひはしたが、しかし彼の傲りはそれを喜ぶことを耻ぢた。

しかし彼は始めて原稿をたのまれてかくので、締切り日が氣になつた。そして締切りまぢかまで何をかいていゝかわからなかつた。彼は自分の頭のなかの、あらゆる倉のなかから、隅の隅まで材料をさがした。蟲が繭をつくるのにいゝ所はないかと搜して歩くやうになつたものである。そして彼の搜し出したのは、釋迦八相記の內の、釋種の滅亡にたいする釋迦の態度であつた。

彼は子供の時に、死んだ姉がよく古本屋から草册子を借りてよんでゐた。彼はその本に出てゐる畫を見るのが好きであつた。そして母や姉にその繪についての話を聞くのが好きだつた。その內に特に白縫物語と釋迦八相記が頭に殘つて隨分面白い本のやうに思つた。大きくなつてから白縫物語も釋迦八相記も子供の時母に聞かされた思ひ出をなつかしく思うてよんで見たが、母に聞いたやうな面白い話はかいてないのでがつかりした。

しかしその爲、彼は釋迦八相記を買つてもつて居た。そして故國がやられる時の釋迦と日蓮の氣持は印象强くのこつてゐた。自分だつたらどうするだらうと思つたのと、トルストイの無抵抗主義、暴力に抵抗するのに暴力をもつてしない所に興味をもつた。

それを急にかく氣になつた。それで彼は始めの一場をかいた。二場までかいたかも知れない。その時不意、釋迦の傳記をともかく一度よくよんで見やうと思つた。そして神田の古本屋を一軒々々搜して歩いて、ある所でやつと薄い傳記

を見つけた。その本で始めて彼は流離王が釋迦に個人的恨みをもつてゐるのを知つた。釋迦のためにつくつたお堂に生れの少し賤しい流離王がそんなことを知らずに入つたので、釋種の人達が怒つて、流離王の歩いた迹の床をけづりとつた話を知つた。

彼はその話が本當か、嘘か、或は釋迦八相記にものつてゐるかゐないかを知らなかつた。しかしその話は面白い話だと思つた。書いたあとで知つたら隨分殘念がつたらうと思つた。そしてその本が手に入つたのをよろこんだ。

そして歸るとすぐに今迄かいた所をその事實によつてなほした。そしてつゞけて十一月二十一日に最後までかいた。彼は釋迦が日蓮に說教した言葉にはあまり自信がなかつたし、場が短かすぎるのが少し氣になつたが、一方自信ももつた。

之が彼の所謂出世作かも知れない。だが彼は瀧田氏にほめられた他、あまりほめられた覺へはない。友達にほめられるのは馴れつこになつてあまり記臆にのこつてゐない。世間の惡評ももう覺へてゐる程、氣にしなくなつたと見へる。

一六四

彼はその少し前から白樺の編輯をやつて居た。前にかくのを忘れたと思ふが、白樺は第二卷の終りまで白樺同人がの方の責任は一切もつてゐた。第三卷から白樺の借金を或人からそれは白樺の會計にも關係してゐた彼等の同級生の人だつたが、その人から千圓かりて始末をつけて、それから洛陽堂の手でやつてもらうことになつてゐた。それで彼は編輯してゐたが、たゞ原稿さへ集ればよかつた。彼は自づと集るものをそのまゝ三秀舍へ送つてゐた。頁數のうすい時や厚い時があつたが、洛陽堂から少しも小言が出なかつたので、かまわず出してゐた。だから彼は編輯はやつてゐたが、少しも骨は折れなかつた。

その時分、志賀は尾の道の方にゆき、里見は大阪にゐた。
或る日里見から長篇のつゞきが來た。それで彼はそれをすぐ三秀舍に送つた。處がそれから四五日たつて、洛陽堂の主人と三秀舍の白樺のかゝりの人とが來た。二人とも大事件が出來たやうな顏してゐた。聞くと里見の原稿がなくなつたのだと云ふ。彼はその時のことを里見あての公開狀にかうかいてゐる。
「今朝洛陽堂の主人と三秀舍の斯波とが顏色をかへてやつて來た。始め洛陽堂の主人は大變なことが出來ましたと云つて一人だけ入つて來た。顏色がかはつてゐる。その瞬間「何が起つたのだらう」と自分は思つた。
自分はすぐ「何が起つたのです」と聞いた。すると君の原稿が見へなくなつたのだと云ふ答へだつた。さうして斯波も一緒に來てゐると云つた。斯波の顏色は洛陽堂の主人以上に變つてゐた。斯波の氣持はすぐ自分にわかつた。自分は斯波に怒るよりも、氣の毒に思つた。それと同時に君に對して大變すまない氣がした。(中略)斯波は昨日晝それに氣がついて今朝方の二時迄さがしたが見へなかつた。今朝も今まで搜したけれど見えなかつたと云つた。しかし五六十頁ある原稿だし、どんなに小さい小僧までも原稿の大切なものだと云ふことは十々知つてゐるのだから、なくすやうなことはない、きつと搜し出します。しかし何時までも默つてゐるのもわるいと思つてお知らせに來たのですと云つた。そして何度もあやまつた。僕は困つてしまつた。殊に君にたいしてすまなく思つた。君にもう一變同じものを書くことを自分はどうしてもたのむことは出來ないからだ。さうして下がきがあるとも思へないからだ。下がきがなかつた時にはどうしていゝかわからない。さうかと云つて斯波にどんなことがあつても搜し出せと云つても、萬一なくなつたら無理な話だ。斯波はどんなことしても搜し出しますと云つてゐるからと云つて何處まであてになるかわからない。(中略)本當になくなつたのかと思ふ。もしさうだつたら君はどうするだらうと思ふ。(中略)その內に出てくれゝばいゝけれども、出ない

時にはあきらめて許してもらいたい。蟲のいゝ話だけれども之より外、動きのとれやうがないことにぶつかつたのだ。自分は蟲のいゝことを云はなければならないことを苦しく思つてゐる」

里見からは氣持のいゝ返事が來たが、一ケ月程たつていよ〳〵かきなほさうとした時、つい里見は癇癪を起して、直接、斯波に是非ともさがし出してくれと云つて來たさうだが、とう〳〵原稿は出なかつた。そして里見はかきつゞけることが出來ず、中止した。

彼は氣の毒に思つた。彼はいつも下書きをしない男だけに、なくなつた時のことを考へると恐怖をうけないわけにはゆかなかつた。下らないものゝ時は、反つてなくなる方がいゝやうにも思つたが、少しでも自信のあるものが出來ると彼はなくなることを實に恐れた。

それで里見のその事件は彼はいつ迄も忘れることは出來なかつた。あとで志賀から手紙が來て、あまり氣にしないでもいゝだらうと慰めて來た。しかし彼は慰められるのを耻かしく思ふ程、その時はもうすぎたことのやうな氣がした。自分のものだつたら何時までも思ひ出すであらう。

志賀はその小説のモデルにされた或る人が小僧を買收してその原稿をなくなしたのだらうと考へてゐたらしかつたがあとでその考はとり消した。だがその原因はわからずじまいになつた。

それにしても彼はカーライルがフランス革命史の原稿をミルにかした處ミルの女中の不注意で暖爐の火をつけるために燒かれた話を思ひ出さないわけにはゆかなかつた。

恐らくカーライルは里見以上にうち〳〵だかれたらう。しかしそれから起き上り、更に勇氣を起してかき上げた。しかしそれをもつて里見をせめるわけにはゆかない。歴史的のものと、創作とは又ちがう。彼もなくなつたものゝ種

類によつては、カーライルの眞似が出來るかも知れない。だが大概の場合、二度、同じものを、同じ生き生きした感じで創作することは出來ないから。

しかし彼は、カーライルのその起き上つた勇氣を見上げないわけにはゆかない。そして自分の創作が一つもなくなつたことのないことを喜ぶものだ。

それだけに里見に同情する。尤も里見のものとしてその長篇はすぐれたものとは彼は思つてゐなかつた。そして今それをかけば恐らく、もつといゝものがかけるだらうと思つてゐる。

一六五

翌年の一月一日に彼は「二十八歳の耶蘇」を一氣でかき上げた。二時間位でかき上げたやうな氣で彼はゐるが、彼の筆の早さは一時間に五、六枚だから、三時間位はかゝつたかも知れない。ともかく、彼は「わしも知らない」で自分がまだ到達出來ない境地をかいたのが氣になつてゐて、こゝでまだ救世主になれない時の耶蘇の淋しさをかいた。彼はそれまでによく、三十歳迄の耶蘇について考へたことがある。それは彼がトルストイによつて自分の現在の生活をつゞけることに心苦しさを感じされられながら、新しい生活に入れないので、その不安をあらはすのに適當な材料だつたから。

彼はその脚本をかく前に、「わしも知らない」のあとで、こんな對話をかいてゐる。

「耶蘇。父よ！

神。なんだ。

耶蘇。私はもう二十八になりました。

神。さうか

耶蘇。私は憐な人間を救ふ力が得たくなりました。

神。さうか。

耶蘇。どうかその力をおさづけ下さい。

神。まだいけない。

耶蘇。いつにならつた下さります。

神。お前に力が出來たら。

耶蘇。いつ力が出來ます。

神。それはわしも知らない。

耶蘇。世の中には憐な人間が澤山おります。私の救ふのを待ち兼ねております。

(神去る。耶蘇はそれに氣がつかない)

耶蘇。私は見てゐるのに忍びません。父よどうぞ私に力をおさづけ下さい。私は心苦しく思ひます。

(神のゐないのに氣がつき)

耶蘇。父よ。私をおすてになつたのですか。私は出來るだけ御心に從ひます。御心のまゝにおみちびき下さい。(一九一三年、一二月一七日)

この考が熟して、小さい一幕物「二十八歳の耶蘇と悪魔」が生れたのだつた。彼はかきながら之こそ小劇場で芝居にやれるものと思つた。

彼はかき上げた時、可なり得意だつた。

二人の惡魔が、まだ神の子になり切れない耶蘇を未熟なまゝ、木からおとして地上にくさらせやうとたくらんで失敗する所をかいたものである。

惡魔は耶蘇をだまし、既に耶蘇に奇蹟の行へる神の子だと云ふあやまつた自覺を與へることに成功してよろこぶ。その時天の一方に聲があり聞える。そしてまだ耶蘇が十字架を荷なふ力のないことを知らされ、誡められる。耶蘇は惡魔をしりぞけ、後悔し、赤面し、覺悟を新にする。

彼はそれより一年前に、かう云ふことをかいてゐる。

「沙翁の言葉に

「熟すと云ふことがすべてゞある」

と云ふ言葉があるさうだ。（元の意味とちがうかも知れない）

俺に熟さない前に木から落ちろと云ふ人がゐる。

「俺は本にしがみついて干からびる人間かも知れない」

一六六

彼の外面生活は實に變化のない、靜かなものである。彼はその内で與へられた問題を嚙しめ、嚙しめしてゐた。

彼は外面的變化を求めなかつた。むしろそれを恐れた。そして靜かに成長してゐた。しかし彼は自分の進步の遲いのと、自分の意氣地のないのを恐れた。熟し切つた時は平氣で木からはなれたい。時が來たら平氣で卵の殼からとび出したい。しかし早すぎるのは遲すぎるのと同じく彼にとつてはいゝことゝは思へなかつた。新しい生活に入りたく思ふ

時に彼はまだ自分の力の少ないことを知つた。そして現狀を維持してゐる時に彼は木にしがみつきながら干からびることを心配した。

白樺の二月號に彼が「二十八歳の耶蘇」を出した時に、長與がある一幕物を出した。彼はその內にある力に感心した。感心した以上、ある不安さへ感じた。彼はさう云ふ感じは、志賀と長與のものに時々感じた。他にはそんな感じはもたなかつた。

志賀は彼より二つ上だつた。そして彼にない種類の神經と觀察をもつてゐた。そしてそれを立體的にかく才能をもつてゐた。長與のものは彼よりも重く、ある複雜性を持つてゐる。それが彼を時に不安にさせた。その二月號にのつた長與の脚本は殊にさう云ふ不安を與へた。それがヒントになつて彼は「Aと運命」と云ふ脚本をかいた。之の形式は、ストリントベルヒの「ダマスカスの方へ」からヒントを受けた。しかし「ダマスカス」に比して「Aと運命」はあまりに單調なので、彼はその事實を人に知られるのを恐れてゐる。白狀しないのも氣になりながら。

この脚本は始め感想をかくつもりでかいてゐる內に、段々油がのつて脚本のやうなものになつた。志賀にあとで見せた時、始めの感想風なのを惜しがつてくれたが、それはかく時の氣持がそのまゝに殘つてゐたのである。

九場の感想劇で、Aが未知の天才が出るのでおどろいたり、運命について演說したり、其處でお貞さんにあたる人にあつたり、妻とお互に嫉妬しあつたり、運命に出あつたり、そして熊とまちがつて滑稽な遊獵家に射殺されたり、追悼會に死んだAが出て來てしやべつたりする芝居だ。

ストリントベルヒの影響をうけてドイツに表現派が出來たとすれば、彼のこの芝居もストリントベルヒの「ダマスカスの方へ」から影響をうけて出來た點で何處か似かよひがあるかも知れない。彼が精神的にセザンヌやゴオホの影響を

うけたことは前にかいた。

　彼は脚本の方ではあきらかにイプセン、マーテルリンク、ストリントベルヒの影響をうけた。皆、幼稚な所がある。しかし人々がその點で非難したら彼は云ふであらう。

「成長し切つた曉きを見て下さい。私は實力以上に見てもらはうとは思はない。だが實力だけのことはする。そしてその實力は生長するものである。そして自分は自分以外の人間にはなりたくもなれない人間である。とれるものはとれ。其處に生長がある。ストリントベルヒは自分が影響をうけすぎる人間のことをなげいてゐる。だが彼位い獨特の露骨にあらはれた人間が他にあるか。胃袋が損じない限り、いろ〱のものから滋養分をとるのはいゝことである」

　彼はその少し前にお貞さんと自分のことをかいた。彼はもう以前程、お貞さんのことを思つても參らずにすんだ。そしてまだお貞さんにたいする憧憬が消えすぎてはゐなかつた。それでかくのに早くもなく遲くもなかつた。

　それから彼は「罪なき罪」をかいた。之は矢張りストリントベルヒの影響と「オセロ」を見たのがヒントになつて彼はかき出したが氣がひけてやめてゐた。それを岸田によんで聞いてもらつたら、岸田が中止したのを惜しがつてくれたので、又つゞけてかくことにした。（以下次號）



戯曲　火（壹幕）

中村吉藏

登場人物

貯蓄銀行支店主任、　稲木守

事務員　中岡三郎

同　花田とき子

預金者　老婆

同　夜店商人の妻

その他、車夫、荷車挽、職人、電氣工夫等、群衆大勢

場所

東京市外の場末、貯蓄銀行小支店

時

現代

○

貯蓄銀行の小い支店の内部、四方は板壁で貼つて下手には狭いたゝき土間、出入口の扉がある、正面にスリガラス戸が二枚、その右手に高く赤い彩色刷の、貯蓄奨勵のポスターが貼り附けてある。左手にはこの小支店に不似合な程大型の金庫が据えてある、上手の板壁には、八角時計がギッチ〱鳴つてゐる、事務用の卓と椅子とが二三脚列んだ事務室と、土間との間は板壁と、金網とで劃られてゐる。

○

支店主任、稲木は五十歳前後の、前額の禿げ上つた、脂肪肥りのした男子、和服着である、事務員の中岡は廿歳餘り頭髪がモシヤ〱して、青白い顔色、神經質な鋭い眼光である、詰襟の黒の小倉服で、一見給仕上りと云つた風采をしてゐる、こゝらの、細民らしい二三人の男女が、金網の口に立つて、金を受取るのを、中岡は一々取次いでゐる。その人々が歸つて行くのと入違ひに、貧乏くさい服装の白髪も半ば亂れかけた一人の老婆が飛び込んで來る。

老婆。（上ずつた調子で）、御免なさい、私はあちらの銀行へへそくりを少々許り預けて置きましたが、世間の人がいろんな噂を立てますので、不安心だから、たツた今引出して來ました、何んでもこちらは親銀行がしつかりしてるで間違はあるまいていふ事ですが、それに相違ありませんかいな？

中岡。（苦笑）いくら御預けですか？

老婆。（財布をさぐり〱）五拾圓です、………九州の炭坑で稼いでる悴夫婦から毎月送つてくれてるのを、一圓二圓と倹約して三年越しでやつと溜めました、これから私の死追銀だから、生命の次の大切なお金ですがな。

中岡。（無愛相に）こちらへお出しなさいお預りしませう。

老婆。（念を押すやうに）大丈夫でございますかいな？預けた金が返して貰へんやうな事はありますまいな、貴方、請負うてくれますか？

中岡。（鼻頭で笑つて）、ちやア郵便貯金にでも持つて行つた方が善いでせう。

老婆。（タド〳〵と）。郵便屋さんは利子が安いでな………

稲木。（起上つて）、君そんな無あいそうな事を云つてくれちや困るぢやアないか？大切なお得意さまだ（云ひ〳〵窓口に寄つて）お婆さん、大丈夫です、安心して、お預けなさい、返して貰ひたい時や、何時でも利子をつけて返して上げます、こゝは親銀行が、しつかりしてるから、郵便貯金よりももつと確かです。………さア、こちらへお出しなさい。印をお持ちでせう、………中岡君、通帳をこさへて上げてくれ給へ。………

老婆。（安心したやうに）ぢやア何卒これを預つて下さい。印はこれです（とさし出します）

（中岡は默つて受取つて手續を濟ませ、新通帳へ記入する、稲木は自分の卓へ返つて、中岡の持つて來る金を受取り、通帳へ捺印して渡し。中岡に取次がせる）

老婆。（通帳をひろげて見て。内懐へ深く納め）イヤ、何うも御手數をかけました。

稲木。（わざとらしく丁寧に）御苦労さま…。

中岡。左様なら…。

（老婆は叩頭して去る）

稲木。（中岡を叱るやうに）君は何うもいかんよ。この銀行の使用人で、飯を食つてるくせに郵便貯金へ持つて行けなんて、云つちやお得意を追ツ拂ふやうなもんぢやアないか？氣をつけてくれ給へ、この頃、君の調子は何うも變だよ。

中岡。でも郵便貯金が確かだから、正直な事を云つた丈です、あの方なら國家が破産するまでは大丈夫に相違ないんですからね、新聞で見ても、この頃はボロ銀行があちらでもこちらでも倒れてるやうですから、あの婆さんなどもそれを聞かされてけんのんがつてゐるでせう、

稻木。(苦り切つて)へらずロは止し給へ、ボロ銀行は倒れても、うちはそんなのとは違ふ、長年の信用があるから今の婆さんなどもあゝして他の銀行から引出してまで預金にやつて來るんだ、お得意から聽かれたら十分、安心をさせるやうに云つて聽かせんといけない、以後はよく注意してくれ給へ。

(中岡、何か呟いて、十露盤をはじく)

稻木。君、分つたか?

中岡。(冷淡な調子で)分りました……だがこの二三日、こゝへ預金を引出しに來る者がなか〳〵多いやうですね。

稻木。何アに、月末のせいだ、こゝの預金者は、近所の小商人や、職人が多いのだから、支拂に金の要る時だ。

中岡。(起上つて、主任の卓の傍へ行く)、月末といへば、いつもの給料日より二三日も遲れてまだ貰へんので困つてゐます、今日は御都合して下さいますか?

稻木。(頷いて)あゝ、今日は渡すよ、本店の方に何か都合があつて廻してよこさないんだ、併し今日は大丈夫だ。

中岡。何んなら貴方から融通して貰ひたいんですが?。

稻木。(ムクレタ顏で)君がそんな事を云へた義理ぢやアあるまい、何に使つたのか知らないが先月なんか三日にあげず小遣ひが要ると云つて、三圓とか五圓とか、チョイ〳〵無心を云ふのを、私は惡い顏もせず、一々自分の懷から立替へてやつてるぢやアないか?ア、したのを差引いたら今月分の給料だつていくらも君の手に附きやしないよ、あんま

り大きな口を利くもんぢやアない。

中岡。(血の氣が頬を染める)エヽ、差引ものは差引いて貰つても善いですが、貰ふものは貰はなけや下宿へ歸つてもいゝ顔はされませんからね、私等は人の金を使つて株をやる力もないし、他に金の入り道がないから困ります。

稻木。(チヨツと顔を赤くして、睨むやうな眼付)……よけいな事を云はんでも善い、……渡すものを渡さんと云やアせん、一たい、君は近頃、ひどく生意氣になつたよ。本店で給仕をやつてた頃とはまるで人間が變つたやうだ

中岡。(冷やかに笑つて)私だつて何時までも子供ぢやアありませんなれども少しは世間の事が分つて來ましたから、へイ〳〵計り云つちやゐられないんです。

稻木。(諭すやうに)そりやア君、損だよ、眞實に世の事が分つて來たのなら、出しやばらないで、大人しくすつ込んでるもんだ、私なんかも長年の經驗で、めつたに癇癪を起したり、ムカツ腹を立てたりするんぢやアないつて事が身節に泌んで來た、そのお蔭で私もこの主任になれたのさ又それでなけや上役の信用は得られないからね。惡い事は云やアせん。

中岡。(冷やかな調子で)さうかも知れません……でも私なんか心にもない嘘を吐いたりゴマカシたりしてまで、上役の信用を得やうて氣にはなれません、そんな忌な眞似をしなけや食ひはぐれる程ならいつそ一思ひに首でも吊つて死んぢまつた方が早く片附いてよつ程ましだと思ひますがね。

稻木。(セヽラ笑つて)へヽヽ、なか〳〵さうお手輕に死ねるもんぢやアないよ、生命にかけ替へはないと來てるからな先頃の實業雜誌で、何とかいふ學者が云つてたがイザ餓死でもしさうになつたら、他人の肉を喰つてでも自分が助かろうといふやうに出來上つてゐるのが人間だつて、それに相違ないよ君等はまだ若いさ。

中岡、（眞面目に）そりやア私にだつて、そんな殘忍な氣持がないではありませんが、多勢が餓えて死かゝつてるなら、何アに、このやくざな體一つ位投げ出して皆に食はせてやれツていふやうな醉狂で、腹の中が一ぱいになる時がありますす、そんな時はひとりでに泣けて來ますね、

稻木。へゝゝゝ、馬鹿らしい、活動寫眞の俠客物なんかに凝つてると、さうした氣狂ひが出來るよ、まア氣をつけ給へ前途が長いんだからな。

中岡。俠客物の講談本が好なのは貴方でせう、私のはそんなのとは違ひます、……氣狂ひだか何だか知らないが、まア折々、そんな醉狂な氣分にでもなれなけや、日日、每日、斯うして、コツ／＼十露盤を彈いたり、手垢のついた紙幣を出し入れして、人のお寶許り數へてるんぢやア生きてる甲斐は無いと思ひますね……まア何んでも善い、今日は眞實に給料を何うにかして下さい、歸りに、カフヱへも寄れませんから。

稻木。（苦笑）さう／＼、君は大分、カフヱへ凝つてるていふ噂だよ、出來る丈、儉約して置くが善い、世間は不景氣だからな。

中岡。全々儉約したつて高は知れてまさア、いゝゝゝ。

（女事務員の花田とき子、お白粉を襟まで白く塗り、ハイカラの庇髮に結つて、安物の大島紬に、派手なメリンスの帶を締め、香水を匂はせて入つて來る、眼の大きな脂肪に富んだ肉感的の廿二三才の女である）

とき子。今日は？

稻木。（默つて、笑顏で頷く）

中岡。（元氣づいた調子で）ア、花田さん、遲かつたね、何うしました？。大さうおめかしぢやありませんか？

とき子。（笑顏で）私、お暇乞ひに來てよ。

中岡。エ、何うして？止すんですか？

とき子。ハア、今日限り！止しますの（云ひ〳〵稻木の前へ行き、低聲で）……あの……頂けませうか？。

稻木。（眼まぜで）ア、今に何うかしませう、

中岡。（稻木の方に向いて）花田さんが止されるつていふのは前から定つてたでんすか？

稻木。二三日前から話があつたのさ……善い口が見附かつたさうだから、引止めも出來ないんでね。

とき子。（中岡へ）長く勤めてゐて止すのは何んだか殘惜いんだけれども、仕方がありませんわ。

中岡。エライ急な話ですな？……お嫁入ですか？

とき子。（稻木の顏を見ながら笑つて）ホヽヽ、否ゑ、お嫁なんて氣の利いた話ぢやアないわ、商賣をするんです。

中岡。（詮索立するやうに）何商賣です？。

稻木。中岡君はひどく熱心に聞き度がるね。

とき子。何商賣つて、まだ廣告するとこまで行つてないのよ。

中岡。東京にゐるんですか？

とき子。さうですとも、やつぱりこの近所にゐますのよ、だからチョイ〳〵お目にかゝれますわ、何分よろしくお願ひしますよ。

稻木。（笑つて）ヘ、なか〳〵お世辭が善いね。

中岡。（仕方なしに笑顔を作つて）そりやアお互ですが……何處で何商賣をやるのか云つて聞かせたつて善いでせう？

とき子。（ニヤ〳〵媚るやうに笑つて）今は云へませんわ、

稻木。（茶化すやうに）、商賣が繁昌したら、中岡君を支配人にでも傭つたら善いだらう。

とき子。エヽ、是非、お願ひしたいわ、月給千圓ぐらゐでね、ホヽヽヽ。

（此時、扉口をあけて小學教師といつた風采の洋服着の男子、つゞいて、筒袖着のかみさん、その後から絆天着の中年の男子、つゞいて入つて來て、十圓、三十圓、二十五圓とそれ〴〵引出しを求める）

とき子。中岡さん、手傳つて上げませう（と窓口の卓へ寄りかゝる、事務は手早く片附けられて、やがて三人はそれぞれに出て行く）

稻木。何うも今日は引出し許りだな。

とき子。何時も月末になると、預ける人も可成あつたやうですが、この頃は一體に不景氣なんでせうね。

稻木。不景氣には違ひないね。

（スリガラス戸の後で電話のベルが鳴る、稻木は起つて行く）

とき子。（前よりは親しさうな調子で）中岡さん、當分お一人で、忙がしくなるでせう。

中岡。仕方がありません……だが花田さんが……とき子さんが止すていふのは全く不意打だね。

とき子。急に定まつちやつたんです、私ももつとこゝに居ても善いんだけれども……。

稻木（歸つて來て）。本店から電話がかゝつて、一寸來てくれといふ事だ。私が留守の間は、支拂は一時止めてをいてくれ給へ、主任が一寸本店へ出かけたからと云つてね。

中岡。（額に小じわを寄せて）そりやア困りますよ………預金者へそんな亂暴な事は云へません、一たい何うしたんです？稻木。別に譯はない、何か會議でもあるんだらう、序でに金を取つて來るのさ、半時間か一時間の間だ、何んなら來た人は皆待たせてをいてくれ給へ。
中岡。待たせて置くと云つて………困りますな。
稻木。ア、花田さん、君も序にここに居　中岡君に應援してやつてくれ給へ、何んとか彼とか愛嬌を云つて、氣に障らんやうに仕向けてりやア預金者だつて半時や一時待たされたつて怒り出しやしない、とき子さんは………花田さんは、そんな事は旨いよ、さう大勢やつて來もしまいからね。
とき子。エ、エ、いいわ、私、何んとか云つてゴマカシて置きますわ、早く歸つてゐらつしやい。
稻木。ぢやア頼んだよ、大急ぎで行つて來るから。（と、裏へ入る）
中岡。（頭を押へて）何うしたつてえんだろう、………何うも變だぞ。
とき子。中岡さん、何を云つてるの？
中岡。イヤ、何うもこの銀行の内幕は變だと思ふね、………さう云やア花田さんがだしぬけに止めるていふのも何んだか變だね。
とき子。（輕く笑つて）何うして？私の止すのは前から定まつてたのよ、中岡さんには話さなかつたけども。
中岡。（次第にぞんざいな調子になる）今日まで僕に隱してたのが可笑ぢやアないか？昨日も一緒に歸つて途々いろんな内輪話をしたくせに、止すつていふ事は一口も云つて聞かせないんだから、酷いや。
とき子。そりやア日頃仲よしの貴方に、默つてるのは辛かつたけども、そこには又譯があるのよ。

中岡。（向直つて）その譯つていふのが聞きたいね？

とき子。（笑顔を作つて）まだ云へない事……。

中岡。嫁に行くんぢやアないつて云つたのは、眞實かね？

とき子。嫁に行つてもつと酷い貧乏する位ならこゝを止しはしないわ

中岡。（苦笑）さう云つて、僕も、とき子さんに肱鐵を食はされたつけね

とき子。ウフ、、、、（と押へ笑ひしてゐる）

中岡。マサカ何處かの樂隱居のお妾に上るつてのでもないだろう、……商賣つて一たい、何んだね？

とき子。（裏の方をのぞいて來て）……カフヱなの……こゝのガードの先に、カフヱを一軒こさへて、私そこのクインに据るのよ。

中岡。（呆れたやうに）ヱ、カフヱのクイン？……資本は誰が出すんだね？

とき子。それは秘密よ。

中岡。（吐き出すやうに）ぢやア愈々お妾さんだね、……下らないッ、そんな事は止した方が善い、耻かしくはないの、とき子さんは……花田さんは、マサカそんな下劣な人間たア思はなかつたけ……。

とき子。（少し赧くなつて）ぢやア中岡さん、貴方へでも嫁入して、一生貧乏して、子供を産んで、それから夫婦げんくわ許りしてさ、いつの間にか年を取つてそれで死んぢまやア耻かしくはないのか知ら？

中岡。（チョッと彈かれたやうな表情をして）……貧乏はよくはないさ、けれどもお互がとにかく愛し合つて、夫婦になれば唯それ丈でも生甲斐はあろうてもんだ、妾なんか持つ男子は、頭から女をオモチヤにしてかゝるんだから、土

嘉から間違つてるぢやアないか？

とき子。(嘲るやうに) ホヽヽ、中岡さんがそんな立派な口を利くから私可笑くなるわ、男子つて、落つくところは皆同し道樂者よ、ガードの先きの、日露カッフヱの侯爵夫人は何うしたのよ？ あんなに血眼になつて、入れ上げてさ。

中岡。(苦笑) 何アに、ありやア一時の醉狂さ、この頃はてんで寄り附きやしない。

とき子。お金がないからでせう。

中岡。さう馬鹿にするもんぢやアない。

とき子。でも何時かは私に、忌になる程オノロケまで聞かせてたぢやアないの？ あの侯爵夫人、腐つた柘榴のやうな口で、額から鼻から耳乃木まで血の出る程熱烈に接吻してくれたの、火のやうな熱つた手でグイ〳〵首をしめ附けて息が詰まりさうだつたの、それからまだいろんな、もつともつと忌らしい事まで……。

中岡。(頭を掻いて) あれはつい醉拂つて毒を吐いたんぢやアないかね？ とき子さんに肱鐵を食はされたムシヤ、クシヤ紛れもあつたしね……あんな事をさう何時までも覺えてられちや弱つて了ふね。

とき子。だから何んな男子でも一皮剝いたら皆獸だと思つてりやア間違はないのよ、何うせその餌食になるなら奥さまよりはお妾の方がまだ氣樂だわ、自分で忌氣がさしたら、何時でも勝手に逃げ出されるんだものね。

中岡。(眞面目に) 然う誤解されちや困る、男子が、獸なら女だつてさうぢやアないか？ イヤ、獸の方が嘘僞が無くて神に近いつて何かに書いてあつたけが、さうも云へるね、正直なところ、僕があの侯爵夫人と名乘つてるいゝ加減、婆さんのロシヤ女に熱くなつたのは、とき子さんへの面當なんか云ふ丈のもんぢやアない、もつと異つた腹癒せだね、あの婆アの云ふ事だから、嘘か眞實か、分らないが、とにかくロシヤの專制時代に、侯爵夫人で威張くさつて、さん

ざつぱら贅澤をして暮らしてたていふんだらう、そ奴が、時世がひつくり返つて、素ツ裸で本國を逃げ出しやがつて喰ふにも困つて今ぢやあの場末のカフエへ轉がり込んでやがる、そ奴を薄給の俗吏の僕が、小遣ひ錢で玩さんでやれると思ふと痛快で痛快で堪らないんだ、日々毎、見たり、聞いたりで、溜つた不平が胸の底につまつてるのが、あのロシヤ婆の脂肪太りした體をクシヤ／＼にしてやると、一時に爆發して後がスーツとして了ふ、そりや妙にせいせいした氣持になれるんだ、尤もこの頃は實際、懷都合がよくないので寄り附きもせんが、唯それ丈の事だ。

とき子。（ため息を吐いて）だから男子は忌さ……今に敵を打つてやるから。（聲が涙ぐむ）

中岡。（眼を光らせ）敵を打つつて？何うしたのさ？

とき子。……考へて見ると、口惜しくなるわ（眼を拭いてゐる）

中岡。何が口惜しいの？オヤ、とき子さん、泣いてるぢやアないか？君のやうな氣の強い女が急に泣き出すなんて妙だね？

（とき子、默つて泣く）

中岡。（顏をのぞいて）何うしたつての？……僕の云つた事が何か癪に障つたのか？……君を侮辱したんぢやアないから堪へてくれ給へ。

とき子。（ヒステリツクに笑つて）、中岡さんも大膽な男子かと思ふと、存外、氣の小さい、お人よしのところがあるわ。

中岡。（面喰つて）、笑つたり、泣いたり、どつちが本氣だか、譯が分らなくなるね。

とき子。（眞面目に）、中岡さん、打明けて云ふとね、私ね、或男子に甘い事を云つて小料理屋へ連れ込まれて、無理

にウヰスキーなんか呑まされてから手込にあつちやつたのよ。

中岡。（息が詰まつたやうに）エ……それは眞實？

とき子。（相手の言葉は耳に入らぬやうに）……それから一生世話をしてやるつていふの……此方はもう自棄くそになつちやつたから、ぢやアお世話になりませう、それには自活したいからカフエを一軒建てて下さいつてね、その話が定つてここを止す事になつてよ、何うせ資本をぐいぐい注ぎ込ませてやるから、その男子も終には酷い目を見るでせうよ。

中岡。エ、…そりやア眞實の事かね？　ひよつとしたら手が後へ廻るかも知れないわ、さうなるといい氣味だ……。

（とき子、默つて頷く）

中岡。人をかつぐのぢやアないか？

とき子。かつぐのかも知れないわホヽヽ（冷笑）

中岡。さう云やア、何日だつたか、とき子さんが病氣だつて、蒼白な顏をしてた事があつたけ、あれは、そんな酷い目に逢つて、くよくよしてたんだね？

とき子。自分ぢやまるで男子のやうな氣で暮らして來たんだが、そんな目に逢つた時は膽がひつくり返つちやつたわ、……親は無し、妹達を一人前にさへしてやつたら、私の體なんかもう何うなつたつて構やアしないから、まアやり放第やつて見るわ。

中岡。（凄い顏色）一たい、その相手の男子は誰だね？

とき子。今は云へない。

中岡。云つて聞かせたつていゝだらう、何うせ分る事だ。

とき子。分る事だから、分る時まで待てばいゝさ。

中岡。(憤つた調子で)…云つて聞かせてくれ給へ、けしからん奴ぢやアないか? 僕が思切り、酷い目に逢はせてやる。

とき子。イヤ、そんな事をされちや却つて迷惑だわ、打やつといておくれよ。

中岡。でも憎い奴ぢやアないか? ……一たい誰だね?

とき子。誰でもいゝさ。

中岡。云つて聞かせてくれ給へ、…是非打明けてくれ給へ、僕がもつと酷い復讐の仕方を考へて上げる。…けしからん奴だ……。

とき子。(笑顔で)そんなをせつかいは止して貰ひませうよ。

中岡。(熱心に)僕を君の友人として何も彼も打明けて話してくれ給へ。

とき子。この話はもう止しませう、つい調子に乘つて、いらん事を喋舌つて了つたわ。

中岡。(亢奮して)イヤ、僕はこのまゝ聞捨てにはならない。……

(扉口が開いて、紺法被を着た、頑丈な車夫と「通」の字を赤く染め抜いた淺黄の法被の、横太りした荷車挽が入つて來る)

車夫。この通帳のありッ丈の金を拂ひ戻して貰ひませう。

荷車挽。これも同じくさう願ひますぜ

(後から又一人、少し酒機嫌の、職人風の男子が入つて來る)

職人風の男子。オイ、兄弟、一足早かつたな、イヤ、早いが勝ちだ、…この通帳の金を皆、拂つて貰ひやせう。

中岡。(窓口へ出て)全拂ですか？(通帳を拾ひ上げて)五十圓と……百圓と……百八拾圓ですな……お氣の毒だが、今主任が一寸本店へ、出かけて留守ですから、暫く待つて貰へませんか？

車夫。主任が留守ですつて……でもそれ位の金が銀行にないて譯はありませんや、己のものぢやない、仲間の積立金だからな、そんな事を聞かされて空ッ手で返つたつちや仲間の野郎共に笑はれまさア。

荷車挽。兄貴の云ふ通りだ、此方のも、仲間内の金だから、他と譯が違ひまさア、何んでも彼でも拂つて貰ひませう。

中岡。イヤ、勿論お拂ひはしますが、主任が歸るまで待つて下さいと云つてるんです。

職人風の男子。(まき舌で)べらんめえ、主任が留守であらうがあるめえが、そんな事ア此方にかかり合はねえや、銀行の看板を上げてるからにや僅か許の金がねえつて法はねえぜ、汝さんが留守を預かつてりや、汝さんが拂ふのが當り前だ、この忙がしい世の中に日當も出さねえで待つてくれも蟲がいいやな。

とき子。(窓口へ顏を出して)御尤です、そりやアもう仰やる通りですが、かんじんの金庫の鍵を主任が持つて行つたんですから、私等には何うにも仕様がないんですよ、お手間は取らせません、今直に歸つて參りますからお氣の毒さまですが、少しの間、待つて下さいませんか？お願しますわ。

職人風の男子。(笑顏になつて)別嬪さんが、さう云やアあんまりむきにもなれねえや、だが晝日中、主任の奴が出歩くなんて、けしからんちやねえか？

荷車挽。(鼻で笑つて)フン、銀行屋さんが日掛けを取立てて行くつて法もあるまいがテコヘンだな。」

車夫。仕方がねえ、まア腰を掛けて一ぷくするか？

職人風の男子。何しろ世間が物騒だから、何處の銀行屋だつて油斷は出來ねえや、金つて奴ア正物を握つて見ねえと、我がものか、他人のものか、ハツキリ分らねえからな。

荷車挽。そりやアまツたくだよ…主任さんは早く歸つて來ねえかな？。

とき子。イヤ、もう今直に歸られます。

中岡。御迷惑ですが、暫くお待ちを願ひます。

職人風の男子。御迷惑々々つて、口先で云つてりや、それで濟むと思つてやがらア。

中岡。イヤ、決して口先丈で云つてる譯ぢやアありません、眞實に相濟まん事だと思つてゐます、……主任が留守番の者に鍵も預けないで店をあけるなんて、お得意樣から何んなにお小言を云はれても一言もありません。

車夫。（横柄に）一たい何うしたつてえのかな？今までそんな不仕だらの無い店だつたからこの邊の者が皆信用したんだが……。

荷車挽。何しろ、ここいらの者は皆貧乏世帶のやりくり許やつてゐるんだから、そうした金を承知で預つてる者は餘ツ程氣を利かせてくれんと困るて。

職人風の男子。こんな事ぢやア壺へでも入れてよ、床下へ埋めといた方がよつ程安心ぢやアねえか、べらんめえ。

（自動車の笛の音、やがて裏の方に物音がして、稲木がそこのスリガラス戸を明ける。）

稲木。中岡君、チョツと手を貸してくれ給へ。

とき子。ア、お歸んなさい。

稲木。中岡君、重いものを運ぶんだ、チョツと來てくれ給へ。

中岡。はア（と云つて起つて行く）
職人風の男子。大將、歸つて來やがつたな。
（車夫と荷車挽は、頷き合つて笑ふ）
（稻木と中岡は、重さうな布呂敷包を抱へ合つて、ドシリと卓上に載せる）
稻木。（土間の方を見て）ヤ、何うもお待たせして濟みませんでした、（云ひ〳〵布呂敷包を解く、そこにズツシリ積んだ紙幣の束が現れて來る）……さアいくらでも御拂戻します。
職人風の男子。（眼をパチ〳〵させながら）脅かしちやアいけねえ、さうして見せ附けられちや此方等はまるで紙幣の屑を拾ひに來たやうなもんだ、……まア何卒お願ひしますよ、
（事務は手早く運ばれて、一々、拂戻をする）
（車夫、荷車挽、職人風の男子は、始めの元氣もなくぐつたりした樣子で出て行く、稻木も、とき子も「左樣なら」を浴ひせかける）
稻木。（とき子を手招きして）、チヨツと來て下さい。
とき子。（卓前へ行く）まア大變な紙幣ですこと。
稻木。（笑顏で）本店から持つて行けて云はれるんで、荷厄介だが積んで歸つた、下町のボロ銀行は今朝から大分取附けに逢つてるさうで、本店でも氣を廻して、その豫防をしろつて云ふ譯です、これ丈見せ金をして置けや、皆、安心して歸るだらうへ、、、、、。
とき子。見た丈でも紙幣に中毒しさうですわ、……でも皆が中毒したがつてるから妙なものね。

稲木。（紙幣を數へて袋に入れながら）ハヽ、花田さんもその組ぢやアないかな……サア、これが本月分の給料です……（別に、一束を古新聞に包んで）、これはあの、お話した尉勞の分です。（と手早く渡す）

とき子。何うも有難う………

稲木。（笑顔で）それで御用は濟んだでせう。

とき子。ハツ……ではチヨツとそこまで行つて用事を片附けますわ、歸りに又寄るかも知れません……、

稲木。（頷いて）ではさうするがいいでせう。

とき子。（片隅へ行つて、古新聞の包の中を檢め、それから小鏡を出して、髮を撫で付けたり、襟をつくろふたりする）

稲木。中岡君！

（中岡は默つて、近づく）

稲木。（紙幣を袋に入れて）君には立替もあるが、とにかく定つた金丈け渡して置きます。

中岡。さうですか？。（云つて、袋の中を檢める）

稲木。それから君、その時計の針を十分間程進ませてをいてくれ給へ。

中岡。何うしたんです？

稲木。三時までが扱ひ時間だが、まだ二十分間ある、今日は朝から支拂許りで面倒だから、少し早く切り上げやう。

（中岡は睨むやうに、チラと主任の顏を見て、そのまゝ知らん顏で席に着く）

稲木。君、今云つたのが分らないかね？

中岡。（冷やかに）そんな事は僕には出來ません。
稻木。私の言附を聽かないで云ふのか？
中岡。そんな言附を聽く必要はありません。
稻木。も一度云つて見給へ。
中岡。何度でも云ひます。
とき子。（ハラ／＼して）私が廻して上げますわ、議論なんかしてちや見つともないぢやアありませんか？。
稻木。女手を借る位なら私がやります。
とき子。（椅子を引寄せて、それへ上り）この針を廻すくらゐ何んでもないぢやアありませんか。（と長針を廻す）
稻木。何うも御苦勞さま…。
とき子。何うしまして…ぢやア私は失禮しますわ、何うも難有う…二人で喧嘩しちやいけませんよ、ホヽヽヽ（と裏へ入る）
中岡。花田さん、チョッと、（呼びながら、追うて行く）
とき子の聲。何アに？
中岡の聲。相手の男が分りました、屹度彼奴でせう。
とき子の聲。エ？……まア誰でもいゝぢやアないの？……左樣なら！。
（中岡は悄然して出て來て、稻木を睨み付けながら席に歸る、稻木も默つて、中岡を睨む）
老婆。（アタフタ、入つて來る）先刻は何うも御手數かけましたが、急に入用な事が出來ましたで、あのお金をも一度返

して貰ひます。(窓口へ通帳を出す)

(中岡は默つて取次ぐ)

稻木。何うしました？先刻預けて、直に又引出すなんて、困りますな。

老婆。郵便局の方がやはり安心だ、銀行は何處も彼處も皆危いつて、溜り場で車夫さん達が話してますで、氣にかゝつてなりませんからな。

稻木。まアこの紙幣の山を見たら何うです、これでも氣にかゝりますか？

老婆。ヘエー。それが皆、お紙幣ですか？

稻木。さうです、…本店から今、自動車で運んで來たんです。

老婆。ヘエー……ぢやアまア大丈夫だね……それぢやアやつぱり預かつてをいて貰ひませう。

稻木。(笑顏で)安心してらつしやい。

老婆。(通帳を取戻して)ぢやア左樣なら。(立去る)

稻木。左樣なら……何うもいろんな下らん事を云ひふらせて歩くものがゐると見える、悪戯者には弱つたな。

(三時の時計鳴る)

夜店商人の妻。(汚い衣服をして、乳呑兒を抱へて入つて來る)。お願ひします、何卒、この通帳の金を皆お拂ひ下さい。

(中岡通帳を受取る)

稻木。お氣の毒だが、もう三時を打つたから明日の事にして下さい。

夜店商人の妻。エツ、もう時間が切れましたか？困りましたねえ……實は四五日前から夫が熱を出して臥つて居ますんで、私が代つて毎晩、夜店を出しに行きますが、これから仕入に出かけるんです、介抱で手間が取れて遲くなつたんですから、何卒今日丈けは何んとかして下さい、お願ひします。

稻木。お氣の毒ですが、何うも時間外は困ります。

中岡。總額二十圓です、拂つてもいゝでせう？

稻木。他の方にもさうして上げなけやならん事になるからね。

夜店商人の妻。（訴へるやうに）現金でなけや仕入れが出來ませんから、商賣を休まねばなりません、さうすると一日乾干になります、……何卒助けると思つて……。

中岡。支拂つたら何うですか？

稻木。いけない……。

中岡。（昂奮して）預かつた金を支拂ふのは當前ぢやアありませんか？紙幣の山を眼の前に見せびらかせて人を見殺しにするて法はありません、まだ時間にもならないのに。

稻木。君の指圖は受けない。

中岡。よろしい……ぢやア僕が立替へます（紙幣を入れた袋をポケットから出して）二十圓ですね、ではこれを持つて返つて下さい、その通帳は僕がお預りしときます。

夜店商人の妻。でも濟みませんのね……お氣の毒ですわ。

中岡。構ひません、私の立替へたのは明朝こちらから受取りますから御心配ありません。

夜店商人の妻。（感謝の表情で）さうでございますか？では何卒さうなさつて下さい……これで助かります、何うも有難うございました。

（喜んで歸つて行く）

稻木。（冷笑）ふゝいい加減な噓を吐いて泣付かれるのを一々眞に受けてちや銀行業なんか成立ちやしない……でも君はあつぱれ、義人か俠客になり濟ませたなハハハ……

中岡。（反語的に）時計の針を進めて公然詐欺をやる程、僕は大膽な男子に出來てゐないんです。

稻木。（憤然として）詐欺をやる？これは聞捨てにならん、君のやうな小僧が何を云つても私は本氣になつて相手にせんでゐたが、つけ上つてそんな失敬千萬な事を云ふともう承知ならん……私のする事は何も彼もこの銀行の爲めを思ふての事だ。この銀行の爲めになる事は又預金者の爲めにもなる、その苦心も知らんで詐欺呼ばはりは何んだ、もう斷らなつちや君と一緒に仕事は出來んから今日限り解雇する、さう思つてくれ給へ。

中岡。（起上つて）解雇ですつて？

稻木。さうだ、もう明日からは來なくても善い。

中岡。（何か頭に閃めいたやうに、薄氣味惡るい冷笑）……フン、事務員が一人も居なくなつてもいいつて云ふんですか？

稻木。事務員はもう要らない。

中岡。ぢやア分つた……休業ですな……この銀行は休業するんですな、紙幣束を見せつけたりなんかしてヘンだと思つたがこれも詐欺だつたんだ。

稻木。（周章出して）大きな聲でそんな事を云つて貰ふまい、休業はせん。

中岡。（激しい調子で）イヤ休業だ、……重役や主任なんかゞ勝手な眞似をやつて、寄つて集つて穴をあけたのに違ひない、それが流行だ……あのとき子さんにカフヱを出させるつて男子も乾度、汝さんだ、さうだらう眞實に驚いた男子だ。

稻木。（邊を氣にしながら）コラ〳〵そんな狂めいた聲でわめいちや困るぢやアないか？そんな事實は斷じてない、……邪推だ……。

中岡。（愈々昂奮して）隱したつてだめだ、とき子さんへ新聞紙へ包んで渡したのはありや何んだ？あの女を手込にしたのはこの男子だ……それから紙幣束を積んで、時計の針を進めて、預金者を欺さうとするのもこの男子だ……。

稻木。（起つて、中岡の口へ手を當てやうとする）君は氣狂ひだ。

中岡。（その手を振り拂ひ）、よし氣狂つて云つたな、氣狂ひなら氣狂ひらしくしてやる、この近所を喚き步いてやる、（云ひさま、事務室から飛び出して、扉口をあけ）オーイ、オーイ、この銀行は休業するぞ……今日限り休業するぞ。（高聲に叫ぶ）

稻木。馬鹿めッ氣狂めッ。（追駈けて出る）

中岡。（扉口から外へ出て）この銀行は休業するぞ、休業するぞ、預金者等は早く集まつて來い早く集まつて來い（叫びつゝ走りゆく）

（稻木は扉口を鎖し、蒼い顏をして、事務室へ歸り、慄える手で金庫をあけ、紙幣束を片附けにかゝる）

とき子。（裏から入つて來る）オヤ、もう御しまひなさるの？ 手傳ひませうか？ 中岡さんは何うして？

—（六）—

稻木。オヽとき子さんか？　中岡め、氣が狂れて、とんだ事を口走つて歩いてる、弱つたね。

とき子。エ、何うしたんです？

稻木。この銀行は休業するて、わめき歩いてるんだ。

とき子。まア眞實ですか？

稻木。（低聲で）實は今日限り休業する事になつてるんだ、下町では大分取附が始まつたらしいから今の中に、整理を附ける爲めに明日から休業するて事に、重役會議で定つたんだ、中岡め、それを嗅ぎ出しやがつて、ふれ歩くから弱つたよ、早くこゝらを片附けなけやならん、手傳つておくれ。

とき子。（手傳ひながら）さう、休業するんですつて？　……預金者等は困りませうね。

稻木。仕方がないさ、いづれ整理は附くだらう……あの金はよかつたね？　中岡め、君との關係もすつぱ抜きやがつた、君が喋舌りやしなかつたらうね？

とき子。私が喋舌るもんですか？　自分の耻ですもの。

稻木。今でも耻だと思つてるの？　私があんなにまでしてやつても……。

とき子。（片頬で笑つて）だつて一生の耻には違ひないわ……忘られやしないわ。

稻木。でもそれ程思つて貰やア女冥利だつて、カフヱまで出さす事にしたんぢやアないか？

とき子。それはさうですけれど……。

稻木。先刻（さつき）の金は請負師に渡したかね？

とき子。手金丈渡しました……後は自分で肌身につけて大切にしてますわ。

稻木。（ニヤリと笑つて）をろそかに思つてくれちや罰が當るよ……まアとにかく早く片附けやう。

（忽ち大勢の人聲ががや〳〵聞えて、扉口の前で喧噪する、扉は叩きこわされ、中岡を先頭に、先刻の老婆、それから電氣工夫、勞働者らしい男子、爾次まで多勢交つて亂入する。）

老婆。（氣狂ひめいた聲で）金を返せッ、金を返せッ、……詐欺銀行……騙り……盗人ッ！

群衆。「さア金を返せッ」「皆拂戻せッ、明日から休業せうて、その手は喰わんぞ」「返しやがれッ、返しやがれッ、」返さなけや引攫へて行くぞッ」、「泥棒銀行……」「どうずりめッ……」

中岡。あそこに紙幣束が積んである、あれ丈ありや皆拂戻せる。（金網越しに跳んで入り）さア皆拂戻をしろッ、否なら了見がある。

稻木。（蒼ざめた顔色で）、この氣狂め、何を云やがる……諸君、休業なんて皆嘘つぱちだ、これ丈金がある、拂戻すのは何時でも拂戻すが、今日は時間が切れてゐる、明朝早く來てくれ給へ。

中岡。（激し切つて）唾を吐いたつてだめだ、皆そんな馬鹿ぢやアない。

電氣工夫。（金網を越して跳び入り、卓上に立つて、）馬鹿にするな、拂戻さなけや勝手に取つて行かう、皆入れッ、入れッ……。

群衆。（忽ち事務室へ闖入する）「自分の預けた金だ、勝手に持つて歸ろう」「さうだ〳〵勝手に持つて行け」「攫つて行け」（喧噪極度に達する）

稻木。（卓上に突立ち）強盗の眞似をすると酷いぞ、とき子さん、警察へ電話をかけて下さいッ。

中岡。貴様等こそ強盗だ、銀行の看板をかけて人の金を掠めやがつて。

電氣工夫。電話は己が切つてやる。

とき子。(うろうろして)アレー、アレー、誰か來て、誰か來て…。

稻木。亂暴をすると、今にフン縛られるぞツ。

群衆。「何んだこの野郎」「なぐつちまへツ」「さうだ、なぐつちまへツ」「叩き殺せツ」「「叩き殺せツ」(稻木を押し倒しにかゝる)

中岡。(凄く笑つて)諸君、まア待つてくれ給へ、僕は毎日、この金庫と睨みツくらしてるんだが、紙幣なんか入れて置くより、紙幣に使はれる人間を叩き込んでやり度くてならないんだ、そして中へ閉ぢ込めたまゝくたばらせてやりア痛快だ、この男子なんかそうしてやりたい。

群衆。「そりやアいゝ思附だ」「金庫へ叩き込んでやれ」「中の金箱を引ずり出して、その代りにその男子を叩き込め」「金庫と心中させろ」「さうだ、そうだ、心中させろ」「やつゝけろツ」……

(稻木がもがくのを寄つて、集つて、空金庫の中へ押し込む)

電氣工夫。鍵は己が拾つてるぞツ、

中岡。(それを受取つて)では僕が錠を下ろさう、…こうしたら中でいくら喚いたつて聞えやせん。

群衆。「や、若大將、ゑらいぞ、ゑらいぞ」

ー(紙幣束に手をかける者がある)

中岡。諸君、紙幣束に手をかけるのはチョツと待つてくれ給へ、僕が通帳と引合せて、拂戻するから…さうしなけや後で諸君に難儀がかゝる。

【群衆の中から。「若伜、頼むぜッ、しつかりやつてくれ。」「さア通帳はこゝにある、拂戻してくれッ」
老婆。（前へ出て）私のから一番先に拂戻してくれッ。
群衆の中から。婆ア、すつ込んでろ。
中岡。まア靜かにして下さい、（主任の席に直り、）通帳引かへに、拂戻しますから列を作つて下さい、……とき子さん、とき子さん、手傳つて下さらんか？
とき子。（陰の方から出て來る、）私もう吃驚しましたわ……でも拂戻の御手傳ならしてよ。
群衆。「ゑらいぞ、ゑらいぞ」「しつかり頼んますぜ」
老婆。（押されながら）何卒願ひます、利子もつけて下さい。
群衆の中から。慾張つてやがらア……
中岡。いくらッ？ア、五十圓ですな。（紙幣を數へて渡す）
電氣工夫。私のは八十圓だ、（通帳を出す）
群衆。「私のは百十五圓だ」「私のは二百圓だ」「私のは三百五十圓だ」
（中岡と、とき子とは素早く拂渡の事務を運んでゐる中に、贋造紙幣でも見附けたやうにハッと手を止める）
（群衆の中に、紙幣束の下積の包に手をかけるものがある、それを制するものがある、）
群衆。「ア、ルーブル紙幣が交つてるぞ」……「エッ、ルーブル紙幣だ」「さうださうだ、上の四五枚がホンモノで中は皆、ルーブル紙幣だ」「ア、ルーブル紙幣の束を見せて人を欺さうとするんだ、太い奴だ」
電氣工夫。この男子も共謀だ 中の男子をなぐり付けろッ

群衆。「叩き殺せッ」「こ奴も金庫へブチ込んぢまへッ」

中岡。(振り放して、卓上へ飛び上り) まア待つてくれ給へ、それは僕の知つた事ぢやアない、僕は諸君の爲めを計つて却つて、敵に計られたんだ。僕が共謀だなんて云つて殺されては死んでも死切れない。

とき子。(亢奮し切つた調子で) 眞實に、この人は知らないんです、知らないんです……亂暴な事は止して下さい。

群衆。「默れッ、ルーブル紙幣なんか掴ませやがつて、此方の味方面をするて太い奴だ」「質が惡いや、やつつけろッ」「はり倒せッ」……。

(寄つて集つて、中岡をなぐり倒す)

群衆。「この阿魔もやつつけろ」「蹴飛ばしちまへッ」「イヤ、女はかわいさうだ」

とき子。(ヒステリカルに) さア、私もなぐつて下さい、殺して下さい、……私丈、生きてやうとは思ひません……。

電氣工夫。阿魔なんか相手にするなッ。…さア、皆引上げやう、ルーブル紙幣なんか拾つたつて駄目だぜッ。

群衆。「さア早く引上げやう」「馬鹿ア見たな、訴へてやろう」「さうだ、訴へて出やう」

電氣工夫。このまゝすつ込んぢやアゐられねえ、これから本店へ押掛やう。

群衆。「さうだ〳〵」「さうせう」「それがいい」

(ガヤ〳〵ワヤ〳〵云つて、喧嘩しながら引揚げて行く)

とき子。(中岡を抱き起しながら) まア、こんな酷い目に逢つて……貴方は何も知らないのに……鼻から血が出てゐる……こゝには瘤が出來て……中岡さん、しつかりなさい……しつかりなさい、私がついてますわ。……

中岡。(譫言)、ア、あそこが眞赤になつた、とう〳〵火を附けた……

とき子。あれは赤いポスターよ、しつかりなさい。
中岡。とう〳〵火を附けた、……この銀行に火を附けた、…そうなるのが當前だ…當前だとも…アレ、燃え出した……燃え出した…窓も床板も、眞ツ赤な火になつた。ヘ、、、、、。
とき子。中岡さん、何を云つてるの？　しつかりなさいよ、…私が介抱して上げますわ……貴方の傍に附ツ切りで介抱して上げますわ。
中岡。(凄く笑つて)ハハ……金庫が燃える、金庫が燃えてトロ〳〵熔けてやがる……雨のやうにとろけてる、中には白骨だけが殘つてるハハ……いい氣味だ、いい氣味だ……。當り前だ、いい氣味だハハ……
とき子。(悲痛な調子で)中岡さん、しつかりなさいよ、私が……とき子が分つて？
中岡。(瞳を据えて)分つてる、汝さん、侯爵夫人だろう、ざまア見ろ、その眞白い體にも、今に火が燃え付くぜ、脂肪肉がヂウ〳〵云つて、焦るぜツ……白骨になるぜツ。
とき子。中岡さん、とき子が分らないの？
中岡。分つてる……今に、汝も私も皆燒死ぬんだ……ア、火、……火で一ぱいだ、火だらけだ、燒けろ……燒けろ……燒けて了へツ……世界中が燒けて了へツ、……ハハ……
とき子。(頷きながら、涙ぐんだ調子で)私も貴方と一緒に燒死ませうね。(中岡を堅く抱いて、接吻する)
(室内は眞赤な光線に滿ちて。そこに火の幻覺の世界を現ずる)

カーテン

(一九二三、四―)

編輯私語

○

天才は教育を超越す、時空を超越す、教育と社會は純眞を叩きこはし、天才を平凡にし、人物を小さくし、人間を機械化し、傀儡化し、傳統的ならしむ、一千人中の九百九十九人は教育の奴隷となり、殘れる一人は教育力を脚下に踏みにぢる。

○

私は世間と妥協のない純眞、熱情の作品を愛する、若き啄木が二十七年に殘したあの熱情、純眞な作品がどれほど若きものゝ天地を示唆するか、二十五歳以下の人々の作品の純眞さに私どもはどれだけ心を引かるゝか。

○

そして又、大愚の如き生活がどれほど私に落ちつきと趣味とを與へてくれることだろう、あの大男、大砲萬右衛門がノソ〳〵と土俵の上に、大愚振りを發揮するときのあの鈍調、片山潜氏が半歩、一歩と前へ進んで行つたあの鈍調、私はそのユーモアにまた天才を超越するものがあると思はせた。

○

革命の戰士は病み、また疲れて此頃の天候の長閑さ平安朝に輪をかけたり、レニンもトロツキーも神經系の過勞症で眼邊ピク〳〵と痙攣を打たせつゝまだ六韜三略を手より離さず、私語子は一詩集を抱いて花下にいねむる。

○

幾萬の警察眼を投げられつつある片山潜氏は獨逸バーデン・バーデンに心靜かに疲れを休めつゝある、彼は元山にも押しよせねば、浦鹽で日本燒打も計畫しないらしい、彼は大の日本好きだ、日本の將來を語つて涙下るので、初對面の主義者等はビックリするらしい。

○

ヨッフェ氏なか〳〵病が思はしくないやうだ、それにもかゝはらず横臥しつゝ本誌に寄稿して下さつたことは感謝する、だが、こんなに原稿取りに骨の折れたのも「改造」發行以來ないそうだ、そう、外交記者は晴れ〳〵しながら私語してゐた。熱海の海よ、熱海の風よ、病餘の人だ、吹くなよ、荒れるなよ。

○

「改造」で俳人「一茶」の藝術的研究を募集する。應募者は別欄を參照して應募して下さい。

改造定價

壹冊　定價八十錢　郵稅貳錢

半ケ年（四円八〇）以上　郵稅不要

增大號臨時號の定價は別に定む

改造廣告

一頁廣告料　一等 百貳拾圓　二等 九拾圓　三等 八拾圓

廣告取次所　日本電報通信社　博報堂　一星社　弘告社

註文の注意

◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇見本は發送せす
◇外國發送の註文は別に郵稅（普通號貳拾四錢）を申受く（但し支那を除く）
◇郵便切手代用は壹割增のこと
◇拂込は振替貯金によらるるが最も便利なり

大正拾貳年四月廿日印刷納本
大正拾貳年五月一日發行

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行兼印刷者　平田貫一郎

東京市京橋區西紺屋町廿七番地
印刷所　秀英舍

東京芝區愛宕下町一ノ一
發行所　改造社
電話　芝（長）一六三八　芝二八五四　芝四三〇三
振替　東京八四〇二

（本號に限り特價金九拾錢）

吉田絃二郎作

（吉田氏の尤も自信ある作物のみを集めた傑作集）

小說 ダビデと子たち

定價貳圓
送料十七錢

第八版

時代の要求する宗教的名著を見よ

創作壇の人格者と稱せらるる吉田氏の傑作として自らも認め、他よりもしかく推稱せられつつある本書は、氏が宗教的感激より得たる獨特のもので、王者として自己の精神的空虛を感じたダビデが、三角戀愛より端なくも自己の皇子と或女を競爭したため、老臣からは愛憎をつかされ、又自身も腫物の膿血に惱む人生の愛慾と苦惱を氏一流の感激を以つて綴られたものだ

識者に清冽の一感激を投げた逸作

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO